星野天知著

默歩七十年

東京
聖文閣版

讀者へのお願ひ

本文を讀む前に、鳥渡此頁を讀んで下さい。

五六年前から私の所へ種々昔話を問ひに來る人や、問合せの手紙が盛んに來始めました。之で私も古老の部に這入つた事を知りましたので、其問答手控を編年風に整理して見ました。それが此小冊子の原稿に成つたのです。どうやら自叙傳らしく成りましたが、私の一生は整然とはして居ませんで、農業、商業、文學、武藝、敎育、書道の六方面に渉つて多岐多樣です。見やうに據つては出鱈目の集め物のやうにも見えますが、其眞中を貫ぬく一道の主義を見て下さい。多くの人は事業の爲めに人格を低下され、仕事の爲めに本性を毀損し勝ちですが、其誘惑の躊躇に打勝つて天職に活きて來た所だけで

も見て欲しいのです。

讀者よ、個人の傳記などと云ひ給ふな。飾らざる人間一生の傳記ほど立派な文學はない。それは大自然の描く文字である。それも名譽や官職や富などを掴む爲めに、自己目的に歩んだ傳記などでは、如何に大官富豪のものでも問題には成るまいが、苟も人世文化の爲め其天職を視詰めて歩んだ足跡なら、決して卑下すべきものでは無いと思ひます。凡ゆる大宇宙の萬象は何れも各自の役目へと動かぬ物は無く、人類も其動きに左右されながらも、只管人間文化へと動いて居る。其動きを凝視すると、どうしても大自然の意志が命令して居る事を感ずる。私が少年時代の疑問は「何をする爲めに生れて來たのだ」と云ふ事だつたが、終に「人の足らざる所を助ける」と云ふのを天職と自覺した。それで此助け得られる伎倆を養つて、出來るだけ偉い人に成らねばならぬと考へた。之が武藝への熱情と成り、學術への憬れとも成り、其學術

も專門學のやうな一方智識の三方無智に成るよりも、成るたけ博學に成ろうと志した、それは職業とか名譽とか社會とか云ふ事を考へなかつた故でもあつた。商業は父祖の家督に居る兄の不明を補ける爲め、農業は父の遺業を成就する爲めだから、成功後は何れも他へ讓る事にした。教育は持論の女子武藝教育を實行して其範を示し、兼て不遇な日本女子を助ける爲め、文學は當時の社會眼が餘り低級なるを憂ひ、之を輔ける爲めであり、書法は老侯の誠忠なる委囑に感じて、暗黑な書道界を助ける爲めであつた。斯う云ふ次第で六、七方面へ涉つたのであるが、吾本願は唯一路で、惑ひ無く天職の縦走を遣つただけであります。

其一　山莊の雪

家くらを人に讓りて山の庵　田芹野びるの手料理に

友待つひまの置炬燵　　雪に氣づかふ妻の顏

其二　積　む　雪

七十年の足あとも　　降りつむ雪にあと消えて
たゞ待つ友の音づれを　　峰の嵐にきくばかり

其三　雪　げ　の　足　跡

ふり積む雪も時來なば　　下もえそむる若草の
雪解のあとを訪ね來よ　　そこに見出さむ足の跡

天　知

終りに申添へます。此書の出版に盡力された增田五郞君と福田晴光君、並に編輯と筆耕とに多大の勞を執られた小林好太郞君への感謝を記念します。

目次

目次

生家と一族

幼年時期

青年時期

壯年時期 上

壯年時期　下

老年期

挿圖目次

生家と一族

問者　訪問客数名

答者　星野天知

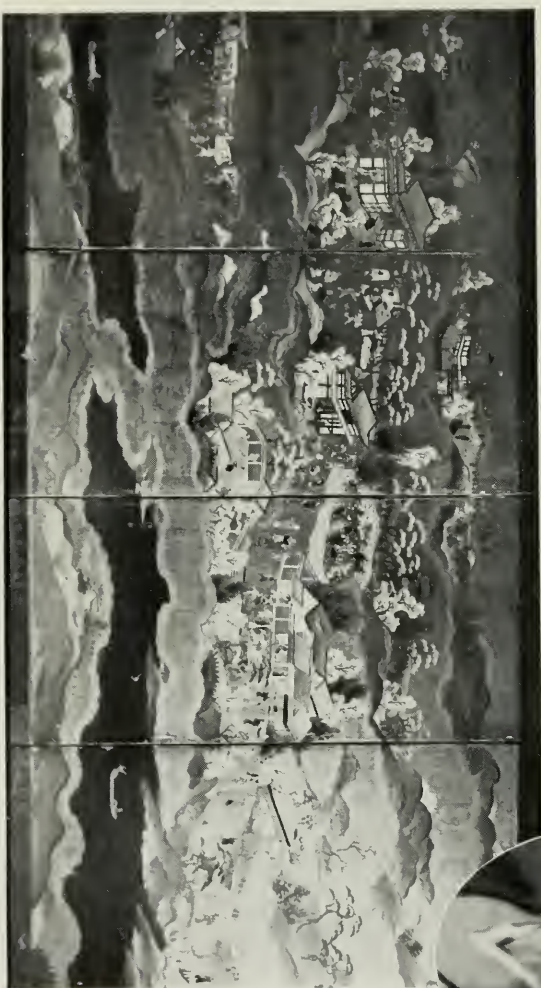
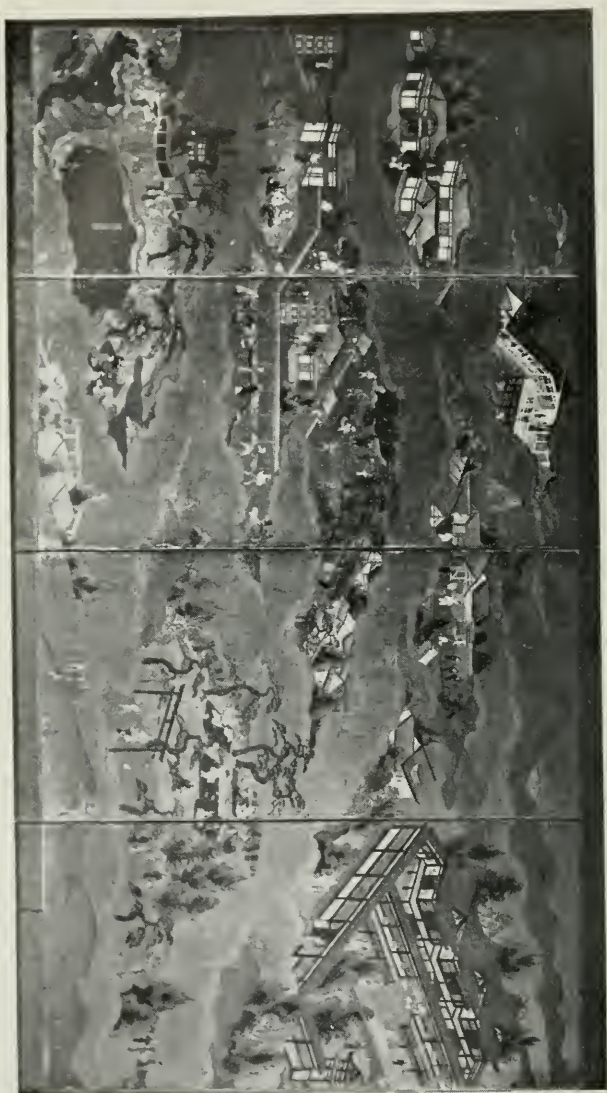
一問　鎌倉八幡宮境內にある、砂糖問屋大献燈江戸方の世話人に星野淸七、當主に伊勢屋淸左衞門とあるのが御生家の事で、而かも江戸時代からの舊家で在り、時代隨一の參勤交替道路に當る本町四丁目の、土藏造り十間見世、輸入砂糖の大問屋とだけは承知ですが、どうか內容を伺ひたいものです。

答　生家の貫祿

幕府御用金の融通仕事をする十人衆といふものが、江戸時代に市內隨一の富豪として存在した。慥か三井、三谷、鹿嶋、靑地、中井、後藤などであつたと思ひますが、此後藤は代々長左衞門と襲名して藥種の大問屋でした。星野の家は其分家でしたが、當時砂糖の需用が劇增して、舶來の出嶋砂糖（テジマは長崎の輸入地名）が流入するのに着眼し、逸早く砂糖問屋に轉業しました。果して機運空しからず、二代目の時には一躍して右十人衆の壘を磨するの勢を呈し、大阪通ひの檜垣（ひがき）船二艘を手船として商勢を左右するやうに成り、一時は山二とか伊勢淸とかいふ屋號が、都下の一部に喧傳するやうに成りました。其處へ私の父が士族氣質の儘で養子に入込み、三代目淸左衞門と成

著者

豐臣大政所御部屋屏風（吉野山）

同　前　(奈良)

破進堂箕日山莊圖

つたのでした。

其頃の商家は舊幕町人の氣質で、何れも人格は低級なのが多いので、父は甚しく之と伍するのを嫌つて、漸く識者や藝術家方面に知己を求めるやうに成り、續いて公共事業に專心するやうに成り、終に乘馬帶刀御免といふ資格を授けられるやうに成りました。其代り資産の勢力は半減しました。此營業を顧みない主人を擁護して、能く家業を持續した番頭鈴木利平と私の伯父星野銀二郎、此兩名の忠義心は見逃がすことは出來ません。

四代目は兄が襲名しましたが、其藝術肌は經營に堪えませんで、放肆生活に流れて家庭混亂の災を起しました。私は在學中でしたが、見るに見兼ねて就學の傍ら五代目主人と成り、家族と家業との整理に當り、六年を費して漸く復興の域に達しました。遇々兄が米國から歸朝しましたので、家産と家長の位置を返還しようとした所、既に基督信者に成つた兄は固辭して受けません。元來私は祖先經營の苦を偲びて改革の任に當るべく、兄を說得して讓受けたものだから、今此位置を保有しては、兄を欺き吾心を欺く事となるゆゑ、如何しても讓ると主張したので、終に母の寵兒と認められた弟男三郎へ、六代目の家督を讓る事にした。素より薄志弱行の弟ゆゑ無理とは思つたが、唯守れ、爲すなとの言葉を添へて、私は鎌倉へ一度び隱居して仕舞ひました。

二問　御尊父は明治初期に於ける先覺者で、區内文明の先導を成された方だと聞きましたが、其血統と性情といふやうな事を伺ひたし。

答　父の血統と性情

私の手許に大政所の金屛風といふのが在ります。狩野派の大和繪で、奈良と吉野山の密畫ですが、之は豐公の正室大政所から淺野長政が拜領した物で、緣金物に豐公の紋所が刻むでありま す。淺野家滅亡の前、懷胎して居る側妾を密かに遁がした事がある。それに此金屛風と吉光の短刀とを與へて後の證據とした。此懷胎の遺兒が父の實家中山新兵衞の祖先と成つた。父は其當主の弟で新之助翁宗と云つたが、此什物二種を挈引出として堂々入籍したものである。此短刀は刀劍界の珍什で逸物だとの評があるが、家督讓りの時、私は之を弟へ讓つた。さて父はといふと、小兵だが爛々たる巨眼と厚い唇とは、能く人々を威壓したものである。日頃寡默で几帳面で行儀

正しく、食事の他は胡坐もかゝない、笑ひ聲も笑ひ顔も極稀れで、一觸卽發とも見える疳癪持だから、子供心には唯怖い暴君だと計り思つて、溫か味など知る由もなかつたが、或日私が町で父の日頃賞味して居る麩か湯葉を見掛けたので、何となく求めて母まで屆けて置いた所、其夜父が珍らしく優しい顔を見せて褒美をくれた。それが餘りの意外さに嬉し涙が止まらなかつた事がある。之が一生中たゞ一度感じたに過ぎなかつた。併し稍々長じてからは、商人中では最も偉い人のやうに見えて來た。書畫骨董の眼識やら、風流藝術の趣味の高さなどと、段々引付けられるやうに成つた。とは言へ、家業を放擲して贅澤生活を獨り恣まゝにして居るのを見ては、只管苦勞する母に同情して日夜痛憤に堪えなかつた。親戚の重な人も唯父を憚つて意見する者もなく、日日母を虐待される横暴さに堪えず、或日私は諫言狀を認め、贅澤な骨董品や盆栽など、父が叱責の種子となる物を破壞して家を出やうと考へ、母に辭別した所「今一度考へておくれ」と言はれた涙の言葉で、終に中止した事が在つた。

尤も母を罵り苦しめて激怒するのは、何れも酒を過ごして居る時だから、恐らく酒亂癖の性質なのであらう。素より道德堅固で、堅い人といふ觸れ込みで入夫しただけの價値は在つた。初め飲酒も嫌ひであつたが、商家の交際宴會で飲み習つたもので、常用三四合の酒量であつた。此堅

固な性質でも四十臺頃、一人の馴染が出來た。其頃だろう、折々母へ腕力を出すやうに成つたのは。私共十二三歳の子供でも、怖さに震へながら飛出して父へ獅噛み着いた事を覺えて居る。十五六歳の頃、兄と共に金策をして父を諫め、其女と緣を切らした事がある。所が後に父が隱居所へ別居すると、其世話人が附添つて中風病の父を臨終まで能く看護してくれるので、過去は一切水に流したと母は言つて居た。

斯ういふやうに、家庭の暴君も社會からは文明の先覺者で、有識者間からは商家に稀有な人格者であり、溫厚な君子だとまで言はれて居た。人は置き場所だなと、私は思つた。

三問　本町小町の噂があつたといふ母上の、血統と御性質は。

答　母の血統と性情

柔和で太ツ腹な商器を備へる祖父は同業問屋の人望家で、問屋一同の代人に推されては大々神

樂奉納の爲めに伊勢大廟へ參詣したり、叉年々鎌倉八幡宮へ代參するので、當時本陣旅宿を勤めて居た大石平左衛門といふ宮侍の家と懇意に成り、其家の娘が美しくて怜悧な所を見込んで嫁に迎へた。所が此大石といふ家は和田平左衛門尉義盛の後裔で、一度び世を憚りて大石といふ所へ隱棲したが、後和田の舊邸へ戾り、匿名の儘大石を名乘つて居たといふ譯である。此娘が吾母と妹と二人の男子を生んで早く歿したが、之は出產の爲めで、無病健全の血統であつた。

此大石の家は此嫁の弟が繼承して一時は鎌倉宮社司も勤めて、慈悲深い人望家であつたが、子がなくて夫婦養子をした。其家には和田家の什物が二種あつて、一は馬琴「質屋の庫」に誌してあつた。飲む事は大蛇の如く、刺す事は蜂の如しといふ蜂の模樣が、朱盃の內に現はれて居るのを見た。それ故、和田の血は大石の家には絕えて仕舞つたが、吾家へ傳はつて居る道理である。

星野の血統が越後からか、或は和田の血統からか分らぬが、母の兄弟は揃つて著しく皮膚が白く、性質は極めて溫良で、特に母は情け深い所から、代々使用人が慈母のやうに慕つて居た。

十三の歲から松平隱岐守の江戶邸へ御小姓に上つて居た所、其親戚の田安家から所望されて其奧勤めと成り、中老職まで勤め上げて、二十七八歲で聟取りをした。所が其聟の暴君さに永らく苦勞生活をして居た所、重ねて叉嫁運が惡く、其弟と長男と三男とに迎へた嫁が、揃ひも揃ひ、

選りも選つて、何れも家庭教養が無いのみならず、情愛と眞實性とが缺乏して居た。それと同居しなければならぬといふ位置に据えられて、悉く悲觀したものだから、共性來の樂天性も打挫がれて居たが、基督信者に成つてからは、七十歳を越える頃から無病と成り、八十を越えてから末子の嫁して居る廣島の吉田家（前文理大學總長吉田賢龍君の家）に滯留し、九十二歳の長壽を完ふした。

母は御殿勤めをして居たので、琴と押繪が上手で、茶の湯も假名文字も勝れて居た。金錢にも無慾で、經濟には儉約でした。手蹟の好いのは慥に和田系から來て居ます。祖母の弟で大石家の主人、即ち私の大伯父、此人は隱居して杉浦正雄と改めましたが、御家流を見ごとに、書く人でしたし、又その長姉は加納といふ家へ嫁しながら、推されて手習師匠をした程で、勇健な瀧本流を書くお婆さんでした。

四問　御尊父の重な仕事に付て伺ひたいのですが。

答　官民合同の殿樣事業

元來父は着眼の早い性質で、舊習を破り得ない舊家の中に在りながら、嘲笑や誹謗を排して、斷髮も洋食も洋服も、時計なども逸早く採用した。家人にさへ斷髮は願人坊主と疎んぜられ、肉食を祖先に叛く人と謗られるのも平氣であつた。そして子女の敎育といふ事に早くから氣を採んで居た。それが幼童舍設立と成り、常盤小學校の因を成した事は後段に讓り、爰では最初の官民合同事業に盡した事を述べましよう。

歷史年表を見るに、明治元年三井八郎右衞門貿易商社を設立すとありますが、大方此事でしよう。何でも築地に商社が設けられて官民合同の利益を計られましたが、官民共に貿易の勝手が不案內なので、民間では一向氣乘りがしませんから、そろ〳〵持扱ふやうに成り、父などは種々に工夫したものです。佛人のクラムといふ人とは橫濱で屢々交涉して居ました。其度に私は英學生だといふので、必ず同伴されたから能く覺えて居ます。料亭で馳走をしたり、記念寫眞も二度覺えて居ます。粗惡なビール一百函と木綿の洋傘何百打かを引受けて困つて居たことも覺えて居ます。斯ういふ有樣では到底成立たぬといふので、とう〳〵左の願書だか注意書だかを官廳へ差出す事になりました。

以書付奉申上候

（前文略す）皇國外國との貿易朝庭の基本相立御國益第一に可心掛儀は當務の業體に御座候間精く盡力勉勵可申儀に御座候然る處貿易筋に付御國益の基礎と申儀は乍恐生産引立方に有之何程賣買の力を盡し候共生産少く候ては御國益には相成間敷其生産引立方の基土地の開不開に候へく倩愚考仕候に兩總常野の國々には未開の地多く有之就中下總小金ヶ原の儀は御府内近隣の場所ニ付右原野開發相成候はゝ一廉の御國益とも相成隨て公私の辨理不一方儀と乍恐奉存候間右土地商社へ開發被仰付被下置度則開發仕様荒増奉申上候
（中略） 右開發場所へ可然御方御一人御撰擧にて總轄鎭臺御定被遊被下度尤賞罰共御委任被遊度事
一貧院御取立右場所へ御場御補理都下並に近郷等の無宿物貰等御取纒右御場所へ差送夫々壯健廢人等の辨別を以て人歩或は居職等仕譯御用往々土着の百性に致活計相立候様致遣度素壯健にて家業家職を忌嫌候者共に付嚴重の法則相立使役不仕候はんには眞の百性にも難相成と奉存候 （以下略）

これを見ると大抵其成立ちも分る通り、官民共に商社から此開墾事業へと轉じて來ました。況んや社會事業などにまだ考へ付かなかつた政府も、此窮民救助を兼ねるといふので、忽ち妙案として乘り氣に成つたのです。財政に行詰つて居る新政府が、民間資力で此社會政策も出來、貿易の資料も出來るといふので、有栖川の宮様を總裁に頂く事にまで成り、三井八郎右衛門を總頭取

とし、父を頭取筆頭とした。

父は乘馬帶刀御免の實を現はそうとでも思つたのか、私の見た時の扮裝は斯樣であつた。羅紗のぶッ裂き羽織に天鵞絨裾の野袴、大小二刀に裏金の陣笠、前には手鎗持ちの男、左右には馬脇きの侍、兩掛け擔ぎの男とを從へ、馬上豐かに繰出すのであつた。

此華やかなりし農業も、收納期までは金力と權力とで上景氣であつたが、第一期收納、第二期收納となつて、初めて地質や肥料や不良作物の持て餘しの問題が起り、次で不良民の問題が煩はしく起り始め、四年も五年も粗惡な農作物ばかりで、年々巨額の資金が注がれる結果には、官民共に素人らしい倦怠が生じて來た。そこで政府は手を退いて土地を提供し、悉く民間事業に任せて仕舞つた。其時の事か或は起業の時の事かは知らないが、父は斯う云つて居た。「何しろ右大臣ともある岩倉(具視公)さんが坐蒲團を外して疊へ手をつかへ、國家の御爲めだ、何分にも賴みます、と頭を下げられた時は、一同恐懼して、辭退どころか、總頭取の三井も何とも言はないので、俺が代つてお受けして仕舞つた次第さ。」此誠意ある岩倉公の拜み倒しの爲めに、富豪連は終に倒產する者が出る程の損失を招いだのである。吾家は祖先の埋藏金の爲めに資產半減で此大厄を脫がれたが。

五問　元八町堀の與力でした謠曲家谷村老の話では、御尊父は家元觀世の直傳で謠ひが御上手であつたとの話ですが、あの時世では珍らしい事ですから、其樣子をお話し下さい。

答　觀世太夫淸高の風采

明治初年の風潮は、何でも傳來の事物は舊弊の二字に葬られて、唯維新文化へと狂奔したもので、特にお能や謠曲などは振向く者もない。尤も上流に限つた存在の故もありますが、民間では全く緣の無いものになつて居ました。其頃は寶生九郎は隱に藝者屋を始め、梅若實は將さに扇子を持つて門頭に立たんばかりの折だから、觀世の家元も泰然とした貧窮大名の裝ひをして居た。能舞臺も毀れ放題、邸前の溝橋も腐れて危ふく、後世の名人淸廉も大藏省の雇ひ給仕で、弟の禮二郎は片眼で、吾見世の小僧に使つて居たが、謠曲隆盛時代になつては、家元の若師匠として北海道へ出張したと、其母から後に聞いた。

太夫は前屈みで脊高く、大名らしく間延びのした、面長な京都風の人であつた。適々稽古に來られる時は、何時も街の辻角に人々が集まるのを常とする。それは太夫の謠ひ聲が恐ろしく大きいので、四五間離れた辻角で能く聽こへるからである。尤も二階で謠ふのだから、大聲が頭上から追被さるのに、往來人が半ば愕ろかされるのだと言つて居た。

其頃の父の謠本には、太夫が自身で丁寧に朱書きを入れて、隨分細かな注意も書込んである。私は此遺本の御蔭で、自分の稽古にどれ程力になつたか知れない。多くの師匠も珍本だと言つて其正確な朱書きに感服して居た程であつた。

六問　御尊父は種々の藝術方面に御趣味が廣かつたそうですが、俳優方面には如何でした。

答　九代目團洲のモデル

劇場見物は嫌ひでもないが、九代目團洲の性格が大好きな爲め、其舞臺は必ず見物に出掛け、

何時も其樂屋へ入込んで、種々な書畫骨董の話に餘念がなかつた。或時父に伴はれて其樂屋へ往つた事がある。其時團洲は大鏡に對して頻りと顏を造りながら、父と應對して居た。父が差出す烟草入の緒締めを手に執つて見るやら、話すやら、忙がしそうにして居たが、軈て「淸左衛門さん、其羽織を拜借しとう御座い」と言ふ。私は先きに見物席へ戾つて、忠臣藏の狂言を觀て居たが、午後の勘平腹切りの場へ、九代目が不破數右衛門で出て來たのを見ると、第一母がアツと愕いた。それは數右衛門が父の羽織を着て居るのみならず、髷の鬘がそつくりなのである。尤も數右衛門も同じ九曜の紋所だから此同じ紋所から、九代目が不圖、好奇心を動かしたのかも知れない。それに色合の淡茶が氣に入つたのであろう。父は色は黑いが、大きな眼と厚い唇と、其脊恰好は九代目のそれに近かつた。

七問 當時お茶事では、御尊父は中々有名でしたが、德川田安公が茶道再興、又は椅子建て手前の新案にも、餘程御協力あつたやうに伺ひましたが。

答　徳川田安公の宗匠頭巾

此處で田安公といふのは、幕府御三卿中の徳川慶頼公のことで、將軍慶喜公の蹟を繼がれた家達、達孝二公の父君である。公はお茶事には非常に熱心で、父を同嗜好上の友とされたのは勿論だが、風釆といひ思想といひ、士族間にも稀に見る人格を愛したのである。町人嫌ひの父は又鷹揚で篤實な公の氣風を好んで、忠良なる臣下よりも更に心置きなく接近したのである。父が全盛の時、深川海邊(うんべ)といふ所に宏壯な寮(遊興する別莊と譯す)を構へ、八十疊敷きの宴席と、田舍家といふ別棟の茶室を建てゝ、無雅俗流の豪商でも、武骨一遍の大官でも、廣間の宴席後は必ず此處で一服の抹茶を薦める事になつて居た。公もお忍びで招宴に應じられて、此田舍家へ來られたが、大層氣に入られて被つた宗匠頭巾を、父に與へられたことがある。後日、更に時服をも二三回賜はつた(此二三品は今尚吾手許に祕す)。公は片眼の瞼が垂れ下がつて居られた事を、私は覺えて居る。

八問　田安公の御簾中（御三家御三卿の正室の尊稱）は名所樣と申上げて、閑院の宮家から御降下に成られたそうですが、其名所樣に終始仕へた御老女に入墨奉行の娘が居たそうですが。

答　入墨奉行遠山さんの娘

それは向山お爲さんといふ老女の事です。母の若い時中老として其人の下に居ましたから、能く噂を聞いて居た。講談にある入墨奉行遠山の金さんは、氣の利いた江戸肌の好男子らしいが、此老女は若い時からの醜婦だから、自ら一生奉公を志願したのだと、私への話しであつた。主人名所樣の大氣に入りで、飛ぶ鳥を落す勢ひであつたが、主人がお隱れになつてから一生奉公の願意も空しくされて、反對派の策動で永の暇になつて仕舞ひ、高家の紹介で横濱の富豪茂木家の鎌倉別莊に客分として女中の取締りをして居られた。此別莊が私の山莊の一軒先きで、終に母の紹介で私も懇意になつたのである。所が二三年して其茂木が破產した爲め、私は常に母の尊敬して居る此老婆を、安穩の地に据えたいと奔走して居たが、突然の大震災で分れ分れになつて仕舞つた。後此老女から、閑院の宮家に安穩に御扶持を受けて居るから安心してとの通知を受取つた。

私の知つたお爲さんは七十歳以上であつたが、脊は低く、丸まつて、色白く肥えて、髪薄く斜視眼で、代親の姓向山と改めた儘で居た。其人の噂噺しの一つ二つを述べて見よう。

お大名は毎夜就寢の時、お下を洗ふのを常とする。それは老女の役目だから、先づ若いお女中が黑塗り蒔繪の盥にお湯を持參する。老女は獨り殘つて殿樣の〇〇を丁寧に洗ふのを例とするのだといふ。中々お脂の多いものだと言つて微笑だもしない。大名とはそんな者かと呆れた。

御維新の際は、勝さん（安房守）は殿樣の所へ度々來ました。そして慶喜は駄目だ、斷が足りないと言つて居られました。私達までも、柔弱で駄目な男だと思つて居ました。

九問 御尊父は中々のお茶人だと聞きましたが、其方面を伺ひたいものです。

答

俗宗匠と名人捨藏

茶の湯には凝つたものです。四五十歳から一生涯樂しんで居ました。尤も書畫骨董癖から入込

んで、懐石料理の趣味が深かつたので、私の好む茶禪流とは反對でした。父の性質では、素より交際道具に利用したのではありませんが、始終招客を樂んで居ました。流儀は裏千家で中田宗閑といふ宗匠でしたが、之はお手舞ひ宗匠で俗人の器であつた。其又師匠は禪僧出の老人で、之は私の姉が永く師事して、私も子供心に奥床しく感じて居たが、始終出入りして居た二代目宗閑の方は、詰らない男だと思つて居た。玉章さんと能く兩人で酒席の接待役に成つて居たが、碎け方は玉章の愛嬌に及ばず、風雅でもなく洒落でもなく、詰る所禪氣なき茶人ほど窮屈なる者はないといふ人だ。私が後日、利休居士を論じた一文を見せた所、良く讀めもしなかつた程で、笑止の事であつた。

師匠が斯ういふ人だから、といふ譯ではないが、佗を唱へる裏千家には似ず、随分贅澤な茶會を催したやうです。尤も斯う仕なければ、風雅氣の乏しい多くの紳士達が集まらなかつた事でしたろう。何しろ樂屋働きの家内上下の混雜には極めて不評判で、子供心には茶の湯といふものは悪い物だと思つて居ました。

斯ういふやうに、父には禪味は無かつたが、美術鑑賞の眼は高かつた。特に料理趣味は發達して、當時懐石料理の名人と云はれた捨藏老人は、茶會毎に必ず詰切つて居たものだ。父の献立書

きに此の老人の調理といふコンビは來客中の評判で、此名人は白髪の小髷を結つた、睫も白い小形の督であつた。

十問　實業家氣質と藝術家氣質と錯綜した御一族だから、隨分變つた方も出ましたろうと思ひます。どうか御一族の方々に付てのお話を。

答　實業肌と藝術肌の混族

大伯父の事から述べましよう。祖父の事は前に申しましたが、其二弟の長は半兵衛と云つて濶達な男、散々放蕩して赤合羽擔ぎにまで成り下り、改悛して後は巨商と成つた程の人だ。巨商と成つても停まる所を知らないで、諸侯の金融方とも成つて、幕府の瓦解に殉じて仕舞つた程の快男兒だ。吾家の富も大方此人の積極的な手腕が預つて力あつたものだと思ふ。其弟は反對に律義克明な人で、星野與兵衛の襲名を遺して、今日尙、藥種問屋として能く榮えて居ます。

次に私の知つて居るのは母方の伯父伯母ですが、母の妹に花といふ上品な伯母が居ました。子供時代の私が婦人中で最も尊崇敬慕した人で、母の跡を繼いで、田安家の奥中老まで勤めた人です。之が吾家の本家、後藤へ嫁ぎましたが、到底不似合は免かれませんでした。其家の隱居番頭に、秋山武右衛門と云つて、滑稽堂繪双紙店を傍ら營んで居た人が居ました。大蘇芳年の「月の百姿」を出版した時、此伯母の宿下り姿を、苦心細說してモデルとした位でした。其靑黛烏歯の豐頰に、眉宇の黑子も愛嬌を添へたものでした。

其弟の米三郎といふのが又脫線家で、頗る藝術肌の男でした。商家では小細工貧乏人寶との諺語があつて、常に擯斥されて居た程、手先きの器用な人で、趣味性が非常に多い所から、勤勉力行の商器なしとして、鎌倉の緣家（大石平左衛門方）へ持參金附きで養子に遣られました。極衰の鎌倉へ、千兩函持參の婿入といふ田舍評判で、益々調子が付き、助ける積もりで人妻と出奔したり、親戚から除外されて貧困者仲間へまで墮ちたが、正直米の名で性來の義俠心を稱賛されて居た。私は其一片背々の心を忘れ兼ねて、漸く親戚と同席し得るやうにまで助力したが、晩年は樂隱居と成つて、昔を懺悔して居た程である。

此伯父と共通した、江戸ッ子肌の老番頭が吾家に居た。鈴木利平と言つて遠い親戚の男だ。若

い時は松平と言つて、遊藝好きの所から、金鮨といふ鮨屋の息子と親友で、共に長唄師匠の張り弟子であつた所、此金鮨の息子は後に立て唄で一頭地を現はし、九代目團十郎も、此立て唄で無ければ舞臺へ出ないとまで言はれる名家と成つた。確か之が先代松永和風では無かつたか、私も度々、其凜々たる立唄には陶醉されたものである。

此利平に繼いで忠勤を全ふした人に、銀二郎といふ人が居た。之は此米三郎の弟だが、穩和な商器を供へた篤實家であつた。以上の三人が不思議にも鼻が異狀に高く、三天狗などと人々に評判されて居たものだ。

さて私の同胞はと云へば、姉は好子と云つて、早く文藝を慕ひ、高雅風騷を愛して茶の湯の奥許しを獲、父に隨ふて田安家へ出入し、只管市井の徒を厭ふたが、不遇の緣家に一生を枉屈して終つたのは遺憾であつた。次は私の兄の事だが、生來の藝術肌が累を成して、襲名後も一向手腕の暢びる所なく、出遇ふ事件も、目論む仕事も、失敗に失敗を重ね、終に發狂して一度び死線を越え、同時に基督教に據りて再生し、渡米して漸く本性を押出され、東洋工藝の權威者と押されて、其洲の大學教授の顧問と成り、彫刻に、陶器に、漆器に、自己獨特の技巧を現はし、屈指の二大百貨店主の懇請空しからず、外務省よりの證言を以て、彼の排日の盛期に、獨り大手を振つ

て再度の渡米をするに至つた。
妹は私に二人ある。此二人は子供の時から私が可愛いゝ者にして居た爲め、長らく妻を迎へる必要も無い位であつた。育子と勇子といふのであるが、上は順良で、情け深い事は母よりの傳承で、之は横濱の增田商店の富商の奥に納まり、妹の方は藤村著「春」の中の涼子といふのがそれで、之は文學趣味も藝術味も豊かだが、廣島文理大學總長と銘打つた吉田賢龍君の妻君に納まつて居る。其兄で、私には弟の男三郎といふのは、順良無比の母ですら、優柔不斷だと評して居た程の優しい男だから、何か肩書きが無ければ、世の落伍者と成る恐れがあるので、本人が嫌がるのを、督促奬勵しつゝ卒業させたのだが、帝大の工學士として日光大廟大修繕の技師と成り、名譽の仕事を成功した一方、家督相續者と成つて、傍ら工業事務に從事するといふ得意の位置と成つた。私が文學雜誌發行時代に其事務の助手をして居たので、自然同人達と懇意に成り、上田敏君を誌友に紹介もし、自らも文名に夕軒を名告る程に成つた。併し良妻を迎へ得ぬ事が、一生の破綻を來たしたのは憾み多き事であつた。
前に述べた長兄は家襲のまゝ淸左衛門を名告り、當春八十歳で米國で物故したが、此藝術風が私の長男吉人へ傳はり、矢張り彫刻は天才的で學士の下駄屋と評された通り、鎌倉彫の下駄の創

意者で、今旣に鎌倉彫に一頭地を占めて居る。又幼少から文筆に異彩を現はして、文學に了解ある者は、長女に妙子あり末子に巖あり、實業家氣質は次男健兒と次女露子に現はれ、如何にも此一族らしい色彩は爭はれぬ。殘留する吾子は九人の中三男四女であるが、女子は悉く母系より來た謙虛と堅實さを供へて、吾一族中撰を異にして居る。

十一問 嬢さん達が打揃つての好成績といふ事は兼てから承知ですが、特に長女妙子さんが到る所の各校での秀才といふ、其評判に輪を掛けた愕きは、文部省で英文中等教員試驗に唯一回でパスされた事です。老巧の男教師も多く落第したのに、而かも女子は唯一人だつたと試驗官新戸部稻造先生の噂でした。サア斯うなると、勢ひ其養育者たる親びとの問題になる。どうか其母、卽ち奧さんの事を少し噂して頂きたい。

答 後段に讓る

それは聖心女子學院設立の事を話す時に讓りましよう。

幼少時期

問者訪問客數名

答者星野天知

一問 木は其根を見よで、先づ生家と一族に付て伺ひましたから、次に明治初年の風物と其雰圍氣に生ひ立たれた少年の感想といふ事になります。

答

寺子屋風景

(一) 御家流の手習ひ小僧

六歳の時母に連れられ、供の小僧に煎餅の大袋と包物を持たせて、寺子屋へ入門しました。地方ではお寺だそうですが、爰は劍術道場見たいに天井無しの板屋根で、四五間に十間打抜きの小屋に、二三百人の子供が天神机に向つて靜粛に手習ひをして居る。毎日四五十枚の手習双紙十冊づゝを習ふ爲めに、終日琉球表の上に正坐して居なければならぬ。尤も折々用もないのに小用個をして戸外へ飛出し、潑剌の元氣を漏らしては居た。此十冊の草紙を毎日乾かしては背負つて通

學する。筆は椎の實筆（太サ二分五厘、首の長サ五分程の捌き筆で、首の拔けぬよう糸を軸頭にまで引出してある）と言つて、草紙へ一字書きから四字書き位ひまで用ゐる。其上は柳葉形の中管、其上は勝守形を用ゐて居た。最初は平假名、進んで簡易な假名文、次は江戸方角（江戸地名を綴つた韻文）都路（東海道五十三宿を綴つた韻文）商賣往來、消息往來、庭訓往來などと進んで往く。此邊になるともう十五六歳の上段者で、用紙は疾うに白半紙だが、其頃は習ひ紙を紙屋へ持參すると、僅かの料金で取替へたものだ。手本は最初からそれ〴〵先生が書いて渡される。流儀は何れも御家流で、其頃幕府の公文書は此流でなければ通用しないといふ其因習から來て居るのだが、唐様も追々行はれては居た。併し町民からは異端扱ひで、重もに學者文字として居たから、「賣家と唐やうで書く三代目」といふ狂句通りの人氣であつた。

賞罰法方は年一回の書きぞめ會に、室内の上席へ貼出される位を名譽とし、家に據り其神棚へ貼つて御先祖に報告される位の事で、成績には賞罰を注意させないで、專ら其素行に重きを置いて居た。それ故稽古中少しでも懶けると忽ち竹竿で警められる、喧嘩や爭論でもすると竹刀で打据えられるし、惡童などは紐で梁釣りに成るか、積机へ乘せられ、水茶碗と火付き線香とを持つて、數時間反省するまで所罰される。之で大抵の腕白小僧も馭せられたものだが、一層酷しい岡田といふ雷師匠があつて、兒童社會を震駭させて居た。此怖ろしさを知つて居ても、元來手習ひ

の窮屈さを嫌つて居る私は、或時五六日も家に引籠つて懶けた事がある。所が愕いたのは、外出しないと信じて居た御師匠さんが突然訪ねて來られたので、我知らず庫へ遁込んで息を凝らして居たものだ。其夜、「懶けてはいけない、見込みのある子だと、御師匠様からの御傳言だ」と、母から聽いて怖ろしかつた。二三百人も居る中で、どうして私一人位の缺席を知つて居るのだろう。天狗見たいな人だと、怖ろしくなつて、早速出掛けたら、矢張りいつも通り何とも言はないで、唯席が其身邊の所へ移されてあつたには弱らせられた。窮屈は一層增したが、月六齋だけ實語經の素讀を課せられたのは嬉しい。山高きが故にと、唱歌代りに發聲させられたからである。之が漢籍の習ひ始めで、物識りの第一歩だと得意であつた。

其頃、往來中で折々讀賣り男の流暢な呼び聲に引摺られた事が屢々ある。之は瓦版賣りと云つて、面白い出來事を喚び歩いて其摺物を賣るのだ。有識者間には既に新聞紙といふ物が出來たとも聞いて居るが、一般には瓦版の方が未だ注意を呼んで居た。子供は調子ものが好きなものだから、教育材料に忘れてはならぬものと後日考へた事である。

此寺小屋は高木青春堂と云つたやうに覺えて居る。浪士らしく高潔の人らしかつた。おかみさんと言はずに御新造さんと呼ぶ事を覺えた。毎月二十五日に天神講の吾名札へ四百文を括つて納

め、御書きぞめの日には、一朱の紙包を天神様の掛軸へ供へて参拜する事を覺えて居た。

（三）舊弊なハイカラ生

寺子屋生活の四年目から私は英學生へと急轉した。其頃支那人を唐人と言ひ慣れて居たので、西洋人の髯の多いのを見て毛唐人と呼び、南洋や印度人を、ジヤガタラ唐人だの、黑ン坊だのと呼び、英語のことをペラ〳〵と云つて居た。そんなペラ〳〵などを子供が習つて何に成るつもりだ、とは吾環境の輿論であつたから、吾商業界近くに其教習所などある譯がなく、父の熱心な探求で、芝新錢座に鳴戸塾のある事を知り、私を連れて自身入門の勞を執られた。其時の教課書は和本で左開き、四體のアルファベットから、單語に單文を添へて綴られてあつた。入門の時は九歳で、Dの音をデーとジーとの二音で頑張つた爲め、終に窮迫して泣出したので、負けになつたと父に笑はれた。

其頃、西洋小間物類の商店が日本橋通りに二三軒出來て來た。之を唐物屋と云つて、父は上等の顧客であつた。其一軒に中田といふ大見世があつて、或日父の用で其店へ往つた所、初めて洋

服を着せられた。海松色の小羅紗、金モール付のナポレオン帽、靴も立派だが、子供心にも氣恥かしくて家へ歸へれなかつた。中金（なかきん）といふのは此家の略號だが、國太郎といふ其家の息子が、極めて意地悪で、私より六七歳の年上と來て居るから、迚も對抗は出來ない。此息子と羅紗問屋の息子との三人連れで、鳴戸塾への通學が始められた。揃ひの學生羽織に、山高帽にステッキ携帶といふ內規だ。此羽織は兵子帯と共に、政權の餘威で鹿兒島から流行して來たものだ。綿入の長羽織りに長紐付といふ、新流行の裝ひだが、吾頭上には獨り太い髷があるので、固い山高帽が跳上り氣味になる。それが目障りだと言つて嘲弄する。終には帽子を打つやら、飛ばすやらで、毎日絶間がない。畢竟此髷が災害の原因だと、屢々母に訴へるが、毎時（いつも）「それは御先祖から戴いたのだから斬髪は無用」と說得されて仕舞ふ。怨みは此髷にあるやうだが、歸途漢學塾に立寄る時は、吾同士が多くて、心暢び〱とするのを悦んだ。二三年目には品川町へ一軒英語教授所が出來て、其處へ轉じたが、久しからずして廢家と成り、終に横田菊藏といふ、劍士榊原健吉先生に酷似した人について、漢英の學を敎へられる事になつた。

（三）　菊藏先生の奇發音

肩巾の廣い肥滿な大兵で居て、柔和な五十四五の老措大である。元は同業仲間の主人であつたが、撃劍と學問とが好きで、終に親讓りの商店を番頭に讓り、瀨戶物町の路地裏で、四室の矮屋に住んで居た。英學は此先生の獨學で、當時貴重なウェブスターの大字典を所持して、それへ漢籍同樣細かい註釋を、所狹きまで朱書きしてあるには愕いた。更に子供心にも愕いたのは其英語の發音である。私はリーダアの卷の三と會話篇を習つたのだが、會話がコンパッセッションで、リットルがライトル、女子がギルルなるに至つては、學ぶ元氣も殺がれるので、多く飜譯だけと漢籍外史だけを習つて居た。併し其溫情と寡言とは何となく引付けられるやうで、私は其劍術を慕はしく思つて居た。此家の御新造の所へ裁縫を習ひに來る鹽物大問屋の、二十か二十二位の色の淺黑い、お政さんといふ娘が居た。丸々と肥えて、無口な、賴母しそうな人で、書も字も上手だと聽いて益々敬服して居た。此忘れ得なかつた娘さんが、五十年の後になつて、如蘭女史といふ書道の先生に成つたのを知つた。

（四）如蘭女史の新チャン

私が四十二三歳の頃、友人横瀨文彥君の紹介で、日宗保險の勸誘員、酒井といふ人の家を訪ねた。其玄關へ一步蹈込むや否や「オヤ新ちやんでしたか」と言ひながら、脊高のお婆さんが出て來たのには愕かされた。之が娘盛りのお政さんが、一足飛びに白髮の蓬々とした老婆に一變したのだから、無言で立竦むより仕方がなかつた。「新ちやんは成功なすつたのに、私は斯んな有樣で」と涙ぐまれたのには、同情して顏を伏せて仕舞つた。其後又十年、關西へ移轉後の或日、新聞を見ると、酒井如蘭といふ書家の老女史が十數回の富士登山者で、此夏は又女弟子を率ゐて登山壯擧に出るのだとあつた。如何にもと思つた事がある。

二問　明治御維新前後、江戶市中の混亂狀態に付ての御見聞を。

答　徳川瓦解の江戶市中

（一）彰義隊の流行

私が寺子屋入門の翌年が上野戰爭で、それまで彼地此地の辻で斬合ひが毎日のやうでしたが、子供は噂さを聞く計りでした。市中は何れも毎日見世戸を下ろして、隙間を少し明けて往還を見るのですが、途絶えた人通りの中を、偶に通るのは幕臣らしい人ばかり、或日五六寸ばかりの戸の隙間へ、一太刀斬付けられた犬が旬々鳴いて逃込んで來た。續いて拔刀の侍が戸口に佇むで、其犬を逐出せと叫んで居る。私は可哀そうだ、御免ようと絶叫して泣出したら、侍は忽ち居なくなつた。犬など斬るのは贋侍ひだと思つた。それは先日米三郎といふ伯父が、突然武者修業者のやうな服裝で來た時、彰義隊加盟者と言つたのを、後に皆々が贋物だと評して居たのを聞知つて居たからであつた。開戰前までは斯樣な市民の加勢が多くて、反抗氣分を煽つて居たが、無頼の徒も混在して市民を苦しめたものである。

（二）キン切れ强盗の庄平と其娘

或夜枕もとが騷々しいので、不圖目覺めると、人足達が文庫藏から出たり這入つたり混雜して居る。傍らの姉を搖り起して親の行方を尋ねる男が居るやら、寢汚（いぎたな）い兄へ夜着を覆ふ男も居る。

私は夜着の袖から見廻した。すると、行燈を楯に取つて腰掛けた赭熊兜の男が居た。段袋に草鞋履きで、拔刀を疊へ突立てゝ、視張つて居る様は頭領らしかつた。顔は薄暗い蔭で見えなかつたが、其紅色の熊の毛が物凄かつた。其頃斯ういふ裝ひの官軍を折々市中で見て居るので、それが闖入するのだと思つて、町では官軍の賊といふ言葉が傳はつて居た。それ故か少しも怖くはなかつたので、いつしか眠つて仕舞つた。何でも大工を手下に使つて塀を破り、庭から闖入したのだが、母は逸早く四歳の少女を抱いて屋根へ遁れ、一同十四五人は皆縛られて仕舞ひ、小判三百兩と黄金細工の品を多分に持ちゆかれたが、怪我人は無かつた。翌日見舞人が續々來た中で一番に來たのが、分店星野半兵衛方の番頭庄平といふ男であつた。

此男は脊がスラリとして、顏も苦味走つた好男子で、八丁堀與力の息子だが、放蕩の爲め本役にも就けず、姉の緣を手頼りに大伯父半兵衛方の客分番頭に成つて居た。常に如才のない悧發な男で、吾家へも親しくして居たのである。

爾來七八年、杳として少しも手懸りがないので、専ら薩摩の江戸荒し位に思つて居た所、手下の大工が捕縛されてから、首領は此庄平だといふ事が分つて一驚を喫した。此男が佐渡の島破りをして捕へられ、獄門の刑に處せられたといふ噂を聞いた。其島破りは、一人の娘が東京にあつ

た故だと聞いた。私の母は此娘を度々見て知つて居るが、父親に似て目鼻立ちも姿も美しく、寄るべなくて藝者で居たが、其才色に打込んだか、當時賣出しの御用商人某の目に留まり、引かれて其妻になつた。後日母が其富豪の夫人を俥上に見て愕いた事があつたが、餘り不思議だと云ふので、後日再び視直したが、間違ひないと言つて居た。

さて此盗難の夜、父は帶へ繩を着けられた儘、貯藏金の案内を強ひられた其侮辱の壓迫が骨髓に無念を刻み着け、「盗まれるなら己が遣つて仕舞ふ」と憤激して居たが、どうも之から一層身代の事を捨鉢氣味に扱ひ出したやうだと、母が談つて居た。

三問 上野戰爭と彰義隊の事に付ての御見聞を。

答 上野戰爭の火、天下取りの火

寺子屋入門頃の事だから、お話する程の事も覺えませんが、或朝市中が急に騷がしく、人々が

走り出して戰爭々々といふ聲に愕きながら、人の跡に着いて火の見櫓へ登つて、上野の方角を見せて貰つた。其頃の商家の屋根には火の見櫓といふ、出火の見張り臺が出來て居た。成程東叡山の方位に、黑烟が渦卷き揚がつて、凄まじい火焰が燃え上り、火の子が舞上がつて見えた。あれは今、根本中堂が燒落ちる所だと言つて、口々に勿體ない事だと惜んで居ました。其火を茫然と凝視して居ると、火焰の中から黑い物が時々現はれ、それが人間の形をして居るやうで怖ろしかつた。あれは彰義隊の亡靈だ、彰義隊は昨夜廣小路で多くの官軍を斬つて、山へ寄せ着けなかつた、そして今朝はもう脫け出して居るだろう、どうせ小人數で、敗れるのは知れて居るのだ、などと一體に彰義隊贔負でした。

此頃、天皇陛下と將軍公方との區別が、一體に分つては來て居るのだろうが、市中を橫行する薩摩隼人が威張り散らすのを忌嫌ふ所から、官軍を嫌ふやうに成つて居た。薩摩ッぽうとか、芋とか言つて敬遠する所へ、大官連の遊興振りが往々亂暴に流れるので、一同顰蹙して居た。此傾向は追々と小官吏にまで波及して、權妻流行時代と成り、某大官の本妻殺し、某大臣の裸踊り、某別邸の裸美人舞ひ、鹿鳴館の破廉恥大官などといふ、風紀壞亂時代を現はした。それはチュートン人種羅馬入りの初期であつた。如何に羅馬美人が天下取りの火の手を煽つたか、恐らく戰火

より強い火焰であつたろう。

四問 江戸評判娘といふ錦繪に、長者箱入りの脫線娘が集めてありましたそうですが、其中の小判娘といふのは御親戚だと聞きましたが、之も時代相の一現象で、看過ごし難い事と思ひます、どうぞ。

答　小判娘の御親裁

それは本家の後藤長左衛門二代目の一人娘で、お兼と云ふのですが、多くの變態娘と共に錦繪に出て有名でした。其繪には、娘姿の小判の腰繩を老人が持つて居た。八九才の頃、私は後藤の伯母の家へ遊びに往つて、奥へ奥へと深入りして、一軒の離れ家を見出した所、そこから瑞々しい四十以上の、上品な見知らぬ婦人が出て來た。黑縮緬の羽織に撫で着け髮で、團十郎の女形のやうだ。大きな眼は著しく情に輝いて、何だか氣味惡い顔だ。面長で色白、丈けはスラリと暢び

て高い。オヤ新坊かへと言つてニッと笑つた時、ひどく齒齦が現はれて口が大きく見えた。猫に氣が引かれて其家へ往つたら、十五六匹の大猫仔猫が走り廻つて面白かつた。軈て菓子を貰つて母家へ歸つて來たら、女中達にまで笑はれた。歸宅後母に話したら、男妾は居たかと問はれた。ア、大勢居たよと答へて、又笑はれた。

此老孃は一人娘で榮耀榮華に育てられ、吾儘で聟選みが強く、唯芝居見物だの遊藝だのに打込んで、果ては藝者遊びから、藝人俳優買ひと放埒氣まゝにし、其爲め手切れ金やら、ゆすり金などで持て餘すやうに成り、終に男妾を置いて外出を禁ずるやうになつた。偶々外出する時は必ず駕籠に乘せる事にして居た。其駕籠も左右の垂れを掲げ、緋縮緬の大蒲團をダラリと垂らし、派手な髷に大柄の衣裳、厚化粧といふ態で納まつて居る。それに宰領の番頭、警護の鳶頭に、供の若者小者といふ行列だから、一層人の目を欹だてさせたそうだ。

或日、兩國藥研堀に差掛つた折、生憎武士の斬り合ひが始まつて、群集で取卷いて居た。此老孃は忽ち駕籠を卸させ、群集を潜つて立現はれ、いきなり羽織を脫いで、切結ぶ刄の上へ被せて仲裁に這入つた。其馴々しい度胸に、武士も群集も呆氣(あつけ)にとられて仕舞つた。マアおいでなさい仲直りをしましようと、グン／＼兩士の手を引張るので、附添ひの者が頻りと詫びて引離そうと

爭ふ所へ岡ッ引が來て、手を引離したといふ。此時も金の力で漸く內裁にしたそうだ。此等の評判が追々江戸中に擴がり、終に將軍家から其女を見たいと云ふ內命が出たので、いよ〳〵吹上げお白洲となつた。之は當時の最高裁判ではあるが、公方樣お慰みのお白洲（裁判所のこと）だから、眞の重罪人を裁く所ではない。此喚出し狀が掛つたので、こちらは大心配大騷動だ。先づ町の公事師（くじし）（私設代言人のこと）と相談をする。其筋の者へ献物を手配する。親と公事師と附添人などを引連れて、本人は平氣で出頭した。將軍直々（ぢき〳〵）のお調べといふので、上段の間に御簾を垂れ、そこから折々お聲が懸る仕組みだが、一切はお取次ぎの態で、時の若年寄りが調べるのである。其若いお調べ役が二言三言調べた時であつた。此老孃は洒然として見上げて居たが、突然あなたは好い男だことと言放つた。サア係りの人は赤面する。附添一同ハッとして驚倒せんばかりにお詫を申上げるといふ始末、聽て、之は氣が狂つて居るから充分手當てをして遣はせ、との言渡しでホッと息をついたと、其親御から母が聞いたとの事であつた。

此裁判は意外の大成功で、將軍家、殊の外の御滿悅であつたといふ。此事から益々評判が高まり、人だかりで外出が出來憎くなつたので、終に離れ家を作つて保護する事になつたが、性質が非常に飽きッぽくて、每に男妾を取替へ〳〵するには困却し、終には金力に任せて男を探したの

だといふ。此老孃お兼さんの父は、實直な賢明な人で、忠實な番頭を相續人に直し、吾伯母を之に娶はして、此一人娘の難物保護を、繰返し〳〵遺言されたといふ。

五問　明治新政府の遷都祝ひに、御酒下されといふ、官民最初の交歡が催されたそうですが、どんなでした。

答　御酒下されと江戸の祭禮

庄内藩酒井左衛門様の市中取締りの隊伍が、往來途絶えた市中に、閃めかした抜身の鎗も見えなくなり、薩摩の攪亂策たる、市中强盗の出沒も聞こへなくなり、江戸城も無事に引渡しが濟んで、上野戰爭も鎭定してから、東京も平穩になつて、戰さの評判も遠去かり、商業も舊態に復そうとした明治二年の事であろう。從來行はれた神田祭禮と同様、或日急に軒提灯が出る、金屛風が出る、赤飯が出來る、山車が飾られる、樽御輿が出る。人通りが急に繁くなつて、町中がさわ

めき出した。暮前から町内は皆休業して、夜は各戸の酸漿提灯で晝のやうに明るく、若い者は皆赤襦袢の肌脱ぎ鉢巻きで、踊るもあり唄ふもあり、多くは醉ひ痴れて居る。私兄弟も斯ういふ裝ひで町へ出された。珍らしくも父が乘り氣になつて、此裝ひの指圖もする程であつた。私は未だ八歳だが、斯んな事は嫌ひだから一巡したきりで、もう空腹と睡魔に捉はれて、再三の父の命令も聽かなかつた。大切な御酒下されだ、サア出て騷いで來いと吹鳴られても動かぬ。打つて撲つて打据えられても、灸を据えられても動かぬ、到頭火の線香束を全身へ捺着けられても泣かぬ、母が抱いて遁げたまでは覺えて居たが、其後は昏々と眠つて仕舞つた。之が御酒下されの思出として、今も其折檻振りを痛快に思つて居る。大町内へは町役人まで御酒と鯣とが下げ渡されるが其他の一般へは、裃さへ着て出頭すれば、誰でも御能拜見も出來るし、一升樽の酒に一束の鯣を下賜されるといふので、此日はよた／＼に損れた裃袴に、鉢巻きした醉どれが、市中を蹣跚として居たのを覺えて居る。併し之は御能拜見といふ別の日の御催しであつたかとも覺えて居る。

（一）神田明神と山王祭（まつり）

此御酒下されよりも毎年盛况なのは神田の祭禮であつた。江戸人種と祭禮氣分とは離れ難いもので、所謂江戸ッ子の負けじ魂からの伊達風景は、實に見ものであつた。

江戸人は江戸を山の手と下町との二つに分けて、風俗氣質が全く違つて居た。山の手、即ち麹町、四谷、牛込、芝の邊には、多く地方人たる官吏や士族などが住ひ、下町、即ち神田、日本橋から京橋邊には商工業の重もな者が住んで、江戸氣風を掌握して居る。從つて山の手氏神の山王祭と、下町の氏神である神田明神祭とは、自ら趣を異にして居る。共に年一回の祭禮で、多少競爭氣味もあるが、外聞を競ふ職人氣質から、下町の方が斷然優勢で、各町競つて立派な人形華車を所有して居る。其爲めに華車作りの名人も相應に輩出した位だといふ。私の知つて居る頃でさへ、大華車は下町分が三十六本ほど殘つて居た。公方樣御上覽の年などは、祭禮が一段と人氣立つて、下町の華車が順番に勢揃ひして、山の手へ繰り込むといふ九段坂の登り坂などは、實に湧返へる人氣であつたといふ。山の手の代表として、山王の金冠裝束の猿華車が、以前は第一位の先頭であつたが、所持の幣束を落したので、第二位で進むことに成り、以來、下町代表の諫鼓雞が先頭に繰り込むやうになつたとか、田町の大鐘馗を曳出すと暴風雨になるとか、魚河岸の龍神が出ると大喧嘩が起るとか、種々な浮說を怪奇的好奇心に結び着けて、眞劍味を添へるし、職人

などの氣負ひ社會では、女房を質に納れても伊達な揃ひの衣裳を整へるとか、隨分狂熱を湧返らせた大祭であつた。

（二）天王祭（まつり）

山王祭と明神祭とは東京全市の祭禮だが、盛夏に天王祭といふのがある。他にもあるが、小舟町の天王祭が一番有名でもあり、且度々見て居るから、之を述べよう。

都下天王祭の中で京橋と小舟町とが盛大で、特に小舟町のが錦繪にも出る位の評判である。小舟町から小網町へ掛けて海産問屋が多く、運漕業や舟乘り、延ひては魚河岸に關係があるので自然人氣も荒く、伊達を競ふ所から一丁目毎に飾り門を建てる。先づ堀留町から三丁目へ出る入口に、大根じめ（七五三のこと）の大跨ぎが建ち、次の町入口に龍宮城の朱門が布貼りで、其次町は大萬燈の大門で、冊諾二柱が天の浮橋に佇む圖か、素盞嗚命の惡龍退治などを描いたものが建ち、夜に入ると一齊に點燈されて、各戸に列なる軒燈と相映じて、燦爛目を奪ふ計り、神樂殿では十二御座の神樂が奉納され、群集の間には玩具屋、酸漿屋、虫賣りなどが居り、浪を染出した暖簾を掛け

て、酌みたての水冷やッこひ〳〵と喚立てる水屋、之は傾斜臺に檜葉を布いて眞鍮や陶器の深皿を飾り、白玉團子や心太を砂糖水へ容れる位ひの事だが、氷の無い此時代には中々涼味を呼んだものである。此他には麥湯か甘酒を以て客を呼ぶ位の事であつた。所が、市井に住む此七八歳の子供は、此虫屋の前で目を瞠つて仕舞つた。それは初めて天然の美聲に觸れた、恍惚とした愕きであつた。琴や義太夫の三味線は毎度悲しくなるので厭ふて居たが、純な腦髓には天聲がピッタリと來たのであろう、蘇生したやうに嬉しくなつて、その日は蛬の籠を枕許に置いて寢に着いたが、以來虫の聲を聽くと、天王祭を連想するのである。

(三) ベッタラ市

此天王祭より一層樂みなのは、十月のベッタラ市で、之は商家恒例の祭で、大阪の十日夷に對峙したものである。十月廿日は惠比須講祝ひで、常得意を招待して店員一同と、出入の職人を集めて祝ひの酒宴を催し、惠比須大黑天の祭事を行ふのである。其神前の供物たる夷鯛などを賣る市が其前夜に立つのだが、それを宵惠比須と云つて、大傳馬町一二丁目を中心として、夜見世商

人の百貨店が櫛比羅列し、それが左右の町へ溢れ出る盛況だ。隣町にある吾家の前も其市中に成る。肝腎の鯛見世よりも此市の呼び物は、淺漬と云ふ麴漬大根の漬物見世がベッタラ〱と喚び立てゝ一番繁昌するのである。

惠比須鯛といふのは、丈け五六寸の鹽鯛二尾を、頭から赤糸を尾へ引張つて反上るように作り、之を白木臺へ載せたもので、啻に目出鯛といふ計りでなく、鯛を抱へる夷像からの附き物として居るのである。狂歌に――

大黑と同じお棚の惠比須講白鼠らに鯛の曳きもの

とある。此お棚はお店で、忠義の目標言葉で、中々その眞相を能く穿つて居る。

以上のやうな、年一回の奇現象は、子供等を有頂天にさせる。特に其宵だけは自由に出入りして、買物の面白味を恣まゝに出來るからでもあつた。

六問　官民合同最初の握手事業としての、小金ケ原開墾との御關係に付て伺ひたし。

答　新聞社見學と旅行の魅惑

私が十一歳の時、愼之輔（從來、新之助）と改名させられて、開墾地の地主にされました。そして「お前は下總街道の船橋町へ雜穀問屋を開き、小金ケ原各農場の穀物を一手に引受け、之を東京方面へ販出すべし」と宣告された。されば父は私を穀物商にする氣かと奮慨して睨み返した。寧ろ農業家と成るとも、道義廉耻を消磨さるゝ商業營利の徒に伍すべきかと思つたのである。當時は子の心親知らずとして反感を懷いて居た。其後十二三歳の時、何でも髷を斬つてから遠からぬ事と覺えるが、父に從つて兩國藥研堀の報知新聞社へ往つて社長の部屋へ通つた事がある。社長は小西（義敬）といつて氣安い人だ。或藝妓に溺れ込んで居るとの事で、何者かゞ漫畫を配布した。其畫に反齒の裸體男が化け狐の馬になつて、手綱を採られて居る、其顎無し反齒の社長さんだから一層氣安く思つたのである。栗本鋤雲さんが居てニコ〳〵して、案内して連れて歩いてくれた。此先生は吾家で父が茶事をした時、屢々來られたので私の馴染であつた。三階を降りると、大勢の人が眞中の大机を取卷いて書き物に熱中して居る。其處には大方、若い尾崎さんや犬養さんも居

たのであろう。
其後又使ひに往つた時、編輯所の若い人々の中へ往つて見た。何かガヤ〳〵話をして居たが、私を見て色々冗談を言つて居たが、新聞社へ來ないか、偉くしてやるぞ、と言はれた一言を覺えて居る。此少年には聽捨てならぬ憧がれの言葉だ。ア、來るよ、偉く成る事を敎へて呉れるならと假約束をした。豫て商人などに成るものかと思つて居るので、本當に來る積もりであるから入社の意を父に告げた。父は叱つて「俺は新聞社が好きで行くのではない。あれは書生などが這入る所で、お前はそれよりも大地主に成るのだ、大地主とはどんな大きな開墾場の主人に成るのだか、今に見せてやる。望みをもつと大きく持つのだ。」と退けられて仕舞つた。
斯ういふ話があつてから一ケ月も立たぬうちに、開墾場出立といふ事になつた。父は例の通り先き鎗乘馬で五人の供を召連れ、一日先きへ出立した。其左右の近侍格は、農場の監督手代として召抱へた五人中の山田嘉助、萩原謹平の二人であつた。私は翌日姉と一緒に出立した。二三日後には、母が川端玉章畫伯と來た（玉章畫伯のことは次章に述べと。）。
其頃開墾事業は一通り準備が整ふた所で、三千坪の邸地に土手空堀を廻らし、冠木門に裏門の吊橋、大茅葺きの大藎構へ、籾倉、仕納小舍、授產所、門衛小舍から厩、倉庫と堂々たる大構へ

である。朝の出太鼓で百人の農夫を集め、夕の入板木で鍬納めをする。晨には百雞が曉を叫び、宵には農男が爐端に交す野良噺、自然界に愕がるゝ私は、忽ち此世界が嬉しい物になつて仕舞つた。

開墾會社の事業だが、此二和(ふたわ)の一村は初めから父の事業で、同時に地主は吾名を用ひて居た。そこへ一村の鎭守稻荷社が無くてはならぬといふので、此度新たに建設されたから、其遷座式を執行の爲め、父は東京より神官を招聘して、星影神社と命名された。其實況は次回に述べる。

此祭典も濟んだので、成田不動尊參詣といふ事になつた。父は乘馬、母と姉は駕籠で、供人上下七八人、私は歩いて行くと頑張つて、草鞋履きで嬉々として往く。秋の野面に柴栗賣りに親しみ、近く雉子の鳴く音に愕き、野を越え林を拔けて、笑ひさゞめいて往く面白さ、宿へ泊れば又錦繪の五十三次を聯想する旅宿氣分の樂しさ、臼井、酒々井、印幡沼、手賀沼などを辿つて往くのだが、成田までは隨分遠いと思つた。僅か二晩泊りだが、浴後宿屋の宵物語り、朝立ちに霧の中から馬子唄に鈴の音、此等旅行の面白味は幼ない心にすつかり植付けられて、一生旅行好きの種子となつたものだ。

七問　お話し漏れの玉章畫伯の出來事が伺ひたし。

答　川端玉章さんの落馬

狩野芳崖の畫が二朱で賣れなくて、高橋由一の油畫を五兩で父が購つて、珍重して居た頃だから、若い玉章さんは悲觀して、輸出の扇子描きをしたり、草花を油畫風に描き始めたりして居たので、其彩管外の働きとして、饗宴の接待役を依頼されて居た。或秋、下總開墾場へ隨從して來られたが、折から村社の遷座式で、眞崎から神官を招聘して賑々しく嚴修する所であつた。當日は社前に櫓を組立てゝ、紅白の供物餠と福德錢とを盛上げた白木の三方を飾り、參詣路の兩側に紅白の幟と地口行燈を立て列べ、其眞中を衣冠束帶の神官が笏を構へて進み、背後の左右に、狩衣に納豆烏帽子、腿立ち取りの從者が福草履で肅々と從ふ。私達は路傍に居たが、其隨身の一人が玉章さんに似て居た。念のため其歸路を熟視した所、顏に特徴の大黑子もあるので、アヽ玉章さんは神官だつたのか、それでいくら强請つても繪を描いてくれないのだ、と思つた。其後、邸

内の馬場で私が馴染の紅影といふ馬に乘せられて馬場を一廻りして戻つた時、玉章さんが、俺も乘るぞ、と言つて勢ひよく乘出したは好いが、突然驅けを追ひ始めた。馬丁は叫んだ。其馬はいけない、と云ふ間もなく、十間ばかり向ふで、玉章さんは鞍から跳飛ばされ、腰を打ち、臂を挫いて、氣の毒な思ひをした。

其後幾ケ月後と思ふが、全快の禮に本町の家へ來られて、夜食の折、父の面前へ唐紙を擴げ、既に半截一杯に杉の古木が描き上げられてあつた。私の見た時は給仕女から盆を借りて、一揮に月を描いて人々を感歎させて居る所であつた。續いて他の一枚へ石燈籠を描き、其上へ猿を描いて深山の趣きを現はしたので、何れも名人だなアと嘆賞して仕舞つた。玉章さんは矢つ張り名人の畫師であつたのだ。此畫は今、手許に記念として持つて居る。

後年、鎌倉別莊に晩年の先生を訪ふて、此話をして笑つた事がある。それではと云つて、こん度は描きさしの岩石の畫を呉れた。そして言つた。「あんたは能く色々の事を遣るな、時々聞いて居りますよ。」

七轉び八起して秋の夜をかこつ　　玉章

この愛嬌人も藝には遊べたが、どうしても悟れぬ人であつた。

八問　寺子屋から英學生、それから漢學へとの順序ですが、その頃、小學校は無かつたのですか。

答　常盤小學創立前後

（一）石庫學校の珍先生

明治三四年の頃、蜻蛉の眼玉と唱へた贋札騷動があつた。井上の馨大臣が臭いといふ評判も立始めたので、大阪の豪商藤田傳三郎さんのピストル自殺となつて舅が着いた。其藤田さんの石庫が、日本橋本町二丁目に建てた許りで明き家となつて居た。當時石疊みの商店など、世人は見た事もないので、珍らしそうに石庫と唱へて、之にピストル自殺といふ無氣味な感じを結び着けて誰も近寄る者が無かつた位だ。個人には祟る恐れもあろうが、公共用なら適當といふので、區内の學校と定め、校則を改め教員を増し、前に述べた幼童舍を改めて、初めて常盤小學の看板が掲

げられた。之は江戸城の大手橋近い所から其橋名を採つたのであつた。時は明治六年で、其募集した生徒は十八九歳の番頭髷の男から七八歳の嬢ちやんも居て、涼み臺をベンチとして、一齊に片假名、平假名を縱横に讀み習はし、續いて單語に付て假名遣ひと漢字を暗誦させる。例へば、絲々々と先生が三振する鞭に調子を合せて發聲する。單語が濟むと、口語の單文へと進む。それは何れも黑板(こくばん)へ懸け圖を掛けて教へるのである。五組に級分けして、下等八級から下等六級に及び、私達は其六級で十人居た。机は腰掛け、黑塗り蓋付きで三人並び、前面に黑板を立てゝ、教師は常に籐の鞭を携へて居る。之は指揮杖でもあり警策でもある。初級へは片假名を縱横に教へて、ンヿ𪜈トキメの略符をも教へ、片假名を終へて漢字の單語だが、それは圖入りで、同時に假名遣ひを覺えさせる。糸犬錨でイの部を、井戸豕(ヰノコと讀む)蠑螈(ゐもり)でヰの部といふ類である。教師が豕と言つて鞭を三振する。生徒は一齊に鞭に從つて三唱するといふ教へ方は、頗る陽氣で愉快に覺える。それより一層巧妙な教へ方は、吾等上級生の世界國盡しと日本國盡しとである。何れも七五調で、節面白く暗誦が出來る。折々調子に乘つて合唱しては叱られた程である。無味索寞たる地理の教授には、唱歌代用で苦澁なく記憶出來たのは妙策であつた。

正教員を訓導と言つて、教務の管理をもして居た。最初の校長は喰代(はゝじろ)豹三と言つて、面長な毬

栗頭の、威儼ある溫厚な人、習字は專門の書家で、片桐霞峰といふ菱湖流の先生であつた。生徒の一番困つたのは地方出の先生に種々違つた發音のある事で、特に東北辯には惱まされたものだ。茶釜を茶カマ、土瓶をドーヒンなどはまだいゝ。鰺をアンズと訂正されるに至つて、私は愕然とした。畢竟東京の言葉は無教育の言葉だ、もう信じられないと考へたから、家庭中へ大いに主張したので散々に笑はれ、學校嫌ひの兄などは、學校教育のことをアンズ〳〵と嘲弄するので、漸く國訛りと云ふ事を會得し、當時師を二無き者と尊敬して居る人氣にも係はらず、此先生ばかりは、アンズ先生と渾名で呼ぶやうになつた。

算術は洋算和算と分けたが、數學とは言はないで、算術と云へば洋算の事であつた。其專門の先生に高橋といふ好男子の先生が居た。黄八丈に仙臺平の青袴で、上品な好きな先生であつた。出版書もあつて、餘程出來る先生だと思つて居た。此先生は後、行德の旅舍で燒死したので、私は久しい間悲しみに閉ぢられて仕舞つた。獨り女教師が居て、門井かねと云ふ。玉章畫伯に肖て居た。本町二丁目に門井書塾を開いて居る女先生の妹で、手跡も漢籍も出來る人だが、子供には怖がられて居た。後年私が鎌倉女學校設立の事を聽かれて、種々な物理器械を寄附された人だ。

この石庫學校も追々滿員となつて、初めは三階が英學教授所、二階が區内の扱所（今の區役所）、階下

だけ學校であつたが、扱所は向側へ分離し、英學教師歸國に據つて父も手を退いたので、全部學校で使用する事になり、校長たる主席訓導も、山田行光といふ、痱癪家で腕曲りの峻嚴な人、深田康守といふ溫厚な親切な人、松原恕巳といふ柔和寡默な良材が、相繼いで交替した。

これら諸先生の中で、創立以來最も異彩を放つた先生が居た。それは小使ひ先生といふ珍らしい先生のことだ。總髮で袴穿きの劍術先生で、庶務會計も辨ずるし、掃き掃除や下駄扱ひの小使ひもする。そして先生と呼ばないと叱り付けるので、子供達は不思議な眼で見て居た。之が千葉門下の劍客中村一朗といつて、後に日本橋警察の擊劍師範をした人で、私の劍法手繙きの先生でもあつた。

(二) 菱湖流、霞峯先生

前に述べた片桐先生のことを、爰にもう少し述べたい。

此人は僧侶の出で卷菱潭の弟子だと聞いたが、何だか此先生の方が菱湖に近いやうに見えた。家では手習塾を開いて居る。私が習字を勉强すると云つて、頻りと可愛がつてくれた。或時、學

校に祝賀會が催された時、來賓の面前で唐紙書きをさせられた。十二歳の私は、不意な事ではあり、用意どころか、唐紙などへ書いた事もないので進退谷まつたが、軈て放膽的に無事の二字を半裁唐紙に食み出る程に書き毆つた。あとで學務委員の大津屋といふ人に呼ばれて賞められた後で、天狗樣に成らぬやうにと誡められた。一度も自分で上手だと思つた事もないのに、そのやうに見られたのは殘念だと自誡した。

天下の書風は菱湖流の右に出るものはないとの少年見識が十七八歳の頃まで續いたが、米庵の勇壯な肉太の書體に動かされ出した。霞峰先生は言つた、菱湖先生は趙子昂主張だが、自分は王羲之を狙つて居るのだと。其頃は分らなかつたが、後年、霞峯先生の筆蹟を澁谷金王八幡の社殿に「御社」と草體金字彫りで揭げられたのを見て、今昔の感に堪えなかつた。菱湖に宛然たりだが、頹法を知らぬ悲しさ、略草瘦骨の納まらぬ書き方に暗然としたのだ。先生逝いて早や三十餘年、其面影に接する如く慕はしくも、亦氣の毒にも思へて、悵然たる事久しいものがあつた。

それは私が五十八歲の時。

(三) 師範小學への躍進

さて、石庫の常盤小學も益々手狹になり、本町一丁目へ新築落成するのを待つて移轉し、運動場も附き、校長も千葉實といふ漢學者タイプでない先生が來た。併し明治五年の學區制通り、矢張り第一大學區、東京府管內、第一中學區、四番小學といふ煩雜な肩書きで公立となつたのは十年からである。この新築移轉祝に、二條の赤色横線の校旗を現はした扇子が配られた。其裏面に全校生の名が印刷されてある。其最上級に私だけの名が稍々大きく出て居るのが恥しく、密かに隱して仕舞つた。それから十五歲の時、上等小學校に進んだ。先づ今の中等學校といふ所だ。學事は面白いけれど、讀書が物足らないので、益々英學と漢學とに力を注いで居た。其頃校長から勸誘があつた。それは特別推薦を以て御茶ノ水師範附屬の小學へ轉學させるといふのである。そこは多く士族醫家の徒弟で、教授法も進步し、一體の學力も勝れて居るから、一級下を受驗すれば入學出來るといふのである。私は欣然として受驗した。所が却て一級上へ編入さるゝの恩典に浴した。

九問　その東京師範の附屬小學といふのは多士濟々で、知名の士を多く出した所から、當時、俊才學校と云つて居りました由。どうか其邊の所を伺ひたい。

答　御茶ノ水附屬校の俊髦達

大いに得意であつても新兵の悲しさ、暫時は屈伏して吳下の阿孟で居ねばならず、お負けに體操、圖畫、幾何學とは、今まで少しも習はぬので非常な苦戰であつた。たゞ讀法、作文、書取、算術、習字などは高點なので、たゞ待期の姿勢を保つた。從來主席に居て、獨り群を拔いて居た者に猪子吉人が居た。好敵御ざんなれと勉强に馬力をかけ始めた。翌年の定期試驗には一躍して主席となり、さしもの猪子御大も强敵なりと悅んで、以來莫逆の盟友たるを誓つた。其後十一年の四月、上等小學卒業まで相携へて特賞を得、主事より訓導に推薦の恩遇があつたが、吾々は提携して大學豫備門に入るの志を述べたら、主事は更に賛成して、推擧入門の事になつた。

斯くて兩人の入門願書は採用されて、許可の恩命があつた。私は得意になつて學資の事を父に願ひ出た。所が意外にも大反對で、果ては親に背く不孝者とまで叱られ、終に悲憤の淚で引退が

つた。それに引替へ、猪子は勇み立つて入門したので、終に提携の志に背いて仕舞つた。此學校からは名士の卵を多く出して居る。明治十年十二月の試驗表が、友人から屆けてくれたのがあるから、少し誌して見る。

上等二級　星野愼之輔、猪子吉人、山縣四郎吉（後、正雄）、小林二郎吉、坂部宇之助、關場不二彥、野間光彥、中嶋兼三郎、日比野道、永井秀、早川琴、辻村幸造（以下略）

この上級十七人中でも、四五名は知名の人だし、四級生に石橋思案、五級に澤柳政太郎、津田喜代太郎、細川風谷、七級に幸田露伴、等々がある。

（一）猪子吉人の初期細菌學

白面紅頰で寡言溫厚、近眼鏡をかけた學者風の好少年、之が猪子君だ。學術腕比べの好敵として莫逆友達で、前途黴菌學で驅逐しようとした盟友であつた。併し餘儀なく破つた其盟を吾長子に據つて成し遂げやうと思ひ、長子が生れるのを待つて吉人の名を付けた所、之は意外にも讀書嫌ひで、其素を異にして居るから斷念し、次男こそはと其計畫をした所、之も亦實業家向きで終

に斷念して仕舞つた。猪子が醫科を卒業した時、喜んでくれと吾家を訪ねて來た。今の臨床醫は未だ細菌の煙りも立てないが、前途の醫界は細菌學にリードされるだらうと話し合つた。猪子から常に講義錄を貸與してくれて居たので、相應な所まで話が出來たのである。其頃私は林學を研究して居たが、大器晩成するのは君だとの一言を殘して往つた。猪子が二十四歲で河豚毒研究を遂げて若い博士になり、次いで洋行する事となつて、初學同窓の宴を開いて招かれた事がある。其時私は頑固な耶蘇信者で社會改良論者であつたから、一座が酒盃に賑はふのを憤慨した。酒席に慣れた猪子山縣の態度も去る事ながら、津田參事官が椽側へ四つ這ひになつて低頭した、屬官態度の卑屈さに益々厭氣が催し、藝妓登場となつて終に坐を辭した。彼が獨逸でチブスに罹り客死の報を得た時は、地底に落ちるやうな氣がした。私が進んで河豚の肉を食したのも、吾親友の研究を立證する一片耿々の志であつたのだ。此多望な新博士が研究してまだ纒めて置かなかつた材料は、種々旅宿に遺つて居た筈だが、續いで留學した北里君にでも聽いたら分る事であらう。

（二） 野間光彥君の指導役

此友に次いで忘れないのは野間光彦君である。九條家の家從を父とし、其姉上いく子といふ方は九條家に使へて後、二位の局になつた方だ。光彦君は文才に秀でゝ、少年同志では吾文學の導師である。私が初めて同君の漢楚軍談で演戯物の興味を覺え、以來貸本屋の上得意となり、軍談物から牌史小說に入り、終に少年時代を掩ふた隨筆物耽讀家になつたのである。其姉上幾子さんは細おもて色白の、上品な京都女で、三十歲前後に見えた。光彦君は能く肖た顏だが、痘瘡で痛く損傷されて居るのは氣の毒だつた。高工の染織科出であるが、それには、上品過ぎて不適任の所もあり、文學科へ這入つたなら、よかつたものをと思つた。

今年喜の字の翁姿で、私は一つ年上の同君を志賀山麓の病床に見舞つて、其白髮にそゞろ竹馬の昔を懷しんだ。

十問　其時代の英學教授の樣子も少しお話し下さい。

答

第二期の英語教授

（一）スモール通辯

石庫學校の三階に開かれた英學校、之は父が招聘した英人チャーレス・ロゼット先生と、青木春海といふ飜譯家とが教師で、私達はパーレーの萬國史、ピネオ文典、會話篇、第四リーダアなどである。私は一番年少で上席だから、教師からはスモールの名で通つて居た。怖い疑ぐり深い此先生は、毎に私に通辯をさせて他の學生への叱責を傳達させられる。其度毎に其生徒は私へ白い眼を剝いて威すのだ。一番叱られるのは私の兄で、アイドルの名があつた。或日そんなに怠けるなら歸れと通譯したら、青眼玉へ宜しくと言つて早速に歸つて仕舞つた。今、何と言つたと詰問されたから、「ミスタア・ブリューアイス・グッドバイ」と答へた。少し考へて居たが怒らなかつた。家へ歸ると待受けて居た兄貴は、此奴が歸れと言つたから早歸りしたのですと、母へ辯解するので一喧嘩が始まつた。或日ロゼット先生は青木教師と私を料理屋へ同行された。當時、西

洋料理といふものは、築地は別として近所では海運橋に一軒ある許りで、赤茄（トマトのこと）など見た人が尠い程で、私は珍らしい其料理でビールを飲まされ、苦しんで坐睡りをして居たら、忽ちロ先生の怒號に脅かされた。それは子供の好きな物を註文したのを斷られたので、それを誤解して怒つた事が分つた。青木敎師が辯明しても納まらない。銀貨を掴み出して卓上に叩き着けて居る。私が立つて亭主の爲に詫びたら、漸く勘辨して歸る事が出來た。先生が或日、父へ面會に來た。俄拵への椅子と卓で、私は其側へ通辯役として立つたは好いが、何かの用談だから子供には意味が分らぬ。じつと考へて居ると、アイ・ウヲントとか、アイ・ウヰッシュとかと度々言ふので、之は願ひ用だと氣づいて、終には月給増額の願意が會得されてホッとしたが、子供には常識が足らないので、大人の話は分らぬものだ。會話は言葉だけでは了解できないものだが、また不足の言葉でも了解されるものだと思つた。

先生歸國後は、青木先生と今一人の先生に着いて居た。大英國史、それは美しい表紙の分厚い書物で、初めの方に海から手が出て大船を掴みそうな繪があつた。それを半分ほど讀み習つた頃だと思ふ。或宵、兄貴に誘はれて初めて寄席へ往つて、笑ひ噺や手品や太皷琴などで大變面白いため、歸宅の時は十時を過ぎて仕舞つた。家内（やうち）は寢鎭まつて兩親ばかりが奥座敷に起きて居た。

急に後悔が胸を衝いたが、果して眼玉の飛出すほど叱られて、以後停學といふ事になつた。此ために十七歳まで英學修業が中絶して、後年の勉學に大損を來した。

(二) 青木乞食先生

此先生は、當時英學者が稀れで珍重されて居るにも拘らず、賛平といふ町醫の長男に生れて、安樂に暮した爲か、意志薄弱の貴公子で、母と妹とを抱へて居ながら、四五回も移轉する始末だから、終には追ひ及ばずして往く所を知らなくなつた。此賛平といふ醫師は、古くから吾家の醫者で、二代續いて懇意にして居たので、母の御殿奉公の時も里親にまで成つた間柄であつた。

其後十年、此先生が突然路頭に現はれて、見世先きへ乞食姿で訪ねて來たには愕いた。併し先生に對する尊敬心から、たゞ傷ましく思つて父へ取次いだが、あの男は駄目だから構ふなと跳ねつけられ、據ろなく小錢を掻集めて劬り歸したが、其後横濱に、英語乞食と云つて堂々たる洋服美髯の好男子が商館町を英語で貰ひ歩くのが呼びもので、困る樣子もなく過して居ると聞いたので安心した。私は之を見てから益々懶惰の怖ろしさを知り、吾勤勉心に鞭打つたものである。

十一問　明治十年の西南戰爭頃の市民の樣子はどうでした。

答　市民の薩摩人氣

(一) 鼠隊の出陣

西南戰爭は私が十六歳の時で、其記事は讀賣新聞に、特別畫入りで日々報ぜられるのを興味深く注意して居つたが、大人達は一體に無頓着の樣でした。所が賊方の拔刀隊には向へないといふので、此度維新政爭の復讐心に燃えて居る東北士族を募集して拔刀隊を派遣するといふ評判、之には人氣が稍々動き出した。私も見送りの群集に雜つて其出陣の有樣を見たが、腋下を切裂いた鼠色揃ひの洋服に、武者草鞋で太刀を負ひ、無帽で鉢卷きをして居た。その行進を勇ましきものに見送る東京市民は、元來薩摩嫌ひなので、口々にお賴み申しますと言つて、大に期待をかけて

居た。軈て熊本籠城の噂が立ち、今にも落城して薩軍が攻め登るなどの流言が頻りに出始めたので、市民が始めて不安になつて緊張し出した。

（二）西郷星の出現

偶々空に火星が大きく見え出したので、西郷星の噂が立ち始め、夜に入ると、各戸の家根は見物人の動揺めきで賑ひ、果ては女武者の妖雲が現れると云ひ出した。それから間もなく城山の敗報が傳はつた所、敗れたのは官軍だろうと言ふ人が多かつた。之は東京市民は嘗ての薩兵の亂暴を憎んで、未だに薩軍に人氣はないが、西郷其人ばかりには人氣があるので、其敗退を願はないからだ。隆盛陣歿と聞いても信じない。それは影武者で、實は琉球か朝鮮に遁れて、今に捲土重來するのだと口々に傳へて居た。此際の市民の心理狀態は餘程變調を示して居た。日頃放埒ぶりを示す大官や威張り散らす小吏達を憎惡して居るので、官軍にも好感を持たない。兼々嫌ひな薩兵は兎も角として、西郷先生は生かして置きたいといふ念願が三四年も續いて、今にも突然、海外から來襲する其人を見る事と信じて居た。

十二問　其大官の放埒ぶりといふ一班に付て、民間で著しく聞えたものは何々でしたか。

答　放埒大官の惡影響

(一) 猫と鯰の新語

日々に起る料亭の亂痴氣騷ぎは、一般に苦々しい事に思つて居るだけだが、放蕩氣分が青年思想に著しく及ぼして來たのには嘆息する人が多かつた。特に黑田長官の正妻殺し、伊藤大官の娘餘り、芋大臣の裸踊り、大倉邸內裸婦の饗宴、鹿鳴館の暴行大臣等々などは、識者ならずとも痛恨の氣分を漲らせました。元來行儀の良い幕吏に慣れた市民だから、顰蹙しない者は無かつた。大官を大鯰、官吏を小鯰と嘲り、藝妓餘りを常態として、猫と鯰の對象語が出來た。

（二）權妻車の横行

大官を見習ふ中官吏等は東京美人を渇望する本性を發揮して、藝妓街は非常に繁昌した。此時代の産物として權妻（ごんさい）なる者が出來た。多くは一時的嬌姿たる藝娼妓が、上品な奥様風を装ふたもので、奥さん風の丸髷を派手やかに大きく装ふた此の權妻髷が、終には堅氣の奥さん社會へも流行するやうになつた。往還はこの權妻を伴ふ官吏風の男が多くなり、特に二人乘人力車に同乘して得々と往來する所から、二人乘りを權妻俥とも云ひ始めた。

（三）人力車の變遷

爰で稍々脫線氣味だが、人力車の初期時代のことを少し話します。

當時、京橋近くに大八車（大荷運搬用の大型車）の創意者たる大八といふ人が居た。其人が流行の馬車に倣つて二人乘人力車を造つた。黒塗り車體の背面に、兒來也だの、大蛇丸だの、金時だの、瀧夜叉姫

などの青刺(ほりもの)模樣を現はしてあつた。氣生ひ仲間の趣味相應のものだが、當時の乘客とは餘り不似合に見えた。車體と共に其模樣も追々上品な物となり、一人乘も出來、速力を主とする腰高も出來た。乘床を高く、乘客は膝を抱き氣味に乘る。車夫は梶棒の根元を摑んで疾走する。客が置手拭に兩袖を口に當てゝ砂塵を防ぎ、唐棧縞の羽織で意氣がつて走らせるといふ風景、二人乘の鈍重な型は退けられて田舍廻りとなり、終には一人乘り無地黑といふ所へ落着いて仕舞つた。所が仰向きに引繰り返される事が多くなり、其防ぎに小車の支へが出來、叉止め金も出來たが、終には調子も整ふやうになり、奏任俥と云つて艷消し無地黑に金紋を小さく現はす物も出來るやうになつた。當時俥熱は中々高く、人力狂と云つて市中を毎日乘廻す人も往々見られたものである（人車の創業者は大八に非ずとも云ふ。併し大八の店前で盛んに製造はして居た。）。

（四）江戸趣味の破壞

薩長天下の田舍趣味が都會に横行されてから、東京趣味は大打撃を受け、權妻髷の如き野暮な濃艷さが幅を利かせ始め、柳橋藝者と新橋藝者とは、淸洒たる意氣趣味と濃艷な鈍重趣味とが對

峙するやうになり、終には新橋風に壓倒されるやうになつた。東京料理として京都料理に對立した植半も、八百膳も、平清も、常盤屋も、追々と退却して、風味は甘ッたるく、見掛けはゴッテリとして多量に、總て濃厚張りに風靡されて、江戸人種沈沒の世相を現出した。

十三問　江戸時代の、整然とした舊家の氣風を知るには、一定した行事を知るのが好いと思ひますから、どうぞ。

答

江戸舊家の年中行事

(一)　餅盡し、お目でとう盡し

舊幕時代に取扱つた民間の年中行事は、父の代まで堅く執り行つて居たので、子供の時見た限りを共まゝ話す事にする。尤も、昔よりは餘程簡略になつたのだと母は言つて居た。

一月　商家の元日は朝寝をする。之は大晦日の夜更かしから餘儀なくされるので、八時頃見世戸を明ける。全家一同新調の衣服に改め、店員は交る〲主人へ年賀を述べに出て、互に祝詞を言ひ交してから、雜煮を祝ひ屠蘇酒の盃を酌む。子供達も兩親の面前へ順序正しく居列んで盃を受け雜煮を祝ひ、おめでとうと言はねばならぬ。日々に馴れ親んで居る兄弟達の前での此切り口上は、子供には恥しいものであつた。さて見世の方は、七日までは格子を閉ぢて金屛風を建て、大きな鏡餅を白木の三方へ載せて表面に飾り（一斗取りの重ね餅へ蝦、橙、ホンダハラ昆布等を載せ、裏白のシデ、讓り葉を布く）神棚には七五三繩を掛け、小形の鏡餅五對を供へ燈明を掲ぐ。元日は年賀往復を遠慮して靜肅に半日を守り、午後から年禮客が出初める。大人は碁將棋や追羽根、夜は双六、歌留多、時折り福引の興もある。そして福茶を酌み合つて吉凶禍福を占ひ興じる。私は凧揚げで終日屋根の物干臺で暮す。獅子舞の太鼓に萬歲才藏の唄聲、鳥追の三味線、遣り羽子の音に、凧の唸り聲など、正月氣分が滿ち〱て、子供の心を有頂天にさせる。

恒例に從ふ朝の雜煮餅は好いが、晝晩の二食は作り置きの煮しめ物に閉口した。人參、牛蒡に蒟蒻、刻み鯣、燒豆腐等の煮込んだもので、それに數の子、大根膾、煮豆に鱓の照り煮、鹽鮭などの献立である。

二日は拂曉から初荷送で早起き、之は荷車二三輛へ送荷を積上げて、多くの提灯を掲げ飾り、綱曳き賑々しく初荷を送り込む。先方でも酒肴を振舞ひ、手拍ちをして此年の取引きを祝ふ。

此二日から廻禮が始まる。店主名代(めうだい)として多くは子供の廻禮が行はれる。八九歳の私は紋付き袴に小刀を帶し、介添の二番々頭が附添ひ、供には扇子函を衿に掛けた小僧と、家號を染拔いた大きな革羽織を着た髷先き勇ましい鳶頭(とびがしら)（仕事司の親方の事）が挾み筥を擔いで從ふ。尤も之は遠廻りの時だけで、近廻りには小僧だけであつた。

雜煮祝ひは三ケ日(さんがにち)だけで、七日には七草祝ひで白粥白餅、それに刻んだ若菜を雜ぜる。先づ拂曉に主人代理の者が種々な勝手道具を爼上に列べ、順々に七草を敲く。敲きながら、七草なづな唐土の鳥が渡らぬ先きに、と繰返し〳〵唄ふのを例とする。此日松竹等の店飾りを除く。十一日は鏡開きと稱して備へ付けの大小鏡餅を悉く壞し、翌朝雜煮にして祝ふ。十五日は小店員等の宿下り、十六日は小豆粥で、何故か十六日年越しとして祝ふ。二十日は夷講とは云ふが、別に祝ふ事はしない。併し夷取引きと云つて來客を馳走し、其席上で是非商ひをするを吉例とする。此日に限り一俵を百俵といひ、一兩を百兩といふて、拍手して景氣好く虛勢付けるのを例とする。

二月　初午祭で、舊家には大抵稻荷小祠を庭内に鎭座してあるので、此日、開放して、赤飯を

誰人でも參詣者へ振舞ふ。吾家にはそれは無くて、他家へ招かれて、子供達は往く。

(二) ギヤマン白酒と雛料理

三月 三日が雛祭りだから、二月の末から毎年十軒店の雛市といふのが有名である。本町の二三丁目を横斷する大通りで、三丁目と本石町までの間に定見世の人形見世がある。其往還の中程に板圍ひの假見世が背合せで十數軒出來る。昔は十軒と制限されたものだが、此頃は益々繁昌して十五軒もあつた。其頃白酒容れのガラス壜が出始めて珍重された。透いて見える和蘭壜が七八錢で買へるとは、ギヤマンも安くなつた物だと不思議がられて居た。私の父が横濱開港間際に和蘭渡りギヤマン花瓶といふ一品を、金二歩で購つた事がある。其後、立派な桐箱から普通の二合ビール壜が出たのを笑つた事がある。其位にまだガラス物は尊いものであつた。

雛道具は其頃、長澤屋物といふのが大名道具として有名であつた。否、長澤屋物は仕入品で、諸侯の嫁入道具を何百圓と受負ふので、たゞ見掛けばかりを整へるのだから、高等の品ではないといふ。併し好みで出來た絕品も大名道具としては存在したのである。維新動亂の際、父は其絕

品を手に入れて、毎年飾つては親戚間に羨望されて居た。母は名人捨藏から懐石料理を仕込まれて居るので、手際能く其雛膳へ料理しては親戚の娘達を招く事にして居た。私も其末席へ番外客として其光榮に浴するのを樂しみとして、大いに行儀見習ひをさせられたものだ。

四月 此八日は釋迦誕生祭りで、甘茶の振舞ひに預かろうと茅場町の藥師堂へ出懸ける。釋迦佛の小像が水盤やうの物に立つて居る。それへ周圍に湛へる甘茶を注いでから、青竹の容器へ甘茶を貰つて來る。

櫻が咲くのを待つて、店員交る〳〵向島へ花見に許される。上は枕橋か梅若の植半、中は花屋敷か、三めぐり堤の即席料理か蜆汁、子供は言問ひ團子か花見鮨。

五月 鎧兜や勇壯な人形、弓箭、陣太鼓、大小の幟などの軍人軍器と、鍾馗の像が床の間に飾られ、柏餅を作つて親戚へ配り、又は床の間に供へ、全家へ振舞ふ。また各軒先へ菖蒲を葺き列べて、菖蒲湯へ這入りに往くを例とした。子供は菖蒲叩きをしたり紙兜を被つたりして遊ぶが、別に樂しい程の祭りではなかつた。

(三) 四神劍とお盆の陰鬱

六月　吾家に近い大傳馬町に天王さんのお旅所祭がある。五日の祇園祭に四神劍の鉾建物が御輿の近くに建列べられる(四神劍とは方角を配した青龍、白虎、朱雀、玄武の彫像のある大旆鉾である)。これは十日から催される小舟町御旅所祭の前觸れのやうに思はれた。神田明神社から神輿が渡御ある事は、此二ケ所とも同様であつた。

七月　棚機祭、また七夕祭とも云ふ。此五日頃から大通り近くの屋根は一面に竹籔のやうになる。背高い葉竹に色とり〲の色紙短冊や紙細工物を結び着けて、屋上火の見櫓に高く揭げる。或年、見世の若い衆達が、六尺四方の大蜘蛛と大蜻蛉を揭げて、町の者を愕かした事を覺えて居る。家の二階へは白團子に薄穗と時の果物とを月星に供へて、女藝上達の願をかける。所謂乞巧祭をする。兄妹膝突合せて、天體の話から月宮殿の空想、牽牛の農夫、織女の女工、和歌手習ひ、裁縫や琴の稽古事と隨分興がる宵であつた。

此月も十日を過ぎると草市が街頭に見られる。之は孟蘭盆精靈祭の飾物を賣る市で、眞菰、籬垣、蓮花、蓮葉などを買集めて精靈棚を飾付け、茄子と胡瓜で牛馬の形を作り、野菜料理を供物として新舊の靈魂を慰める。孟蘭盆會當日の夕暮になると、中玄關前に苧幹の迎へ火を焚いて一家の亡き魂を招く。菩提寺から棚經僧が來て讀經する。母は毎日膳部を調理し、蓮飯、お茶湯を供へ、溝萩で手向けをする。斯く七日間施行すると又、送り火を焚いてお見送りをして、墓詣

りをする。此間は諸事うす氣味惡く、晝夜敬虔の念に滿たされて、子供も餘程考へさせられる。

（四）稗蒔賣りと煤拂ひ

八月　街には最早稗蒔き賣りの聲も聞き古りて、定齋屋の鈌の音が暑そうに聞えて來る。吾家では先祖の遺風を崩さずに枇杷葉湯の接待藥罐が店側に出される。淺草觀音に四萬六千日と云ふ市が立つ。雷除けの赤玉蜀黍だの、咳藥の千生り酸漿などを鬻ぐ。一は居間の天井に、一は軒先きで陰干にする。此等の品を求めかた〴〵觀音堂へ參詣する。

九月　この十五日は神田明神の氏神祭禮で、華車と金屏風と附物なる事は、京の祇園祭から來たのであらう。實に前述したやうな狂的の昂奮日であるが、江戸市民の元氣を代表する日であつた。

十月　十九日、ベッタラ市、二十日、惠比壽（夷）講祝ひは前にも述べた。

十一月　この十幾日かにお事祝ひといふのがある。藥種問屋と漢醫との神農祭であつたが、習慣として繼續して居たと思ふ。物干竿に目搔い笊を着けて屋上に建て、家内ではお事汁と云つて

味噌汁へ小豆と種々な野菜を加へた物を一同に振舞ふ。

此月末に煤拂ひの祝をする。疊も牀板も家具一切を日光に曝し、多くの出入り職人が馳せ參じて朝、暗い中から疊を叩き塵を拂ふ音勇ましく、胴上げに興じたり、道化面を被つて踊つたりする無禮講で、一同へ蕎麥と祝儀が出て吉例を終る。之は疫病と貧乏神の潜伏し得ざるやうに、塵拂ひする祝ひとしてある。何しろ子供には大愉快の日であつた。横濱開港早々、誰もが見物志願の折、父が私を同伴するといふ日が此煤拂ひの日に當つた。それで私は往かぬと頑張つたので、一同に笑はれた事がある。そんなに子供には樂しみなものであつた。

(五) 餅搗きと酉の町

十二月 この二十日過ぎには餅搗きの祝ひがある。夜が明けぬ頃から見世を明けて居ると、大釜に火を焚いて五六人の餅搗き人夫が來る。見る〱中に七八斛の餅を搗き上げる。捏取り役の掛聲に調子を取つて、ペッタンコ〱と三本の杵で搗き上げる。一方に親方が餅板の上で、搗上げた餅を大中小の鏡餅やら、熨斗餅、海鼠(なまこ)餅に作り上げる。最後に辛味餅と云つて、出來立ての

餅を大根卸と醤油で一口づゝ食して祝ひ納める。三十日には出入りの鳶人足が來て門松を飾る。柱毎に脊高い葉竹と六尺以上の大松を細巻きにし、それに輪飾りを懸け、軒に七五三縄を張り渡し、切り掛紙を垂げる。子供はすつかり正月氣分に陶醉する。

此門飾に先立つて淺草に酉の町といふ市が立つ。吉原遊廓近くに大鷲神社といふのがある。其境内で熊手、唐の芋、粟と唐黍の切餅、舞ひ玉などを買ひに往く。熊手は料亭、宿屋、娼妓、藝妓に關係ある家々の者が、得々として勢ひよく求めて往く。併し堅氣の商家でも上品な小形物は神棚へ飾り着ける。この酉の町參詣にも大革羽織を着せた鳶の親方を從へて往くのを例とした。

大晦日には、其頃はまだ舊暦慣用時代だから、節分祓ひをする。主人名代の一番々頭が羽織袴で部屋毎に豆蒔きをする。鬼はそと福は內と吹鳴るのである。私は其豆を拾ひ歩いて笑はれた。

十四問　繪双紙屋滑稽堂主人は御本家の老番頭だそうですが、其事に付て少し承はりたい。

答　芳年畫伯と滑稽堂主人

（一）秋山番頭の滑稽味

本家後藤長左衛門、則ち伯母の家に秋山武右衛門と云ふ老番頭が居た。それは客分番頭で商業には無關係の自由勤めで、繪双紙見世を營んで居た。實に垢拔けのした氣爽な老人で、始終巫山戲て居るやうな賑かさがあつて、絶えず笑ひ皺が目尻に集つて居た。其瓢輕で眞實味のある所に芳年畫伯も引着けられて、注文通り「月の百姿」の大作を完成したのであつた。

明治初年後、英人が北齋の印畫線を激賞し、或は廣重の布置の視角や鮮彩の妙を稱へ出さない前までは、浮世繪と云つた此版畫は、ほんの女子供の娛樂繪で、士君子の問題には乘り得ない職人繪であつた。私は秋山老人の紹介で病中の芳年に面會したが、此人ですら可成り慘めな生活振りであつた。素より窮しても金錢に屈せぬ意氣があるので、それを慰め〳〵して、或時は私の伯母をモデルとして說明に苦心したり、或時は物外の月に付て、生若い私などへ相談して意匠に盡

力したものである。それ故か此老人の見舞ふ時だけは、其晩年の精神病も平常通り納まつたものだと云ふ。

(二) 式亭三馬の江戸の水

秋山老人は商人出ではあるが、一隻眼ある男で、式亭三馬の面影がある。三馬は本町二丁目で江戸の水と云ふ化粧水を販賣して居たので、今も存在して居た其家へ私を案内した事がある。括り猿の商標のある建て看板があつた。そこに十七八のお牛と云ふ娘が居た。此娘は常盤小學の同級生で、姿はスラリとして色白であつたが、斜視で、狐と渾名されて居た。三馬と血縁の有無は知らない。

其頃、世間で滑稽といふ言葉が盛んに流行したので、此老人の事も其渾名に呼ばれて居た所から、自ら滑稽堂と名告り出したのである。

(三) 女嫌ひの評判

秋山老人が主人の娘を預つて熱海の宿に滯在して居た時、私の友人櫻井と云ふ男も同宿して居たが、何かの序でに私の艶聞噺しから女學校内の浮評を談り出した所、此老人はせゝら笑つて言ふには、「そりア人を知らないと云ふもので、私はあの人の子供の時から知り拔いて居るが、あれは女嫌ひの評判者で、嘗て千兩娘が言ひ寄つたのさへ跳ね着けるし、金滿家からの養子相談を二度とも拒絶したので、現に三十近くになつても、親類中では嫁の世話をする者が無い有樣だ。其浮説などは取合はないよ」と言つたそうだ。私はそんな木强漢でもないのに。

十五問　少年時代の文學思想といふやうな事を伺ひたし。

答

文學思想の芽生え

（四）當時の文士

母が御殿奉公をして居たので多くの草双紙が家にあつて、八犬傳、釋迦八相記、金瓶梅、兒來也、殺生石、田舍源氏等、少年時代の娯樂讀物は世間には未だ何物もないので、此等の假名文を耽讀したものであつたが、十六歳の時、學友野間光彦君が片假名雜りの漢楚軍談を貸與されてから演戲物を餘り始め、續いて京傳物、馬琴物と凝り始めて、終には隨筆物で智識慾を恣まゝにするやうになり、毎夜十時から一二時の頃までを、密かに耽讀時間と極めて居た。偶々月と鼈池といふ雜誌に應募して、俳句めいた考へ物二句が載錄された事がある。之は父に加筆して貰つたのだが、活字に始めて現はれたのが嬉しかつた。以來投書熱が盛んになつたが、晝夜の苦作も三度に一度しか採錄されない。それでも一二年目には投書家仲間へ顏を出し始め、十八の時、曉の夢といふ小說三卷を創作した。之は因果物語で、鎌倉の舊家を舞臺とし、一家の盛衰は積善と無慈悲との結果たる事を骨子としたものだが、夜業を禁じられた爲め頓挫して仕舞つた。文學の無い商人社會では、少し讀めたり書けたりすると少年學者と云はれるので、それで店則の貼出し、手拭の染文字、看板などを依賴する者もあり、揮毫の序でに披露や洒落の文章も面白半分に作つてやる。中には其狂文の爲めに商賣が繁昌し出したなどと禮をいふ者も出て來る。地方の娯樂雜誌からは投書を勸誘する。狂歌狂文の交換、寫眞の交換等、中々隅へ置けぬやうになつて來た。或

時父が言ふ。「發句は正風に限る。芭蕉は偉いが高尙過ぎる。江戶座の宗匠は駄目だ。矢張り天明調が宜しい。」とて句集を多く貸與された。それは私の十七八歲の時だが、未だ俳味が分らないので、先づ狂句から始めやうとしたが、下司張つた句が流行するので餘り氣が乘らない。其頃政變を地句つたものに「板垣がとれて新宅木戶が出來」とか何とか言つた落首などは面白い。之が狂句かとも思つた。

前に述べた「月とスッポンチ」雜誌といふのは笠亭仙果を主として假名垣魯文、萬亭應賀、柳亭梅彥、梅亭金我などの補助で、所謂戯作者の手で堂々と新生面を開いて來たので、市民の文想は漸く之に吸寄せられ始めた。併し文學の高級社會には成島柳北の花月新誌、山田風外の鳳鳴新誌、續いて服部撫松、石井南橋、三木愛花等の吾妻新誌などが盛況を呈して居たが、重に狂詩狂文を主流とする漢學派で、諷刺と諧謔を以て取扱つて居た。其一層碎けたものに、野村篁雨の團々珍聞といふ、世人に歡迎されたものがあつた。狂詩派に對抗して狂歌狂句狂文が旺んで、之が又碎け流れて端唄、都々逸へと調子を替へて往つた。此代表として會田皆眞の「親釜集」が出來た。

（二）親釜集雜誌の天地坊

或日未知の會田皆眞さんから懇書が屆いて、新雜誌出版に付、同人仲間へ加入して呉れ、狂句の宗匠になつてほしいといふのだ。同人の顏觸れを見ると、

花廼家由緣、鯛鯨舍鮮魚、松廼舍綠、玉林舍櫻雅、本調子浮連、眞心亭天地坊、拙至堂杜棄、賛々亭湖山、渡邊信平、新撰樓志仁、葉彌垣文雅、玉泉亭柳雅、秋琴亭緒依、會田皆眞。

此十四名であつた。大抵は商籍の人だから、眞の平民文學である。

顏合せの初會合に、皆眞社長が漫畫人物の自畫へ讃の混ぜ書きを求めたが、誰も肅然として手を出さない。何を愚圖々々して居るのかと私は苛立たしくなつたので、思はず席を進み出た。見ると二三人の天狗男が描いてある。私は直ぐ樣筆を執り擧げざま、鼻高三千丈と大きく書きなぐつた。之が皮切りで吾も我もと筆を執つたが、餘慶名信平と名告つて、鼻高三千丈の下へ五分の蟲と附けた。今まで誰かの同伴者位ひに思つて、一瞥も與へられなかつた此子供が天地坊であつたといふ事が知れて、一座の愛嬌となつた。尤も世事には極めて晩熟な學生堅氣の私であつたか

ら、十九歳だが、十四五歳に見えたのだといふ。

(三) 會田皆眞と秋琴亭の輿歌

皆眞は檜物町の提燈問屋で、隨分手廣く繁昌して居たが、仲々道樂者で多くの通人雅客と交はつて居た。由來其住地は狂歌の雰園氣に包まれ、明治狂歌壇の琴通舍松琴翁も、四方眞顏の高弟八雲連の古面翁も此邊の人である。隣の萬町に琴通舍脈の秋琴亭緒依といふ帳面屋主人が居て、之が皆眞を助けて出來上つた親釜集である。狂歌中で最も鄙俗で拘泥味のないと評された本町組の調を、此緒依が八雲連の雅韻を以て改導しやうと、殊更に輿歌と云ふ唱號を稱へて居た。此人は穩健な透谷と云ふ所で、片襷胡座で二人の小僧を對手に見世先きで働いて居る。本名は津久非吉右衛門、明治十八年の東京流行細見記、二十五人狂歌師の中にも見えるし、忠臣藏狂歌四十七題の中にも其名が見える。此顏で、狂歌師の錚々たる宗匠からも多くの寄稿が雜誌へ集まつた。

自分一人が餘り年少で、同人との交遊に除外されて居たので、仲間の家業も本名も多くは知らないが、其中で本調子浮連といふのは、町內の鰯屋支店の藥種問屋の店員、鯛鯨舍は日本橋魚問

屋、新撰樓は人形町の書店法本德兵衞といふ人ではなかつたか、之に天地坊の自分と併せて六人だけ知つて居る。併し贊々亭湖山は光つて居た。寄書家では野崎左文、番町曙窓、中坂まとき、與霞樓堂太、謦馨聲信平、伊井良軒、十世富などいふのが勝れて居た。與歌師では千程庵、畫馬屋額翁、千秋堂愛竹、筑波庵、東光庵可三、松園、蟹の舍、豐年舍民賀、雪廼家豐、松廼家美登利、浮橋塘江、七面堂武昇、關根桃州などが屈指の連中であつた。

由來江戸文學は、山の手が俳諧で下町は狂歌である。下町は眞の江戸市民で、一度び蜀山人が出でゝ、此民衆生活に肉薄した輕快奇拔な頓智頓才の文藝を鼓吹してから、翕然として民心を收攬して仕舞つた。其天明調の大流行で市民文想の大部分を慰撫して居た。それが宿屋飯盛時代まで維持して居たが、天保年間の倦怠期が、明治維新の氣忙はしさに壓されて休止の狀態であつたが、十年頃から少し形を成したものが現はれ始めた。尤も斯道の人々は寄り〱集まつて六七年頃より催しては居たが、私の父などの本町連の方は十年から月次會を始めた。父は元來文政年度の駒込に生ひ立つたので、士族社會に涵養され、そして與歌調を推薦して居たから、本町に居て本町派を嫌つて居たのだ。

吾親釜集が與歌を唱道して生れ出たのが十三年五月、それから一二ケ月遲れて、五世淺草庵の

披露會が京橋木挽町に催されたが、世間は未だ共鳴する景氣が無かつた。其後五六年後、漸く鶯蛙會が興る頃から新聞雜誌に狂歌が流行の色を現はし始めた。併しもう其頃には文學の高尙な思想が學徒間に醞釀し、新體詩の試みが始まつて、そろ〳〵文學更新期に向ひ始めた。其ために再興しかけた興歌も腰が折れて、「親釜集」も終に十五年二月三十日號あたりで立消え狀態になつた。尤も掉尾の勇を鼓して「浮氣の友」といふ兄弟雜誌を三四號出したが、最早世間に反響が無いので、廢刊の運命に終つて仕舞つた。雪廼家豊などの殘念がり家で、翌年七月に「滑稽厚釜集」を出したが、殘炎終に力なくて三編で消滅した。

其頃投書家といふ文筆家は、何れも道樂仕事だから誰も原稿料は取らない。原稿料でも取れば賣文と云つて卑しめたものである。文章で金を得るといふ事は、貧困書生の所爲だと思つて居たので、後の「文學界」時代でも此習性があつて、原稿料を送るにも非常に遠慮したものだ。斯いふ中で、私は狂句から狂歌、端唄、都々逸、それから今樣に入込むやうになつて、之が稍々吾本領に落着くやうに感じて來た。どうも卽興的短句は成功しそうもなく考へた。

幼い腕ながら獨自の編輯で一枚刷りでも摺り物を出版して見たく、社中同人から詩歌を集めて「楠でも柯でも」といふ、楠柯の夢から捩つた馬琴張りの一枚刷り、續いて「八景宵夜馬琴の腕

づく」と云ふ刷物を出版したりして、無氣なしの財布を簸いて居た。それほど馬琴崇拜者であつたから、書く文體は固より、日頃の品性も益々馬琴訓に堅められて、筆には端唄、都々逸に粹語を述ぶるも、實際は冗談も言へない、方正愚直の小學徒であつた。

十六問　少年時代の質問ももう終りに近付きましたから、其頃受けられた大きな感じ、即ち性格にまで影響のあつたやうな事に付て伺ひたい。

答　其時代の感動

（一）大きな悲哀

少年時代の大きな悲しみは四つ覺えて居ます。第一は愛慕して居た伯母の死、次ぎは父が暴君張りに母を打擲するのを見た時、次は姉が嫁ぐ夜の別れ、その次は醫學志望を退けられて商人に

すると宣告された時。

此愛慕して居る伯母といふのは前に鳥渡述べたやうに、落着いて和やかで上品で無口な、御殿女中のモデルらしい貫録に壓されながらも慕はしく思つて居た。それが私の十五六歳の折、急病で其枕頭へ招かれて、私に末期の水をと促がされた。私は恭しく羽根を以て三度び其唇へ、其三度び目にはもう私は涙で堪えられなかつた。伯母は首を上げて、私を見て微笑しながら別れを告げられた。私は座にも堪えられなく、去りとて去るに忍びず、次室へと退いたが、其夜十一時頃家人不在の吾家で弟妹二人と悄然物思ひに沈んで居た時、一室を隔てた庫の内で瓦落々々と箱の崩れ落ちる大きな音がしたので、跳上るやうに愕いて、思はず不吉の豫感に打たれた。果して其時刻にとの凶報が來た。

第二は父の暴君振りと云つても、それは酒亂氣味でも決して下民の如く打擲などはした事はなかつたが、或時髮を摑んで引倒し、金盥を振上げたので、老女中が其得物を支へ、若女中が母を庇つて居る所を見て仰天した。私は十歳位だつたが、怖ろしさに支へる所か、震へ上つて泣いて仕舞つた。此事が快濶の少年に陰欝性を宿した。

第三の悲しみは、尊敬する姉が心に染まぬ結婚を義理のため辭み兼ねて辭し去る時の別れ氣分

であつた。此姉は讀書手習ひが好きで、十五六歳から茶の湯に專念して裏流の奥傳允可を得、風雅の心得もあつて、尋常の娘ではなかつた。獨り離れ座敷で琴を調べたり、太平記の寫本をして押繪を能く描いて居た。無口で愛情を現はし得ない質だが、私は其嗜好の高尙さに引付けられて唯その傍らに居れば滿足を覺えたのである。親の權力と親戚の義理に絡まれ、曲げ難い强い氣象を押曲げて、最も好まない商家の主婦となつたのである。其良人は實直克明な良商人だが、理想の段違ひから、姉は一生失意の境地に埋沒されて、其性情を歪められて仕舞つた。之も亦悲しい極みであつた。

最後の悲しみは寧ろ憤慨である。泣きはしない。併し耶蘇信者になるまでは名譽心のために夜中屢々泣いた。智識慾の方は英漢の絕えざる勉强と雜書の涉獵とで滿足出來るやうになつたが。

(二) 大きな愉悅

前に述べた初旅の印象は腦底深く染め着いて、一生の旅行好きにしたもの丶、それは下總開墾地から成田山への父の大名旅行に同伴された途中の狀態であつた。次には虛榮と作爲で拘束され

る市井育ちの少年が自然界に羽箍きする喜びで、之も一生を導く性格となつたものだ。それは上野戰爭の直後で私が七歳か八歳の時だ。向ふ兩國の川端で、町から離れた閑靜な場所に祖父の舊隱宅があつて、そこへ一ケ月程兄と共に住はせられた事がある。そこには隱居の世話人であつた我儘お婆さんと婢僕と三人より居ない。それが第一に嬉しい。二階の廣間から聳え立つ庭松を見越して、兩國の川水が眼も遙に展開して居るさへ暢び〳〵するのに、川縁へ突出た中二階で朝がけに見た心持、窓から棹を出せば魚釣りも出來そうに見える。四疊半の茶室作りも嬉しい。折から滿潮の川水に朝靄が一杯懸つて、其薄れゆく隙間から白魚の大網が大きく擧ると、其白紗の水滴が旭光を綺羅々々と輝かせる、朝飯の頃になると其白魚舟が塀外へ着く、其新鮮な一チョボを笊を吊り下げて買ふ、直ぐ膳へ登るといふ調子。夕暮は窓下の舟で雜魚を釣つて遊び、宵には勝手元から辻占賣や火輪糖を呼込むといふ、簡素で自由な生活振り。虛榮と階級を脫した自然の風流に、盡く憧憬の力を吸込まれて仕舞つた。

其頃別莊といふ言葉はなかつたが、有福な商人は多く寮といふ諸侯の下屋敷みたいな物を持つて居た。軈て父も深川大工町に宏壯な寮を新築した。開墾會社頭取と副頭取との仲で、三井家と父とは懇親の交際をして居た。殊に其代理人の初代三野村利右衞門とは交涉も繁かつたので、白

然其寮隣へ建築したのであつた。其寮内別建ての茶室は萱葺きに黒木作りの田園好み、風雅を盡した前栽のたゝずまひ、八ツ橋の菖蒲池、舟遊びの蓮池など能く整備されたものであつたが、此人工的の小細工では少しも憧憬の念が動かなかつたから、此少年の心は今日の所謂別莊住ひの放縱生活を喜んだ譯ではない。

此他この少年の常に好むものは讀書で、特に隨筆物と小說であり、又文章を綴る事であつた。分相應な分類、拔抄、編年、比較統計等に興味が深かつた。少年でありながら、愛讀書さへあれば淋しいといふ事を知らない。却て人の居ない所を好んで居た。

以上三つの嗜好は衣食住が自然と簡素に傾くもので、品選びをしない性質になつて往つた。家も派手を嫌つて小さく、衣も粗末に、食も自然味といふやうになつた。

(三) 隱病の苦惱

四五歲の時、妖怪退治の錦繪を見た。楠正行が腰元女中に化けた古狸を退治する所で、其氣味惡い顏付きに餘程怯えたものであらう、壯年勇武の時代でも夢に魘される時は常に此古狸の顏で

ある。目覺めては呆れ返る計りであつた。グランド将軍もそんな事を言つて居た。幼兒は決して
威かさぬ事である。

十三人の盜賊が闖入した時も怖しくなかつたし、芝居の幽靈などにも怯えはしなかつたが、生れる早々大熱に冒されて大腸を損じ、以來病弱で常に蛔蟲に惱まされ、ために顔色蒼白で、一二ヶ月に一度は必ず病臥する。其發熱時に屹度、職人風の鴉が棒を持つて突進む姿勢で現はれる。それが現はれる時は熱の高い時で、此鴉が何とも言へない怖さであつた、其頃父が玉山とか云つた有名な易者を招いだ事がある。其易者は私の命數を十二歳までと斷じたので、私もそう覺悟して居た所、十三歳になつても存命して居るので、半信半疑ながら何時死んでも餘命だけ儲け物のやうに思へて來た。所が師範校から賞與の書籍を受けた中に、養生篇といふ飜譯書があつた。之で始めて養生といふ事を覺え、起床就寢食事の時間を定め、分量を正格にする事、運動と冷水摩擦を怠らぬ事等を勵行すれば必ず健康體になるといふ。其時分には一般にこんな事すら知らないものだから、神仙術でも授かつたやうに喜んで實踐に取懸つた。實に一日も怠らずに一ヶ年を過ごした所、功績顯著で、漸く死なぬといふ確信が擡頭するやうになつた。

肉體の方は此途を辿つて往けば良いとして、今度は心の方だ。今日までは痛い事でも、苦しい

事でも、怖い事にでも泣かぬ子、强い子と云はれて來たが、喧嘩が怖くて、弱い對手にも實行出來ない。男と生れて喧嘩度胸がなくて何事が出來やうぞと屢々聽いて居るから、之ではいかん、もう病人ではないから、實地經驗を積むべしだと考へた。恰度校內に惡童の評ある兄弟が居た。荒々しい魚河岸育ちで校內に跋扈して居る。偶々それが同級生を歸途に要して露路へ追込む所へ通り懸つた私は、茲ぞと續いて追掛けて往つた。兩惡童は抵抗も出來ない其同級生を踏着けて打擲しやうとして居る所だから、私は物をも言はず躍り懸り身を以て遮つた。其權幕に此惡童等は茫然と佇立して居たが、忽ち遁げ出して仕舞つた。其後この惡童の級と他の級との大衝突が起つて、兩級全體の申合せで校外一町離れた巷路で對立した事があつた。一方は此惡童が居るので恐怖して居る事を聽いた私は、密かに其場へ出向ひた。向ふの陣前には惡童兄弟が橫行濶步して居るのを見て、一方は既に萎縮して居た。私は憤然として走り出た。其時は弱者の有樣を見るに見兼ねたので勇氣が出たのだ。何事か一聲叫んで惡童へ走り懸つた。所が此度も亦惡童二人とも遁げ出したので、敵は譯もなく總崩れとなつて、終に物別れとなつた。喧嘩に强い惡童が何故二度まで私と鬪はないか、私は是まで兄貴に意地められて擲り合ひをしたが、常に負け通しで、喧嘩には少しも自信がないので、此惡童にも負けると思つて居るのを、何が强そうに見えるのだろう

と不思議に思つて居た。

右は常盤小學在學中の事であつたが、二年後になつて師範附屬在學中、とう〳〵本懐を達した事がある。といふのも可笑しい話だが、それは斯うだ。

私が師範附屬へ轉校した時は、上級への新入生であつたが、一ケ月後には早くも十數人を突破して、級の中程へ躍進したので、鳥渡目に着いたものだ。そうすると、級中の悪戯者で辻村といふのが居て、頻りと私を虐め出した。突然髮を引張る、頭を打つ、袖を引破る、石を投げる。其石投げの技は實に巧妙で恐るべき打力を現はすから、喧嘩には有力な武器であつた。此武器を以て威嚇して居るので、私も我慢に我慢をして居たが、益々增長する許りである。もう勘辯出來んと思つて居る所へ、或る日又小石を握つて頭と頭をやられたので、私は飛着いて押倒し、咽喉を締めて壓着けたので、とう〳〵悲鳴を擧げて陳謝した。私は倘打擲の手を緩めないで、今日こそは半殺しにするぞといふ其劍幕に恐怖したか、蒼白な顔になつて哀願し出した。之は吾身のため許りではない、衆人のためにと、今後を堅く誓はしめた事がある。こんな事があつて、益々男子は第一に腕力が強くなくてはならぬといふ考へが固められるやうになつた。此志が武藝へと導いたのである。

十七問　少年時代の迷想とか空想とか、或は職業の選定とかいふやうな事に付ての內容の披瀝を願ひたい。

答

其時代の思想

（一）弱い者を助ける本願

十三四歲の時と覺えるが、十五夜の月見をして居て、嫦娥と西王母の事や淳于髡の事など空想に耽つて居た時、不圖、人間は何のために出て來たのだらうと考へ出した。これから此問題が腦に糊着して仕舞ひ、適當と思へる答を與へる人がない。せめて自分の事だけは分明にして置く必要がある。さて、自分は何を爲すために出て來たのだらうかと晝夜考へ始めたが分らない。段々過去の吾行爲から考へ、感觸から判じて見ると、弱い者虐めをする者、威張る者、權力を振廻す

者、此等を見る時ほど憤慨に堪えられないものはない。漸く物心を知る頃から、父の暴君振りを見聞きして母への同情心から根ざしたのであろう、いつも妹達や召使や同窓の弱者達の味方になつて懸命になる所を見れば、弱い者を助ける事が良心の本願と見える。それなら、自分の生れて來たのは弱者を助けるためだとの結論を得た。愈々そうだとすれば、弱者を助けられるだけ偉くならなければならぬが、それには學問と腕力とがなければならぬ。益々勉强すべきであると勵んで居る中、醫は仁術也といふ事を聞いて、永らくの病苦の體驗から醫家になろうと考へ着いた。醫は病苦と貧苦を救ふ事が出來るので、吾本願に適合すると考へたからである。併し之は父が許さないので、次には智識技藝を以て後進を助ける敎育家になろうとしたが、之も父に退けられて商業社界に入れられて仕舞つた。それは十七歲の時であつたが、商業見習ひはして居るが、半日だけは獨學と夜學との時間を許されて居た。それは家の息子だからで、他の小店員達は終日間斷なく商用だけに働いて、宵だけ手習、十呂盤の時間を與へられるだけだ。私は丁稚と輕蔑されて居る小僧達に第一同情が起つた。それで每夜、此等に讀書算術などを敎へ始めた。小僧は五人居たが、皆喜んで勉强する。一人怠け者は觀世太夫の息子禮二郎位である。素より堅固な老舖の店則があるので、贅澤と懶惰を嚴誡し、働く事と、金錢と時間との浪費を禁ずる事が一般の風をな

なして居るから、起床就寢の時間も勵行されて、能く一家の統一を有つて居る。迚も學生々活の不仕駄亂さを恥ぢずには居られない。初め私が經書で人の道を話すのに、其結果まで說かぬと感じないから、段々と實行主義道德に纏めざるを得なくなるし、終には損得主義にまで行くと、大いに耳を傾けさせる事になる。斯うして居る中に私自身が、何時しか利害主義、損得主義の道德に染まり始めた。其癖一方には安井塾へも通つて居たのだが、別に衝突した事も覺えなかつた。

（三）消極的修行の覺悟

曲亭馬琴が名詮自稱といふ事を能く言ふので、何時しか自分の名を考へた事がある。愼之輔とは之を愼み之を輔けるといふ事で、威張つたり自慢したり、圖に乘つたりしてはならぬ、弱者を助けるにも其往く所に隨つて輔佐すべきで、助けるにも積極的に違れば失敗すべし、と斷じた。それ故、莊子の葆光といふ二字に憧憬して、葆む光が漏れ出すやうな偉物になるやうに心懸けやうと志した。此消極的修養は如何にも東洋的で、之は少年時代に學び得た經書の教養であろう。

此經書教養の少年が實業社會へ据つて大いに心服した事は、第一に金錢道德の正しい事、理屈

を言ふのと威張る事は悪いといふ事、働く事と儉約する事を忘れない事、愛嬌よく他の意に逆はぬ事などで、學生の大いに學ぶ事と思つた。斯ういふやうに日常の生活態度を訓練するには好いが、其目的とする所は金錢で、之を獲得し得る人は同時に人情が冷却し、人格が低下するを免かれぬ。それに此社會で偉い人といふのは、多く金儲けをする人を云ふのだから、自分の成りたいと思ふ偉い人とは違ふ。物識りで品行が立派で、度胸があつて人情の厚い人、之だけが偉い人といふ理想であるから、結局安住の境地でない事を知つて居た。併し父の意志に從ふべき務として、商業を或所までは成功しなければならぬ。仕なければならぬといふ以上は、暫時でも熱心に働くべきである。よし金儲けの技倆をも見せてやるぞといふ肚が極つた。そこで漸く商業を熱心に見習ひ始めた。

十八問　今から六十餘年前といふと隨分隔世の感がありますが、其頃は舶來文化が大衆へ傳はり

初めの頃ですから、失笑すべき事件が日常生活に多かつた事と思ひます。どうぞ。

答　其時代の笑ひ話

(一)　祖先崇拜の髷

第一に髷断しです。九歳の私は髮が多かつた故か、髷も前髷も太く大きくて、英學生の意氣として被らねばならぬといふ山高帽子が安定しない。少し步くとポンと跳上つて、如何にも舊弊髷を嘲けられるやうだ。官吏や學生は大抵髷を斬つて居たが、大商人などは一人も斬つて居ない。髷は先祖から授かつて居るものだとして居る。此大商人達が餘儀なく斬髮して、帽子を被り始めた當座は滑稽であつた。知合ひの店前や知人に出逢ふと、急いで商人お辭儀をする。其度毎に帽子が飛び脫けて路上を轉がる。それを捉へやうと狼狽する。其周章して赤面する擧動が如何にも可笑しい。何れも帽子を荷厄介にする所から、屢々失策を仕出かしたものだ。私の髷は斬つてから忝しく竹林中へ埋められた。中には菩提寺へ埋めた者が多い。之は吾國では髷を神聖視して居

たからである。

（三）　ビールの泡喰ひ

京濱間の汽車が出來た時分だが、汽車の事を岡蒸氣と唱へた。陸上蒸氣車の意味だ。驛員を役員と云つたが、商人は御役人と尊稱して其威張るに從つて居た。車劵を買ふにも檢札されるにも「どうぞ御願ひ申ます」と腰を屈める。一々有難う御座いますと禮を言ひ〳〵乘るのである。父は度々横濱へ往くが、之が不快だと云つて重に馬車や蒸氣船で通つて居た。横濱仲買商増田屋の手で、クラムといふ西洋人と貿易を相談しに多く往つた。その初めは父も未だ結髮して居たが、其洋人を兩國藥研堀の常盤屋で饗應した頃は、既に斷髮して居た。私は此洋人の膝に抱かれて居る記念寫眞があるが、それは片言交りに通辯したので可愛がられたのだ。此宴席で其頃ハイカラのビールが出た。此料亭の心得ある女中が、其壜を七八回も震蕩して座敷の隅へ口を差向ける。其手付きが甚だ心得たもので、聽てスポンといふ其音を切つ掛けに、不慣れの客人は一齊に緊張する。女中は沸騰壜を大急ぎで客の水呑コップへ注ぎ廻る。客は狼狽して、飲むやら泡に噎ぶや

ら、そこら中へ溢すやら大騷ぎであつた。クラム君は愕いて微笑して居た。何でもビールは泡を賞味するもので、栓を拔くにも沸騰を利用するものだといふ利用法に感服して居たものだ。

此程度だから、無論ビールの良否などは分らない。それを見拔いたクラム君だ。極めて粗惡なビールと粗末な木綿吳服の蝙蝠傘何百打を父へ賣付け、父は又其代償として開墾地の大麥何百俵かを送つた。斯樣に何れも粗惡品のため理想の貿易仕事は廢めにして仕舞つた。尤も損得などには無頓着な父だから、一笑に附した事ではあつた。

（三）　ジンジンビーアのおくび

此ビールよりも其頃ジンジンビーヤといふ飲物が路頭で賣歩かれて居た。唐物屋から父が其藥物を取寄せて飲用して居た。ジンジャーといふのかも知れぬが、炭酸水の事である。重曹に酒石酸を加へるだけの事だが、其沸騰するも珍らしく、また噯が出て胸が透くといふので喜ばれる。初めは其噯に奇怪な顏をする。子供はそれが面白いので、客人でも職人でも、舶來品と言へば珍らしがつて、必ず試みたくて請求する。私は强目に調合して之を薦めるが、誰も突然の噯に稀有

な顔付をしない者はない。頗る座興的の飲料品であつた。

(四) 烏天狗の配達夫

或宵、店員三四人潜かに路傍へ立出る者が居た。その晝、店前へ初めて電信柱が建てられた日であつた。私も追隨して忍び出たら、皆電柱に添つて電線を見上げて犇めいて居る。何でも烏天狗の子供が書狀函を背負つて、電線を走つて往く影を見やうとして居るのだといふ。私も緊張して見詰めて居ると、薄い煙のやうな雲のやうな影が一二遍見えたやうに思つたが、又走り行く薄雲のやうにも見えた。斯ういふやうに電氣智識は市民には未だ皆無であつた。三年後に私は天變地異といふ書籍を見て、初めて電氣の働きだといふ事を知つた。

青年時期

問者　訪客數名

答者　星野天知

一問　少年時代の熱望を抑へられた結果、其勢力はどう云ふ方面へ噴出されましたか。

答　商業と武藝との入門

醫科在學の友人から、醫學書や筆記を借覽して、勉强課目の一つとして居たので、少しは生理の事も醫術の事も分つて來るし、臨床家の現狀も內幕も聽き知るやうになり、仁術の看板にも、商賣思想が多分に織込まれて、不德の壘も磨し兼ないものだと知つて、それでは商業と大して違はぬものだと考へ、稍々醫學志望熱も鎭まつて、商業へと振向くやうになつて來た。それにしても、偉く成りたいといふ企望は益々旺んで、男子は兎に角、膽力を養つて、第一に臆病を除かねばならぬ、それには腕力を養ふ必要があると思ひ、暇があると密かに、荷物藏で百斤俵を擔いだり、薪割りをしたり、下男と角力を捕つたり、重荷運びの人足に交つて働いたり、專ら下司の勞働仕事に勤めて居た。元來小兵で、體重も十四貫を出なかつた所へ、腕力が少し强かつたので、小學校の器械體操で、腕力を要する種類には第一人者であつた程だから、劍術なども初めは薪割り流で、毎日新らしい竹刀を一本づゝ打折るのを例とした。

膽力養成は武藝に限る、と教へられたのは、砂糖の宰取り業をして居る大坂屋庄三郎といふ男で、此男は以前千葉道場へ通つて居て、能く其道の事に通じ、心立ても良い男であつた。私が少し計り文學趣味があるのに敬服して、能く看板や廣告文や狂歌川柳の事を依賴するので、終に其開店にも盡力してやつたもので、翁と渾名されて居る程お能の翁の面に肖て居る。其顏だけの心持を私は好んで居た。所が武藝などは商業思想とは緣の遠いもので、寧ろ破産道樂とされて居るから一般に秘密を要する。そこで服部金三郎といふ一つ年下の店員と相談して、暗いうちに拔け出て、見世戸の開かぬ前に歸宅する事にし、四五丁離れた伊勢町川岸の中村道場へ擊劍入門といふ事に成つた。

　餘り早朝なので他の弟子は來ない。交る〲先生對手に打込む計りであつた。三月、四月と通ふうちに、體術の先生が本白銀町の今川橋近くにあるといふ事を服部が探り出して來た。體術は武藝の基だと聽いて居るから、百尺竿頭一歩を進めて之も修行せねばならぬと、先づ其先生の人物を視察しやうと二人で訪問した。先生は五十七八歲、六尺豐かで狀貌傀偉、半白總髮の偉丈夫で、先づ腕の太さに愕いた。其立派な武者貫錄に一も二もなく敬慕の念が動いて、即座に入門願ひをして仕舞つた。束脩を納める事も知らずに、入門の卷物へ記名したが、血判させられて肅然

とした。軈て道場に通された。見ると、表面高く大額が掲げられ、演武場の大文字が場内を壓して、山岡鐵太郎書としてある。其承塵(なげし)に稽古長刀が懸り、左の羽目板には稽古着を懸け列ね、長棒、太刀、短刀、居合ひ太刀に、古流の大木劍が掛並べられた二十四五疊の道場である。此日は柳生心眼流立合形初手二本を授けられて嬉しく歸宅した。其頃は月の小遣ひ五十錢より貰へぬので、三十錢の月謝を二道場へ納めるには不足するし、乗物や食物などに絶體浪費せぬ主義の私でも、安物ながら稽古着や道具代に多少の費用を要するので、初めて借金といふ事を餘儀なくされた。之が又修養になつて、漸く金儲けの必要を感じ出した。

世間の仕事は、相當偉い人でも、必然な良い事でも、導く人か後援かゞ無くてはならぬ。若しそれが無ければ金力に據る他はない。精神的の仕事外には何れも資金を必要とする。それならば先づ金儲けが大切の一方面だと考へ、商業見習ひの方へも漸く氣が乗り出した。此様な譯で早朝は隔日に兩道場へ通つて粉骨碎身の稽古をし、午前から午後へ掛けて商業見習ひを勵み、宵の中は英語と漢學の勉强に、夜學と獨學で多忙に暮して居た。斯うして三年を過ぎた時分には、客慣れ人慣れ商賣慣れと、三拍子が稍々整ひ始めたので、仕入方へも廻る事に成り、横濱へ出向ひて、増田商店から商館廻りをするやうになつて來た。其頃の輸入商は弗(ドル)（洋貨）相場の高低が損得に

大なる關係があるので、着實な此商業も、勢ひ相場師のやうな考にならなければならぬ。其高低が甚しいので、商勢が一體に活氣を帶びて來た。血氣の者は何れも其調子に動かされるので、私も堅固な株の鞘取り賣買を少しづゝ試み始めた。之は安全な仕方には相違ないが、慣れると兎角間弛くなつて、終に冒險の域に踏込む。偶々大儲けすると、日常の錢遣ひが荒くなり、氣に驕りを生じて落着かなくなり、諸事粗漏になつて用心を忘れる。私も其例に漏れず、月の小遣ひ一圓づゝの男が一時に三百餘圓の負債を生じて仕舞つた。

返濟無力の吾財嚢に窮した揚句、吾に何を敎へたか、此問題を二三夜考へて見た。一攫千金の浮かれ心で、勝負熱に浮かされた結果だ、之は貨殖の正道ではない、貨殖といふ事は働く事で、小取りに限る事だ、今後一生投機といふ事は爲さぬ事と心に誓ひが出來、此誠心事は此事ばかりではなく、其時分に朝鮮大院君の亂といふのがあつて、弗相場が急に奔騰した事がある。其時私は横濱へ出張して居たが、市中が騷然として人氣が沸騰して居た。今浴みを濟まして增田商店の見世先きに居た時、更に弗相場天井知らずといふ二十圓臺突破の飛報が飛込んだ。まだ無際限だろうといふ人氣だから一枚（一千圓の事）買附を依賴した。老練な增田老人は言つた。「それは私が賣つて置きます。」其夕方歸る頃、朝鮮から內亂鎭定の入電で、相場は忽ち瓦解し、私は半日で壹千圓

の損失を負ふ事になり、實に面目なくて歸店の强面さを感じた。此事も勝負事に不得手な吾性質を誡める材料となつたのである。

此失敗は必ず取返へして見せると心に誓つて横濱へ出掛け、商館倉庫を餘り廻つて、支那人番頭から持て餘しの古荷を廉賣させ、此二三百俵のボロ荷を相手に吾荷物倉庫に引籠ること三週間程で、他の砂糖を調合配劑に工夫の結果、上等の砂糖三十樽程を造り上げ、忽ちに賣捌いて喝采を博した。此二三百俵で一擧五六百圓を儲け、更に二人前の働きをして、其年漸く損失を償ふ事が出來た。此奔走も努力も、一に武藝の修行から出た積極勇氣の賜物であつた。

私が商業家と成つて働いたのは、父の荒した祖先の家を堅實な物にしやうとの目的で、陰に陽に母の安心を只管願つて居る計りであつた。其父が隱居して、兄が横濱增田の娘を娶に迎へて主人となつた。所が忽ち夫婦相剋の波亂が起つて家庭は治まらず、兄も商業不得手で怠け出した。幼少の頃から不安に感じて密かに賴みにならぬ兄貴と思つて居るので、何時まで此狀態で過ごして居たら、自分も共倒れとなろうから、今こそ一考すべき時だと考へた。併し資金が無い。無いのは却て宜しいが、何か赤裸空拳で取着く仕事は無いかと、晝夜工夫に專念した所、一二ケ月後に不圖した事から、兼々父が事業の中途で放弃してある小金ケ原開墾地のことを考へ出した。之

演武場額（山岡鐵舟書）

は現在三軒の監督者任せで、年々二三百圓の補缺をして、少しも收入が無いので、全家の嫌ひ物になつて居るし、且その持主は吾名になつて居るのだから、兎も角込入つた事情を調べかたぐく調査して見よう、次第に據つたら改革して物にしたいと思ひ、父から其許可を得て半月づゝ出張する事に取極め、一ヶ年間怠らずに實行した所、追々樣子も分り、監督者の裏面も、村内の人氣も分るやうになつた。そこで父の許しで斷然たる改革を行ひ、植樹開拓の農事を整へ、手當てを厚くして豫算を整理し、一ヶ年百五十圓の剩餘を出すやうになつた。之は私が二十二歳の時であつた。

此年は中々多事な年で、四月には柔術の中傳許狀を受けるし、五月には劍法剪紙免狀を受け、又、林包明の英語學校へも入學して、國友穀三郎といふ先生の會話に沒頭して居た。千葉縣廳からは製絲業盡力の賞狀などがあつて、鳥渡俗人達の評判が好かつた。

二問 武藝修行の事に付て委しく承りたし。

道場試合風景

答

私の劍術初心時代は親の讐討ちと笑はれた程の眞劍さで、餘りに武骨劍術なので、星野鐵舟などと冷笑されたものだ。山岡鐵舟先生が千葉道場へ通ふ頃は、矢張り薪割り流で極不器用だつたといふ。そして面白くないのと痛いのとで、皆々對手になるのを嫌つたといふ。其薪割り流が似て居ると云ふのだろう。併し年月も經過して、種々な人々に稽古されたり稽古したりするので拔も出始め、三年後には滅切り上達の動きを見せ出し、四年目には目錄免狀を獲て、漸く素人離れがするといふ域まで進んだ。斯うなると他流試合もするし、初心者をも引立てるし、そろ〳〵光り始めた爲め何となく噂が世間へ漏れ始め、逸見さんは名人の評判男だが、見世へ私を訪ねられたり、父さへ同僚の府會議員から賛められて、始めて知つたと言つて、「生兵法大疵の基だ」と誡められた事もある。

他流試合と云へば、或朝例の如く稽古をして居ると、遲れて多數の門人連が來たので、私が一人々々それを對手にして三時間も立續けたので、空腹と疲勞とで稽古着も脫げないで一息ついて

居ると、先刻から師範席で見て居た客人が出て來て、恭しく一手願ひたいと私へ申込まれた。起き拔けから一滴の水も飲まないで疲れ果てゝ居るのに、若氣の意地で承知して仕舞つた。サア立合つたが、靑眼に構へたまゝ手が擧がらない、氣合も出ない。十分程も睨め合つて居たが、益々空腹に堪へられない。捨鉢になつて飛込んだら組打に來た。平常は組打が大得意なので「しめた」と思つたが、手が動かないため足締めに掛ける間もなく、面紐を解かれて仕舞つた。翌日、此失敗を詫びたら、先生は斯う言つた。「それ所ではない。彼は警察所の師範なのを、能く打込ませずに長く押へて居たのは見事であつた。」と花を持たせられた。

私は兩刀遣ひと試合した時、短劍で押へられた爲め負けた。二度目には短劍を拂つた爲め、長劍で橫面を打たれた。之で一思案する事となつた。二刀流の宮本でも、眞劍の時は每に一刀のやうだ。打込む太刀は唯の一刀といふから、二刀だからと云つて負ける道理がない。自分が不慣れのため二刀に迷はされて、一心が亂れるために打込めないのではないか、斯う思つて半月後の試合には下段靑眼で對抗した。先方は又ジリ〳〵間を計つて右へ廻つて來る。今ぞと思つて、兩刀には無關心で跳込み樣、面と往つた。手易く一本取れた。二本目も同樣、飛込んで體當りで先方は倒れた。之でもまだ〳〵二刀には自信が出來なかつた。

〔一〕 鐵舟居士への體當り

明治十五六年の頃、千葉周作先生の遺子奇蘇太郎氏を押立てゝ、舊門人衆が神田三崎町へ千葉道場を再興した事があつた。都下有名の劍士は大抵集まつて、盛大な道場開きであつたが、中村一朗先生が最古參の故で、第一に竹刀を執つて大道場に立上つた。其お蔭で私も立上つて其稽古對手を勤めた。引續いて滿場一齊に稽古が始まる。見ると山岡鐵舟翁も居るので、私は直ぐ一本願つた。直心影の構へかは知らぬが、どうも甘く見える。果して甘いのかと深甲手を二本擊つたが、皆這入つた。續いて又二本、依然として變化も緊張もない。地稽古癖で人を侮るのだなと思つたから、突然御免と叫んで體當りをくれた。遉が泰然たる姿勢が崩れて三四步跟けた。爰ぞと又二回の體當りをしたが、もう動かないで防ぎ始めた。門下ばかりに慣れた弊害で、今他流の辛い點も知られたか、もう子供扱ひにはしなくなつた。無鐵砲な血氣さでも、天下の名士を突倒すだけは躊躇したのは好かつた。此立合ひの樣子を憎んだのか、群聚の中から態々私の手を引張る人がある。誰でも構はぬ、サア來いと猛擊したが、大敵後の疲れで手が働かない。其人は又非常

な早技で、進退輕妙變化出沒といふ使ひ方で手におへない。終に出足を蹴られて倒されて仕舞つた。之も疲勞の瘦我慢からの失敗であつた。此使ひ手は其時三十五六歳に見えた。逸見さんだろうとの事だ。此時、中村門下は私と加藤正吉、磯某の三人であつた。

(二) 小林三敗居士の自白

此中の加藤正吉といふ男に付て話がある。眞影流三四年といふ腕で、此男が入門して來たが、其頃私が道場主席で居るものだから、自然多く對手になつて居た。所が跳込んで打つか突くか、體當りかに極つて居る。それが大技で荒つぽいので、呑まれて仕舞ふ人が多い。私は柔術の體勢で扱ふのだから極めて馭し易く、一年立つても同樣の有樣だつたが、不圖來なくなつた。殆ど忘れた時分に、翌年又來場したが、それは一月の稽古始めの日であつた。眞影流の太短い竹刀を、更に先太とにして相靑眼に構へて來た。けふは少し烈しいなと思つただけで、相變らずの騷がしい體當りだ。二三邊羽目板へ敲き着けたら停めて仕舞つた。稽古後の祝酒になると、頻りと私に鉢飲みを強ひる。飲めないと言つても承知しないで、聽て竹刀を取出して私を打とうとする。先

生が叱り着けて歸して仕舞つた。此不可解の行動に付て、後年私が還曆旅行で京見物をした時、同氏の宅で聞かされた。それは長年間どうしても打込めぬのに立腹して、山岡道場に入門、更に淸水治郞長を訪ねて、その用心棒の松崎といふ劍客に就いて修業を積み、之ならばと思つて試合に來た所、又々同樣であつたのに業を煮やし、終に東京を去つたのだが、奇しくも同じ途をと心さした其劍法、書法、宗敎とも、貴下の成功に對して、吾は三敗居士になつたと述懷された。此加藤正吉君、今は小林精一と改名されて、畫家小林輝蔭君の父であつた。

（三）榊原先生の謙德

駒場の農科大學時代に劍道部はあつたが、私は各種の兼學で寸暇がないため關係しなかつた。或日、敎師缺席で臨休となり、寄宿舍へ戾ろうとの歸途、不圖見ると、露天で擊劍が始まつて居る。二三十人の學生を擁して榊原健吉先生が、兼々膂力家で有名な門人某を今日も同伴したか、背高の其壯漢の顏も見える。私は此先生が嘗て見世物師と惡口されるも厭はずに、擊劍を大衆的にしやうとの見識で、屢々勝負を以て公衆の興味を促がされた頃から熟知して居るので、不圖心

が動いた。早速溜りで道具を借り、先生に一本願つた。矢張り山岡先生に見るやうな直眞影の構へで隙が見える。此日は久しく使はないので張切つて居るのと、一學生といふ氣安さで、最初から甲手を續けざまに三四本打込んだ。先生捗し緊張したやうだが、こちらは頓着なしに甲手押への突きや打ちで、極めて敏捷に、極めて猛烈に、息吐く暇もないやうにした。そして激烈な體當りを二度續け、三度吶喊した。噫、劍豪既に老たり矣といふ所だ。ドヾドと二三歩蹣めいた。今一押と思つたが、遉にお氣の毒のやうに思つたから、一禮して溜り場へ潜り込んだ。斯うして一息吐いて居ると、先生は汗を拭ひつゝ、溜り場に居列ぶ學生達を掻分け〳〵、段々私の方へ寄つて來られたので、私も路を開こうとしたら、先生は私の前に來られて、丁寧に頭を下げて、「只今は有難う御座いました。失禮致しました。」と挨拶されたので、私は愕いた。どうして隱れて居る未知の私を見付けられたのかと、其謙遜な、篤實な德風に敬服して仕舞つた。矢張り私が負けたのである。

この師匠の本意を知るや識らずや、其高弟の剛力男は殺氣を帶びて、一本稽古をと申込んで來た。私は久し振りの稽古でもあり、剛敵に向つた直後で、未だ腕も凝り息も整はないが、固より好む所と立上つた。此壯漢は嘗て八尺有餘の赤樫金麾棒を使つた事を見知つて居るし、殊にけふ

は仇討ちの怒氣も昂ぶつて居るから、其心構へで對抗した。果して大太刀に打込んで、突倒しに飛込んでくる。嘗て加藤正吉の復讐試合の打込みに酷似する事を想起しながら、一本も當てさせないので終に業腹打となつた。無暗に叩き伏せやうと跳込んでは打込み、躍り込んでは撲ちのめしに來る。餘り幼ないので沈みに掛けてと思つたが、目前に謙德の老先生あるを思つて、覇氣は忽ち鎭まつて仕舞つたが、到頭一本も當らせなかつた。

（四）志田歌之助の剛力

以上話したやうな事は澤山あるけれども、詰らぬ自慢話のやうだから停めにして、柔術の方を少し思出しましやう。

一時、滿都に喧傳された相馬家騷動の主役、錦織剛淸に賴まれて、座敷牢から相馬主公を救ひ出そうと、同邸で柔術を逞ふした志田歌之助といふ人、此人は柔術使ひだが、其剛力が特に有名になつたのは、嘗て將軍鷹狩りお野立ちの折、そこに靑面金剛の建石が目立つて居るのを見られて、誰か之を持擧げる者は無いかと言はれた。併し其重量に躊躇してか、互に顏を見合はせる計

りであつたが、其時末座から恐る懼る立出でゝ一禮する者があつた。皆々危ぶんで居ると、軈て其石碑をグッと抱上げて、のみならず觀衆の面前を一巡して、元の所へ納めて平然として居る。怪力見事なりとの御賞めを受けて大に面目を施した。此評判で一時に此志田歌之助の名が高くなつた。其評判の豪力男を、後に榊原先生が講武所で、竹刀先きで脆くも捩倒したといふので、此度は榊原先生の剛力たる事が大評判になつた程だ。私は此豪傑に端なく大嶋先生の道場で邂逅した。酒酌交はして居られたが、先生が私を紹介したので、忽ち一稽古する事になつた。私は捕へられぬやうに引込み引外し、背面へ廻つて踝縊めで縊着けたが、剛い頸と丸い背中で一向に利かない。大嶋先生は六尺有餘だが、此先生は五尺二三寸位、下へ潜れそうだが腕力が強い。成程噂通り五人力だと思つた。併し動作が稍々遲いので、目ま苦しく着け纒つて其疲勞を待つた。もう好かろうと飛付いた。音が烈しくなつたのに、大嶋先生醉後の坐睡を破られたか、ヤアまだ遣つて居るのか、もう宜かろう。「縂にしちア堅いなア。」「そうだろう、小さく固まつて居るからなア。」之は兩先生のお世辭だ。

（五）中村先生の打潰し

北辰一刀流千葉周作先生の高足だが、學問が、身分が、太刀運が、妨げたか多くの人に知られずに、日本橋警察の師範はして居たが、自ら其位置に晏如たる人だ。想ふに、足輕身分が幸ひして、隨分位置の高い先生に遠慮のない稽古を受けられたので、腕節の強いことは有名であつた。前に述べた通り、少年時代に常磐小學に小使ひ先生といふ變態先生が居た筈だ。あれは此先生のことで、何でも無頓着で遣るといふ偉い所のある人だ。上野戰爭へも出るし、東京の大コレラに巡査が嫌がつて、病氣缺勤が多い時も、自ら進んで疫病係りになり、ナニ酒さへ飲んで居れば傳染するものかといふ勇猛さだ。一回も缺かさぬ私の勉強振りを悅んで、特別に烈しく使つてくれる。中々の肝癪家で、時々、打つて擊つて打のめされる事がある。腕力と腰の利くのが特徴なので、皆々之を怖がつて居た。私が柔術の目錄段の時であつた。久し振りで此打潰しの猛打を受けたが、飛び交はし跳ね交はして、一本も當てさせないので肝癪が爆發し、得意の組打ちで來られた。私ももう遠慮を捨てゝ柔術の技で首拔きに懸けた。剛情我慢の先生も終に敗北して、一ケ月

も按摩に懸つて非道い目に遇つたと、後日私へ喜怒哀樂搗き交ぜといふやうな顏で叱り付けたものだ。

（六）柳生流の皆傳允可

少年時代以後、私の師事した先生の中で今日まで偉材として敬慕して居るのは、英漢學の横田菊藏、禪僧の釋貫道、及び柳生流大嶋正照の三先生である。庄內藩を脫走して新徵組に投じ、一方の部長として能く人を斬つたと言ふ。無論多くの名士と交際があるけれども、名利に淡白で仕官を斥け、たゞ道場主となつて體術師範と整骨治療で飮酒を唯一つの樂みとして居られた。吾入門の時は現在の門人三十人足らずで、八九年前に旣に免許允可の山岸といふ男と中段以上の壯者二人で、其餘は一年生ばかりであつた。私は少年の頃から何を修めるにも、一番主席の者を目懸けて勉勵努力する習慣がある。學校でも道場でもそうだが、大抵主席に成れるものだ。其代り人一倍精力を傾けるのだが、それが樂しみなのである。剛敵には容易に打勝てないが、何時かは何時かはと屈せずに心を鞭打する。三年目で受けた中段許狀で度胸が出ると、隔朝の稽古では飽足

らなくなり、英語の休み毎には夜の道場へも出る。皆々勇躍して朝組の私へ挑み掛るのが面白くて、隨分猛烈な立合ひもしたものだ。夜分には先生は重に監視するばかりだから、私等のやうに直接教授で細密な技の呼吸は教はつて居ない。それ故、當身なり締めなり投げなり、私には著しく利く技を教へられて居る。之には皆々は恐れて居た。尤も上段者は何れも思想教育のない商工階級の人々だから、重に腕力に依賴する傾きがある。

私が目錄免許を受けた頃は、修業仲間の服部が停めて、弟の男三郎を入門させて之に仕込んで居た。兄も夜、道場へ通ひ始めて、到頭柔術も吾家庭に入込むやうになつた。もう流石の父も何とも言はない。のみならず、此頃からは決して醉ふても腕力は出さなくなつた。

中段免狀の頃、私は胸に疔が出來て、惡寒と氣欝で食も進まないので、氣を紛らそうと道場へ稽古を見に往つたら、老先生が話の中に煎藥を調じて飮ませて下さつて、忽ち痛苦を忘れて奇異の思ひをした。先生は何れ免許の時、此秘藥も傳授すると言はれ、それから過去の手帳を繰擴げて、種々の難病者を全癒させた經驗を示された。之で此先生は漢醫の藥草應用法を以て、筋肉揉み療治に倂用さるゝ醫術家だといふ事を知つた。私が少年時代に思込んだ醫術の事が、一時の斷念から再び擡頭し始めて、後、農科大學で藥草學を研究し、世間で一般に草根木皮と輕蔑さるゝ

時代にも萎げずに、應用植物編といふ小冊子を發行して世間に主張したのも、此動機が預つて力强かつたのである。

此疔は素人拔けのする驗だと先生は言はれたが、何藝をするにも、全身の姿勢が其技に合致するまでは多少とも無理がある。其無理が押され壓されて一ケ所に凝滯する。それが種々の形で疾患として現はれる。之が素人拔けのする時期と云ふべきだろうと思つた。斯う思つて柔術は吾性に於て成功するものと、獨り極めをして仕舞つた。後年、書法研究の時も、三四年頃に肩から腕へ掛けて三四ケ月艱み續いて、終に貝殼骨へ瘤が發した。之が全癒後は假名書きに著しく凝滯が去つて、連綿自在なるを得た事であつた。

目錄允許で素人拔がしたと云つても、柔能く剛を制するといふ事を體得する事が出來ない。腕力の強いのが來ると、吾知らず腕力が出ていけない。或日の午後であつた。近衞上等兵が三人道場を訪れて、吾等歸國土産に柔術を習ひたいと申込んで來た。之は大兵の男揃ひだから、力自慢か角力自慢で道場荒しに來たなと思つたから、私が相手に出ようとしたら、先生は稽古に來合はして居た子供に對手を命じた。此子供は朝日屋といふ大商店の息子で、十四五歲の暢び〳〵した氣質だ。蕪切り髮で無頓着に兵士の胸衿を捕つた。兵士が嵩高(かさ)に押へ付けやうと、腕力を恣にす

るのが氣に障つたのか、急に身を交はしたり引込んだりして惱まして居た。他の兵士も順當に組付いて倒そうと摑みかゝつたが、何れも蹣跚として倒れるやら滑るやら、大汗を掻いて終に疲れて止めた。私は之を慰めて、「諸君は腕力家らしいから、私が押しくらのお相手を致そう」と言つたら、欣んで立上つた。何れも六尺有餘の男で、好い筋骨の持主だ。其全身全力の押し力でも、柔術腰は如何ともする事が出來なかつた。三人とも呆れて言つた。「柔術は不思議なものだ。力を取られて仕舞ふのか、非常に草臥れました。之で好い土產になりました。」此等の事でも柔能く剛を制する一例だと思つたが、まだ〳〵そんな卑近の現象では盡せぬものだと後に思つた。

當流は縊と當身とを以て勝負の決を取る。併し稽古試合には當身は禁じて居るとは云へ、常の稽古に咽喉部と胸膈部は怠らず鍛へて居る。私は或時多數の門人へ稽古をつけて居た。段捕りから新入者まで十二三人も居たが、交る〳〵私の肋骨を蹴上げる稽古だ。此蹴り當てに、皮の痛い時は初心者、骨の痛いのは初段から中段、目錄以上は胃の所までズーンと痛むものだ。交る〳〵に蹴らして居ると、一蹴ズーンと腹の中心を衝いたのがある。愕いて見ると初心の男だ。之は豫許蹴りだと思つたから、後に其職業を聽いたら米の踏搗きする男であつた。或時又、新入門者の手首が非常に利いて襟取りが強い。拳も強くて當身の呼吸も直ぐ會得したのに不審を起し、其職

業を尋ねたら大工であつた。斯ういふやうに、少年の頃から熟練した職業の長所が往々妙手を作り出す事がある。少年時代の無意の練磨は無心の妙境に入り易い事がある。

此先生に師事する事七ケ年、免許を允可され、引續いて一子相傳といふ皆傳をも授けられてから半年、或日の朝稽古に私一人へ勢ひ良く稽古を付けられた。私は其得意の圍ひ締めを初めて破つたので賞められた。それから先生を捨身に投げた所、けふに限つて其巨體が崩れ落るやうに倒れたのを、不審に思ひながら歸宅した所、暫らくして先生危篤といふ急使が來た。愕いて驅け着けたら、先刻お別れした儘の姿で、大鼾のまゝ道場に横臥して居られた。吾藝を愛撫された細密の教授振りは今尙忘るゝ事が出來ない。時世が若し昔の如く武藝禮讃の時代なら、直ぐにも先生の跡を繼いで此道場を隆盛にし、先生の厚恩に報ふべきにと感慨に耽つた事であつた。

此前年から私は農科大學生になつたので（此事情は後に述べる。）、毎週土曜午後から日曜の終日は此道場へ來て柔術を教授して、僅に師の志を繼いで居た。尤も此年、私は基督教の洗禮を受けたので（此事も後に述べる）同志の青年を集めて爰に英學算術などの奉仕學校を始め、日曜は又祈り會、説教會などを開いて市民に話しかけたものだ。そして二十六年には鎌倉山莊境內へ道場を建てゝ、此道場の大額や稽古具一式を移して聊か師の志を繼ぎ、之が大正五年私の五十五歳まで續いて、三百の門人を

仕込み、有段者四十六名を出した。此道場が大正十二年の大震災で破壞して仕舞つたのである。

(七) 能勢先生の無敵流

前に述べた柔術道場の事も、是から話そうと思ふ無敵流の事も後年の話だが、武藝噺の序でに述べる事にする。

私が柔術の免許允可までは異議なく受納したが、いよ〳〵皆傳の允可を渡された時は其器に非ずと思つたから再三固辭したが、先生は頑として動かぬ。據ろなく受納はしたが、如何にも自信がない。生憎其年、先生が急逝されたので益々窮した。嘗ては勝安房先生から、坐禪しなくては武藝は駄目だと訓誡されて居るし、いつかは其修行をとの念願であつた所、三十一歳の時圖らずも建長寺釋貫道老師の鉗鎚を受ける事一ケ年、爾後三年目に至り、白耳義人デモンシューといふ公使館付の人に稽古を着ける際、不圖した動作で啓發した事があつて、それから豁然と眼が開け出した。實に不思議に思ふ程、我執が解け始めた。

之から私の敎へる柔術の捕り方が全然違つて、專ら剛を柔にて、氣合の扱ひ方を主とするやう

になり、先覺の遺した訓誡や說明が會得出來始めた。併しそれは柔術の事で、劍術の方は面甲手稽古は一に攻擊技の稽古として形而下の物たらしめ、高等な武術として、此柔術と一致すべき劍法があるべきだと考へ付いたが、自分には一刀流の他は分らない。所が上野廣小路に無敵流劍術教授の大看板を掲げて、護身器を陳列して居る所があると友人が知らせてくれた。私は早速其家を訪ふた。先生は能勢頼之（或は頼行か、私は子息が頼行かと思ふ。）といふ老人で、信州の人である。私の問ふ所も先生の說く所も、流名の無敵といふ二字にある。敵を敵としないで身方にするといふ意味の流名で、敵する者無しといふ意では勿論ない。之を聽いて、私は會心の意ある所を談つて、面、甲手、竹刀を捨てた理由を說いた。兎に角一本試合を願ふべく、立上つた所へ案內があつたので、先生は私を制して、試合申込みの警察の劍士と試合つて見せた。一方は千葉一刀流で立派な使ひ手だが、素面素甲手の優しい老人の二刀に觸れる事も出來ないで、二回とも倒されて仕舞つた。私は恭しく先生に感謝した。吾理想として永年探ね倦んで居た劍法に出遇ひ、實に宿昔の熱望が協つた事を謝し、吾體術の姿勢で其進退動作を示した所、其體勢なら此劍法と同じだと首肯された。私は問はれる儘に今見た試合を斯う述べた。「初め先生は敵と進退整調の位取りに居られたのを、彼自ら調子を破つた爲めに倒れたのでした。敵は吾影、吾は敵の影で、敵が吾を動し、吾動いて敵亦

動く事、團扇と風との進退同樣、不即不離の呼吸と視ました。之は一刀流で松風の拍子とあり、拍子を中斷すれば、調子が外れて倒れるの理合と思ひます。天地に敵なく、皆身方として觀ずるの大理想、無敵の流名判斷如何。」と述べたら、老先生は、偖も今の若さに珍らしい御方じヤ、其御修行振りなら當流も忽ち手に入りましようとて、直ちに入門を許された。

之から其子息の賴行氏（父子の名共にユキにて文字不明）と高弟とを明治女學校の道場へ聘して、私達を始め女生等に敎授を受け始めた。何程熱心に修業しても惜しい事、其間僅に一ヶ年餘で、此老先生始め一同歸國されて仕舞つた。

近年漸く劍柔共に武藝は勃興したが、劍は勝負を擊ち合ふ竹刀技となり、柔術は國技勝負の據點から、素人相撲となつて仕舞つた。眞の武藝はそんな肉體操作に停まつて居るものではない。併し加納治五郎氏が起倒流を撰用して、之に自分の揚心流を加味して講道館の一流を起し、之を國技とするため勝負の決め所を定め、專ら相撲捕りにしたのは、危險の手を省いただけでも一見識と見られる。加納さんの師礒又右衞門先生には、私も稽古を受けた事がある。

古來の柔術は敵の腕力に逆らはないで利用する事を敎へ、今のは已れの腕力と技とで約束の勝を爭ふ事を敎ゆ。昔は腕力が妨げとなり、今は腕力が利となる。昔は體骼は勝負の照準とならぬ

も、今は概ね照準を現はすといふ次第である。

さて、此流儀を練磨してから、劍柔二術が全く一道となつたが、其根柢は禪の修行からで、兩術とも掌る所は一の意念の働きだから、此意念の扱ひにまで及ばなければ、劍柔共に一卒の技に過ぎまい。

其意念の一致點、其處に一の場所、即ち臍下丹田に意念を集中する必要があり、其極無我無心の境地に居る。そして對手のリズムに一致する樣になれば、彼我一體の動作になる。敵若し此整調のリズムを破つて、突くか撃つかすると、吾は其虚に吸込まれるやうに、劍なり拳なりが打入るやうになる。結局彼我の一致といふ事が主要となるから、之を鍛錬するには、動作の練達と凝念の練達と相俟たなければならない。私が十年以上の武藝鍛錬と、坐禪の鍛錬と一致した所は之だ。最初此事のヒントを與へて下さつた人に、伊東祐賢といふ良醫が居た。私の父の代からの知り人だが、私と良く話合ふ人で、此人は馬術の武藝を得て居る。此人が或日、劍聖白井通先生の著書を貸してくれたのである。

（八）剣聖白井通の悟り

白井通は千葉周作道場での師範の一人である。此流儀は素面鉢巻き袋鞣で、他の師範は何れも面甲手の稽古だ。兩派の門人が兎角爭ふので師範同士の試合をした時、一方で構へる意念の先を言當てゝ、戰はざる中に一方が負けて仕舞つた事がある。此白井先生が口授した所を、漢文で書き現はした醫師がある。其著書を伊東醫師から借覽して、初めて劍法の蘊奥なるものが、荒唐無稽の作り話でない事を識つた。其書には白井先生の修行が左の樣に出て居たのであつた。

白井先生免許允可の後、修行を尙其師に請ふた所、意外にも禪寺へ紹介され、不審に思ひながらも一ケ月師事したが、少しも劍法を敎へずに、たゞ毎日、水を被る事を命ぜられるばかりであつた。到頭憤激して辭別した所、老僧は突然一喝して、劍を其心底に求めよ、と叫んだのにハッとした。其機緣で心眼が一時に開けて、名手の門が開けたのであつた。

三問　動から靜に入り靜から動を起す。武藝修行は中々精神修養に適切といふ事を知りました。剛健な心身の修養だけでも學ぶべき修行道ですが、一體、皆傳虎の巻といふのは如何な事が誌してありますか、少々お漏らし下さい。

答　荒木又右衞門の奉書試合

他流の虎の卷には各流特種の敎訓が誌してありましようが、私は當流の事だけ話す事にする。私の流儀は柳生心眼流で、元祖は柳生十兵衞先生ですが、特に荒木堂と云つて荒木又右衞門を法の祖として居ます。其皆傳の文章を研究して見るに、拙文誤字で不明ですが、結局氣合ひ術を根柢として居る事が分ります。陰陽啊吽の腹式呼吸を述べてある末に「陰の息を胎内に籠めて丹田に收め、臍下の心と一致すれば天地陰陽合體と云ふものにして云々。」而して後氣の充足るに準じて、力の勝るを意地の極意相傳とす。」如何にも坐禪觀法と同じで、たゞ之に武術の合ひ氣が加はるのである。此氣合ひ術は荒木又右衞門より傳承するもので、荒木の武術卓越な理由は此氣合ひ術に長じて居た故だと思ふ。舊劇に荒木の奉書試合といふのがある。あれは荒木が柳生宗家へ

此氣合術の應用を傳授したので、觀客に分るやう作者の働きで奉書紙を用ゐたに過ぎまい。九代目（團十郎）が大内記に極意傳授の時、無手で氣合ひを現はそうとした所、狐拳との悪評で失敗したのは無理もない事だ。

私には、荒木といふ人は大兵な粗剛な人で、氣合ひで敵を取拉ぎ、大技で人を斃すといふ遣り方のやうに思へる。師傳の稽古木刀は、柄も長さも太さも現代に無い大きな物で、元祖傳來の寫しだといふ口傳のものであるが、稽古薙刀も長刀術と云つて他流よりは餘程大きい。特に捕り者の手法中には、技巧が尠くて荒つぽい手が可成りある。此等を見ると大兵粗剛で、氣合ひの威壓が強かつたのだと思へる。宮本武藏のやうな藝術や智略武術に透徹した神器ではなく、實に着實素樸な豪傑であつたと思へる。

四問　武藝では隨分御苦行をなされたと思ひます。それで膽力を養つて意志を強め、氣合を辨じて健康を改造され、終には禪悟を獲て人格養成に資する所多しと、之だけは分りましたが、今日までの永い年月に何か危難を脫がれたとか、役に立つたとか云ふ事がありましたか、伺

ひたいものです。

答　兵法の體驗

（一）高所よりの墜落

血氣の時は求めて危地へ立入るもので、無益の事ですが、一つ二つお話します。

二十二三の頃は劍柔三四年といふ所で、生兵法の時代ですが、猫の仔のやうに體が自由自在で飛ぶにも跳ねるにも敏捷此上なしといふ時代で、恰度濱町の明治座が大火の時でした。其隣地の隱岐守（松平家）邸へ、母の舊主といふ所で手助けに馳せ參じた折、八九間もある御納戸庫の破風板へ飛火がした。餘り高い所で消防夫が持て餘して居るのを見兼ね、身が輕いのを利用して消止めたは好いが、其屋根先きから飛下りやうとした時、瓦に滑つて墜落したが轉ばない。人々が騷いで走せ集まる時には、もう私は無事で上を眺めて居た。八九間の上から落ちても、地上へ立つて何事も無かつた。心に何の動搖も無かつたのは、修行のためだとの自信を得た。

（二）惡漢の逃避

濃美大震災の折、名古屋へ出張して、孤兒拾容と被難民救濟用の寫眞を採りに、震源地の根尾谷といふ僻村へ宿泊した事がある。女學校教授の時であつた。川橋が折れて跳上つたり、麥畑が斷層して五六間も落ちたり、小舍は潰れたり顚倒したりして、雨を凌ぐ所もない。私は山路へ入込んで大樹の蔭へ憩つて居た。すると、晝頃から一人の勞働人足が跡を跟けて來たやうであつたが、不圖見ると、其男が其處へ來て居る。人相の險しい眼光だ。同伴の寫眞師は氣味惡く思つたか村へ向つて歩み出した。其時、其人足はヅカ〳〵と近寄つて、「何の御見物です。案內しましよう、之を持つて。」と言ひながら、手に光る物を出した。私は透さず言つた。「それは便利だ。駄賃は左か、右か。」と、左に蟇口、右に懷劍を引拔いた。彼は屈せず、左でさアといふ。よし附いて來い、あの小舍に泊るのだから、と言ひながら其肩口を押へた。惡漢は振り放して走り去つた。斯んな些細な事でも被害は被害だ。

（三）羆と追剝ぎ

明治二十七年北海旅行の出來事、瀬棚にインマヌエル村といふ基督敎信者の理想村開拓に付、女醫の荻野吟子さん(この時は志方性となる)に農場視察を託された其歸途、長萬部街道を、黒松内近くの往還をスタ／＼と脚も輕く歩んで居た。左右は丈高い熊笹で、伐開いた十間道路は坦々と續いて人影もない。其時だ。突然向ふの熊笹から三人の勞働者が現はれた。不審に思つたので、視ると鬚髯は蓬々と生え、身にはドンザを着て跣足だ。七八間に近付いた時、一人が挺身して吾右側を往過ぎに掛つた。包圍の手段と見たから、私は突然左側を來る二人へ、早足に突掛りに往つた。二人は面喰つて居る所を、突進んで身を振替へて對向した其時、彼等は何か叫んで一目散に逃出した。黒松內の立場茶屋で聽けば、昨日の空知の脫獄囚で、警察が騷いで居る最中だと云ふ。此話最中に剽盜に金を奪はれた稼ぎ女を助けた乘合馬車が這入つて來た。腰も立たない稼ぎ女が、怖ろしい三人組だと戰いて居た。

東海岸は鰊の大漁だ。雷電峠の大難所が海へ突出て、磯谷から小樽へは船便に據る。所が漁期の多忙で船が來ない。宿の女房に聽くと、此峠は北海道で三大險の一と云はれる所で、特に昨今雪解け季で熊が出るから、誰も案內人は無いといふ。之は暴虎馮河と云はるゝかも知れぬが、何だか通過出來そうに思へたので、其諫めを謝して單身登り始めた。十町も登つた頃、後から頻り

と呼懸ける者がある。四十歳位の髯だらけな横廣の男で、背に大鞄、手に太い仕込杖を持つて居る。漸く追付いて同行を賴むのだ。私は先づ熊に對する覺悟を問ふた。其男は言下に答へる。「此一刀で斬る計りだが、君は杖も持つて居ないが如何する。」「私は猛獸を斃す事を知らないから、一本の棒さへ捨てた。先づ自ら殺氣を納めて、熊の前に合掌端坐して、膽力と眼光とで之に對する。吾修行が未だ其域に達して居なければ、甘んじて喰はれる計りだ。自己の腕を賴みにして猛獸の殺氣を呼起さんとする君とは同行出來ん。君は劍を學んだといふが、三四年は出まい。」今まで眉を怒らし、胸を張つて居た男は、漸く常體に復して言葉も丁寧になつて、同伴を願ふのである。杖を荷物に隱して、種々危難に對する心得を聽きながら從つて來る。ラムネ製造所を持つ男だといふ。熊の足跡が雪に點々と穴を遺して居る。髯男はセカ〳〵と先きへ歩む。私は二つ目の頂上に着いた時、其男を呼止めて、路傍の伐木に一睡を勸め、辨當を遣つて暫時仰臥した。終に熊は出なかつた。此覺悟あり、此用心あつて、安きを得たのも修行の功だと思つた。

(四) 稻妻强盜との出合ひ

一時新聞を賑はした稲妻强盜といふのが居た。重に千葉、茨城の二縣に出沒して殺人强盜を事とする。丁度市川町の金貸後家を殺して下總へ逃げ込んだといふ其日の午後の事である。私は何の氣なしに、毎月見廻りに往く下總の吾農場へ往こうとして、船橋驛から徒歩で街道へ入込み、漸く蜿蜒たる丘陵に沿ふて田の畔を二里ほど往くのである。折から夕暮で未だ人顏も見える時だのに、今日に限り絶えて人影も見えずに何だか寂然として居る。何時も野良歸りの農夫等が居るのにと、不思議に思つて一つの丘陵の鼻崎へ差懸つた時、右手背面の笹がザワ〳〵と鳴つたので不圖見返へると、一人の壯漢が六尺棒を左に衝立つてヽスックと立て居る。少しく細顏で色黑く中背で眉巾も尋常だ。或知友にソックリであつた。無帽で裾端折りして居る。私は足を留めジリジリと向直つて身構へた。暫らく双方で睨み合つたが、剽盜としては棒構へが稍々出來て居る。差合の構へから振込むなと感じたから、飛下りる所をと懷劍を握つた。右手を棒へ掛けた儘、奴も睨めて居る。私は突然丘陵の陰へ走り廻つて躍り上つた。そして其背面へ出た時は、奴は既に遁げて仕舞つた。一丈餘の松並木が其男を沒して、もう薄暗くなつて來た。草に伏して隱れたのであろう。併し此場合が大切な所だから、私は油斷擊ちを警戒して、暫時木蔭に佇んで其動靜を窺つて居た。軈てガサ〳〵と草の音がして、元の寂寞に戻つて仕舞つた。此强盜は多少柔術が出

來て、頗る進退が敏捷だといふ評判だつたが、私もそんなに思へた。

五問　明治六年、特命全權大使岩倉卿の一行が、歐米視察土産の一つと云はれた官民合同の開墾事業といふ事は、當時社會の大評判であつたと傳聞して居ますから、其副頭取であつた御先代の失敗事業を如何改造されましたか、其結末まで伺ひたい。

答

官民合同の開墾事業

（一）快刀亂痲の試み

開墾といふ言葉は、吾家の人々からは厄病神と思はれて居ました。父も放置したまゝ監理人任せにして居るので、毎年補助損金も掛るし、官民合同以來種々の事情も分らないし、村民の人氣が極めて悪いし、實に持て扱つたものであつたが、私は此廢物に目をつけた。併し父は、資本無

しで遣れるなら許すと云ふ。そこで據ろなく無資本で此廢物を引受ける事にした。兎も角實況視察の要があるので、毎半月づゝ其地へ滯在して、讀書の傍ら村内の事情を調査して一ヶ年を費した。此一ヶ年の在京中は武藝の兩道場へ朝夕通つて不在中の補ひをし、出張中は管理者萩原に就て大坪流の弓術を勵んだ。明治十七年四月と覺えるが、殘留して居る管理者三名を一度父より解雇し、私は改めて其中、萩原と宮田といふ二人を一年交替の管理者として採用し、與へる物は與へ、取上げる物は取上げて、一夜にして改革整理を完成した。所が首席であつた山田嘉助といふ難物が承知しない。此男は舊幕時代の御六尺といふ駕籠舁き頭で、大痘痕の巨漢だ。全身に刀痕のあるのを見ても話の面白い男だから、吾家上下の人氣男でもあり、又頻りと私を好遇して其故鄕へ案内したりして、藥籠中の物にして居た。私は其藥籠中にあつて其私行を知る事が出來たので、解雇と聞いて其狼狽は知るべしである。果して其夜、威丈高になつて種々の難問を以て恐喝して來た。一は父の食言に就ての訴訟、二は其配下無賴漢の要擊、三は自殺の道連れにすべしといふ事、此小僧一呑みといふ劍幕であつた。私は其時はまだ三四年の腕前で血氣橫溢といふ時代だから、サア何でも來いといふ調子で威壓して仕舞ひ、退去に一ヶ月の猶豫を與へて引退がらせた。續いて經濟方面の整理も出來、年々百五十圓の剩餘を生み出すやうになつた。其頃は月に七

園もあれば、下宿して大學へ通へるだけの資金となるので、私は此剩餘金で農林學校へ入學しやうと考へた。

其頃山林學に熱心な友人から山林會報告書を二三十冊送られたのを讀耽つて居たが、農業よりも山林の方が現今の國家には急務な事で、獨逸皇室の財政などは盡く山林收入にある位だから、吾邦の如き農産地域よりも廣大な山林地域を放棄して居る國柄では、之を經營すれば皇室の財産を豐富にする位の事は易々たるものだといふ事を知つた。之は此開墾地などの小さな問題ではない。遣るなら此大問題に向ふ方が良い。此小さな所有地の農業などは山林を基礎として考察し、農學書に據つて智識を得る程度で充分だと考へ、王子の山林學校へ入學願書を出す事にした。

（三）　殿　様　農　業

扨、此開墾事業といふのは前にも（生家と一族の部中官民合同事業の項）鳥渡述べたが、明治政府が始めて殖産に指を觸れた事業で、素より研究された仕事ではなく、裏面には封建制度の置土産として持ち扱つて居た何萬といふ無頼漢、それは折介（をりすけ）などといふ俄か浮浪の輩を所分する政策でもあつたから、勤勞

第一の農業を、求めて自ら破壞するやうなものであつたが、其犧牲は都下富商の倒産であつたが、其頃の富商達でも、此遊民では農業は成立たぬ位の智識はあつたろうが、恐れ多くも宮樣を總裁に頂いた恐懼と、岩倉右府の拜み倒しとで出來た仕事で、壓制政府の御用金程度に承諾した事であろう。併し父ばかりは富豪の士族といふ好みだから、乘馬帶刀の身分になつて、大官連と交渉する得意さから熱心に事業に勤めて、家産を傾けるなどを厭ふ氣色もなかつた。

小金ケ原は下總の行德、船橋兩宿から、遠く印幡、手賀の二沼に添ふて成田街道に及び、之を上牧、下牧に分けた古い牧場跡で、多年風雨に曝されたまゝ僅の野馬の蹂躙に任せてあつた原野である。何れも輕鬆赤土で樹木が皆無だから地味が瘠果てゝ居る。之を宮家始め富豪連に持場を割付け、初富、二和、三咲の數字分けの村名を付けた。父は上牧に二百町、下牧に二百町歩を領分とし、古村の御瀧不動に隣接した地に三千坪の邸宅を設け、堤防空堀を廻らし、表裏の冠木門も儼めしい豪農風の役所構へ、大萱葺二十間四方の本邸、穀物貯藏庫、收納小舍、手代長屋、厩小舍等を建列ね、養豚、養雞、馬場、試作場など大農の體裁悉く完備し、養蠶、製茶、製紙、豆腐、蒟蒻、澱粉、切干大根の試驗場など至れり盡せりで、日々五六十名の農夫を雇傭して自作農を試みた。初めの二三年は會社仕事で警察權も許されて居たから、牢舍の設けもあつて折々無賴

民の裁判も行はれた。手代と稱する五六名の監督者の詰所は見世と唱へて四五十疊敷の座敷へ御用机を列べ、羽織袴で居列んで居る。其樣子は豪農の陣屋とも見え、一體に御役所氣分である。最初官民合同仕事で始めたが、平民も權力を獲ると威張りたくなるのか、殆ど官吏風になつて居た。之は現代の市民會社や銀行でも、重役になると殿樣氣分に傾いて行くのと同じで、日本人の通弊であろう。其ため農夫等は甘く見るやうになつて、會社仕事といふ言葉は怠け仕事の代名詞となつた位だから、採算上の失敗は無論だが、農業智識の缺乏から、二三年で早くも期待が裏切られたやうに思つて、官民共に大早計の失望に沈んで仕舞つた。官廳は逃げて濟んだが、民間では倒産するやら、手代に横領されるやら、他へ讓るやらしたが、父は最初から貧民救助の考だから、道樂かた〴〵家產の半分は蕩盡したが、損失には一向愕いたり悔やんだりしなかつた。此貧民救助の方へ力を入れて居ただけ家人等が困らせられたので、貧民の家族を老少に應じて夫々手當てをしたり、職業の資本を與へたり、吾家へも窮民の男女子供を使用扶助したがため、惡癖や惡癖が店員內に擴がつたりして恐慌を來たした。

斯樣な事で全家何れも氣を腐らす所へ、新地の作物で何れも粗惡な產物が到着し始めたので、流石得意の父も嫌氣が出始めて追々出張を見合せ、終には監督者任せとして放任して仕舞つたの

である。

（三）　事業完成の惱み

前述の如く、私は先づ經濟の整理をしてから道路の修繕、村社、學校の手入れ、殖樹林產の奬勵、原野の開拓、作料の整理等々、素より投資の力が無いから年月の力を待つより仕方がない。之を待つ間の年月を有益に利用しなければならぬ。それには此事業の智識と、更に擴大した國家的山林智識とを養成しやうと思ひ定めた。

之から私は滯京して學生々活、社會運動、教授生活、商業監督、文學運動等に奔走して居ながら、春秋二季と夏休暇中は出張巡視しては、農業の計畫やら監督者の奬勵やらに盡力して十餘年を過ごし、漸く事業は完成して相當の收益も整ふて來た。之で私は良い財產家となつて一生安全の生活が出來る譯だが、其折、私の思想が一大回轉を起す機緣に觸れて、此財產を解消する事になつた。それは私が三十六歲の時であるから、後段に讓る事にする。

序でに誌すのだが、此開墾事業に對しては、東京府から金盃授與、千葉縣からは賞狀、木盃、

封金等、五六通の賞狀があつた。それは小學校への寄附、蠶業製絲場の盡力、他村道路寄附等の事である。其最大の一例左の如し。

下總國葛飾郡二和村
星野愼之輔

學資トシテ金杉學校ヘ金七十五圓寄附候段奇特ノ事ニ候依テ爲其賞木盃壹組下賜候事

明治十年八月廿日
千葉縣

六問　大學生になられた譯は分りましたが、如何なる動機で耶蘇信者になられましたか。

答　農科生と基督敎受洗

（一）「偉い人」の解釋

東京の駒場に農林大學といふのがあり、それに山林學校が併合して農科大學に昇格した。其際私は林科に入つた。素より學歴や職業は目的でなく、たゞ出來るだけ林農の智識を掻込むのが急務だから、正科の他に農科の知人から書籍やノートを借覽して、實地研究をも見學する事に勤めたが、まだ暇があるので、藥草植物と獨逸語學とを學んだ。課目外には白井光太郎教授と獨逸學教師とを煩はして寸陰を惜んだものだ。元來私が小學時代からの勉強振りは、其日教へられた事は其日に摘要整理して、同時に記憶して仕舞ふ。尤も之は夜食後の仕事として、夕景は大抵運動散歩に費やす。そして試驗前には念のため一二回通覽する事として、後は悠々と遊んで居るのを得意として居た。實は當意卽妙とか護魔化すとかいふ頓才が乏しいので、用心深い癖が着いたのである。

さて學生々活は單調なもので、特に文科などと違つて、思想は多く簡單明瞭で素樸堅實な者が多い。其代り食ひ足らず、物足らぬ感が多いので、少年頃からの「偉い人」といふ宿題が再び擡頭し始めた。此學校では學士や博士の名稱を目當てにして居るが、それは一部の智識評價で、人間の偉さとは違ふ。現に尊敬すべき杉浦重剛や志賀重昂などは、其やうな安い評價は御免と云つて退校した位だ。腕力も膽力も學力も、偉いといふ事の一部分ではあろうが、どうも偉いといふ

根源は精神修養にあるやうだ。それには宗教といふものを探らなければなるまい。其宗教も實踐修行のあるものでなければ空論に過ぎない。それに當世界文化をリードして居るその歐米人が信奉する以上、耶蘇教が秀でゝるに違ひない。されば、之より此教師を求める事にしやうと思案した。尤も前にも此志望はあつたので、築地の立教大學へ入學し、或時は寄宿までして英文と宗教とを熱心に探求したけれども、志を得ずして其儘に過ぎて居たが、兼て擊劍仲間の先輩に村田友吉といふ、日本橋教會の執事をして居る人が居た。商家の主人だが、擊劍は達者で、好い性格の人だ。この人の紹介で教會の門に案内された。

(二) 思想の大發展

斯くて求道の門はズン〳〵と開かれ、第一に、虐げられた弱者を救はんと一身を犧牲にしたイエスの偉大さに憧憬し、一國主對一國民の教理でなく、世界人類對天父たるの教理に敬服し、自己一身の消極的教訓に留まらず、隣人愛を高唱する所に利己心打破の識見を覺え、損得利害の生活觀を破られて、正義人道の生活に目覺め、俄に眼界が開けて、首が雲上に出て世間を見卸すや

うになり、舊慣古例に自縛されて喘ぎ疲れる有樣も分り、社會改良と家庭刷新の要務をも明かにする事が出來、自ら驚異の眼を輝かす事であつた。

儒教の仁義は高遠な理想だが、冷靜で批評的だ。特に人世に女子を忘却して居る。それよりも佛教の慈悲の方が、熱もあつて人間生活に迫つては居る。併しそれも老人的で陰氣臭い。所が博愛、特に母性愛や隣人愛などを道德の基調とする方が熱力も高く、元氣も潑剌として生活に入込んで居る。精神の原動力はこれでなくてはならぬ。今日までは何事も第一に自己ばかり見詰めて居たが、隣人を見、社會を視、國家を視るやうになつた。基督の昇天や復活や神の裁きなどは、まだ信ずる程の熱力が自分には無いだけの事で、聖書にあるやうな怪奇めく事は、吾邦の古事記の如く、其時代相應の智識で誌した事でもあり、又信仰熱で斯く思つた儘を書いた事と思つて、敢て擯斥する所は無かつた。

それで其教會の牧師北原氏から洗禮を受け、改めて基督教信者になつた。それは明治二十年で二十六歲の時である。

此日の受洗兄弟に藤井米八郎と平田喜一の二青年があつた。

此以後、駒場の下宿に居ても、學術勉強の餘暇には聖書の研究に餘念が無かつた。教會でも禮

式後の聖書研究會で質疑をする。物足らないので別に英書での研究會を起す事となり、金子吉之助といふ傳道師を招いてくれたが、そこに出席する青年は同志社出の矢口信、共立學校の平田喜一、青山學院の淺田洋次郎、それに私だが、英書に苦手の藤井米八郎は傍觀者であつた。併し此金子傳道師も往々冷汗を流す人で、終に缺席仕舞ひになつた。此教會は商人教會で到底學徒の研究所ではなく、據ろなく各教會を巡つて、有識な牧師の說教を聽聞して其研究に沒頭した。之は靈智といふものを得たいといふ宿望からであつた。尤も十五六歲頃から思想の根柢を固めて來た儒教は、花の蕾のやうに保有されてあつたが、それが何の衝突もなく陽氣に開き始めたやうでもあつた。

そこで先づ社會へ呼び掛けやうといふので、金子傳道師と藤井とを對手に、私と平田君とが協力して、室町の柳屋といふ席亭で教育演說會を開いた。警察署許可の下に開催して、私は青年に肉體の鍛鍊から積極精神の涵養として、旅行遠足の急務を說いた。

さて、日本橋教會の青年組は聖書研究熱が高潮するに連れ、牧師北原氏の學識低級さに不平を懷いて居たが、其息子の盜癖から退校處分に逢つたのを隱蔽して居たといふので、そんな不純な人格は吾等の聖師ではないといふ。其上御有難い主義の長老執事等とは合流出來ないから脫會す

る。そして兄弟三人集まる所に教會ありと基督の教へられた通り、吾等は無教會、無牧師の一團體を造ると高唱して脱會して仕舞つた。

そこで私と平田、藤井の三名で、本銀町の吾先師の道場を集まり場所として、毎日曜熱烈な祈禱會と說教とを開いた。次週には引續いて脫會加入する者十二人となり、教會は動搖し始めて、傳道師などを說諭に寄來し始めた所、情弊に不滿な人々が各教會に多いので、最初は何れも教理の論駁を事として來るのだが、何れも屈伏して仲間となつて仕舞ふので、各教會では次第に動搖を來して不安の評判が擴がり、將に新進氣鋭の一派が興らんとした。

（三）社會奉仕の第一步

私共の信仰は生活に卽するのを一要件とするのだから、祈禱と說教とに止めず、吾等學生の身分でも、後進を補導しなければならぬといふので、土曜の午後中は、青年會の一部として和英の學、書算の技などを教授して區内の子供を隨分多く集めた。夜は說教會を開いて路傍の公衆へ人道を叫び、日曜は午前を祈禱會として牧師も役員もなく、十五六人から二十人で熱心な集りを開

き、午後は柔術などの武藝教授をして居た。私は其頃農科大學の寄宿舎に居たので、毎土曜課業が終るのを待つて駒場から此道場へ馳せ着け、夜は吾家へ泊つて家庭の狀況を聽き、日曜の夜は再び立寄つて母と談笑し、夜の十時を期して駒場へと驅け着けて、校則の門限に間に合ふやうにするのを常とした。此往復は素より私の修行の一端として、乘物を用ひないのだから、本町四丁目から駒場の校門まで、暗夜間道を拔けて、步行四十分と極めて居た。隨分若い時は早い脚の方であつた。斯ういふやうに每土曜は缺かさず私が外出するのを異な事として、之は有妻の男だと評判して居たが、どんな家だか探檢しやうといふ物好きな男が跡を跟けた所、右の次第なので案外に思つたそうだ。それは諏訪といふ剽輕な男だが、或日それを白狀してから言ふには、そういふ人とは知らなかつた。自分のやうな薄志弱行の男は、せめて同宿して居たら感化を享けられるだろうから、何分頼むと言つて居た。罪の無い、好い性質の男であつた。

七問　無敎會、無牧師といふのは、如何にも潑剌たる靑年の純情な信仰らしいですが、其後はどうなりましたか。

無敎會信徒とプリマウス派

(一) ブランド氏の來朝

其折、英人ブランドといふ篤信家が無敎會主義で、世界に同信者を求めるため横濱へ來た。そして三浦といふ牧師から吾等のことを聽いて大に喜ばれ、早速訪ねて來ました。所が其頃は、淺草敎會の執事をして居た淺田といふ洋白商會主や、日本橋敎會の執事村田友吉兄弟などいふ人々も、吾集りに加はつて居たので、此英人は先づ此人々と握手した。之が信仰上一つの間違ひを起した原因でもあつたのです。

無敎會派の原動力は吾等青年組で、無論舊敎會臭味の老輩とは、信仰も解釋も違つて居るのです。青年組は日曜の他は散在して居るので、勢ひブランド氏と敎理を闘はせる暇もなく、單に會談したのは一二回に過ぎないが、それでも旣に根柢に於て敎理の相違點があつた。ブランド氏は矢張り、ブランド敎を宣布する態度で敎理を說得する。無識の老人連は、無敎會、無牧師は世話

と資金が掛らなくて便利だ位の改宗で、教理などは何れでも好い程度のものだから、ブランド氏は「西洋人」たるが故に、其說明は一も二もなく感服して居るのである。私は袂を拂つた。之はプリマウス派勸誘の說敎だと叫んだ。

（二）國風實踐の宗敎

其後、淺田老人の宅で敎理を話し合つた事がある。其時老人は「あなたは大問屋の御主人でありながら敎育に從事なさるとの事ですが、一體、人が人を敎育するといふ事は抑々の間違ひで、神の他に人間を敎育するものはあり得ないのです。」私は答へた。「其通りだ。併し此世では普通の目と耳では神の動作も言葉も分らないから、形のある仲間の先覺者が、修行と祈禱とで感得しただけの神の力に縋つて、神の愛と智とを敎へ導くといふ敎育、其敎育に從ふのが吾等の誠意である。併し敎育の意義を他の方法に考へて居る者もあろうから、あなたの解釋を承りたい。其說明が明瞭でない以上は、信仰の趣旨も違ふ事になるので、同信徒とは認めません。」と詰め寄つた所、老人は言葉が詰つて他を言ふより他なかつた。

教育は私の天職とまで思ひ定めて居る時だから、聞流しが出來なくて、その聞齧りの空論を追窮して、終にプリマウス派と絶交して仕舞つた。之で以前の脱會組三人と弟男三郎とだけの一團となり、たゞプリマウス派を造り立てた紹介の働きだけを遺して解體する事にした。以來道場も閉鎖するの止むなきに至つた。其後この派の有志家が替る〴〵吾等を詰問やら說得やらに往來したが、言葉の行違ひや解釋違ひで埒が明かない。凡そ無識の信仰は小見地に凝り固まつて形式に墮するを常とする。彼等は新約時代の樣式を其まゝ日本の今日へも當嵌めやうとする。そして聖書の事績よりも、其字句、其言葉に信念を傾けて居る。吾等は苟も群聖の代表と信ずる基督の聖旨神意に指導されて、新日本に貢獻せんとするものである。違つた時代、違つた國風を其まゝ墨守するの愚は學ばない。さらばとばかり分袂して、之より一意學校教育に盡瘁すべく、一に實踐的宗教の實現へと志した。

此ソリマ-ウス派へは母だけを殘して、其信仰を傷けぬやうにしたから、老母は其仲間の人々に慰められて、救ひの生涯を送り遂げた。特に私達を憤らせた淺田老人の一子洋次郎といふ人が、母の墓まで世話する程の懇情を盡してくれた。此人達が重になつて、今日も尙その集りは靜肅に持續して居るやうである。

八問　農科大學在學中の樣子をお話し下さい。

答　大學生時代

（一）下宿屋の草

燻ぶつた小さな田舍の閑驛、それは五十年前の澁谷停車場である。人家の疎らな小さな町から直ぐ坂路で、急勾配の右側に掘りかけた赤土堤に二三本の瘠松が踏張つて居る。之が道玄坂で、いかにも道玄といふ山賊でも出そうな所だ。其先きへ進んで點々人家が見える。なるたけ人家離れした粗末な下宿屋を撰んだ。月三圓五十錢の下宿は田舍としては稍々高いが、木の香も新しい六疊の一室だ。私は唯一人で其處へ坐して、窓下に離々たる雜草を見た時、何か本性が適所を得たやうに非常な愉悅の感に打たれた。之は不羈自由に憧れる本性が、人工的虛僞の儀例で束縛し

た都會の舊家といふものに閉籠められた窮屈さが、一時に解放された感じではなかつたか。今や舊習と格式の坩堝を這ひ出でゝ、田舍下宿の一隅に孤坐して、一汁一菜の粗膳に對する一寒生の境地、之は何とも言はれぬ身の輕さと、魂の自由さとであつた。他室の客は此粗食を補ふに、常に他の副食物を註文するが、私は一回も左様な事は愼しんだ。それ故か貧乏者と認められて、排ひ飯や後廻しの冷遇を受けて居た。併し金錢は正しく、時間は正確、人手は掛けず、部屋は整然として汚損せず、飲酒せず放歌せず、家の娘や下婢を厭がらせぬ事などでは好評であつた。それは下宿中、二軒の主人から此等の賞賛を露骨に申述べに來たから知つた譯である。其頃でも此邊の農家の下宿屋は、食物などは一層粗末な物だが、私は元來食物と衣類は何でも構はぬ主義で、母はよく節儉の德を敎へてくれたが、幼少時代に米三郎といふ伯父と兄とが、常に衣食の撰り好みをいふのに困らせられた母の苦心談を聽いて居たので、誓つて左様な事は言ふまいと思つたからでもあり、更に武藝修行で剛健氣質を仕込まれたのに基因したものでもある。

(三) 賄ひ征伐の一喝

校内寄宿生で居た或夕方、食堂へ這入ると恰度賄ひ征伐が始まつた時で、多くの小鍋が縦横に跳ね上り、櫃や茶碗が礫のやうに投げ出されて、怒號足踏みで囂々として居る。中に其卓上へ飛上つて喚いて居る者もある。之は何事かと聞くと、鮟鱇汁だと云つて猫の腹綿のやうな物を出した、それは吾等を侮蔑したのであるといふのだ。私は本校生の生活が、如何に地方的低級趣味であるかに呆れ、同時に、馳走振りの厚意を裏切られた賄方への同情で輕い義憤が起つた。私は突立ち上がつて呶鳴つた。「百姓の耻曝しだ、止せ。之は鮟鱇の肝汁で、都會では洒落た食物なのだ。低級な山猿と笑はれるぞ、本校の恥を思へ。」素より亂拳覺悟で居た所、忽ち鎮定して仕舞つた。そこで賄方へ命じて麵麭を配らせて事濟みになつた事がある。何事も捨身の時は斯んな事があるものだ。

（三）　高橋是清翁の健忘性

高橋是清翁が吾校長になつた事がある。私は委員として屢々接觸したものだ。誠に飾らない態度で學生にも眞實に應待される。「請願の件は如何にも尤もの事ゆゑ本省へ能く交渉しましよう。」

など丶言つて悦ばせる。再三督促に往くと、何時も快く面會する。決して否とも言はず、說諭らしい事も言はないで、眞實そうに見える。常に此流儀だから、終には賴みにならない好々爺として、學生達は問題にしなくなつた。所が金慾だけは別だと云ふ話を聞いて居た。或時全校生を校庭に集めて言ひ渡すには、「メキシコにカラクワ鑛山といふ有望の金鑛があつて、それが端なく手に入りそうだから、校長を前田政名君に讓つて、吾輩は渡航するのである。此事業成らずんば再び諸君に目見(まみ)えん積りだ。」などゝ大部樂天的の調子を上げて居たが、まんまと僞鑛山を摑まされて一敗地に萎して仕舞ひ、いつ歸朝されたか知らぬ程であつた。此ため一時は悄氣て居られたが、久しからずして官界へ顏を出し始め、何の斷りもなく再び諸君に目見えても一向恬として居られる。私は此目見えん問題に付て同翁に問はんとした事があつた。それは明治三十二年頃の事で、洋行歸りの松井節彌（後の櫻田助作夫人）といふ、元吾校の女生たりし緣故で、其料理會を吾鎌倉の山莊で講習を開いた事があつた。其品評會に知友を集めた所、九鬼隆一子が高橋翁を同伴して來た。其折の事である。翁が靴紐を結んで居る時、私は高橋さんと呼び掛けた。翁が振返へる其顏を見た時、私は其罪の無い愛嬌さに擊たれて言ひ淀んだので、思はずも再來を約する挨拶になつて仕舞つた。翁が一生の成功は此健忘的愛嬌であろう。

（四）　中村彌六さんの肝癪玉

一時政界に慧星のやうに飛び出して、意氣颯爽と奔馳した快男兒中村彌六さん、此人は林學博士の教官で、或日例の如く教場へ來た。見ると、教壇に嘲るやうな顏が樂書してある。赫と怒つた先生は、之は誰が描いた、名告り出ろ、と叫んだので、一座は寂然として白らけ渡つた。今日は講義中止と宣告されたので、私は立上つた。「何の意味もなく私が描きました。どうか私を罰して講義だけは是非願ひます。諸君のために。」と陳辯した。先生は私の顏をジロリと視た計りだ。快男兒吾が意氣を感受されたか、講義は始められた。此兒戲者は木村といふ男だといふ事は知つて居た。

その月末、私は事務所へ呼ばれたので、叱責だろうと思つたが、意外にも賞狀を附與された。「在校三年間の試驗成蹟優等にして平素品行方正なるを以て特に之を褒賞す。明治廿二年十月十二日」とあつたが、私は普通の事だと思つた。

（五）異色博士の顏觸れ

教授の中には貧弱な人格が隨分多いやうであつて、船來博士の松野礀といふ文明紳士、大黑さんが鑛植に成つたやうな氣象博士西尾二郎、自然味が深くて、昆蟲世界に知己の多そうな佐々木忠次郎博士、冷酷で雅量の乏しい、庶務室の苦虫で居た酒匂常明博士、此人、後に製糖會社の社長に祭られ、慣れぬ實業界の魔手に犧牲となつたのは氣の毒だ。古在由直君は其頃まだ學生で、アールヌーボーの尊稱を奉つて居たが、後年總長に擧げられたのは、此尊ぶべきヌーボーの良品からであろう。

（六）田尻稻次郎先生の鼻折れ

親戚の增田嘉平翁が箱根木賀に滯在して居るので、私は夏季休暇を利用して、その旅館蔦屋を訪ねた。所が大藏省高等官田尻さんが滯在中で、今富士登攀の對手を探して居るが、其人を得な

いで困つて居るのだといふ。此人は質素剛健を好む變り種子で、眞摯な良い學者だといふ事は聽いて居る。其人が徒歩登山の對手といふので、館中皆恐れて居るのだ。之は面白いと思つて、早速申出た。見ると、同君は三十五六、中肉で五尺三四寸、飾り氣のない好もしい風釆だ。

翌早朝、倔強な剛力を從へ乙女峠へ向つた。同君の友菊池大麓、小牧昌業の二君に見送られた。菊池さんはフックラとした色白の醫者タイプで、小牧さんは溫厚な感じの良い人だ。田尻さんは古びた背廣服に靴、襟に財布の黑紐、夏帽ステッキ、私は夏服に草鞋、學生帽に懸け鞄、一氣に須走り口の宿へ着いて、浴後の雜談に花が咲く。先生頻りと强がり出した。壯時は常に一貫目の鐵棒を杖にして居たとか、碁盤で燈火を消したとか、話して頻りと腕を撫すといふ有樣だ。私は朝來この時まで唯々諾々として柔順であつたので、益々武勇談で肉迫して來る。どうだ、此床の間に碁盤がある、之を見よ、と言つて、その一端を摑んで前下りに擧げられた。私は始めて應じた。兩手ならと言つて、輕く持擧げて煽いで見せた。「之は何か遣つて居るな、之はどうだ。」と言つて鴨居へ體を引上げて見せた。私はもう遠慮なく片手で體を引上げ、更に肩を鴨居へ着けて見せた。それから腕押し、脛押し、胸押し、腕曳きと種々な藝盡しを出されたが、先生みな失敗、終に登山勝負を提議された。負けは會計課なりといふ決議で、一先づ就寢し、三四時間眠つて出

立した。
日の出を馬返しで仰いだが、無休の約束だ。雨雲、雷電雲を突抜けると雨が下から降り注ぐ。金時供の剛力は箱根産だから、吾等は金時と命名した。金時の天狗崇拜熱を兩人で冷かすので、金時怫然として「今に見ろ旦那方、頂上近くになつての弱りさが見たいぞ。」といふ。「よし頂上でも威張り續けるぞ、負かしたら駄賃を遣らんぞ。」
太郎坊からは廣漠たる燒石原、八合目の大岩屋で、辨當と金時が言つても許さない。一服の烟草だけを許して九合目の天狗社を觀る。爰では天狗などゝ呼捨てにすると引裂かれると堂守は叱る。「そうか、その奇瑞を實驗したいものじや、此天狗奴。」と田尻先達は叱りつける。金時は愕いて顏色蒼然となつた。サア駄賃は遣らんぞで、金時とう〳〵降參するといふ巫山戲方だ。
頂上の辨當、之で身拵へも出來たので、私は獨りで頂上廻りをして劍ケ峰へも登り、大澤の石瀧、馬の背、蟻の戸渡り、虎岩へと來る頃、田尻先達は漸く對岸に現はれた。之を待合せて須走りを走り始めた。此頃は剛情我慢の先達も無言での緩歩だから、お先きへの一言を遺して、私は韋駄天走りを始め、その日、四時頃、須走りの宿舍へ馳込んだ。一浴後、先達の聲がした。とうとう「敗北々々」と言ひつゝ、足の肉刺を調べ始めた。

この先生は後、法學博士となり、會計檢査院長まで登り、後、東京市長に推されて綺人市長と云はれた、鹿兒嶋出身の淸廉の士である。

(七) 俗吏膺懲の痛快味

學生氣質で、地方俗吏の不品行を懲らした話を述べやう。

學生には一年一回の實習旅行がある。豆州天城の踏査、木曾山林測量、三方ヶ原施業、青森、秋田の林相調査など三四週間の旅行をする。その駿河旅行の途中、靜岡の大旅館へ宿した。其夜隣室へ稅吏十四五人泊つて、晩食に四五名の醉漢が出來た。女に揶揄ふやら、放歌するやら、傍若無人の亂痴氣騷ぎに、何れも不愉快を感じながら、學生一同は靜肅に寢に就いた。其時、醉漢兩三名がガラリと吾等の部屋を明けて、ヤア間違へた、此處は豚小舍だつたな、と放言して荒らかに障子を締めて、高笑ひをしながら引上げた。氣慨家は憤然として別室の私へ相談に來た。私は元來威張る者には憎惡の堪え切れぬ所へ、其代名詞とも見る俗吏といふ對手を見ては、憤激を禁じ難いのだ。併し今日は元締めの位置に居る事を考へて、徐々と勝算を考案して容易に答へな

かつたが、先づ辯者三人を派して穩かに當方の威嚴を展開し、腕力家三人を添へて和戰に應じ、吾等三人は其後詰めとして結末の處置に當ろう、よし、やれといふ事で、翌朝交渉を申入れた。まだ醉漢がゴロ〳〵と寢轉んで居る所へ、故意にドカ〳〵と六人で這入り込んだ。氣勢に壓されて一同起き上つたが、傲然と構へた一人の年輩者が上司の態度で應接に當つた。初めは詭辯やら威嚇やらの暴言だつたが、此方は一層落着いて「本省の命令で出張する大學生で、吾等の侮辱は默過するとしても、御下賜の帽章に對して豚小舍と嘲笑されては誠に恐懼の至りだが如何にや。」と詰問した時は、一座は鎭まり返つて、先方も目を伏せて仕舞つた。後ろに控へた腕力組は、面倒だ、無禮男を出してくれ、一擧して解決するぞと迫る。其時、柔和な語調で大いに陳謝する中老者が和解に立つたので、終に腕力沙汰にはならずに、校生代理六名の前へ其醉漢をして平伏陳謝させ、そして膺懲の凱歌を擧げた。先方はコソ〳〵と出立して、宿屋へ命じたか膳部を贈つて仲裁の挨拶をされた事がある。若い物數寄さは斯ういふ事も痛快がつたものである。

九問　其後の御家庭風景から家督相續のことを伺ひたい。

答　五代目商店主

（一）家族と家産の整理

學生の私は、毎週歸宅して家事の動靜を聽く事にして、兄の樣子に注意して居た所、迎妻二年目頃から夫婦仲が段々不穩になつて來て、兄がそろ〳〵茶屋遊びを始める。全家擧つて嫁の評判が惡くなる。佛のやうな母を心配して慰めに來る姉が、却て嫁非難に馬力を掛ける。嫁の辛さは一通りでない。その嫁が又ミッション出で荒つぽく、家庭の教養がないので、母や姉の目に餘るのも無理はなく、さりとて本人も惡い心で仕向ける譯でもなく、特に學問嫌ひの兄とは全然理想が違ふので、その失望も手傳つて悶々の情に堪えず、終に病氣を起して入院する事になつた。實に手の着けやうもないほど、行違つて居る夫婦だから、今の中に分離するのが双方の幸福だと思つた。そして其嫁の父（増田嘉平翁のこと）に面談して、忽ち離婚と取極めて仕舞つた。

この斷然たる所置に付て、氣の弱い兄は増田家の人々に面目ないと悄げるし、家に居れば父の

壓迫に堪えず、更に母の心配顔を見るも强面いので、とかく料理屋へ入浸るやうになつた。父は不圖した事から此事を聽き出して激怒した。「よし悴が家を潰す氣なら、俺が先きへ潰して遣るから、金庫の鍵を持つて來い。」といふ騒ぎになつた。

　主人が既に斯ういふ有様だから、店員達は皆不安になつて、眞面目に勤める者はなく、古參の者は心配の餘り意氣悄沈する。其目を潜つて、若い者は拔荷をしたり、買喰ひに日を費したり、顧客廻りに遊び廻つたり、全家一體に人心離散の傾向を現はして來た。私は傍觀して居るに忍びなくなつた。最早己れ一身の仕事を考へて居る時ではないと思つたから、或日曜日に弟を促がして兄の隱れ家を探すべく出掛けた。待合か料亭か旅館かと考へた末、芝公園の新溫泉を訪ねる。今考へると不思議なやうだが、たゞ兄が居そうな場所と考へた計りであつた。初めは番頭も女中も取合はなかつたが、番頭の眼を凝視した所、之は居るなと感付いた。味方の者だから安心せよと押通して、到頭面會が出來た。私は兄に問ふた。「さん〴〵父親で苦勞した母が又、子の爲に苦勞して眠れないそうだ。どうだ、家は潰そうか、潰す手傳ひもする。興すなら興す手傳ひもするが。」善良な兄は悄然として、「迚もあの家族は背負つて往けぬから、宜しく賴む。」とだけで、金庫の鍵を私へ渡した。「宜しい、慥に預つた。」との一言で、約束を濟ませてしまつた。

其夜、兩親に家督相續の承諾を受け、重要な親戚へ報告を濟ませ、從來營業の主管をして居る伯父の銀次郎へ營業部一切を委ね、父と兄とで荒した家產を總計して見ると、迫は古河に水絕えぬ觀がある。差當り營業資金が著しく不足して居るので、至急所有地一ヶ所を賣却して增資する事が出來た。之で奬勵法を定め、負擔を廢し、人心の安定を計つたので、營業方面は順調になつた。

次には家族の財產整理だが、之は貸地と貸家料の收益が月々五百圓はあるが、多くは父の消費料である。其頃の中產生活は四五十圓から二三十圓の月費で、私の學資金などは一切で月七八圓で濟む時代だ。豐富な隱居料でも月百圓ならば充分だが、私は此家族收入を全部父へ仕送るからと別居を勸誘した。案外父は快諾した。實は此問題が兼ての懸案で、兄がいつも苦惱して居たものだが、手易く話が纏つた。所が母は先祖の家を離れぬとの本願だから、私は親夫婦を別居させるのが心苦しかつたが、母は現在宗敎に生きて居て、嫌ひ拔いて居る父と別居する方が自由の生活に入る譯だし、父も亦兼々氣に入りのお政といふ世話人を附添ひにして、是亦、自由生活を樂しめる譯だから、其やうに取計らひ、兄の新宅を九段上に設けて、兄の馴染女を世話人に納れ、其處へ私と弟妹が同居して、夫々の學校へ通學させる事にし、此家族の一切は私の農業收益から

支辨する事にして、總ての整理は出來上つた。

斯ういふ按配で家督相續人になつたのだから、表から見れば問屋商人五代目星野某で、富商のやうであるが、私は一時改革のために商籍に這入つたので、元締めと監督だけで、商業には一切手を觸れないし、又他力に據らない獨立主義だから、家族收入は一切弟に監督させて、從前僅かながら貰つて居た小遣ひさへも返却して、身に着けぬ事にしたから、總ては從前通り、吾農園事業からの收入で生活して居た。

所が半年も立つか立たぬうちに、本宅が動搖し始めた。家庭を預かつて居る伯父夫婦が不人望で、雇人が亂れ出すし、母や妹からも苦情が出るし、到底伯父伯母は大家の主婦たる器でないと認めたから、從前通り別宅させて、再び母を主婦の位置に据ゑる事になつた。此頃の母は基督教の篤信家で、日々晴れ〴〵と過ごして居たので、私は非常に嬉しかつた。嘗ては父と兄との苦勞で愚痴に日を過ごして居たから、兎角病身であつたが、母は全く救はれた人になつた。

(二) 成つて退くの本意

此度は諸事順調で、商業も追々繁昌して年々好景氣であつた。斯くして平和に進んだので、家運は再び繁榮し始めた。其六年目の時、偶々在米の兄が迎妻のため歸朝したから、篤と其後の成績を報告し、今や家運再興して最早安心だから、兼約通り此まゝ譲り返すと告げた所、此時、兄は既に以前の兄ではなく、熱心な基督信者で、再び窮窟な社會へ這入ろうとはしない。潰れた物を再興してくれたのだから、自ら所有すべきだと主張する。私は前約通りを履行するので、今更好まぬ商業家には成り得ないと主張する。其時傍らに弟男三郎が居た。之は現在まだ帝大工科二年生であるが、長兄も次男の私も辭するとすれば、三男が繼續するとしたら如何と問ふた。併し之は唯貰ふといふ意味ではなく、祖先の家産を保護養成して繼續を全ふするといふ意味での相續人と心得て貰ひたい、それに富有になると心自ら弛緩して、漸々遊惰に傾いて學藝德藻も緊張味を失ひ、良友が遠去かり惡友佞者が近付くものだから、此警戒の努力に心勞しなければならぬ、それに又、金品貸借の人々が接近するものだから、無抵當の貸金と借金保證人には決して立たぬ事、此等を重い條件として服用して呉れるなら、今日唯今、此家督を譲ると言つた。弟は委細承諾といふ事で相談が纏まり、此月より私は全く商業界より手を退き、病軀の所以を以て戸籍面へ隱居屆を登記して仕舞つた。

十問　これまでお聞きした所では、先生は改革整理の手腕家で、開墾事業も商業人に成られたのも、豫期された仕事ではない。併し教育こそ、吾本性に合致する豫期の事業だと云はれるから、其方面を早く伺ひたいものである。

答　吾が女子武藝教育

（一）人道主義の事業

仰せの通りに相違ないが、その開墾事業は私の生活資本を供給し、商業界への盡力は父祖に報ゆる奉仕の念を完ふしたので、實は事業その物は私の念にはない。何でも其時機に對して必須の急務と思へば、其仕事を捉へて吾が主義を遂行するのが眼目だ。若し其仕事が吾が人格を損じ、又は吾が人道主義を曲ねばならぬ事ならば、直ちに其事業を退いて、他の事業で吾が人道主義を

遂行するのを本意とする。それ故、事業の成敗や名聲の毀譽などは念頭にない。例へば開墾事業も成功して地主となつた時、之を其農民に解放分割し、商業店主であつた時も、一財をも身に費さずに後繼へ讓與して仕舞つた如きである。之から述べやうとする教育事業も終始無俸給主義であつた。それは宏壯な家構へも不用だし、日常の衣服も食物も在合せ主義でもあり、寧ろ簡素を好むの癖から、自然多くの生活費を要せぬ所からでもある。學生時代には下宿屋では貧書生の待遇を甘んじ、樂隱居になつても一介の村夫子と見なさるゝを恥ぢない位だ。それも初めの中は人道主義でも、折々、一身の名譽や利害や事業慾が擡頭したものだが、其人道が神の道へ通達するやうになつてから、所謂壞の埋草になるも辭せぬといふ考へにもなつて來たのである。
斯ういふ譯だから、之から話す事毎に付ても、どうか事業の成敗利鈍などに重點を置かないやうに聞いて下さい。

（二）　日本女子の教育熱

さて、私が少年時代から念頭を去らない、弱者を助けるといふ觀念が、年齡に應じ時代に應じ

て、種々な形で現はされて來たが、親の遺業繼承の義務觀念に壓されて、暫くは農林の學裏に彷徨したり、難業の整理に沒頭して居たが、漸く敎育の方面に曙光が見え出したので、忽ち素志が躍動し始めた。それは斯うである。吾邦の女子は永らく男子の壓制で卑屈に陥沒して居る。如何なる英俊でも豪傑でも、母の膝で育てられぬ者はない。其女から學術と金權と法權とを奪つて、弱い者虐めをして居る。何といふ卑怯な男性だろう。私は此弱い者を敎育して、其觀念理想を高めるのが急務でなければならぬ。一身の事を考へて居る場合ではない。幸ひ明治女學校といふ新智識養成所で私を迎へて居る。一校たりとも吾邦のために、女子敎育の烽火を擧げねばならぬ。現政府の冷淡さを看よ。現に女子師範が唯一つある計りで、それも全然女子を理解しないから、宗敎を退け、軟文學を冷視して情藻を顧みず、科學一方に偏して、徒らに變性男子を社會に送り出すに過ぎず、さりとて女子敎育を導いてくれる歐米人の宗敎學校は如何。それも一向に吾國情の無理解から徒らに歐米に心醉した輕佻浮薄な女性を送り出して居る。此等をして新日本の母性たらしむる事は出來ない。双方共に自己を理解しない結果である。先づ動中に靜を觀、敵を知り己れを探ねる。不動の意志鍛錬と、情藻的文學を以て情藻思想を養はねばならぬ。斯う考へて私は、長刀術を二流から、懷劔術を柳生流から、棒術と柔術とを併せて女流型の手を編成し、そし

て實行すべき時機を待つて居た。

この宿望實行の時機を與へてくれた人に巖本善治君がある。

(三) 初對面の巖本校長

巖本君は明治女學校教頭(實權は校長格)の新進教育家で、女學雜誌社長で、基督教社會の名士で、女學者を以て任じて居る人だ。わが兄嫂であつた增田たき子といふ學生が、其家に寄寓して居た所から、自然私の事を聞知られたのであろう。或日、吾寄宿舍へ未知の此紳士から懇切な招請狀が屆いた。それは學校と雜誌社との經濟立直しの相談が目的であつた。私は又と得難い教育理解者を捕へた喜びで面談した。先づ其風采と態度の謙遜さに、人間を基礎とした高所の立場に、武藝教育の奥儀理解に快哉を叫ばしめた。私は教育の抱負を開陳して漸く教師撰定の事に及んだが、素より適任者を見出すべくも覺えないので、とう〱自分が乘出す事となつて仕舞つた。そして新學年は目前に迫つて居るので、それ迄に準備する事として別れた。

其頃は農林の學術も分つて仕舞つたし、殘り半ケ年は重に實習旅行で、自分は素より學歷や資

格などは目的ではないし、此半ケ年を文學研究に向けやうと考へて居た所だから、學校へは無届けの儘、九段坂上へ新宅を構へ、其處から神田の錦城學校へ通つて、逍遙先生專賣の沙翁物と、思軒居士の英小說と詩經との、優秀な飜譯研究に志した。此一ケ年の勉强は非常に益する所があつた。私は明治十六年にガリバルジー嶋巡りを飜譯して、お伽話出版界に先鞭を打つた積もりであつたが、二軒の書肆に挑付けられたので、出版は出來なかつた。今、思軒居士の流暢な俗談平話の飜譯振りを聽いて、出版出來ないで可かつたと思つた。オリバークキストの裏長屋言葉などや、俗調卑語の詩經の碎け方など、實に啓蒙の思ひがした。坪内、森田の二才人とも、はや四十に近い齡に見えたが、一は垢脫けした才子で、科白廻しなど江戶人には脈身に見えた。一は稍々蒼白で味噌ツ齒な、學者らしい廣い額、張つた眼ざし、輕快洒脫な話術は、頗る敬服したものであつた。

斯ういふ勉强で、一方は學生々活、一方は敎師生活、一方は實業家生活で一年間を過ごした。

十一問　明治女學校とは、どう云ふ成立ちで、どういふ學校でした。

一答　明治女學校時代

（一）女子教育の導師は基督教

明治初年頃から歐米の宣教師が各居留地へ女學校を建てゝ、最初は貧しい日本子女を養育して居た。此基督教派の働きが吾邦に女子教育といふ事を教へてくれたのである。其頃、官立では女教師養成を目的とする女子師範があるだけで、全く此方面は等閑に附されて居たものだ。それに刺戟されて、櫻井女學校の前身を起した櫻井チカ子、續いて跡見花溪女史、棚橋絢子、矢嶋カヂ子、それから木村鐙子女史が居た。何れも二三人の娘を預り始めてから、追々女塾となり學校となつたのが多い。此トウ子女史は、其夫木村熊二君が政治學研究生として、森有禮などゝいふ俊才仲間の一人となつて、政府から洋行させられ、其留守仕事として女史は知人の娘達を預つて漢學思想で教育を始めた。それが時勢の要求を受けて忽ち多人數になつた。そこで九段牛ケ淵にある明き家を借りて、明治女學校の名で開校したのが序開きである。それが更に隆盛になつて九段

坂上の飯田町へ移轉し、漸く學校の面目が整備した。其頃、最初の農學者としての津田仙君が麻布に學農社を開いて居たが、其學生中に出石出身の巖本君が居た。それが津田社長の强制勸誘で基督敎徒になり、飜然覺る所があつて敎育に着目し、明治女學校へ屢々參觀に往來して居る中、鐙子女史に信頼され、委託の遺言に據つて、巖本君が終に校長の職分を襲ふ事となつたが、自らは敎頭を名告つて居た。之は鐙子校長の功績を記念する篤志であつたろう。校風は基督敎主義になつたが、形式は、宗敎様式に多くは據らなかつたので、華族、學者、地方の精神家などの子女が、女學雜誌の愛讀圈を越えて、續々と校門を賑はし、何れも巖本君を嘆美して神の如くに崇拜し始めた。英語敎師こそ英米人や同志社出身者であるが、當時濟々たる學者を多く招聘して居たので、心强い學風を爲して居た。私は初め精神修養、武藝敎育の敎授として這入つたが、心理學から高等漢學の講座を設けて東洋哲學を論議し、武藝修行と相俟つて專ら精神修養に盡力した。尤も日曜だけは日曜學校々長となつて、耶蘇敎的修養談に熱を揚げて居た。但し此等の事は重に學校が番町へ移轉後に係つて居た。

さて、最初委任された敎授の方は右の通りだが、財政整理の方はと云へば、二ケ月後學校から私へ謝禮だか俸給だか届いた時、それを返却した事があつた。それを機として私へ整理實行の依

頼が來た。早速調査に着手しやうと思つたら、僅に收支會計だけの範圍より明示されない。銀行や個人よりの融通金も現財産も示さないから、極めて小問題に過ぎないので、一向氣乘りがしない。併し折角の依頼だから、學校だけの收支を整理して、校主役の巖本と整理役の自分だけは無報酬として、多少とも殘餘があつたなら受ける事にし、實狀を開陳して教師一同に減俸を乞ひ、漸く整理の緒に着いた。併し雜誌社の方は巖本自身で整理されたが、增資の要があるとて相談されたから、私は何千圓かを融通して一時治まる事になつた。尤も是は一時の小康で、融通性の强い同君の事だから、久しからずして又苦境に喘ぎ出すだろうと思つて居た。

（二） 女子武藝の精神方面

其頃は一般に士族出の娘が多いので、新設の武藝科募集には多數の志願者に當惑する始末であつた。先づ五十名中から上級生五名を選拔して、之に長刀術十手を敎へ込み、之を稽古臺として九人づゝ受持たしめ、荒こなしが着くのを待つて、師範たる私が一人づゝ之を仕上げるといふ遣り方で、一二ケ月もすると、漸く一同の元氣が潑剌と動き出し、校內の人氣が何となく緊張し出

した。

武藝教授は單に身體動作だけでは、所謂下司の武藝で精神的に進まない。禮儀作法で精神の緊張を肅清して、道義的に導く位は出來るが、稍々出來て來ると、精神上の教理で導く事が必要になつて來る。其講義の座を設けるために、先づ心理學の講座を引受けた。素より心理學には意志の章はない。それを私は武藝に據つて解釋する事にして居た。後年、此意志の事に付て、哲學者元良博士と知合になつて話し合つた事がある。

(三) 元良博士と意志の研究

此人は早くから私は知つて居た。京橋の大文字屋といふ砂糖商の養子となつて勉强した人だ。茫乎とした溫厚無口な學者肌の人で、よく店先で見懸けたものだ。此店の斜向ふに、同名の老舖で、而も同業の大問屋がある。そこは吾家と同業仲間だから、從つて此異風な養子として、同氏の事は屢々傳承して居た。其人と圖らずも津田仙翁方で打解けて話し合つたのは此意志の事である。同氏は生涯の仕事として、心理學上に嘗て記載されない意志を解説すべく、舊年建長寺で宗

演師に參禪した。所が「師は私の正坐したのを見て、唯その儘お立ちなさいといふので立上つたら、それで宜しいと云はれた。私は何の事だか分りませんでした。」といふ。私は武藝方面の研究の方が有利な事を話し、其便利を計る事を約した。私は此意志の研究から靈智の域に進んで同氏と討議すべく期待して分れたが、久しからずして突然の訃音に接したのは、斯界の損失にして又吾損失でもあつた。

十二問　石部金吉金兜といふやうな先生が、燦爛たる風流文學を唱道された。下ゆく水の源流を打明けてお話し下さい。

答

性情の激變

（一）　克己性情の苦鬪

二學期は早くも過ぎて、夏季休暇が來た。寄宿舍居殘りの十四五人と、職員達が鎌倉避暑學校

を催すので、私の妹も往くから是非にと同行を勸められた。今まで若い女子と同伴した經驗などのない武骨の自分が、女學校へ半年ほど往來して居る中、何だか筋肉の緊張味を鈍らせたやうに思へる矢先でもあり、軟弱男子を忌み嫌ふ私には、この同行問題は重大の事に思へた。併し終に同行して仕舞つた。私は少年の頃は、病身の故か感じ易くて、內氣の弱虫であつた。剛情張りではあるが、道理一點張りで、馬鹿正直と云はれたものである。それで二人の妹と一人の弟とを吾生命として可愛がつて居た。十四歲の時、始めて他家の娘に心曳かれ、十六歲の時、同級生で好きな娘が居た。見れば恥かしく、見ねば淋しく、卒業後永く苦しんだ。それは早川琴といふ娘であつた。之が初戀とでもいふのであらう。其後、八犬傳愛讀者になつて、「若き時は之を誡める色にあり」と云ふ句に恐縮して、謹嚴これ勤めるといふ意志を固めた。軈て武藝道場に出入りし始めてからは勇武一天張りで、女性を心外に驅逐して一顧も與へないといふ事にした。意志が肉慾に負けそうになると、益々武藝に猛烈さを加へて肉體を苦使し、或は宗教の熱力を以て神前に苦禱し、或は水を被り衣を減じ、只管修道的信念で鬪かつた。二十六七歲頃には情慾も漸々起らなくなり、若い女に邂逅すると却て嫌惡の氣が起るやうになり、無論羞恥心など浮かなくなつた。豫て評判された、女嫌ひだの偏人だのといふ噂も定評となり、誰も嫁の世話などする者も無くな

つて、中には武者修行に出る目的がある故だなどゝ云ふ者もあつた。世間の若者が妻子を持つと急に老成して活氣を失ひ、生計に苦しんでは悲觀して居るのを、私は常に見聞して居るので、無妻主義をも唱へて居たが、それは無準備で迎妻するの愚を避けて、先づ立志せよ、成業せよ、といふ見地からの無妻主義であつた。私は凡そ意志で抑制出來ぬものはないと簡單に信じて居たから、よし獨身の吾身を美人の間に一夜を過ごさせて見よ、そんな魅惑でも自分は勝つて見せるぞと豪語して居た位だ。

斯ういふ木强漢が女學校に一ケ月も出入りして居た或夕、招かれて親睦會へ出席した。若い女群の熅れで噎せ返るやうな中へ立つた。敎育ある家庭の素樸な娘達の、純眞な妙齡さに打たれたか、天女の世界へ來たやうな恍惚さに茫然として仕舞つた。都會育ちの身で藝妓などに媚びられたりしても一向感じなかつた私だ。女一切には無關心だと信じて居た丈自分が、此夜の感じは不思議だと思ひながら歸宅した。素より敎授中は精神が緊張して、敎授が面白いので、例の無關心になつて居られるのだが。

（一）鎌倉避暑の魔風

避暑の一行は十八九より廿二三歳の女生十四五人、教員と取締で五人、婢僕三人、之が鎌倉坂ノ下極樂寺村の成就院といふ臨海の山寺へ滯在した。本堂の西席が女生席、東の客席が男教師席、內陣が寄宿取締り吳くみ子、婢僕は新設の炊事場を居所とし、清水の湧く大きな岩井戶、蟬聲の絕えぬ時雨に、鬱蒼たる老樹の庇蔭、海風軒に涼しく絕好の自然境地で、人々の心も自然に歸る暢びやかさを覺えた。

敎師の連中は村木經策、磯貝雲峰と私とが常住で、巖本君は折々滯在し、歌人池袋清風老も少しの間滯在して一種異樣な和歌の朗詠を聽かせて居た。それに齋藤精作といふ珍らしい若者も、傳道かたぐ〱此連中に加はつて居た。其脫俗な風格は大いに畏敬の念を起さしめた。

（二）齋藤精作坊の飄逸

朝鮮總督府の官吏齋藤音作といふ人の弟で、長らく病身で哲學的宗教を好み、基督教中稀有の脫俗家で、悟道僧のやうに超然として居る。精神問題には極めて早熟で、私の妹などの能く世話をしてくれた人だ。私の利害道德を善惡道德で打破つてくれたのが、親友になつた機緣をなしたものだが、私が巖本君と別れた後、其戀女房の村子といふ婦人を迎へて歸國されたが、久しからずして早逝し、其妻を兄に讓つた所に又變つた所を見せた。

山寺の生活は淸風と讀書との靜肅な修養の生活であつた。日々の淸遊と淸談とで師弟の交際が親しく、暖かく展開して往つた。軒には蟬の聲が漸く秋を告げつゝ。

斯うして睦じくなるに從ひ、師弟の禮儀は少しも亂れずに、平常でも他の居間へ出入りしたりせず、敎授外は言葉も交はさないで、珍らしい俗界の修道院であつた。避暑の一ケ月は忽ち過ぎて一同歸校する事になり、學校で開散式をして私は歸宅したが、其夜の淋しさは甞て覺えのない程で、立つたり居たり、落着かない自分に呆れて、言ひ甲斐ない吾身を持て扱ひ、安眠も出來ずに早朝登校して始めて落着いた。私は今まで斯んなに人生の淋し味を感じた事もなく、又人々を慕はしく思つた事はなかつた。それでは誰が慕はしいか、それは分らないで、たゞ避暑連中が慕はしいやうに思へた。そうして月日が立つ中に、漸く其思慕の本體が一人に集まつて來た。成就

右　成就院什物　源頼朝木像
左　同　文覺作自像
下　運慶作　金剛仁王像

院といふ寺の魔風が私を襲ふたのであろう。其寺の什物中に頼朝髭植ゑの像、淸盛筆蹟の軍旗、文覺上人自作の木像があつた。此木像は、高さは僅々一尺程の物だが。

（三）　文覺上人の木像

荒彫り刀目の雄渾さが手傳つて、腕を組んで力んだ眼顆と、筋肉の引締り方に氣魄が充ち滿ちて居る。それで成就院と聽くや直ちに此木像を聯想される程、心に喰込んで仕舞つた。爾來之は當所材木座に普陀樂寺といふ文覺建立の庵室があり、嘗ては其處に上人も棲んで居たのだが、近年廢寺になつたので、此寺に保管してある由を住僧から聽いた。私が「女學生」附錄に「怪しの木像」一文を草して人世に淋しい想ひを寄せたのは、此木像を透してゞあつた。

後日、彫刻家荻原碌山が相馬黑光さんの紹介で山莊へ來た時、私は家什の仁王像を見せてロダン眼を愕かした事がある。それは昔、鎌倉宮司であつた吾大伯父杉浦政雄老人の手に入つたもので、鎌倉八幡宮の什物帳に、嘗て運慶作として記錄されて居た物が、明治維新の神佛分離騷ぎで町へ溢れ出たものだと云ふ。併し其啊の一體は別作で、東京深川の古物店から寄せた物だと老人

から傳承して居た。それを見た碌山が頻りと感嘆して止まないので、さらばとて成就院へ紹介して文覺の木像を見せた所、何かヒントを獲たか、無言で歸京して仕舞つた。氏が最初の傑作と云はれる文覺上人の胸像は、其後久しからずして世に出た事を聞いた。

十三問　怪しの木像といふ一文は其頃、吾等の仲間には有名でしたが、あれは女學生雜誌夏期附錄へ掲載されて居ました。其女學生雜誌の事などを伺ひたい。

答　「女學生」雜誌の發行

明治二十三年の事、巖本君の勸めで、私は各女學校を歷訪して文學奬勵を遣り、女生の文才涵養のため雜誌發行の事を相談し、其六月に「女學生」といふ名前で第一號を女學雜誌社から發行しました。其同盟校は左の通りです。

明治、立敎、女子神學、獨立、東洋、英和、青山英和、廣嶋英和、海岸、頌榮、フェリス、共立、金城、

清流、高田、梅香崎、横濱捜眞、女子學院、成立學舍女子部、の十八校主筆の私は專ら修身道話に據つて人格を高めやうと心懸けたが、傍ら文學思想の奬勵に盡力する事にした。

私は此前に愉覩會といふ遠足會を設けて、三ケ月に一冊の廻覽雜誌を出して居た。少年時から遠足旅行が大好きで、紀行文、案内記、感想、和歌、俳句、小唄など、元來の投書家好みを編輯して居た所、後に平田君も加はつて來て、偶々マコーレー卿の一文を寄せられた。私は此一文で深く同君の少年姿を視直したものである。何しろ十七八歳とは云へ、色白の柔弱そうなお坊さんで、初めは附紐をダラリと垂れて居たからである。此文才を知つて居るので、多忙な時は每度女學生雜誌の編輯をも手傳つて貰つて居た。私が白表女學雜誌を受持つやうになつてから、透谷、藤村などゝも知合ひ、二十五年の女學生夏期號外が、溢れ出る活氣で出版される頃は、全然文學趣味横溢の有樣で、終に文學界雜誌へと延びて往つたのである。但しこれは後の事。

（二）學校移轉と吾家

雑誌や學校は何れも新人の進出で活氣立つて來たから、評判が高まり出して、堅實な入學者が日に增すばかりで、手狹になる一方だから、自然擴張の必要に迫られて來た。其機を見て財政の轉換策を案じた巖本君は、三井銀行との交涉で地所を借り、嶋田三郎君の舊宅に增築して、急遽下六番町へ移轉する事になつた。

表門は黑塗りの舊屋敷門、其左右から側面へと廻らした門長屋、馬車廻し附き洋風の舊玄關を其儘に、二階は增築の敎室、後庭にある洋風三階の嶋田館に列んだ寄宿舍と食堂、素より見榮えのない學校だが、移轉と同時に、新入生は早や氾濫して仕舞つた。

此學校移轉に連れて、吾住所も番町へ移轉する事にした。今までは兄の住宅であつて蕭灑たる平和な家庭でも、這に兄も徒食に飽きたか、突然小笠原嶋へ物々交換の見込で出航するに付、資本の調達を請求し出した。何事にも締め括りの出來ない其性質を知拔いて居る私は、一應諫めたり頼んだりしたが、頻りと哀願されるので、千圓だけといふ約束で準備した兄は、白米百俵と雜貨とを積込んで勢ひよく出立した。そこで私は妹と老婢とを連れて學校近くの五番町へ移轉し、同居して居た弟は一高寄宿舍へ、平田君は他へ。

（二）平田禿木君の初期

共立中學生だつた平田君は便誼上吾家に居られたが、同君は私と共に英學生ではあるが、年齢が一昔も違ふので、終に文學談なども話し合つた事がない位だ。初め日本橋教會での信徒仲間で懇親になり、其家は吾家に近い伊勢町の染料問屋で、昔から伊勢町の繪の具屋で通つて居た。斯ういふ仲だから、唯の文友位でない親しさがあつた。それ故、飯田町の家へ同居された時も、家族の一人として誰もが歡迎して居た。朗かで惡戲好きの妹勇子などは、十一二位の無邪氣さで平田君を揶揄して居た。それは却て禿木が吾ビアトリーチェとして、後に懊惱の影を宿した因でもあつたろう。

（三）武藝から高等文學科の主張

下六番町へ移轉した女學校々庭には武藝道場も新築され、柔術も棒術も、盛んに教授が開始さ

れ、武藝組の姿勢は腰が落着いて胸が張り、沈着で温雅な健康美を現はし始め、校外の評判も高くなり、各種の參觀人が交々來るやうになつた。そこで或日、父兄を招集して武藝の演習を參觀させた事がある。其時の新聞社の評には、今時物珍らしくも古道具屋からでも引出して來たやうな薙刀だの、柔術だのを女學校で教習させるとは譯の分らぬ事だ、と冷笑した。外國新聞記者は「柔術といふものは魔術だ。壯漢の胸へ一少女の手が觸れたかと思ふと、其壯漢は忽ち投倒されて仕舞つた。私達は一向譯が分らぬ。」斯ういふやうな有樣で、其頃は武藝に付ての社會の認識は暗黑であつた。益々實績を擧げて示す他には、大和魂の成立を示す手段はないと、私は愈々教授に勢力を注いだ。武藝に連絡の教壇として私が講演する高等漢文科では、先づ孟子から韓非子、王陽明、陶淵明、莊子から老子へと進んだ。尤も莊子は高等武藝に進んだ學生へ講じ、老子に至つては免許以上の解釋となるから、唯後の理想として說き聽かせたに過ぎない。私は此等の講義をするには先づ著者の環境、人格性情、文章の解剖、理想と人物總評といふやうに質問應答させ各自の考察を披瀝させるのを常とする。折々參觀に來た漢學者達は、異樣な感に打たれて賛嘆された事がある。學ぶ者は又精神界の研究に慣らされて居るので、興味深く熱心に研究しては往々卓論を提起する者がある。或時は詩經を平解して新味を與へ、或は觀音經を講じて武術の無念無

想、祈禱の無我無識の境に及ぶなど、武術の觀點より先んずる事もあつた。此講座は又修身の講座とも文學の講座ともなつたので、校內に漸く文學の空氣が動き出した。此等の講義から往々文章を解剖する事が出て來て、終にレトリックの講義を始め、續いて日本女子の談話術に拙劣な所以を警告し、小說への注意を奬勵するため、進んで自らミゼラーブルやウェキフィールドなどを講演するやうになつた。

(四) 藤村の若先生姿

斯くて武術から文學への連絡を明かにした。斯うなつて來ると、乾燥巧利の道德や涸渇道義の文學ばかりでは納まらない。近松や西鶴物では餘りに急激な碎け方で、物議が起ろうし誤解も生ずるであろう。どうしても泰西の文學を壯んに味はせる必要ありと思ひ、吾高等漢文學に列んで高等英文科を設け、第一に嶋崎春樹君を推薦した。實は其頃、巖本君は俳諧亡國論といふ一文を誌上へ掲げ、又校生へも講演したので、情藻敎育のため軟文學を皷吹して居る私と見解に齟齬を來たした。之が校內二頭ありと巖本君が誤認した折だから、此講座の新設や嶋崎を容れる事は難

事だろうと思つて居た所、それが無事に實行されたのは、其雅量か反省かと賞揚した事がある。さて嶋崎教師を教壇に紹介した所、高等科生は皆二十二歳前後の妙齢揃ひで、中には二十三四で先生以上の者も居る。まだ世間慣れない此若い先生は、忽ち射竦められた氣味であつた。此出鼻が祟を爲したせいか、其後この科は一向氣勢が揚らなくて、兎角生徒間の不評を聽くやうになつた。私が或時、透谷に其困つた過去の話をしたら、透谷は何か意味を取違へたのか、忽ち顏色を險しくして、「女の子などに好かれぬ方がよい。」と罵つた。私は只管その友情の深さに感じた事があつた。尤も其頃は嶋崎君には煩悶が欝結して、稍々平衡を失つて居たからでもあつた。

十四問　御一族には熱情家が多いそうですが、御令兄は一時瘋癲病院へ入院されたとの事も伺ひました。其樣な御血統がおありなのですか。

答　熱情家の血統

(一) 兄の發狂導師

母方の血統は純潔で穩當で、慈悲忠良の血が傳はつて居たが、之は毎時、祖先和田義盛を偲ぶ種子になる程だ。併し父方の方は優越感の我執癖が強く、熱血性で進歩的だ。父の同胞五人に付て見るも、何れも武士道義の堅固さがある。女は男勝さりで、男は何れも酒癖がある。三人とも中風が發して、發狂氣味の者が一人あつた。珍しいのは父母兩族を通して男女關係が極めて堅固で、體質に病的遺傳のない事である。偶々兄の發狂を見たのは其善良な內氣者の失敗苦で、薄志弱行の結果だと思ふ。それが突發した時は、丁度私が箱根山上の夏期學校に參加して居た時であつた。會場は本宿で、海老名彈正、小崎弘道、井深梶之助を始め、平岩、宮川など當時錚々たる牧師等が壇上に立つて居たが、吾校職員知人の一群は、元箱根の靑木旅舍を專領して本宿へ出席したり、權現の寂境に靜坐默想したり、樹下舟遊の凉味に讀書淸談に耽り、杜鵑の聲に目覺め、

山霧の蔭に眠るなど、安き靜養の日を繰返して居た。或夕、本宿から女生達集つたので臨時親睦會が催された。其頃は母も妹も東京から參加して居て一同でプランセットに興じて居た（プランセットとは三本箸を括つて脚とし其上に盆を被せ二三の人が指先きを觸れさせて居ると指頭のエネルギーが通じて歩み出す。其脚の擧がる數に據つて占ひをさせる遊び。）其處へ横濱の親戚から飛電が屆いた。兄が小笠原嶋から歸着して精神異狀を起し、市中を騷がし、巡査も持て餘して居るから、早く捕押へに來いとの事だ。早速駕籠舁き四名を雇ひ、松明勇ましく夜の十時から舊道を降り始めた。深夜の深山には幽かに谷底から聞ゆる水聲ばかりで、何とも云へぬ寂寞味にたゞ恍惚として、曉雲の赤ら曳く光に小禽の囀りを聽く頃、湯本の福住が見え出した。横濱増田方へ着いて詫を述べる頃には、藤井米八郎君の盡力で兄は既に落着いて睡眠中であつた。尤も此事は先回一度あつた事で、それは五番町の宅へ嶋から最初歸宅して早々異狀を起し、世話人の老婆へ發作的に怪我をさせた事があつた。其怪我の養生旁々、病後靜養の妹勇子へ附けて、鎌倉雪ノ下草庵へ住はせて置いた。其夕既に平靜に戻つた兄は、當分靜養といふ事で其草庵へ落着く事になつた。今回の渡航は清算整理のためで、失敗の結果を披露すべき不面目さと、船中非常の炎暑とで逆上したものであらう。

之から兄は元來の嗜好である本道の鎌倉彫りを研究する事にし、それで運慶の末裔、三ツ橋榮

助の扇ケ谷の宅へ通ひ始めた。所が其後繼者の息子よりも筋が良くて、師匠からは好遇されて居た。性來の藝術心は大いに滿足して當分は落着いて居たが、追々と飲酒癖が昂じて、貧者と聞けば手當り次第何物でも與へ散らすといふ有様で、漸く人々に厭はれ出した。そして突然、恐怖病者となつたといふ知らせで驅け着けたが、辛ふじて小松川病院長と協力して入院させる事が出來た。之から五六ケ月も入院して居た所、重體の腎臟病で退院させられ、最早一日の問題となつた折、母の勸めで宣教師に神の救ひに付て說き聽かせて貰つた所、日頃の兄に似ず釋然として宗教感を起し、法悅の結果、一夜にして起死回生の徵を現はし、醫士を愕かしたものだ。其後、堅固過る程の篤信家となり、志を起して渡米し、其勝れた技巧さと正直さと深切さとを發揮して屢々米人の信頼を博し、或は加洲大學東洋講座の顧問となり、或は東洋美術品鑑定家に推され、其工藝修繕の一新機軸を以て專門家の位置を獲得し、一時歸朝せし時の如き、桑港二大百貨店主より外務省に兄の歸米を懇請して來た事がある。折から排日旺盛の時期で危ぶんだ所、藝術家は特別の尊敬が拂はれるので氣遣ひなしといふ事で、未だに安住して居るが、先年路上の怪我で身體不自由になり、今春まで生存した。斯ういふ次第で、兄の他には瘋癲氣味の者は出ない。江戶氣象に養はれて度外れの利己心嫌ひから、想ひ遣りの深い事と情熱の烈しい者とが著しく多いといふ

事は云へる。

（二）義俠癖の伯父

現に私の母方の伯父に米三郎といふ江戸ッ子が居た。千兩箱聟と評判されて、鎌倉大石家の養子となつたが、人妻の不遇を見兼ねて救ひ出したのが緣で、自ら携へて遁亡するなどゝいふ熱情家で、親戚の指彈を受けて零落しても尙ほ衣服を脫いで貧を救ひ、食膳を分つて餓ゑを助けるといふ遣り方で、或時窮迫の極、捨子をしやうと思つたが、現場へ臨んで如何とも出來なかつたといふ。此伯父は薄志弱行で、極めて經營の才はないが、手先きの小器用さは人一倍であつた。隨分下層社會に入込んで居たが、賭博と酒色とには決して手を出さなかつたのも意外だ。それは不正不義を嫌つて、常に人情と人の道といふ事を言つて居た。私は其廉潔な義俠心を愛して種々引立てゝ居たが、親戚達が冷視して居たのは餘儀ない事でもある。

（三）豪快な大伯父

それに大伯父の半兵衞といふ豪快な男も熱血性の人だと傳聞する。之も脫線家で、一時放蕩に身を持崩して折介仲間へ落込んだ位だが、紀ノ國屋文左衞門の氣象に憧憬して奮然手腕を振ひ出し、其兄に協力して忽ち巨萬の富を作り、獨立して一躍富商となり、進んで大名方御金御用達となつたが、幕府瓦解の犧牲となつて、家產と共に其生命をも一笑に附して仕舞つた。實に爽快な熱血家である。此等の血が吾血族に流れ込んで居るので、往々脫線家が出る。併し人情を尊重して寧ろ利害には鈍いやうであつた。

十五問　二十四年、濃美地方大震災の折に宗教的の大働きをなされた事を、其社會から傳聞しましたが、それは？

答　濃美震災の傳道隊

それは十月二十八日の事で、息苦しい暑さの日でした。私は學校の職員室で相談中、突然大震

動が襲ひ、飛出す者もあつた。夕刻には名古屋邊の慘狀が知れた。「之は容易な事でない。近年のやうな上下社會の腐敗は畢竟宗教を忘れた國民の狀態であるから、神は警戒さるゝために此慘禍を示し給ふのである、吾等この警醒と救助とに蹶起せねばならぬ。立てよ、諸君。」といふ巖本君の激勵で、直ちに震地傳道隊が組織された。私は慘禍の現狀を撮影して義捐金を募集する方面と彷徨う孤兒を收容すべく率先して出發した。折から村瀨(鶴子)、鈴木(源子)の二女生が故郷名古屋へ往くので之を保護同伴したが、兼て此源子を敬慕して居た川合信水君が是非同行との願ひで、四人連れとなつた。

(一) 川合信水君の初期

同君は後年、郡是製糸の職工社會の大教育家となり大師父となつて、世界勞働聯盟の日本代表に選ばれた程の人望を負つたが、甲州から基督教青年として巖本君を仰いで出京し、宗教と武藝とを慕ふて常に私に接近して居た頃は、たゞ溫厚堅實な地方の好青年であつた。稍々柔弱な感はあつたが、終始變らぬ所は特長であつた。後、東北學院の力行會で働き、院長押川方義君に深く

私淑して居た。私を押川君に紹介して、肝膽相照らす仲とさせたのは此人の力である。押川師の知遇から綾部の郡是製糸場教育部長となり、其不退轉の信仰力が輝き出して職工の神様とまでなつたのは、一本鎗の單純な偉さ計りではない。正に基督の慈愛心を體得した良器の故であろう。

（二）　募金の叱咤演説

熱田から名古屋市の内外を、屍臭の煙と倒潰の屋下とを旅した私は、女生を各々の家へ届け、孤兒拾容の事を役場に托し、琵琶嶋の町外れから寫眞師を雇ひ震源地といふ根尾谷へと踏入り、七八間も斷落した麥畑や、跳返つた村橋や、崖崩れや倒木や、それらを視察して、慘状寫眞を集め、歸京早々、中央教會堂で、救濟義金募集のため、巖本君と演説會を開いて幻燈を示した。其折、私は叫んだ。

ピラトは眞理とは何ぞやと基督に問ふた。眞理とは神を識る事だ。彼と我と融合する事だ。研き磨いた心の奧に湧く觀念だ。所凡人間は大恐怖に逢着する時、神佛に眼が開く。科學萬能の人でも絶體絶命に至れば心に神佛が浮ぶ。其時彼と我と融合する。私は震災民に神の道を談つた。物質萬能の彼地も暫時は神

の國になつた。繁忙の中にも神の話を歡迎する。一朝にして財を失ひ、家を追はれて路傍の人に伍し、榮枯盛衰を目前に展開される。誰しも一個の握り飯を未知の人に分ち、一杯の味噌汁を隣人と啜り合ふ。眞理は到る所に視られた。吾等無事平穩の境地に立つ者、誰か財餘の一滴を吝む事をなし得んや。彼我の融通、之を名告けて慈善と云ふ。此眞理に背き得る者は今日の義捐を爲す勿れ。

帽子は廻された。黄金の指環を投入れた者もあつた。

此波動は甲府に響いて、私は招聘に應じて卽時甲府へと向つた。そこは甲府の公開堂で、政黨軋轢の强い所だから、演說會は常に混亂する。私が演壇に立つや、果して其種の壯士が喧騷し始めた。幻燈說明も辛ふじて濟ませた頃は一層騷がしくなつた。私は憤激して卽席劍舞を催し、拔刀の氣合で漸く滿場を平穩に治めた。それから招かれて都留郡の役場で一會を催して歸京した。私の此行は甲府英和女學校敎頭の金子仙子さんの招きに據つたものである。

（三）　金子仙子女史の熱誠

箱根の夏季學校で始めて知つた人だが、甲府の信者仲間で社會運動の働き手である。仙子さん

は三十歳前の働き盛りで、男優りの有爲な人との評がある。後、青木姓に變つたが、其主人といふ人は氣骨もあり、膽力も技倆もあるが、眼底の据らぬ所が惜しまれた。私の事業に助力を請ふたものだが、眼疾に災ひされて、妻に多くの痛苦を掛けて逝つた。此ためにあたら有爲の女史をして腕を暢ばさせなかつたのは惜しい事であつた。師範出身で、膽力と熱誠とは人を動かすものがあつたのに。

（四） 救世軍の山室、白痴敎育石井の二聖

震地傳道隊の中に山室君は參加しなかつたかも知れぬが、此人と熱烈信念の三幅對として居た湯谷磋一郎、藤井米八郎の兩氏が居た。共に震地へ向つて活潑な運動をした。此傳道隊の働きで收容した孤兒を石井亮一君が引受けて、瀧野川孤兒院を創立した。亮一君は稀に見るの聖器で、其頃は大須賀姓であつた。嘗て立敎女學校々長をして居られた時、私は講演に招かれて初對面したが、其頃から尊敬心を持續した爲め、孤兒院設立には相應の盡力もしたのである。亮一君が孤兒撫育のためチブスに感染、入院したとの報は校生を奮起せしめた。松井まん、同節彌、村瀬鶴

の三女は蹶起して、傳染病室に投じて其媬育に馳せつけた。私は其信念不動の熱線に曳かれて心許なく其保護に隨行視察した。斯くの如く校生は一般に精神的に堅實であつた。山室軍平君の心を捉へた佐藤きゑ子も亦其一員の優なる者である。君をして終に救世軍の明星たらしめたのも、一に其熱烈不動の犧牲心であつた。孤兒敎育より白痴敎育へと進んだ石井亮一君、此聖業にも聖器にも亦、渡邊筆子と云ふ情熱家の內助が働いて居た。

(五) 小此木忠七郎君の超逸

震地傳道隊の運動が解放された頃、吾校へ仙臺から三名の轉校生があつた。小平小雪、齋藤冬子、町田辰子で、此等は無理解な敎育に付て改革を叫んだ有爲な宮城女生である。相馬黑光さんも同志だが、之は他校へ入門した。此脫退組に同情して吾校へ轉じたのが敎師小此木君、此人は福嶋出のドクトル信六郎君の弟だ。此兄弟は共に人格高い逸材である。其性質の自然さに先づ心を捉へられた。號を混沌と自稱する如く、耳も稍々遠いが一見不得要領の觀がある。而も諸事明晰で人情細やかで、吾黨のヒューマニストである。吾老莊觀念と共鳴する所も亦、その高所大觀

笹目道場の高弟と師範生組

的の所にある。嘗て道德と文藝との衝突に付て、私と巖本君と一致しない所から校内二頭ありと憂ひて巖本君が內部敎職會議を開いた事がある。其時同君の說が面白い。「それでこそ進步があるのだ。寧ろ討論して硏究するに如かず。唯自らを高しとしない事だ。」之で巖本校長も仰向けに寢轉んで仕舞つた。其無意恬淡さに係らず、嗜好は中々廣い。其嗜好ある所には必ず硏究が伴ふ。其硏究は何れも科學的だ。星座の硏究、煎茶の硏究、考古學の硏究、刀劍の硏究等々、特に顯微鏡新鑑定法の如きは鑑刀界に特立して居る。素より名利の塵外に逍遙する吾黨の同士だから、西田天香君とは意氣相通じて、其修行にも出入して差支へる所がない。その無爲混沌たる態度容貌で事故を起した事がある。嘗て福嶋縣に政黨競爭の激甚なる頃、選擧運動の嫌疑で其地で拘留された。何程事實を答辯しても釋放されない。檢事は其空惚けたやうな風丰を誤認して、月餘も牢內の動作監視といふ事になつた。所が牢內で平然として坐禪修行をして悟然たる態度に持て餘したと云ふ。

十六問　當時女子の武藝敎育といふ事は非難こそあれ、問題とされなかつたにも係らず、人格鍛

錬、大和魂養成を標榜して、身を以て盡瘁された事は特筆すべき先見の明と申すべきです。
それに付き、其教授の樣子や成績に付て委細お話し願ひたい。

答　武藝教育の實蹟

（一）教授の順序と成績

何の教授でもそうだが、特に對人的の武藝の教授などは教授者の人格が大いに關係する故、吾主張を實施するには、どうしても自ら教授しなければならぬ所から、斷然身の方針を擲つて自ら教授を始めたが、最初、一刀流薙刀三十一手を一ヶ年練習させ、次に柳生流棒術と護身十八手の柔術を鍛錬させ、其達成者に初段免狀を與へる。次で薙刀の複法十一手、立合形柔術十二手、棒術裏十手、柳生流長刀七手、短刀十手を練達させ、之に活殺術を許して中段許狀を授ける。以上の術が其自然動作に一致するを待つて目錄許狀を授ける。以上で五ヶ年の課目とする。私は前後七ケ年の教授で初段、中段二十六人、目錄段の三人を出した。もう一二年で尙目錄段を四人出す

筈であつた事が残念に思はれた。特に松井萬、村瀬鶴、佐藤輔の優三人組の次席に、秀三人組少女があつた。山口好、中山光、藤嶋雪の三者で、何れも名器であつたが、それは武藝ばかりではない。山口の聰明、中山の信念、藤嶋の情藻、何れ劣らぬものがあつた。其情藻は佐々木歌人の夫人に納まり、其信念は刺繡藝術に光彩を遺したが、獨り其聰明は歸省して、珠玉を泥土に埋めて居るのは遺憾である。

（二）帝國ホテルの發表會

芝の彌生館で一度び公開した事があり、其時は初段者ばかりで問題にはならなかつたが、其後愛國婦人會主催で、築地の帝國ホテルで公開した時は多少の反響を見た。併し新聞評などは、未だに教育と武藝の關係などには一言も觸れて居なかつた。たゞ尠しく冷評観が愼まれた位に見えた。外字新聞の方は相變らず魔術呼はりをして居た。

この帝國ホテルの會は、嶋田三郎君の演說と三遊亭圓朝君の教話で頗る盛大であつた。武藝の方は初段級三人、中段級三人で、中段生は私自身が受け手に立つて、隨分烈しい試合を見せたの

で、圓朝君が合氣の妙機を感じたといふ一手を頻りと賞賛して居た。此三遊亭は鐵舟居士の誘導で禪に志した丈でなく、名人の域に居るので大いに話せる。其息子が不良なのに苦勞して、渡米中の吾兄に依頼すべく吾家に來訪された事がある。お閻魔様にお詫をして參りましたといふ訪問言葉だ。其日は盂蘭盆會の中日であつた。此人の若い時は俳優を眞似るので厭味男の不評が通つて居たが、中年後、修禪の域に達する頃は名人の定評を得て居た。

(三) 武藝教育の終幕

さて、初段以上に進んだ者は何れも姿勢備はり、擧動沈着、風采優雅となり、觀る者をして賞賛せざるは無しといふ有様であつた。三四年の後に當護身術のため災害を脫かれた逸話が追々と聽込めるやうになつた。或者は醉漢の暴行を免かれ、或者は階上よりの轉落に尙、持てる洋燈の燈火が消えずに立つて居たとか、又は火急の用務で鑛山への夜旅を完うし得たとか、單身夜盜を說き伏せたとか、種々修行の功果を聞く事は數ふるに暇が無い。人々は武藝教育の良き實蹟を觀せてくれたと、私の成功を證言してくれた。

此努力と此良成蹟を捨てゝ、七年目で此學校を見捨てるのは如何にも殘念であつたが、肝腎の盟主の心象に欺瞞を見出したので、分袂の餘義なきに至つたのである。

武術道場の方は鎌倉の山莊内に新設して多くの門下を養成し、靑年團、教生、社員、町民、婦人、令孃、歐米人等、無慮三百人に及んだ。此山莊の笹目道場は三十年續いて、大正十二年の大震災で破潰して仕舞つた。時に私は六十一歲、之が武藝教授の終りになつた。後繼者の絶えるのは先師に對しても申譯がない次第だが、合氣の極傳まで傳へる門人が出來ないのは、一に生活に慌しい此時世の成行きと嘆息するより他にない。

斯う誌してから後、鎌倉山莊へ避暑滯在して居た所、圖らずも舊武藝門人で健在する人々が、吾が喜壽の賀筵を催すとの報あり、町外に散在する者には通知の暇なければとて集まる者二十五名、何れも古稀中老の勇者で、目錄段筆頭の山本、菅埜等、率先して吾が柳生流武藝の遺鉢を絶えさじとの心願を披瀝さるゝなど、吾が喜壽を若返へさるゝこと十年二十年、再び還暦に立戻つた想ひであつた。

壯年時期

上

問者　訪客數名

答者　星野天知

一問　基督教徒で坐禪修行を眞劍にしたといふので、當時信徒間に相當異論がありましたが、他山の研究か、又は改宗か、其入禪の心の動きを承りたい。

答　入禪の動機

私の入禪は、單に研究でも改宗でもなく、堪へやらぬ潜在の煩悶と、自己建直しの熱求に、多年宿望の武術奥儀の啓發を望んで入室したのであつた。それが決死的で、管長から許されなかつたが、實は白骨坐禪で願ひ出た程であつた。

今その自己建直しの熱求、といふ事に付て先づ述べる事にする。

（一）神前の盟約も妻の故障で

巖本さんの事は前にも述べたが、同君が或日私と犬養（學校同人で名は悳明。）とに誓約した。それは一層緊張して教育に獻身すべく集團協力の必要上、校舍附屬の長屋へ移住しやうといふ事である。其說

動點は斯ういふ事だ。「現今の有様を見るに、此誤りたる教育を正すには、吾黨の人々が益々奮闘せねばならぬ。それに付て考ふるに、何の事業でも人間の配下に働くと思ふのは間違ひで、取分け教育事業などは神の配下に働くの覺悟を要する。それ故、吾等は一層熱禱して献身的努力を要する。君等と吾は此中堅に居る者故、居所も散在して居ては團結力を强固に致し難い。宜しく一同此附屬長家に移轉して、此神聖な事業をして財政で破滅せぬやう致すにあり。」とて嚴肅な祈りを捧げた。吾等は感激して實行を誓ひ、一週間後には犬養は其妹と長家へ移轉して二階の一室へ住ひ、私は五番町の家を引拂つて單身其下室へ移轉した。其處は雜誌社跡で板敷き十二疊一室だから、家財は一切本町宅へ戻し、簡素な學生々活に戻つて、日夜教育仕事に奮闘し始めた。此緊張氣分は忽ち校生に影響して勉强心が張切つて來た。武藝科の如きは著しく增員して犬養、八木(辰藏)の兩助手を加へたが、追々亂打ち稽古や試合も行はれるので、道場の靜かな時はない。私は柔術だけでも、一稽古に三百回以上も投げられて敎へなければならぬので、心臓を傷めて疲勞が强く、其上學術教授も多くの種類を受持つため毎日下調べは深更に及ぶ。此身心の酷使で顏色が蒼白となり、私と巖本君とが蒼白揃ひだといふので、女生間に心痛の渦が捲いた位だ。斯くして二三ケ月を繰返しても、誓約發頭人の巖本が長家へ來住しない。偶々之を問ふと、家内が不承知

でと云ふ。如何にも冷々として居るので、漸く其眞意を疑ひ出した。女醫の荻野吟子なども同人中へ加はつたが、何を思つたか、急に方向轉換をして志方姓に改め、そして北海道へ去つて仕舞つた。其時、私へ「彼は頼朝政略家で」とのみ言ひ遺した。

私は初めて自らを顧みた。そして吾が世間見ずのお坊ちやんを氣恥しく眺めた。それにつけても想ひ出さるゝのは、初對面の時の巖本夫人の言葉である。「彼を買被つてはいけません。後悔をして居る私の實驗があります。」初對面の訪問者に愕くべき非常識な忠告だと思つたが、流石純眞の天籟であつたと、改めて女史に敬意を表した。

斯ういふ激情に煩悶した極、その夏季休暇前、或炎暑多忙の夕、私は輕い腦充血を起して、病床に一二週間引籠る事になつた。以來醫師の勸告で劇務を禁ぜられ、當分鎌倉の閑地で靜養する事となつた。

病氣は久しからずして全快したが、恢復しないのは自己反省の慚愧である。之は更めて自己を見出し、自己を建直さなければならぬと思つた。斯ういふ激痛の心情を更に搖り動かす悲痛な潜在物があつた。それは三年間、人知れず壓迫して來た燃えるやうなプラトニック・ラブである。靜養の夢圓かならず、孤枕常に人來りて談らふ如く、往々、血色勝れた沈着無言の容姿を坐邊に

視るなど、此儘に居れば吾れ狂すべしと思ひ、兼ねての宿意たる武術蘊奥の修行も好機來たものと決心した。又この宿意も久しいもので、一度び白井通先生の實驗に發意し、二度び勝安房先生に示教され、三度び皆傳允可の責任を銘刻して以來の事である。實に坐禪修行の熱意は眞劍のものであつた。

そこで、巖本君に赤裸々の感情を述べて警醒の一書を裁し、入禪の準備を始めたのである。

（二）巖本善治妻、若松賤子女史

同君の行爲に付ては前に述べたが、實に之は惜しい人だ。明智俊才中稀に見るの人で、不思議に人を引着ける魅力がある。由來魅力のある人は身を誤つ者が多い。私は此舊友の輝いた多くの功績を認めて居るので、其顰蹙すべき不德行爲の數々を知悉しては居るが、多くは口外したくない。私より一つ年下だが、每度其才智には敬服したものだ。併し其魅力と才智とが又、每度不德を産出して居るのだ。既に詐僞罪を構成せんとした時、私は舊友の好誼を繰返した。彼人は一時女生等から神と云はれた人で、惡人ではありません、唯かぶれ易い人です。自分自身が欺かれて

居るのでしようと、述べた。

佶屈した漢語調の多い時代に、飜譯出版された「小公子」は若松女史の代表文藻だ。それに巖本善治妻とあつたのを私は攊つたく感じた。之と同じ感じを、巖本といふ人は屡々發揮したものだ。此妻とある女史は島田嘉志子と云つて、其母校では、日本派の湘煙女史（中島俊子）と對峙した唯一の才媛であつた。文才豊かな米婦人タイプで、嚴しい基督教信者である。多くの紳士を失敗させて、終に選り出した一人の夫君、それをも買被つたと呟くほどの、娘氣ある若さを發揮した人だ。生涯夫君の品性を崩させぬやう引締めて居たが、胸の悩みは校舎焼失の衝激で打擊され、其病が革まつたのは痛恨の事であつた。

さて、此友誼の破壞は遺憾であるが、此お蔭で漸く自己修行の重要問題を見出した事は、此導師があつたからで、無理にも喜ぶ事だと思つた。斯う肚が極まつたから、先づ父に乞ふて廣尾の祥雲寺へ參禪したが、吾需める師に非ずと思ひ、鎌倉に圓覺寺の宗演老師を叩いたが、之も友とすべく師とす可からずと思つたので、更に雪ノ下の大伯父杉浦政雄老に乞ふて、建長寺の管長室を訪ふた所、そこに始めて師弟の結縁が見出されたのである。

二問　そんなに師匠選みをなさるといふのも、先生は多年武術の修行で心を丹田へ叩き込まれ、既に坐禪的修行が積んで居られるから、人格の程度が見透かされる譯だと思ひます。どうか其御修行の樣子を詳細に承りたい。

答　坐禪修行風景

（一）入門試合

世間には禪師の提唱を聽聞して、形式だけの坐禪で濟ます人が多いやうだが、私は修行の決心が着いた以上、そんな事では承知が出來ない。絶食不眠の晝夜不退轉で、骨になつても動かぬといふ白骨坐禪をと心掛けたのだから、生半可の禪師では喰足りなかつたのだ。尤もそれは邪道なりとて退けられたが、先づ建長寺管長釋貫道和尚に面した事から述べる。大床に朱衣の大達磨の

軸が掛り、其前に赭顔肥大の老僧が端坐して居る。動かざる事山の如しと云ふ所だ。先づ來意を聽くや言下に、「一切弟子は採らぬ。」と云ふ。私は進み出て、「弟子を採らぬと云はるゝも、私は師と仰ぐから構はぬ。」と答へる。「いや愚衲は無學だから、禪學の議論なら學林に居る菅原時苳に往け。」と言ふ。「其無學が願ひだ。學の研究ではなく、自己を知る修行を望むのである。」其時、杉浦老人は微笑して、紙包を進呈して辭去した。私は更めて、「私は耶蘇信者だが、飽き足らぬので參つた。」と誘ひを懸けるや、寡默の老師は言下に釣込まれたと見え、基督教を邪道の如く非難し始めた。其時の問答は――

私問　老師、基督敎を調べしや。

師答　否、委くは知らぬ。

問　知らぬ事でも禪家では批評し得らるゝや、柳は綠花は紅ゐとは參らずや。

師、破顏して答ふ。失言せり、と。

其時、私は「さらば弟子にしますか。」と詰寄つた時は、追の泰山も俄に動き出して、「宜しい、直ちに受戒じや。」と言ひながら立上られた。本堂には達磨大師の巨像がある。老師言ふ。「之は固より偶像じやが、之を透して或るものを接するのぢや。」と。そして嚴かに讀經し燒香して、其

香爐を吾頭上に翳し五戒を誓はしめる。此或物とは眞如の實相で、常に常住開祖を凝視して、其修行の氣魄を感得すべしと訓誡され、そして天爲居士と命名された。其允可狀と誓誡を示そう。

允可狀

星野天爲居士

授與三歸五戒等畢能須護持

明治廿五年八月廿一日　　建長禪寺管長　霄貫道

誓誡

我昔所造諸惡業皆由無始貪嗔癡從身口意之所生一切我今皆懺悔、歸依佛歸依法、歸依僧歸依佛無上尊、歸依法離欲尊、歸依僧和合尊、歸依佛竟、歸依法竟、歸依僧竟、不殺生、不偸盜、不邪婬、不妄語、不飲酒。

此翌日より僧侶に交はり、終日白壁に面して坐禪修行の法規に終始し始めた。先づ初參に趙州狗子の公案を授けられる。「趙州に狗子あり、之を指して曰く、之何ぞやと。答へて曰く、無。抑々此無とは何物ぞ。固より有無の無に非ず、虚無の無に非ず。」と。之よりこの無の一字に付て、一意專念、凝念工夫に終日を消す事となつた。

（二）怪異出現

最初は氣が散つて五分間も考へて居られない。いつしか凝念が他の事に轉じる。氣を替へ心を取直しても、種々の問題が入替り立替り湧出して、考が纏まらない。忽ち半日が過ぎて晝飯となる。大椀に山盛りの麥飯が喉へ詰まるやうで食慾が出ない。辛ふじて一椀を詰込んだ。翌日も同樣で、終に一週間を過ごした。答案の期が來たが無言で過ごした。次週は散漫期を脫して稍々考案に集注して來たが、有無と虛無外の無に引摺り廻されて疲れ果て、いつしか睡魔に襲はれ出した。氣を勵まし意に鞭打つが、懈怠の念は刻々に身に迫つて、又いつしか夢寢の境に逍ふ。其時背後に忍び寄る人の氣配を感じた。卒然姿勢を正したので其氣配は消えた。此週間は斯ういふ有樣を繰返して空過して仕舞つた。後に配膳の小僧から聽いたのだが、天爲居士といふ漢は不思議だ、睡魔期に警策を加へやうと近寄ると、必ず覺醒して一回も警策を加へられなかつた、と。

二週間目には管長に工夫の答案を提示しなければならぬ。管長室には一人の若僧が恐縮の態度で今退出する所である。引違へて私は管長に對坐するや、「水面の明月、有無言ふ可からず。」と

提唱す。老師喝して、「飯は何杯食ふや。」と。一杯との答へに、「もつと喰ひなさい。」と言つたまゝ取合はない。私は引下つて來たが、考案が晝夜腦中にこびり着いて離れなくなつた。益々奮勵苦鬪して居ると、そろ〳〵不思議な現象が現れ出した。今まで神經が尖鋭化して、食慾乏しく顏色蒼白、頰瘠せ眼鋭くなつたが、學識も意念も遣ひ盡した考案に付て、たゞ茫然と見詰めて居るばかりの境地に入込んでからは、庭樹の蟬の聲ばかりが腦を占領するやうになつた。蟬聲に恍惚として居る時、いつしか好きな食物の事を考へて居る。淺猿しい吾心よ、と叱咤して退けるが、又いつしか考へて居る。漸く之を退けると、潛在する女性の顏が現れて吾が顏に迫つて來る。續いて又一人が他の側へ迫つてくる。ハッと思ふと消えるが、又出てくる。後のは母の顏だと思ふや忽ち左右とも髑髏に變つた。愕いて正氣に歸ると、頻りと悲哀を催して止め度がない。蟬の聲は絕えず聽こえて居ながら、此現象が幾度も繰返される。夢か現か分らない。此妄想を拂ひ退けて正坐を組直し、暫くは正念を有つて居たが、忽ち五體顚倒して、したゝか投付けられたので、跳返りながら起上ると、依然として正座に復して居る。奇怪に思つて考案を始めると、又忽ち二人の顏が迫つてくるし、又忽ち髑髏にも變化する。我知らず捕へやうと手を出せば、消えて仕舞ふ。奮然と妄想を叱して考案を凝念する。斯ういふ事が一週間も繰返される。此三週間目の答案

は「絶體の無なり。」と出た。老師は莞爾として、「そうも言へる。併し汝の物に爲し來れ。」と突退けられて仕舞つた。之で今日まで蓄へ來つた學識は完全に封じ籠められて仕舞つたのだ。今までは書籍又は敎師の口から借りて來た智識で、一つとして自分から練り出した智識ではなかつた。謂はゞ皆借物だ。着け燒刄だ。生きた字引に過ぎなかつた。學識の考慮一切を擲却すると赤裸々の人間本體となる。吾本體が自然に保有する智識では此難問は解されまい。解されても言ふべき言葉がない。いよ〳〵絶體絶命だ。食慾も退け、愛情も退けて、稍々正念の座に臨んだが、解答を己れの物にする事が出來なくて、捕へたものは影に過ぎない。七顚八倒して揉搔いて又一週間を過ぎた。二週間も過ぎた。管長室を訪はぬ事三週間で、今は大椀三杯の麥飯を美味として攝るやうになり、血色も落着いて來た。其時ふと氣付いたのは、今日まで無の一字に欺かれて、引摺られて來た吾身は何だ。畢竟無字も隻手の聲も流橋止水の考案も皆同じもので、たゞ難關考慮の苦闘で端的に不動の念根を集める手段だ。膽を練り、眼界を擴め、自己を知悉する功果はあらうが、此人間の一大事と云ふものを悟ると、世間の人事が塵埃のやうに見えて、是非善惡成敗毀譽が莫迦々々しくなり、餘り觀念が高所に落着いて俗事が物憂くなろう。尤も徹底すれば、聖俗兩境に障礙もなくなろうが、若い中はそれも得難いから、堂内の修行は此位にして、生涯の實行か

ら得るやうにしようと考へた。そこで、斯んなに苦しめた管長に最後の答辯を提示し、それでも撃退されたら破門される計りだ、其答辯と云つても最早言ひ現はす言葉はない、たゞ吾身に残るものは鍛え込んだ武藝がある計りだから、之を投付けて退散しよう、斯う考へて管長室へと參入して、老師の面前へムンズと坐した。謂はゞ決死の座だ。暫くして半眼の老師は「答案」と促した。私は無言のまゝ鐵拳を面前へ突付け、否と言つたら飛び着こうと行詰りの極を懐いて居た。俄然、老師は爆笑して叫んだ。「よし、卒業じや。」私は機を外されて呆然として仕舞つた。譯が分らぬ儘で一禮して歸つた。後は謝禮のため管長室を訪ふたが不在で、留守の役僧が斯んな事を言つた。「熱心で參するから、門外の修行人は偉い。短時日に眞劍で好く遣りましたな。拙僧などは厭や〳〵攝心に追はれて居るんだから辛い事です。俗界は面白い事でしやうな。」などゝいふ。案外のものである。「私は僧心で俗界に働きたいのだ。」と答へたら、羨ましいと言つた。

(三) 啓發機と武藝立直し

老師からは卒業などゝ世事言葉を言はれても、不得要領のまゝ修堂を離れ、終生の行住坐臥皆

禪なりといふ事に期待を懸けて、絶えず暇ある毎に坐禪觀法に餘念がなかつた。それが三年目の後、笹目の道場で稽古中、腕力の剛い外國人が不意に私に掴み掛つた。其强力に煽られて私の體は一二歩前へ蹈鞴を蹈んだ。其强力は拍子拔けで仰向けに倒れた。實に無想の機微からハッと氣が着き、始めて松風の拍子が悟の門である事を會得し、之から私の稽古振りが全然變り出して、極めて柔かいものとなつた。體術皆傳の卷にある合氣の事も、坐禪から得た丹田の不動心で、今日漸く啓發する事を得、玆に始めて吾師の賜物が無益に終らなかつた事を知つた。さらば劍法の方も、敵といふ觀念に釣り込まれないやうな、合氣を練習する形式が出來なければならない。今までのやうな竹刀劍術では之は學べまい、どうかそれを覺えたいものだと思ひ、面、甲手道具を斷然止めて仕舞つた。之が後年、無敵流の能勢頼之先生に邂逅するまで艱んで居た問題だつた。

三問　明治文學の隆起した原因を調査しました所、或は西鶴、春水などの復興か、或は飜譯文學の功績のみで、根を植付ける程の氣魄が見當らない。獨り泰西文學の高い理想を以て日本文學に取入れられた鋭鋒は、當時渇望して居た明治初年の若い血に注射されたもので、此原液

女學生夏期號外・白表女學雜誌と文學界の表紙

「文學界」同人肖像

（右より前列　夕影・秋骨・天知・柳村　後列　禿木・孤蝶・藤村）

こそ貴下の主宰された文學界同人の功績である。今更その經營苦鬪の程をお察し致します。どうぞ、その發行當時の樣子を御話し下さい。

答　文學界雜誌の發行

私が明治女學校敎師時代に、頻りと高等理想の文學奬勵の事を主張して居つたので、其編輯を手傳つて居た女學雜誌の寄稿中で、異彩ある透谷の事を知つた。其頃藤村は未だ筆を執らなかつたが、私も此兩人も何れ巖本の傘下に集まつた者で、基督敎が土臺の文友である。

その透谷や私の文章が追々と女學雜誌に集まる頃から、その建前上、重苦しくも難解にもなつて、巖本畠を荒すやうになつて來た。此潮流を巧に分岐させたのが白表女學雜誌で、之は私の受持で、社會改良の論說、文學上の批評、人物論又は詩歌、俳諧、小說などの類を載せる事とし、赤表の方は舊態を維持して、各週交々發行する事となつた。

斯くて私の雜誌は女學生と白表女學雜誌と二種になり、一は修身道話を主として文學を加へたもの、一は歐米文學を借りて日本文學の思想を向上させやうと勉めたものだが、何れも婦人思想

の向上にあつたのである。私の此抱負が後に文學界同人の純文學說に飽き足らなくなつて來たのであつた。

さて女學生雜誌も二十號を越える頃は、文學趣味が勝つて來て寄稿文が溢れるやうになり、大いに文學の氣勢を擧げ始めた。それが臨時に夏期號外を出さねば納まらぬ事になつたのである。之には禿木、透谷、湯谷紫苑、川合信水、それに隱居と云はれた藤村も無聲の名で初めて筆を執るし、星野夕軒も人氣に動かされて前後たゞ一回の一文を揭げた程だ。私は又一休禪師と怪しの木像の二文を載せるといふ始末で、若々しい元氣の橫溢するのが賴母しく思はれた。此號外が好評で忽ち賣切れになつたが、白表誌との區別が出來なくなつて來た。尤も之は號外だけで再び常態には復したが、年末、三十號を出す頃に巖本社長から動議が出た。それは此二誌を合流させて本誌の文學部とし、透谷を推立てゝ女流文學に盡力するやうにとの事であつた。私は異議なく承諾して直樣、島崎から透谷へ交涉を依賴した所、たゞ客員として盡力したいとの事であつた。其頃の透谷は三十一二に見えて、早くから貧乏修行で世故には長けて居た。長けては居たが、態度は詩人的で、迚も定期の雜誌編輯など思ひも寄らぬ事と考へたから、餘儀なく私が引受ける事にした。

・右の通り、二雜誌を廢刊して新たに新雜誌發行と迄になつたが、其中堅はどうしても私と平田に歸着しなければならなくなつた。何故かと云へば、透谷は前述の通りだし、島崎は突然流離の旅へ出るし、秋骨は未だ筆も執らないからである。他に誰も賴みに思ふ者は居ない。其相談に乘る平田君でさへ、文學方面は力になるとしても、印刷や發行編輯の事務などに付ては、餘り年少で相談相手にはならぬ。そうこうして居るうちに、早くも新年を迎へて仕舞つた。併し私は餘程宗教熱が旺んの頃で、善事は必ず成立つと信じて少しも動じない。左に其頃の日記を抄出して當時の事狀を明かにする。集まる文稿は何れも基督教青年のもので、其立脚地は同じであろうし、何れも社會の低級文學を憂ひての熱心さだから、よしや堂々の陣を張つて居る早稻田や、硯友社や、鷗外、露伴の先輩ありとも沒交渉で往こう、吾等の道は眞劍だ、立てよ、日本女子、といふ元氣で押出したものである。

明治二十六年日記より抄出

一月　一　日（日曜）雜誌社の祈禱會に出席。

二　日　夜、透谷來談（雜誌の件）。

三　日　午後、嶋崎來談、藤井亦來る。劍舞歌詩成る。

六　日　二道場へ年賀、淺田と村田に宗教談。
九　日　上野圖書館に籠る。
十一日　朝、學校にて始業の順序を整ふ。夜、新雜誌編輯着手。同二時半まで平田君と胸襟を
　　　　闘はす。弟男三郎亦同座。
十四日　女學校武道科親睦會、新作小楠公を劍舞す。
十六日　雜誌創刊號編輯。
二十日　終日在校、雜誌出版用多忙
廿一日　透谷來談(學校勤務承諾)。次に嶋崎(出立の辭別に來)。此日豪商界一文を社へ送る。
廿二日　午前、嶋崎出立に際し再訪(旅費を整へ名殘りを惜みて別る)。午後學校の傳道、社の
　　　　祈禱會に熱す。川合信水來(修學發途の苦衷に同情深し)。
廿三日　白表雜誌編輯多忙、腦底煩悶、俗世皆非、山居を望むや切。
廿四日　午前姊來談、母病床を出づ。巖本君士州の遊說より歸京の報あり。
三十日　夕、鎌倉山莊へ往く。此夜月下の雪景に爐を圍みて古藤庵と男三郎と徹夜清談、深更
　　　　三人祈禱會にて靈眼洗ふが如し。
卅一日　庵中瞑想、愛人と愛妹とを追ふ。吾文學界第一號發行、好評沸くが如く第二版着手。

此第一號發行も二十五日やつと禿木の原稿が届いてから俄に騒ぎ出し、徹夜して編輯の筆を執つて秀英舍の特別盡力を得る事に奔走し、辛ふじて一月の發行に間に合はせた。此故に此雜誌の發行日は終に三十日と極つて仕舞つた。

さて創刊號は發行日に賣盡したので、直ちに再版を出したが、之も一週間で賣盡して三版をと云つて來た。私は圖に乘る事を控へた。則ち創刊千五百部、再版千部、二號三號は千五百部づゝ四五號以下千部といふ所で、當時これでもよく賣れた雜誌と云ふのである。

（二）「文學界」の獨立

雜誌面にある通り、三號までは女學雜誌社よりの發行で、巖本社長配下に屬して居たから、女學雜誌文學界と表記した。所が創刊號に巖本善治記名の文章道一文から同人間に異議が起つた。それは禿木からの申出でゝ、以後同君の寄稿を謝絶せよとの事である。私は困つた。別に主義主張に反對する意見でもないのに、之を斷るとすれば、其人とも其社とも絶縁する事となろう。斯ういふやうに一本槍の毛嫌ひを始めると、此先き誰々を退けろ、何某を排斥せよ、と云ひ出され

ては、結局若造の月並仕事で、雜誌發行など永續するものではない。併し今鋭氣を挫いては、大切な出鼻を碎かれて仕舞ふだろうと考へたから、程よく巖本君へ斷つて、私が出版をも引受け、玆に始めて「文學界」は、附屬雜誌でなく、私の物になつたのである。

（二）文學の禿木

「文學界」を想ふと直ぐ聯想するのは禿木の若い顏である。私の廻覽旅行雜誌「愉觀會」で同君の文才を認めて以來、其あどけない少年姿を視直したものである。それ故、文學界發行の時も外部文界の交渉を氏に委託したから、外來の原稿は多く其手を經て居る。それは氏が交際家たる愛嬌もあり、學生の身輕さもあり、又早耳でもある故で、此雜誌は實に禿木と私と二人で拵へたものだが、特に光輝あらしめたのは氏の力である。併し全身これ文學たる氏は、其他に多くを望めなかつたのは當然の事であらう。由來天才は一點張りで、追々純文學主張の不平が煽り立てられて、隨分困らせられたものである。據ろなく其不平を慰め、一時「うら若草」を發行して編輯を委託して見たが、一二號で枯れて仕舞つた。其傾向は女學雜誌對文學界と同じやうな、世間見ずの

若い鋭氣から來る不平だから擯斥すべきものではないが、氏をして稍々惡化させた原因もなくはない。それは嘗て氏が悶々の情を訴へたのに同情した私は、吾妹との交際を承諾してあつた。それが圓滑に往かぬと看た姉が母と共に反對した。恰度その異議の席へ私が往き合せたが、双方が好まぬ事なら停めれば宜いと輕く言つた私の一言が因をなしたか、終に絶縁となつた事がある。其時私は用務に追はれて居る際で、詳細の事情は知らないが、氏の感情は好い事ではなかつたろうから、終には藤村の話のやうに「文章を出さないで金だけ出せば」などゝ、溫厚の氏をして隨分信友侮蔑の惡言を發せしめたものであらう。併し氏は舊誼に背くやうな利害主義の人ではないから、飜譯界の耆宿に居る今日でも舊交は益々溫められて居る。

(三) 一葉の輪廓

女流文學を目標とした「文學界」が、三宅花圃(舊田邊たつ子)さん計りでは女流が光らぬので隱に物色して居た所、「都の花」で見た一葉といふ女が異彩ありとて禿木君からの通知、それでは早速といふので「雪の日」の一文を三號へ掲載した。之が口明けで追々と其本價を現はして來た。其才

筆は勿論だが、世間苦勞の拗ね方がレファインされて居る所が尊い。早速面會して同人中へ迎へやうと、其龍泉寺の宅を訪ふた。其町は吉原遊女町續きの有名な細民町だから、鳥渡行き憎かつたが、泥中に蓮花を探る氣で俥を飛ばした。幕府瓦解で御家人一家の困窮、搗てゝ加へて女手ばかりの薄命さを、繰り出す老母の物語りに心も動き始めた時、小柄で猪首な町屋風の娘が挨拶した。尾羽打枯らした二十四五の飾らぬ風采、稍々險しくはあるが、プラウドの高き光は大いに畏敬するものがあつた。後には追々文名が高まり出して訪者が繁くなり、特に女流といふ所で若い文學生が入替り立替り訪問して世評は益々擴がるので、忽ち博文館の藥籠中へ納められる事になつた。斯うなつては最早一文菓子屋の見世も張つては居られなく、本郷の方へ移轉されたので、再び其處を訪問した處、まだ整はぬ家ながら人出入りも繁くなり、今は新進の才媛とばかり、人も家も活氣が溢れて居た。獨身の女氣に集まる柔弱男、私はそれを忌み嫌ふ所から自然脚も遠くなつて、同人等のそこに屢々訪問するのを聞いてさへ苦々しく思つて居た。併し來て見ると、以前と違つて一葉の夏子さんは、元氣も活潑に、話もヅカ〳〵して居た。以前愼ましやかだつた其口から「あなたと奥さんとの御緣は?」などゝ不作法な言ひ草をするから、あれは天緣ですと言つて呆然とさせたものだ。

後に花圃さんに一葉の事を話したら、「夏子ですか、あれが其樣に偉いのですか、あれは中島（名は歌子）先生の塾婢代りをして、お歌やお字を習つて居まして、私共へもお茶やお菓子の世話もして呉れましたつけ。」

私は「文學界」が祈り出した此一輪の名花、それは短命だけれど、槿花一日の榮ではなく、明治文壇に貢献した永久の華精である。

（四）露伴先生

少年時代の私が御茶の水の附屬小學校に居た時、六級下に幸田成何とか云ふ暴れ者が居た。それが露伴君ではなかつたかと思つて居る。其緣故でもあるまいが、明治初期の小說壇に紅葉、露伴と對峙して居た折、私は馬琴崇拜に引續いて露伴宗であつた。特に「五重塔」の藝術氣魄に魅せられたが、私は明治二十九年に描いた「呪ひの木」に、片輪で歪んだ戀の焰を其藝術に燃え上らせた男を描いた所、惡口家の綠雨が之は露伴の剽竊だと罵倒した事がある。好みが同じだと其行爲が自然近寄るものだから、此野卑な暴言でも一理はあるものと思つた。斯ういふ感じを持つ

て居るので、吾雜誌を編輯して居た時も、是非その一文を所望して掲載したいと思ひ、出不精の私も終に俥を枉げて氏の雷音洞を訪ふた。打寛いで少年時代の腕白話をしやうと思つたが、齡こそ下だが、餘り儼然とした態度に取着く機を得ず、唯投稿を約して辭去したのは遺憾であつた。併し早速「新體詩に就きて」の一文を格文堂主人の名で寄せられたので、よく共意見が合致する事も知れて、一段の喜びを感じた事であつた。

四問　文學界は透谷が作つたのだとか、透谷、藤村の出版だとか種々なデマが飛びましたが、今は逐一明瞭になりました。附きましては生前轗軻不遇の透谷君の事から伺ふ事に致します。

答　北村透谷君の奇矯

（一）初對面の茶室

女學雜誌の編輯を私が手傳つて居た時、透谷の名を知つたのは、二十五年一月號に一點星といふ韻文を見た時からである。其末節に、

しばし呆れて眺むれば　頭の上にうすらぐ雲の絶間より　あらはるゝ心ありげの星一つ　忽ちに晴るゝ思ひに憂さも散りぬ。

人は眠り世は靜かなる小夜中に　吾づるゝ君はわが戀ふ人の姿にぞ有ける。

これから其寄稿文を注意するやうになつた。それは基督教文學の共鳴點からかとも思つたが、更に惻々として身に迫るものがあつた。其後の評論は追々光彩を放つて、ために此雜誌は次第に青年社會へも擴充されて往つた。

或夏の午後、私の本町宅へヘルメットにステッキの有髯壯士が、紺絣の單衣に白木綿の兵子帶といふ風采で、突然「天知さんは居ますか、北村ですが、」と訪問した。素より店員達は天知などいふ名は知らないので、壯士の强請だと誤察して傳達して來た。直樣客席へ出て見ると客が居ない。「ヤア文覺さんですか」と言ひながら、客便所から帽子のまゝ出て來た。之が透谷と私との初對面風景である。急に逢ひたくて來ましたと、眞情おもてに顯はして居たのは嬉しかつた。之は私の文覺上人の一文を見た時の事である。此日は情熱の事から始まつて、空虛文學、沒趣味、沒

理想の慨嘆に花が咲いて時の移るをも覺えず、軈て夜食が出る、燈火が出る、日が暮れる、夜具が運ばれ、蚊帳が釣られるといふ按配で、規則正しい家人等は蔭で怫々言つたといふ。談益々熱し、情愈々昂りて眠られず、透谷は洗面器の水で頭を冷やし〳〵して、眠ろうと勸めるが眠られない。枕を排して、社會思想の低級、宗教家の停頓、學者の沒理想等々に付て痛憤止まず、日高く昇つたので、匆惶として透谷は去つた。之は吾家の茶の湯坐席での面會だつたが、後年同じ席へ嵯峨の屋おむろを迎へた所、天井から床の間のあたりを視廻して居たが、「あなたが斯ういふ所にお住ひとは意外でした。」と繰返し〳〵言ひ續けて、文學談を忘れて歸つて往つたのも奇であつた。大橋音羽も此部屋へ來たが、之は博文館代人で來たのだから、羽織袴の左樣然らばの調子であつたので、よく調和が取れた。

（二）其教師ぶり

島崎が女學校を去つて透谷が其跡へ這入つた。私が番頭格だから同君を其講座へ紹介したが、不似合な袴を着けた透谷は、無雜作に教室へ小走りに這入るなり、ピョコンと一つ頭を下げて、

左手を袂へ突込んだ儘、右手へ提げた英書を机へ投げ出して、「之から一緒に勉強しましょう、どうか宜しく。」と云つた調子で始めたものだ。學生中に英學者齋藤秀三郎君の妹が居て能く出來る。之は冬子と云つて、透谷の譯讀に對立する意味を述べて可否を問ふ事がある。それは偶々ハムレットであつたが、透谷の答は斯うだ。「成程そうでも好いやうだ。そこが沙翁の偉い所以だと思ふ。」何時も斯う答へて他を排さない。此娘の熱心な意氣と秀才とには、戀を悟つたやうな透谷も終に深い憧憬を覺えずには居られなかつた。其娘も亦、透谷の寫眞を肌身に離さなかつたと黒光女が述べて居る。（默移參照）

其頃、透谷は小田原から通つて、數寄屋橋の兩親方へ泊つて居た。或時「不埒な俥夫だ。」と憤つて居た。それは俥上で讀書中、袴が脫げ落ちたのを俥夫が知らせぬため、今日は着流しの儘で困つて居るのだと眞面目で呟くのが可笑かつた。私が無言で袴を貸したら、忽ち哄笑されたのも亦可笑しかつた。

（三）　其履歴と動作

其本名は門太郎、小田原の自由黨壯士であり、次いで宣教師の通譯をして基督教思想を解し、自由黨大井憲太郎が朝鮮に爲すあらんとした際、軍用金調達の非常手段實行員を課せられて憤慨し、正義を高唱して斷然政黨を脫し、以來文學に走つたのだと、此熱血兒は私へ談つた。其妻女榮子さんは小田原の名家石坂昌孝氏の女で、教會信仰の交際から意氣投合したが、位置の懸隔から許されず、斷然手を携へて共に走つたのだといふ。之より酸苦の生活は文筆に於ける天才を鍛錬させたものだ。其高想達識と瘠骨羸弱とは、如何にも楚辭を諷誦するの趣が見られた。理想的の政治觀、犀利な皮肉論評、それは齋藤綠雨の漫罵に比すべき冷笑も出來ない事もないが、綠雨に無い高韻な理想があつて、下卑た文句を厭ふたのであつた。

或年、小石川後樂園で學校の親睦會があつた。その伯夷叔齊堂に瞑想孤坐する私を見出して透谷が小冊子を渡した。それは菜根譚であつた。私は想はず呟いた。「君も亦此方面を視るのか、平凡の英學生ではなかつたか。」顧みて默然とした事があつた。其時本殿の方で薩摩琵琶の吟聲が聽こへて來た。透谷は私に劍舞を遣れと云ふ。それは毎度學校の親睦會で私が劍舞を演出する所から言つたのであろう。私が二番舞ひ納めたのを見て居た透谷が、相談があるとの事で私を別室へ導いて言ふ。日本は今後どうしてもドラマへ進まなければならない。併し舊俳優は舊式の型に捉

へられて居て智識が全然痲痺して居るし、壯士俳優も新味一方で內容が貧弱だ。今後のドラマは結局文士が其模範を示さねばならぬ。それには舞臺稽古を始める事が急務だ。校內で好いから先づ揚卷助六を遣る事にして、君が助六を遣るやう賴む。僕は意久で、揚卷は女が好い。之が出來た樣子で、續いてハムレットを遣る事にすると云ふ。之は冗談の話ではなかつた。揚卷が獲られないので、終に笑ひ話で終つたが、其頃のドラマに對する暗黑時代を破ろうとする元氣さを買つて貰ひたいものである。其透谷が病氣だといふので其家を訪ねたら、ガランとした薄暗い部屋の隅に唯獨り病臥して居た。隅に八寸幅の白木棚に十五六冊の洋書があり、其下に枕して豆ランプが灯され、今讀書して居た所で、聽て全快だといふ。其枕許から錫の小鍋と茶碗とを取出して、一緒に食事しようと勸める。其眞情の自然さに引入れられて、稍々迷惑の感じも忘れて一杯馳走になつた事である。其後又、別の僑居を訪ふた事があつた。其時は近くの溫泉宿で面會したが、恐らく之が別れとなつたろう。

（四）其家族

其時奥さんの話に、「此頃透谷は少し變です。先日歸來早々俺は坊主になるがお前もどうだ。」と云ふ。「えゝ一緒に尼になりましようと云ひましたら、非常に悦んで大笑ひに笑つて居ました。」と言はれた。奥さんはよく透谷の心情を理解して居る、天晴れの良器で、泰然自若たるものがある。果して透谷歿後、幼い娘を擁へて屈せずに立上つた。縁を頼つて米國で勉强し、豊島師範の英語教師で身を立てた。後年青山南町に此母子が居られた時、偶然その隣家が吾親戚の秋山で、其處に私の長女が寄宿して居たので、鶴子さん（透谷の遺兒）と懇意になり、追々事情が分るに連れて終に吾保管して居た透谷の遺稿を請求して來た。私はそれを持參して、此親子に再會した事がある。それは透谷歿後、其父親が十一二歳の孫娘を同伴して吾本町の家を訪はれた時である。それが此鶴子さんだが、少しも當時の感じが出なく、たゞ安心して歸宅した事がある。

　尙透谷といふ號は住所の數寄屋橋から得たのだと自ら話されたが、其住所を訪ふた事がある。二間々口の細やかながら小綺麗な小賣煙草の見世で、「二階が伜の部屋ですが、今日は不在です。」と冷氣を感ずる中年の婦人が答へた。之が繼母で、働きのない門太郎として透谷が如何に冷遇されたかゞ想像された。

　三十三年の五月、私が北海道の歸途、花巻の福井牧師を訪ふたのも、熱意ある透谷の紹介を重

んじたからであつた。所が恰度、福井訪問の頃、東京の芝公園では透谷が離魂したのであつた。友に透を失つて福を得た譯で、此福井牧師は今松湖と號して、此春まで心行治病の大宗師として神戸に榮えて居た。

草の葉末に唯ひと夜、假の臥戸を頼みても
さてあまい夢一つ見るでもなし
野晒しの凰颯々と吹きわたる中に、
何が樂しくて　　　　　　透谷

一夜、此狂詩人は月光に憬れて庭へ忍び出で、桃靑が池を廻りて夜もすがらといふ氣分で、月の入りと共に笑つて他界へ趣いたのであろう。

五問　藤村先生との御交渉を伺ひたい。

答　嶋崎藤村君の冷熱

(一) 初對面と滄浪の旅

文學好きの地方青年が來社中ゆゑ、逢つて遣るやうにと巖本君の言葉で初見したのは若い藤村の姿であつた。品高い青年が「便宜上この二階に居ますから、御手傳ひでも致しましやう。」と云ふ。其後暫く「扇ケ谷に滯在するから、」と云つて、鎌倉雪ノ下に私を訪ねて來た。其時初めて文學に付て話し合ひ、續いて戸川明三なりと言つて其友を同伴して來た。二十五年の女學生夏期號外に無聲の名で「故人」の一文を寄せたのが最初の筆だ。吾校に高等英文科を新設して同君を講師としたが、之は不成績で、忽ち佐藤輔子の眼に魅せられて、たゞ一學期で退職屆となつた。其時、蒼い顏に苦惱の色を湛へて苦笑された面影は今も忘れはしない。「今、歳暮の鮭配りで市中を廻された所で、」と、情けなさそうに嘆息された時は、思はず胸が迫つた。迚も堪へ難い苦惱ゆゑ西行、芭蕉の跟を追ふて、的なき旅へ出たいと思ひ、教職を擲つ事ゆゑ、旅費萬端の厄介になり

たいと云ふ。之は古徳に魅惑された青年客氣の過熱だとは思つたが、其純情さには泣かされた。
一月十六日の來狀では、「實兄へは胸中を打明け、閑地にて勉强したく女學校退職の事を告げ、意中の人とも公然辭別し、寓所の濱町親戚へは折を見て辭別し、巖本、植村の先輩と肉親達と友人と先輩二三へ胸中を明す他、一般へは」といふ事であつた。折も折、低級文學の社會思想を呼び覺すべく、新雜誌創刊の切迫機に焦慮して居る際とて、其同志の一員から突然斯ういふ申出で稍々力拔けの感じがした。併し其想ひ詰めた悄然とした姿の憐れさが强く同情心を誘つて、飽くまで力になるからと激勵した。此後の事を吾日記で見ると、一月三十日の雪夜に鎌倉の草庵で徹宵談り明かし、感極まつて祈禱すとあり。翌日は發刊した文學界創刊號を携へ、二月一日、十二時大船發で島崎君は沼津へ、私兄弟は歸京とある。由來同君は寡默の上に低聲なので、哀別の情が楚々として心に迫るのであらう。私は此日惱まされたものである。歸宅したら、濱町から同君の本箱三本が、之も無言で屆いて居たのには淋しかつた。一月二十一日の日記にある通り、島崎胸底の秘に付き同情に堪へず、密かに本人輔子へ漏らしたのは惡い老婆心であつたと後悔して居る。輔子の家庭は封建時代の士風其儘で、既に親の取極めた許嫁もあり、當人の本性も堅實で柔順であるから、油然と湧き起る情熱との苦闘は正視するに忍びなかつた。到頭苦悶の結果、心

を想ふ人へ身を許婚の人へ、と斷言して鹿討氏となり、續いて姙娠中に他界へ逝つて仕舞つた。私は實に泣かされた。

旅先からの古藤庵の初信は二月七日に認めたもので、之には足を傷めた爲め三分の二は鐵道に據りたれど、富士山の詩神を拜みて橋上にウォルヅオースの句を吟じて桃靑の昔を偲ぶとあり、石山寺にはハムレット一部を納め、淸水寺では觀音經三部を求めて、西京に昔より文學の興らざりし所以を感じたとあり、そして斯う附加へてある。「美の神は妬みの神なりとはアンゲロの言葉とかや、實に在りとあらゆる物を打捨てゝ、一笠一笻に姿を包み、一命を擲ちて彼詩神を探ぬるに詩神なほ影を吝みて愚が風塵に心あるを疑へり。彼の金錢に心を迷はし、虛名に思ひを勞し、孑々として猶詩神の來らんことを望むとも愚頗る惑ひなき能はず。」と嘆じ、そして豫想に反して一向詩興の沸かぬ事を斯う云つて居る。「實の處、今日迄は詩神の優なる所を思ひしが、此度の行脚は確かにミューズの懼るべき威力に愕き入候。迚も一場の戲言茶話位にて氣に入る神に之無く候」とある。そして同人の心影なりとて淸見寺の石像から五羅漢の相貌を寫して、之は愚生のイメージだ、御一笑、と云つてある。之は當時の誌上へ載せたが、それは天知、透谷、夕軒、禿木と本人と五同人の事である。此書面は同人宛だが、同時に私宛の文中には「花は白きを辭せす、

調は高きを辭せず、碎くべき骨は碎くるを辭せず、悲むべきの悲みは悲むを辭せず、暗光（天知の庭號）の杖に拂ひ難きもの何ぞ無聲の杖に拂ふことを得ん。暗光の合羽に重しとするもの何ぞ無聲の合羽に重からざらん。貴庵の利休居士、透谷兄の長論文、渇望罷在候」とて胸底の苦を訴へて居る。更に三月一日出で私へ屆いた文には、「文學界、神恩に據り且御盡力にて彌々多望に可相成、何卒我々の趣きは奇を求めず花に走らず霜枯れの松の姿を欲しく御座候。二月分の文學界是非拜見仕度、排俗戀一文筆を振はれたりや、北村兄にも不相變御出勤の御事と存候。是非同兄の西行を見たしと御申傳へ被下度候。愚生事須磨の農家を借りて「茶の烟」を脫稿仕り、其より先月廿二日高知の知友（馬場孤蝶の事）を訪れ、海上の苦勞を嘗めて明廿八日無事神戸へ着仕候」とあり、それに東京の兄から歸京の命はあるが、斷蓬行脚の內にして往還の路用も懸り、折角中途まで踏出して殘念だから、之から吉野へ行くが、途上近江へ立寄つて、とある。此近江とあるのは近江八幡の市ノ邊の廣瀨恒子といふ人の住居で、古藤庵の此度の旅行を私が氣遣ふ餘り、私と親しい此恒子へ紹介して、どうか私同樣に思つて懇情を乞ふといふ添書をつけたので、一も二もなく承諾して懇待したのである。そこで古藤も、故人に遇ひたる心地したとか、骨ある一種の詩人だと云つて、大いに孤影の安居を喜んで此子を秋蘿と名告けて居た。

古藤が吉野へ着いたのを待つて、私は直樣出立した。神戸の恒子を訪問して高野から吉野へ出で、奥千本へ登る路傍で古藤の姿を認め、湧出る友情に胸が塞がる計りであつた。苔清水や西行庵を偲ぶ暇もない程、現時の低級文學に慨嘆して、日の傾くのも知らなかつた。其旅燈の許に話が粛やかになつた時、前週まで親密な秋蘿の口頭から漏れたといふ其誣言を聞かされたには愕いたが、更に不審の眉を顰めた（此實情は後に述べる）。尤も來信には「吉野西行庵花下の風狂、日頃力に賴む其人と思ひの儘の雜言吐き散らし、今更面目無之覺え候。旅にての恥は萬事無責任と諦めて戯れも悲みも吉野川へさらりと流して」とあり、其時、古藤は既に神戸にあり、「荷物を背負ひ毛布を着、檜木笠を持ちたる風體、いかにも怪しげなれば巡査に咎められ、大笑ひの種子と相成、其夜餘り更けたれば畠中に一泊、翌日より貴庵のお泊りに相成候部屋へ風雅の貧窟を構へ」とあり、之は四月三十日出だが、五月二十日過ぎには石山寺門前農家の茶丈へ移つて居る。近い所に芭蕉堂、藥師堂などありて、瀨田まで行かねば大根一つなき所とありて、狂歌——

醬油と油を買つて石山へ歸ればきこゆ山寺の鐘

雪に入る歸鳥を遠く眺むれば流水黑し瀨多のから橋

神戸から膳所へ來て二泊、京で世帶道具を求めて落着いたが、旅上未だ一詩も出ないと喞つて

居る。

其時、旅上から郵送された藤村の記文を此處に挾んで置こう。

（一）訪西行庵記

はらからと袂を分ち、むつましきかぎりに別れをつげて、たゞ〳〵ものくるはしき一筋にうかれそめ、難波西海のあたりをきまよふこと二月あまり、菅笠の破れたるをいたゞき、身には合羽のふりたるを着し、おもくるしき旅の調度ども前後に背負ひたるさま、まことに怪しき姿して、ことし三月十四日吉野山西行庵に上人の木像を驚かす。西行庵はよしの村をはなるゝこと五十丁ばかり、樵夫の外には通ふものだになき羊腸さかしき山路を分け入り白雲の路ふさがれる幽谷に下るに、かのとく〳〵の苔清水を左になし深山前後をとりこみて、屋根やぶれて、壁落ち、風の音霜枯れのすゝきを吹きて狐狸の栖とも覺しきに、心なきもの櫻を切り山を燒き、今はなにがし俳士の再建ときこえたり。松はうしろに仆れて今昔のおもひ更にふかく、木像はふすびたるが上に燒けこけて、鼻は缺け珠數は落ちたり、こゝろみにうしろを見れば天明五乙巳奉納願主江戸南鍛冶丁大井八右衞門細工人益田慶運とあり、時いまだ初うぐひすの耳あたらしきに、枯れたるすゝきなどかき集めて筵となし、しづかにかの木像に對すれば眉長く俤やつれてさびしげにとうとき墨染の衣にも

日頃より慕ひ侍りし山家の氣韻動いて胸にせまる。洒々落々などゝかる〲しくいふべき風情にも見えず、携へたりし家集をひもときて風より外にとふ人もなきといへる歌ども思ひくれば、千年のむかし捨てはてし身にも櫻のかげの墓はれてかゝる所に結ひなしたる草庵のあはれ、たゞ〳〵涙も落ちぬべきばかり也。今は燒けたれども近きほとりになにがしの寺ありて、そこよりこの草庵に通ひ、松風の音にちりを澄まし岩間の清水に濁耳を洗ひしとぞきこえける。目をねむりてこれに對すれば古氣心を襲ひ、目をひらいてこれに對すれば鳴き渡る山鳥の一聲もはらわたをちぎるの媒となるのみ也。はらからの手に老いたる母を托して朝夕の孝養もおろそかなる身はたゞ山河風雪にたゞよひ、久しく戯曲を好んでたゞこの一筋に瘠せ衰へたるものくるはしさ、今またこのところまで尋ね來りてこの木像を拜するよし語れば、上人もまたわが想をあはれむに似たり、知るや知らずやシェクスピア、ゲーテをはじめとしてダンテ、ミルトン、シルレル、バイロンのともがらあまたこの國に入り來り、世にきこへたる逍遙、鷗以外など沒理想論のすさびにとつ國の詩人をあげつらふよしなどかたり、戯曲の道もおとろへて近くは默阿老人のうせたるも流れ行く芦の葉の變轉迅速のよのためし、たゞ〳〵よしなきことゞも言ひ捨てゝ知己の間に詩人などゝ呼ばれんもの〳〵しく、是非胸中にたゝかふてこれが爲に身安からずと芭蕉庵の筆のあとも顧れば、胸にみちて腰間にさしはさむ風雅の一刀たゞ〳〵詩神をけがさじとこれのみ心にかゝるよしを語るに上人笑ふが如くうそぶくが如し。天地さびしげに枯れたる木の葉むら〳〵と草庵の窻におつるを後に見て、やがて宿にかへりて旅燈のもとにひとり故人のふみをひもとき、月花を友として禽獸のそしりを免かれんと思ふのみ。明治廿六年仲春誌之　古藤庵

（二）　大微笑觀の曲折

古藤が大微笑觀なりと云つて秋蘿に注ぐ心情はよく分るが、當時の秋蘿には妬憤の蟠りが潜在する時で、吾等の友情を阻碍する懼れがあるから、餘り熱度を高めぬやうにと忠告して置いたが時は既に遲く、小說「春」に其入京の場面を「これより友と再び仰ぎ見ぬやうになつた。」とあつた。併しそれは誤解で、私の方は少しも仰ぎ見ぬやうな事はなかつた。それか有らぬか、翌年の元日所感中の文に左の文句を私へ送られた。

……不圖したる誤あり、或は廣瀨姉の如きノーブルハートを誤まらせ、或は物狂はしき姿して、夏の夜の更けたる時鎌倉の庵に、兄が觀念の座を驚かし、尙飽足らで風狂の停る所を知らず、停らんとしては犯し定まらんとしては亂れ、偏に愚かなる心眼の暈りを拂ひ盡さずして、諸友の笑ひを招くにも係らず、尙盲目、生の如きものを捨てずして文學界の事など托し給ふに、吾も責を盡す事は知らで只管萬事を狂眼に觀じ、淺猿しくも盲目なるは今更言ふ迄もなし、兄が觀念の眼子には疾くに吾盲目は認められしならんかとは申せ、之も無智なる故に御座候。心の底まで見えて果敢なきは斯る運命の中に抱かれたるものにて候べし。唯生は兄等の風情にすがりて其靈杖を吾便りとなし、何事も志あらばと思ふ計りに候……

此優しい悔恨の文句を聽く前に左の如き書面がある。

……特に心志未だ定らずしてこゝ（女友に交る事）に携はる時、之が爲に道のほだしと相成、遂にはミューズの心にも悖る如き事あらば、兄へ對しても申譯無之と存じ、廣瀬姉の如き其知己諫爭の友として且又俠友として、眞に忍び難き所も有之候へ共、之も道の爲には替え難く御座候間、我心志の動かざる迄文通は一切止めに可致決心致候。

斯うあるから別に苦痛も不快もない筈だが、何を仰ぎ見ぬ事があつたのか私には分らない。それ故その歸京の際を始めとして其後は久しく便りが途絶えたが、二十八年中は再び便りもあり、又陶工に交つて茶碗描きをして居たときと、音樂學校の制服で入學した便り、それから「春」を書く前調べに鎌倉山莊を訪ねられた時と三回の訪問を受けた。其後、佛國逃避行に先立ち、嘗て淺からぬ知遇を受けて居た神津猛君に辭別すべく來鎌した時は、音沙汰がなかつた。此猛君は信州神津村の舊家で吾が書道門を潜つた人だから、其際急使を遣はされた事がある。私は歸宅早々蹟を追つたが、逢へなかつた。

さて斯う話して來ると、秋蘿といふ婦人の事を少し述べない譯には往かぬ。

(三)　廣瀨秋蘿の商器

同志社卒業三人組と云ふのが吾女學校高等科に居た。竹內梅、榊なつと、廣瀨恒との三俊才だが、恒子は一番姉さん株で其頃既に二十四五歲に見えた。教授外には女生に一切不關焉主義の私へ、鎌倉避暑中怩々しく接近して來たのは此恒子で、其態度には稍々迷惑を感ずる程であつた。私の母が茶事に堪能なのを聞いて、是非拜見したいと取締り老女吳組子刀自の願意を傳達したのも此人で、軈て本宅に訪問して吾母に親しみ、續いて吾妹を懷け始め、終に其故鄉へ伴ひて一ケ月も劬はり樂しませたのも此人である。之を緣として屢々妹の靜養する草庵を訪ひ、終に私のプラトニックの對手を探り出し、忽ち校中へ評判を立て始めた。之も其事實を私へ告げる者があつたが、其時は恒子の眞意が解し兼ねたので聞き流した。素より齡は四五歲下だが、どうしても一度は嫁いだ女とより見えず、それに姿態風貌のなす所から齡上の感じがして、其ために心置きなく親しんで居たのだが、或は多少誤解させたのかも知れぬ。固より人に戀するやうな狂熱性はないが、或は吾身代に心が動いたのではあるまいか。恒子は私に忠告した。「あなたの熱情相手は見

當違ひです。一度對話させたいものと思ひます。そういふ人ではありません。」と。
　吾プラトニックは現實に追込まれる時期が來た。彼女には有力な緣談決答時期が到來した。それは卒業歸鄕の時に際したからである。私は斷然校長を通じて突然プロポーズしたのである。
　私は例の如く鎌倉の庵に妹を訪ふた。其夕恒子が思ひも寄らず突然入來したが、此夜最後の手段としてか、女子としての乾坤一擲の動作を仕向けて肉迫して來た。私は翌朝恒子へ宣告した。
「我に若し先客がなかつたら、吾心は其許に捉へられた事と思ふが。」其時の悽蒼とした無言の顏色は今も尙想ひ出される事である。併し當時寂寥に捉へられた吾心はひた向きに北へ去り往く者の後を追つて居たので、斯んな惡辣な運動も問題にならなかつたと見え、吉野の古藤を訪ふた旅にも第一に恒子を神戸に訪ひ、共に緩々と須磨に宿泊して同胞のやうな心で親しんで居た。其頃の日記中から左に少し抄出して見やう。何しろ恒子は質實素樸で商才に富む愛嬌人であつた。

日記中より

四月九日　雪ノ下庵泊、北歸の彼女辭別に來りし物語り、離愁追慕更に新なり、靜思に不堪。

同十一日　古藤への同情、憐愍、吉野へ出立、此夜靜岡泊、翌熱田より風浪を冒して四日市泊、風光明媚を競へども、旅舍の雨滴に佗しさ孤枕を辿る。

同十三日　神戸に恒子を訪ふ。八ケ月見ぬ物語り盡るべくもなく翌日須磨に遊ぶ。甲に飢えたる情熱を乙に向けて慰藉を得るの理、僞ならず。

同十五日　須磨の漁戸獨居、寂寥苦惱。

同十六日　舞子の松のくねり、須磨溫泉の長閑さ、年上の妹といふ者あらば、それは今日の恒子なり。

同十七日　大阪より吉野へ、途上二僧に緣あり、强いて高野へ同行さる。學文路玉屋泊、大に宗論を鬪はす。

同十八日　同行一僧は京の東寺、小林證如、一は普門院主にて寺院一宿、山氣澄淸靈感快し、此處へ來て快き物、厠と奥ノ院の杉、惡き物、修道の熱意なく偸安俗化の僧風と。

同十九日　五條を廻りて吉野へ、山中無聲を訪ふ。孤影稍々完からず、花散りて幽かに鳥聲を聽く。果して大徹笑の悟ありと聽く。

同二十日　山中徘徊、莖を拈して苔淸水に浮世を洗ふ。燈下無聲の激語を聞く。空谷谺を聽くの感あり。秋蘿に期待を持たしめたる吾不用意に愕く。

同廿一日　山陵を拜して泣く。

同廿二日　山中の溫泉に浸り突然歸心を促す。無聲先づ下山、狂的也。大阪驛にて分袂、彼は神戸へ、我は歸京、囊底を無聲のために拂つて、吾は車中絕食坐禪。

無聲の來信中に斯うあつた。

廣瀬姉は一種の骨を供へたる詩人に御座候。近頃御談笑相伺申候に、之又靈光に打たれたるの人に非ざればば斯程に非じと思はれ候。一日膝を叩いて閑談仕候折、想見にては二人の者貴姉の胸中に逍遥し、一人は此世の人に非ざるべきも、一人は此天地に存するが如く此二物二にして一、一にして二ならずやと申せしに同姉は笑ひ居られ候。凡眼未だ徹せざる所あるか、去れど同姉が心に月花の溢れたるには驚入候云々。

賢明で意志の強い此婦人も稍々脫線熱を無聲へ迸らして懷劍を贈つたり、古藤に妬心を感染させたり、友情に汚點を着けさせたりしたのも若い血の戯れであつたろう。詩人の大微笑觀も、此不美人たりしがために完ふし得たのかも知れない。併し後年、此婦人も夫人姿で斯う言つた。「自分同樣に思つてとの添書に從つて同情して懇待したまでの事で、私は何もあんな弟のやうな一書生に心を動かすものですか。」と熱心に繰返して、尋ねもしない事を言つて居た。

六問 「文學界」成立の樣子は略々明瞭になりましたし、眞の同人は六人であるといふ事も分りました。此上は其編輯上の内容に付て伺ひたい。

答 「文學界」編輯の內容

（一） 編輯者の覺悟など

當時の編輯形式は冒頭に主幹主筆の論文があり、次に壓卷文を揭げるを例としたから、誰が主幹で誰が重要な同人かといふ事が一目して分る。所が「文學界」は吾女學生雜誌の延長とは云へ一般婦人社會へ推擴めた文學雜誌で、一定した方針もあり、統一した社說もあるけれども、自づから文學に對して見やうの異なる人々を集めるには、愁ツかの社說はない方が好く、特に不羈自由な若い文士を集めるには、開放主義にして平等の扱ひをするに限ると思つた。たゞ編輯の手心で取捨するだけの事にして、一切庭園式を採らず前栽式に據る事にした。それ故、誌面では誰が眞の編輯者か、誰が眞の同人かといふ事が分明して居なかつたと思ふ。何しろ學校を出た計りの銳氣勃々とした英文學一點張りの人々が多いのだから、當らず障らずの調子で兎に角五年目の五十號まで繼續したのであつた。尤も私は全然異る方面の用務に追はれるのだから、文界の外部は

一切禿木君に委託した所、其熱心な努力と奔走とで常に斯界の趨勢も分り、又各方面からの原稿もよく集まつた。此事は一に同君の愛嬌が圓滑を有つて居たのだと思ふ。吾等同人の緣で客員に集まつた人々、卽ち大野洒竹、上田敏、中川份綱、馬場孤蝶、樋口一葉、戶川殘花等の副同人の盡力もあり、遙に共鳴して寄稿された人々、卽ち柳田國男、野口寧齋、佐々醒雪、武島羽衣、大西操山、幸田露伴、閼贋阿彌、太田玉茗、淡島寒月、田岡嶺雲、尾崎忠功、井口基二、岡野知十、田山花袋、星野露葉、金子薰園、大町桂月等の援助もあり、弟男三郎の夕軒も吾不在中の編輯事務を助力したり、文友の訪問を引受けて吳れたりした。初め私は女流文學に專ら呼び掛けたのである。此方面には一向手應へがなかつたのと、同人達が各好む所へと進むので、大勢を如何ともし難く轡を控へ〳〵して居たのだが、池ノ端へ秋骨が下宿してから藤村、孤蝶の舊友も集り禿木も往來繁くなつたので、自然理想論も高潮してくるのは靑年活氣の通習である。何れも若い器だ。卽ち純文學の一點張りとなつて、誘導精神の雜誌といふ事も忘れて、一つの不平を捲起した。其結果は排他主義となつて毛嫌ひが始まる。私は又なるたけ廣く文想ある人々を迎へて淸濁併せ呑まうとしたから、多くの他方面から文士は集り出したが、同人が稍々停頓し出したので、雜誌として成立つか否やを、寧ろ實驗さた方が宜しいと思ひ、新たに「うら若草」を創刊して、

編輯を理想通りにするやう委託して第一號を發行して見た。果して賣れない。何程好い雜誌でも對手がなくては成立たない。よしや對手があつても、氣六かしい選擇をしたのでは草稿が集まらない。第二號の廣告はしても發行が容易でない。忽ち中絶して仕舞つた。それは文學界四十號の頃であつた。之で好い經驗を得た筈だが、此頃から再び元氣は取返せなかつた。折惡く私の開拓本業が結末に近付く頃で在京の日が尠く、以前のやうに同人中で小宴を催したり、ピクニックをする暇もなくなつて、疎遠になり勝ちとなり、心のみ焦慮する他なかつた。一方では餘り日本味が稀薄になつたとの非難があるので、「うら若草」發行に對して表紙へ光琳の歌仙圖を現はし、此雜誌獨特の一本棒を少し破れさせて置いた。之は日本派への申譯であつた。併し禿木の斡旋で泰西名畫の寫眞版を載せ始めたので、其頃では豪華雜誌として又評判を持直した。今では何でもないが、此やうな美術寫眞版は、一々寫眞師小川一眞の手を經なければ鮮明に出來なかつたから、讀者は珍重した程であつた。其頃になつては世間一體、種々な文學雜誌が發行されて、大いに淸新味を醞釀して來た。そして同人等も追々職業を求める必要が起つて來た。讀者の種類は、創刊期來帝大學生から中學上級生までが重で、次は地方の讀書子で、女學校始め婦人社會へは多く向かなかつた。實は私もそれで婦人目的を徐々に變化したのであつた。初めは基督教の青年文學で

あつたのが、先づ形式宗教を破つて藝術熱に解體し、自然主義に延びては往つたが、文學の根柢たる精神力は、よし神と命名せずとも、人間の氣魄は同人間の等しく認めて離れ得ぬものであつた。それ故か同人は何れも紳士的で、酒は微醺に停め、女色を談らず、金錢を言はず、他を誇らず、自らを高しとせず、何れも清談高士の一團で、清教徒文士の趣きがあつた。同人は申合せたやうに人世を重んじ、人間を尊び、自然を愛好して女人を輕視せず、ために戀愛の苦行ありしも墮せず、ために詩才一段の向上を見たるは、吾が密かに悦ぶ所であつた。

私が家庭を持ち始めてから、文筆に親しむと家庭が淋しくなるとて苦情が出る。家庭圓滿主義の宿論が、足許から崩れる次第だから、私には重要な問題になつて來た。之が文士で立つのなら工夫もあるが、たゞ社會教育の素志だから職業ではない。それも混沌時代なら兎も角だが、此時分には世間に類似の雜誌も夥しく出始めて來たし、稍々素志の一端も認められても來たし、それに五十號近くになつた頃は、同人との交際も漸く疎くなり、且それ〳〵職業に苦慮する緊急時にもなつて來たので、惜しまるゝこそ退陣の機だと思ひ、禿木、藤村の二君へ通知して廢刊する事にした。根腐りがしてダラ〳〵仕舞ひになるのは好まぬ主義だから、創刊號の一月といふ月を待つて、明治三十一年一月、終刊號五十八號で閉幕したのである。

(二)「文學界」雜誌記錄帳より

第一期

創刊號（明治二十六年一月三十日發行）

禿木ノ吉田兼好第一ノ美文、無聲ノヨリ熱ガアリテ意氣デアル。透谷ノ富嶽ノ詩神ハ天籟ヲ仰グノ元氣颯爽タリ。巖本ノ文章道ハ村夫子的デ同人間ノ物議ヲ起ス。

誌名ハ出版屆ノ際ニ、表紙意匠ハ印刷間際ニ、阿佛尼ノ一文ハ編輯後ニ、何レモ編輯人天知ノ獨想ニ據ル。

三　號　女學雜誌社ヨリ分離シテ表紙ノ社名ヲ削リ、出版發賣ノ一切ハ天知（星野愼之輔）引受ク。一葉女初稿「雪の日」掲載。文學界學校職員定マルコト次ノ如シ。

校長兼校主ハ星野天知、學監ハ禿木、教頭ハ藤村、主座講師ハ透谷、庶務係リハ弟ノ夕影（男三郎、夕影トモ云フ）。

初版壹千五百部、再版壹千部、定價七錢、旬日ニテ賣盡ス。女學雜誌社發行。

四　號　透谷ノ緣デ殘花、天知ノ緣デ花圃寄稿ス。

五　號　二號ヨリ本號デ透谷發奮、民友社ノ攻擊ニ應酬シ、內部生命ヲ說キテ本誌同人ノ思想ヲ明カニス。

肺患ノ爲俄ニ覺醒向上シタ樗牛ナドハ馬場孤蝶ノ葬蝶歌ヲ以テ文學界代表思想ト早呑込ミシテ、厭世思想誤テリト云ヒ、民友社ハ頻リト拜金宗ヲ唱ヘテ青年ノ功名心ヲ煽動シ、淺薄ナ實利主義ヲ吹立テル。此等ニ對シ吾等ノ對向方針左ノ如シ。

眞善美ノ大理想ヲ文藝の姿デ青年ヲ鼓吹シ、ヒュマニチーノ濕ヒヲ高唱シテ、物質以外ニ思想界ノ殿堂ガ嚴存シテ居ル事ヲ强張シ、實利ニ狂奔シテ沒趣味、沒理想ノ世俗ヲ痛罵スベシ。

歡迎サレル現在ノ文藝、譬ヘバ硯友社ノ如キ絢爛トシテ舊弊思想ノ蒸返シヲ得意トスルガ如キヲ排斥シテ、宗教ノ根柢ナキ文藝ハ世俗ニ追隨スルノミデ、之ヲリードシ之ヲ開發スル所以ニ非ズ、宜シク清新無名ノ戰士ヲ招集スベシ。

硯友社同人中、獨リ尾崎紅葉ト云フ學生ハ異彩ガ閃ク。

「都ノ花」誌上ニ樋口一葉トイフ女ガ見エル、逸材ノ素ガ見エル（二件禿木）、卽チ請フテ一文ヲ揭グ（二號ノ雪の日）。

三號揭載ノ花羅漢像ニ付、樂屋落チナリトテ非難ノ投書二三通アリ。アレハ右カラ順ニ禿、秋、透、天、夕ノ五人ノ心像デ、藤村ト同人六名ダト云フ事ヲ明カニシタノダト回答スルコトニシタ。

十二號　古藤ノ友人トシテ孤蝶寄稿ス。雄辯ノ志士辰猪氏ヲ兄トス。意氣颯爽革新ヲ叫ブ。反映見ユ。一葉未ダ脚蹈ミ中。殘花淸寂ノ人ヲ談ル。大ニ其人ヲ得タリ。透谷病ム。恐ラク「劇詩の前途」ハ絕筆カ。透谷筆ヲ斷ツテ論爭ノ鋒ヲ納メ、他ハ專ラ詩文ニ各自ノ欝懷ヲ暢ブ。藤村劇詩ニ腐心ス。ドラマ、其次ギニ差迫ツテ居ル。宜シク社會ニ絕叫スベシ。

此一期中ノ變名、　棲月、鷗水（秋骨）、枇杷坊、藤生、古藤庵、無聲（藤村）、脱蟬、蟬羽、電影（透谷）、鬱孤洞、風澤坊、無名氏（禿木）、天爲、暗光、破蓮（天知）。

十三號以下　第二期

表紙、横黑棒ニ誌名ヲ現ハス。透谷ヲ弔スルニ非ズ。文界ノ暗黑ヲ表スル也。

一葉新顔デ清新味ヲ増シ、殘花ハ閑雅ナ澁味ヲ加エ、藤村漸クドラマノ不成功ヲ思案シ、秋骨活躍、禿木時流ノ注目大ニ勤メ、柳村、寧齋、異彩ヲ見セ、天知亦禪味ヲ控ユ。

十六號　透谷逝。遺稿掲載ノ爲メニ賣高上ル。

六月四日、透谷法要ノ爲メ九段下、筆司玉川堂跡ニテ遺族文友相會シテ追悼ヲ營ム。逍遙、愛山等二三十名、情濃ヤカ。天知挨拶役。九月、遺族ノ企望ヲ納レテ透谷集出版、白表紙ニ金字、透谷集ト大文字デ天知書、四百部印刷、三十八錢、卷頭ノ肖像畫ハ其弟古香（畫家）筆。

柳村無音中ニ音樂ヲ吹入ル。

二十二號　十月同人初回ノ親話會ヲ催ス。記念寫眞。連名ハ禿、藤、秋、柳、夕、吾ト孤蝶ノ七名。孤蝶トハ初對面ナリ。何人カヲ知ラズ。五同人二客ナリ。酒竹入社、之ヨリ俳味縱横。

二十五號　第三期

表紙、横ノ黑棒ヲ縱棒ニ改ム。

一葉伐ニ脂ガ乘ル。「たけくらべ」掲載。

內容靜ニ落着ク。格文堂主人（露伴）次號分寄稿。

三十一號　天知他ノ業務ニテ暫時等閑ニ過ゴセシガ、再ビ編輯ニ盡力ス。

表紙ノ縱棒ヲ青磁色ニ改メ、白字拔ノ書體ヲ改ム。四方ノ諸名士ヲ歡迎待望スル所以也。

三十四號　泰西ノ名畫ヲ掲ゲ始ム（禿木ノ奔走）。第一ニダンテノ若キ司法官ノ姿（伊國古代ノジオット作壁畫）ヲ載ス。讀者好評ヲ寄ス。

三十七號　二十九年一月六日、現在ノ若キ文士連ヘ懇親會通告、上野鶯溪茱亭ヘ會スル者六十七名、本會ノ愛嬌ナリ。

眉山、嶺雲、贋阿彌等、續々寄稿。「たけ競べ」終ル。

表紙ヲ朱棒ノ白字ニシテ內容ノ氣分ヲ現ハシタガ、餘リ豪宕過ギテ俗氣ガ騷々シイヤウダ。

三十八號　「熊に喰はれた男」を掲グ。家庭ニ殉ジテ筆ヲ折ル發意ヲ誓フ（天知）。

四十號　第四期

表紙ノ棒色ヲ艶麗情味アル薄紫ニ改ム。之ハ若イ新進作家ヲ弘ク歡迎スル意ナリ。同人欄ヲ宿の藤波トシ、寄書欄ヲ三輪の霞トシ、巻頭ヘ彫塑家藤田文藏氏門下田中守成君ノ石膏額オブ、ゴクイヴァノ挿畫ヲ掲ゲタ。所ガ文部省カラ發賣ノ注意ガアッテ終ニ禁賣ニス。裸體畫ハ當時ノ風俗壞亂デアル。

純文學派ノ不平慰安ノ爲メ、創作雜誌「うら若草」發行準備。

四十一號　純文學派編輯「うら若草」第一號發行（二十九年五月）。

部數千五百部、大半片付ク。第二號準備、蛇足ノ評アリ。氣勢擧ラズ、頓挫。本號ノ方ハ新顏ノ多士濟々、同人休筆。

四十三號　表紙ハ光琳ノ歌仙繪模樣ヘ、題名薄紫ノ棒ヲヤツレサセテ現ハス。餘リ西洋カブレノ非難アル爲メリ。天知編輯ニ勤ム。

挿畫ハチヽアン名畫ビーナス上半裸身ダケ、禁賣ヲ案ジテ也。

四十五號　表紙ハ再ビ復舊、泰西趣味者慰安ノ爲メ。

挿畫ハドレスデン畫堂ノ逸品、マグダレナ悔改メノ畫。

五十號　表紙ハ例ノ一本棒ヲ鼠色ニ、獨逸語草書キデ、ゲーテノ句、下ニ樂器ハープ添畫黑刷リ、雅致高尙ヲ以テ和洋ヲ溶和結合セントス。

挿畫ハバァアン・ジョンノヴィーナス水鏡。

斯クテ純歐派同人ノ熱ヲ呼醒サントス。

五十七號　各新聞社漸ク文界ニ注意ヲ起ス。文學雜誌雨後筍ノ如ク、無理想ノ自然派、放漫ナ享樂派モ多シ。少シ藥ノ利キ過ギタル感アリ、土臺ノ捨石主義タル吾等ハ徐々ニ退却ノ時期見ユ。

挿畫ハドレスデン畫館藏ポットカ伯夫人像トカウルバッハノレオナーレノ二枚。

五十八號　終　刊　號

六十號デ終刊ノ胸算用ガ外レテ、五十七號デ原稿ガ集マラナクナツタ。
八月ト十一月ト休刊、イヨ〳〵時期到來ダ。有終ノ美ヲ思フ。
終刊告別ノ辭ヲ書ク。禿木ト藤村トダケヘ通知スル。
挿畫ハロヤネリーノ舞姫胸像ト、ハウセイノダイアン女ト、チ丶アンノ其女ラヴィニアノ三葉。
十一月號ト十月號ヲ一冊トシテ一月初ニ發賣。
明治二十六年一月ヨリ同三十年十二月マデ合計五十八册。

（三）「文學界」會計帳より

素より共同仕事の申合せだから、同人間では原稿料などを當てにして居ない。其頃は賣文といふのは嘲罵の意味ある言葉であるから、原稿料は賠り惜かつた。書肆だけは原稿料を普通の事にして居たが、それも人によりけりであつた。同人は學生で獨立自營して居ないが、精神家の理想家揃ひで、平常金錢や營利の事は斷じて口に出さない。私が會計を引受けた三號以後は、透谷、

一葉だけには原稿料を進呈して居た。殘花にも折々お禮の金を送つた。春秋の宴會費と毎月の印刷代さへ拂へば宜しいので、入金は折々あるにはあつたが、大抵は取次所が友人なので、決算の催促などはした事なく、從つて使ひ込まれて仕舞つたから損益は分らないが、ほんの道樂マネーで濟んだのである。

試みに當時の手控から拔萃して見よう。

原稿料　廿六年二月――翌十二月古藤庵旅費(九六、四〇)、一葉四回(三〇、〇〇)、殘花五回(三七、〇〇)
　秋骨七回(三五、〇〇)、鹽阿彌三回(八、〇〇)、知十三回(六、〇〇)、藤村二回(七、〇〇)、花圃一回
(四、〇〇)、透谷六七回アリ、不明、其他略

宴會費　小會四回(二〇、五四)大會(一二、四〇)

收支差引　賣上代差引損(一三五、三四七)

之だけ記載してあるが、記憶だけで後から書立てたものだから全部ではない。たゞ當時の物價が多少參考にもなろうかと思ふ。

(四) 戸川殘花の貧乏好み

會計の話から想出したのは、殘花君の貧乏好みの事である。其祖父は相馬大作の名裁斷を下した戸川播磨守で、隨分殿樣暮しをしたものだが、元來の風流心は「どうか貧乏を味はつて見たい」の心願で、到頭幕府の瓦解後、その本望通り葛籠一つにまでなつたと云ふ。其時米が無いと奧さんが嘆くと、米屋にあるではないかと眞面目に解答した程だと云ふ。其大名氣分が生涯その人品を保つて上品な人であつた。その老莊觀で、松村介石と私との三人が持に親しみが深かつた。

長い牧師生活から目白女大の創立に盡力して暫時教育に從事したが、餘り納まつた恬淡さで熱が見えず、其本領が發揮しないので、專ら德川家の仕事をして重きをなして居た。その葵文庫にも日本櫻の保存方などに盡力されたものだ。常住坐臥これ俳といふのは此人の事で、江戸趣味の寂(さび)て洒落風流のある所は岡野知十君などゝ意氣が協つて居る。

七問　先日古本屋で先生の著書、植物應用編といふのを見當てましたが、少し意外でした。明治二十六年四月、丸善書房發賣です。其出版の動機とか理由とかいふ事を少々。

答　本草趣味と植物編發行

（一）　草根木皮との因緣

吾家の先祖は漢藥の大問屋で、後に新商業として輸入砂糖の問屋に轉じたので、種々貴重な藥物、譬へば犀角、象牙、ウニコール、熊膽、人腦、人膽、人蔘、鯨タケル等々の品が遺されて居た。從つて私の幼少の時から漢藥は日常用になつて居た。特に私は病身であつたから、自然注意が漢藥に向つて其香氣も味も好癖に傾く程でした。此藥好きと病者への同情とで、仁術と思ひ込んで醫師たらんと企望したのであつたが、之は父の不許可で志を成し得なかつた。武藝の老師大島先生が漢醫漢藥の智識があつて、揉療治と此漢藥とを以て種々の病者を治療して居られ、それを私に傳授されたのである。尤も武藝皆傳の節は合氣と殺活術と、それに種々藥法の事を敎へられるのである。それは活法の延長には治病施藥の事があつて、昔は武藝者の本分になつて居たからであろう。

（二）　動植補成の天則に從ふ

斯ういふ譯で私は當時、草根木皮と冷評されて居たにも係らず其效能を信じて居た。其持論は斯うだ。此地球上、生物たる動植物は一元から發生して互に離れ難い關係を有ち、相互補助の鐵則の下に生存し得るもので、動物の數多い病種を治するだけの藥種は悉皆植物中に存在するものであるが、未だ之を發見し盡さないだけの事であろうと。

凡ゆる大自然の働きは皆その如くに出來て居る。そして各種の藥草も主藥主能の副作用が起らぬやうに他の藥素が按配してある所は、人間智識の計り知れない程である。それを猿智慧で其主成分を分析し摘出して人工藥を製すると必ず副作用が伴ふのである。苟も大自然の全能力を知る者は小賢しき人智を丸呑みに信じ得ようか、今こそ西洋崇拜熱で漢法醫術を無價値の如く思つて居るが、時代の智識は何れ天然藥の偉力を認める時が來るであろう。それまでは道樂として研究して置こうと考へ、農科在學中常に標本園と圖書室を漁り、植物學者白井光太郎氏に就いて學べるだけを學び、更に藥用外の有用種も共に漁る事にし、之を分科分けにして、一々手帳に記して

置いたのが一册になつたので、之を三編に分ちて、第一編は植物分類の檢定、第二は各科應用植物、第三は林木有害植物と利用表、附錄に詩經にある植物類の和譯を揭げ、二百頁足らずの小册子だが、藥、毒、救荒用の三種に重きを置き、其他染料、常食用、香辛用、牧草用、纖維用なども加へてあるから、此方面の著書が皆無の折とて、用ゐ樣に據つては隨分役に立たぬ事もない。廣告もしないので三四百册より賣れなかつたが、世益に對する氣分だけを晴々させた。

大正年度の世界大戰の刺戟で自給自供の輿論が起り、其ため草根木皮の硏究から其效驗が認められ、俄に藥草硏究書類が續々と出版さるゝやうになつたので、もう此小册子の義務も果した譯である。

問八 女子武藝の教育といひ、明治文學初頭の文學運動といひ、草根木皮の著書といひ、何れも社會に種子を蒔かれる先見の明には感服しました。それに付ても專門に硏究までなされた農林學に付ての實行成績を伺ひたく思ひます。

答　無資本農業の結果

農學を專攻しやうとして、却て林學の方が吾邦目下の急務だといふ事を切實に感じたのは、林學に目覺めた衝動からであります。風水害の防護、空氣と用水との淨化涵養、氣候乾濕の調節、魚介の繁殖、農園沃土の防護等から風致の保護や衞生等々、何れも人間生活の大問題に觸れて居る。此國家の大問題を知つては、吾家に關する農學などは傍ら學んでも充分である。況んや御料林を發達させて、獨逸の如き經濟狀態と爲さば、如何に嬉しからんと思つたからであつた。

斯ういふ就學の結果は如何といふに、結局官吏になるか敎師になるかの他に實施の途がない。さらば民業に對して智識だけでも誘導するか、喧傳するかの任務を果せぬ事もあるまいと思ひ、先づ千葉縣下を調査して隣縣に及ぼそうと、山持ち豪農を歷訪した所、何れも舊習墨守の弊が强くて改善の氣分なく、尤も資金缺乏の有樣で實施の餘地がなく、農林法は、地勢民狀と財政智識とから見る時は、却て從來の小農法が適して居るし、新開拓地には大農法が適用されぬ事もないが、多くの資金を要するので採用の餘地がない。山林局事業も亦、割當て資金が常に少額で進步

的の事業も出來ず、徒らに消極保護の現狀である。せめて房總二地方の山林持を遊說して營林會を興し、一の施業案の下に活躍しやうと歷訪したが、資金の停滯と成績が早く見えぬとの二點で何れも贊成しない。併し營利の側から見るとしても、徒らに資金を寢かして單に子孫を肥やす計畫ばかりではない。私の案は其處にある。

先づ林相に應じて八十年伐採、五十年伐採、二十年伐採の施業案を定め、別に薪炭用闊葉樹林を設け、十三年輪伐法で十三區劃に分つ、それも全くの原野地に植苗しては、初めの十二年だけは資本を注込む計りだが、在來の濶葉樹林を補植整理して掛かれば、間作農產物の補給も得られるので、計算の半ばは支辨し得べく、斯くて十四年目よりは年々の輪伐で、優に費用返濟と收入加算の成績を得べしといふのである。

併し地方の地主には一種の事なかれ主義が強く、用心を固めて居て熟考する餘地もなく、終に私を絕望させて仕舞つた。そして吾開墾地は一面の平地だから、防風林と薪炭林との他には林學は無用だし、耕地の方も僅に報恩會を起して良農の一團を起し、農民養成の模範を試みたに過ぎないで、無投資の漸進主義といふ事に決した。歲月の力は地力と物價とを高進させる。或意味では資力よりも歲月の方が完全の漸進力に富んで居る。そして靜かに成墾の時期を待つ事にした。

爲さうとして學んだ學識が、却つて爲さぬ方が成功だといふ事を敎へた事になつた。
斯うして十六年間監督を怠らず、夏冬の二期には滯在して整理を事として居たが、漸く農產物も名產の名を博くするやうになり、全部成墾出來て、年收も激增し、終に大地主の位置を獲得するやうになつた。
さて、斯う成功して見ると、又斯ういふ考が起つて來た。それは此成功は永年の苦心と努力とに報ひられた報酬ではあろうが、たゞ讓與された法律上の所有權だけで徒手優遊して勞者の汗を搾取するといふ事は、習慣上怪しまぬやうだが、大自然の理法に背いて居るやうだ。畢竟所有權なるものは人爲的約束で、營々たる筋肉勞苦こそ其土地と密接の關係がなければならない。勞苦の筋肉を養ふべき食餌の多分を横取するといふ事は、情に於ても忍びない如く、甚だ不自然な事である。不自然な無理は早晩破壞が伴ふ。大地主の制度は人類不平の因で、決して吾安住の位置ではない。成功して國土に報ひたる今日、更に一步進んで本然の主に歸すべきである。それに一方では吾心も亦、生涯生計の安堵から懶惰安逸に馴れて、精神に肉體に弛緩を來すであらう。之に馴れない中に農民に開放して仕舞ふ方が良いと決心した。それは明治三十年「文學界」を廢刊して間もない時であつた。

そこで開墾畑の五分通りは農民各戶へ、殘部は吾趣旨を條件として遠藤某へ讓渡したが、それは三十三年の事である。後六七年を經て、果して地主と小作人との爭議が擡頭し、不良な爭議團のために耕地も險惡化し、法律も小作人に有利となりて、地主は忽ち不利不安の境地に陷り、安住理想を破壞されつゝありと云ふ。

九問　藤村先生の若い時、初めて文學談を繙いたといふ雪ノ下の草庵だの、多くの名士が訪ふたといふ笹日山莊といふのはどんな風景ですか、明治文壇の發祥地とも云へますから、悉細承りたいものです。

答　草庵より山莊へ

（一）雪ノ下草庵の風情

舊幕時代、鎌倉の本陣は雪ノ下の大石平左衞門といふのであつた。そこは鎌倉幕府時代の和田平左衞門尉義盛の邸趾で、大石家は和田の末裔で、私方の親戚であつた。其邸隅にある義盛の隱し墓の傍に小さな草庵があつた。私の父が老婆のために建てた隱宅であつたのを、再び私の所有にしたものである。之は吾妹の療養のためでもあり、また自分の靜養のためでもあつた。庵前の瓢箪池には蛙の聲があり、屋後の桔槔（はねつるべ）には苔蒸す井筒があり、高くは松籟、遠くは波の音、爐を圍んで更け行く靜夜を茶に味はふ風趣は、出離の感に方丈の安居を想はぬ者はあるまいといふ風情、其頃の妹の勇子は十六七歳で「春」に涼子とあるのがそれで、酒客の料理に慣れて居る老婆が附いて居るから、柱の瓢に飯米を探るやうな芭蕉庵の貧しさはない。

（二）笹目山莊の朝夕

併し一層不自由でも山中へ住みたいといふ希望で、由比ケ濱の山手で笹目ケ谷（やつ）といふ谷間へ茅屋山莊を新築した。小間ながら九室もあり、武藝道場もあり、後には破蓮堂の額を揭げた離れ堂をも建てたから、優に一家族を容るに足りて、方丈の侘はなかつた。之は軈て迎妻の準備からで

もあつた。此笹目ケ谷は佐々目が谷とも書いて、佐々木一族の邸趾だとも聞いたし、劇作などには雀日ケ谷とも書いてよく引合に出されて居る。谷内は廣くはないが、覇府時代の邸趾が相應に多く、矢倉と稱する岩穴に五輪塔が數多くある。谷口に島津別邸が山側に見える計りで、折々農夫が出入りするのである。其頃、此地には未だ別莊といふ言葉もなく理解もなかつたので、往還より三四町も入込んだ此山住ひは老僧か隱士の隱棲所と計り思はれて居た。八月十四日に妹を伴ふて移住したが、其秋からは藤市といふ農僕一人を對手に讀書生活をして、隔週に本宅と開墾地と學校とへ出張して居た。併し留守中でも常に女學生二三が交る〳〵來泊して居るので、叢林に鳥聲を聞くの感がある。其頃の外域風景は黑光さんの「默移」に讓つて、私は當時の日記で其消息を漏らす事にする。

日記抄錄

九月四日　フェリス女學校に女子教育と武道に付ての講演に聘さる。
同十日　下總開墾巡視に出張、友人犬養君同行。
同十三日　女學校始業式、無敵流修業亦開始。
同二十二日　古藤庵の衷情を以て輔子に問ふ。哀痛。

同二十四日　昨夕來泊の禿木歸京、寂寥感深し。
同二十六日　昨日來、庭園植樹摘草。
同二十七日　出校教授、文武常の如し。
同二十八日　無敵流能勢師來校、練習熱して試合の氣合を生ず。
十　月　七　日　藤井母子此日より滯庵。
同　十　日　神戸の恒子より復信、五月後の心痛稍々和ぐ。
同　十　三　日　重き親戚二軒と父とを訪ひ、家督譲りを發表す。
同二十七日　歸庵、弟と其友淸水と來泊。我不眠に明す。
同二十九日　圓覺寺より古藤來話、吳組子刀自短册を求む。
同　三　十　日　夢圓ならず、悲喜交々。

閑寂なりし此茅門も、後には俊髦偉材の叩く者漸く多く、啻に遺愛の鐘に枕を敧てる風情ばかりでもなくなつた。試みに、世間知名の人々だけでも想ひ出して見やう。文士同人は云はずもがな、松岡映丘、和田英作、柳田國男、松岡靜雄、荒木古童、川瀨順輔などの俊髦から、津田仙、松村介石、成瀨仁藏、海老名彈正、釋宗演、西田天香、小此木信六郎などの人々、さては九鬼隆

一、海江田信義、高橋是清、入江爲守、富井成章、都筑馨六、島田三郎、三井三郎助などの名流も漸く此門を潜つたものだ。此門漸く多事となりて、後圃から峽間に響かせた透谷遺愛の山羊の聲も、仙氣漸く淡れて徒らに庵主の髭のみ白くなり、花間友を覓めて鶯こと葉を交へる趣きをなしたのである。此等の人々に付ては追々話す事にする。

(三) 藤井米八郎の熱急

農家より出でゝ商家に入り、丁稚修行で生長したが、其正義を慕ふ本性は下級商界の氣風に堪えず、進んで基督教徒となりて吾等と相知り、傳道事業で若き頃の山室軍平君とも相知り、其熱烈の本性は相通ずる所があつた。號を畜鋤と稱して農業を志望して居る所から、養蠶家の相馬愛藏君を信州に知り、吾等が二十一年の秋、日本橋青年倶樂部を組織して、吳服橋の柳屋で講演會を催した時なぞは、平田禿木と此藤井とが大いに働いたのである。教會を脫會した無教會無牧師の一團を結成したのも、青年會の教授仕事や傳道仕事をしたのも、平田以外には此人の助力であつた。後、櫻井勉氏の紹介で臺灣新竹の撫墾署の一員となり、宿望を充たして居たが、「誠は人

間永久の生命也、誠は神佛の姿也」として基督教に別離し、法悦に浸りて旅行と俳句に過ごして居たが、眼疾に惱まされて、駑馬も老ゆれば盲龜に劣ると、特異の奇語を寄せて來た。二宮尊德翁を敬慕して、稀に見るの精神家であつた。

(四) 相馬良子さんの眸

震地傳道隊の一員として、右の藤井君がフェリス女學校で熱狂的演說を催した事がある。之が緣となつて、其校生の一人を吾山莊へ伴つて來た。黑眼勝ちで思ひ詰めた眸、文學と宗教が好みで、少し油でもかけたら何でも遣り兼ねない、熱烈な危險性が見えるから、前途を誤らしてはならぬと早くも警戒心が起つた。之が星良子といふ娘の印象である。逗留する中に小說を書いて私に見せたが、どうも其欝勃の鋭氣が何れかに脫線しそうで氣遣つて居た。軈て其宿望通り明治女學校へ紹介して入學する事になり、折々來泊して吾新家庭へも親しみを寄せて居た。其後、突然信州の相馬家へ納まつと傳聞した時は、思はず眼を瞠つた。之は遠からず退屈病の火の玉が轆り出すぞと叫ばざるを得なかつた。

果して突然、而も再度の突然だ。本郷赤門前のパン屋開店といふ次第。その突飛さはどうだ。初對面に印象づけられた眸、それは到底、何か遣らなければ成佛出來そうもない光、それだ。以來私は晤光と云つて居た。由來晤光とは吾居室の名で、其方丈に晤光廬の扁額がある。堀井來助胤吉といふ名刀工の筆蹟で、島崎藤村君の紹介で揮毫されたものだ。吾老莊思想の韜晦氣分から出た句であつた。其晤光とは趣きを異にした眼の威光を評したのである。

あの徹底的な氣象に共鳴して、學徒上りの小旦那が一躍半勞働者になつたのも中々見上げたものだ。學生商賣ではなかろうかと案じて居た婆心は忽ち恐縮させられた。先づ本郷通りで間口は可成りあるが、軒廂の低い見窄らしい平家見世、一方に主人が粉だらけになつて働いて居たが、それは一面識のある愛藏君であつた。再度立寄つた時は、勞苦に奮闘して居る黑光を見て、胸が迫るので無言で歸宅した。後十年程を經て新宿の中村屋を訪ひ、二階で病床に坐した夫人に逢つた。此時は見世も立派に雇人や店員も數多く、心にも餘裕豊かで藝術方面へ著しく擴充され、室内には洋畫が懸け廻されて居た。私は此等翫賞の暇もなく、たゞ一意その病體に胸を衝かれた。之は強ち事業の心勞からとのみは思へない。それは家庭の悲劇から來た、苦闘最中の姿だと思つた。それは夫に、子に、更にもう一人に。

其行蹟を見るに、何れも飛躍的で突飛だ。素人パン屋が一流の菓子屋を壓倒して、共存共榮、勞資融合の模範を實示する事や、日英檢索の巨腕を向ふに廻して印度志士を庇護せし事や、勿論夫君の細密なる思慮工作が之を成就せしめたとは云へ、一に此女傑の信念、否、合掌であつた。

（五）羽仁もと子さんの眼

星良子の事を思ふと同時に又、松岡もと子の名を思ひ出す。今は羽仁氏だが、松岡時代の事を云ふのである。之も吾明治女學校の逸材だが、同時に腕白の名が通つて居た。そして懷ろ手のまゝ空を眺めて居るその立倚り姿が今も目に見えるやうで、何でも學校敎課などには不平で、大望の野火が燃えて居るやうに視えた。級中の姐御株で下級生に人望があつた。それが家庭訪問記者から單獨で「婦人の友」を發行した頃の努力は、私も屢々接近して同情を以て眺めて居た。羽仁姓になつて雜誌の大飛躍を行つたので、私は每號その表紙文字を書いて居た程だ。女史の文才を稱へるよりも、其ジャーナリズムの天才を擧げたい。今はスマートな敎育家として雄飛して居るけれども、稍々惜しい感がある。よしや老女史の肉眼は世間見る可らずと掩蔽さるゝとも、更に

其心眼の尖鋭さを那邊に向けんとはする。

十問　種々の體驗を得られたといふ北國漫遊に付て。

答　北國漫遊の動機

（一）晴耕雨讀

親友であつた巖本君の前途を憂ひて手を切る時機を窺つて居たが、漸く機が熟して來たので、先づ鎌倉山莊を設けて其構內へ武藝道場を建てた。之は柳生流七代の大島恩師から繼承した八代目の義務を盡した譯で、其處へ繼承の武具一切を供へ着けた。此道場は銀行員や教師、校生を始め町民を八年間教養し、二百八十餘名の門人を得たが、有段者は三十餘名であつた。一時は晝夜賑はつて、他流試合者も來て近郷にも聽こえたが、職人遊民も入込んで來たので、警察署からの

嘆願もあり、書法門下も殖えて來たので繁忙に妨げられ、特志者の他は斷る事にした。それが大正十二年の震災で破潰したのが終りとなつて仕舞つた。尤も三人の男子はあるが、何れも齢少なく、且その器を得ず、門人中にも免許者が見當らず、終に一子相傳の繼承者なく、この一流あたら斷絶させるかと思へば痛惜の極みだが、斯道研究癖の變物が出ぬ限り、大きな時勢の波には勝ち難く、誠に餘儀なき事であつた。

一方祖先の家業は既に弟を相續者として隱居屆も濟ませ、學校の方は退職屆を了し、今は單に開墾事業も成墾期を待つばかりで、下總と鎌倉に半月替りに在住し、多くは讀書生活の宿望に浸つた。正に晴耕雨讀以上の身分である。斯うなると、忽ち人間本性の發露で異樣な寂寞を感じ始め、精神も財嚢も安定し得た折だから、迎妻旅行にと踏出した。それは四月の末の事。

（二）　俊傑押川方義君

先づ仙臺へと立寄る。東北學院の押川師、之は高弟川合信水君の紹介である。先づ押川邸の爐邊にあつて夫人と應接を濟ませ、待つこと半時、軈て劍術稽古を濟ませて出て來たのは先生だ。

鷹揚に吾身邊を大股に歩みながら「やア」と聲を掛けて坐した。親しげでもあり、又門弟扱ひでもある。學校は改革したさうだが、どうですかとの初一聲だ。私は憮然として「いや、やる人が駄目だから。」と答へて他を言はない。話が中絶したから、私は默然として辭去した。其夜川合君が吾所感を聽かれるので、「あれは舞臺の役者だ。併し團十郎だ。併しと云つたのは尊敬だが、劍術後、額側に澤山の青筋が見えて居たが、あれは駄目だ。劍ばかりではない。肚も仕事もさうだと先生へ傳言を賴む。」と述べて、其翌朝、匇々汽車に乘込んだ所、大雨中の窓前に傘をさして佇立する二紳士がある。押川先生と島貫兵太夫君であつた。慇懃謙虚な其態度には私を肅然とさせた。出立の事を言ひも問はれもしないのにと思つた。之は多くの門下接見に慣れた不遜の態度からの失敗で、流石の傑物も一本參つた按配であつた。此無聲の一喝は利いたやうで、此接見は勝つて負けに終つたやうだつたが、之から兩者の意氣が通ひ始めたのである。後年、小此木信六郎君が其自邸で學校舊巢會を催した時、巖本君が私へ「押川先生をまだ知りますまい、紹介しませう。」といふのを押へて、「いや、君よりも星野君を能く知つとる」と大聲で窘めた爲め、一座が白けた事がある。此時は既に巖本君の本性を知悉された故であらうし、又私に親しまれた故でもあつたらう。後年芝山内の寓居へ私を招いで打解け話をされ、私に是非その經歷實話だけでも

好いから演說して廻るやうにと勸告された事があつた。之は何を聞かれた爲めだか知らぬが、此會見が過ぎて後、本鄕近くの途上で立話をした事があつた。それは議員となつて上京中の事、實に親しげで別れるのに戀々の想ひであつたが、之が最後の面會であつた。松村介石君などは、押川は吾黨の大將器であると常に賞揚して居たものだ。

〔三〕 聖徒川合信水君

甲州には信玄魂があるといふ通り、山峽育ちの眞面目と泰然不動の基督敎信念に武道を織込んだ靑年とは川合氏の事で、一方には柔弱に見える程の優しさがあつた。骨細で病身で、低聲で怩怩たる樣は一見女子のやうにも見えるが、其小さな眼光は人を射るの慨があつた。當時の基督敎には武士的と歐米流との二派があつて、押川、川合二君は武士的なので私と相寄つて居たのだ。川合君にも戀の煩悶はあつたが、武士的に壓縮して仕舞つた。文學には緣がなかつたが、その文章はいつも變らぬ宗敎觀念で、其不變不動の熱力には屢々愕かされた。押川先生の好き門下生となり、其知遇を得て綾部製絲工場の敎育部に投じ、其不拔の信仰と崇高なる人格とで神の如くに

工人間に君臨し、世界勞働聯盟會の日本代表に推されるに至つた。而もその諾否を押川先生に圖り、之を辭任した賢明さには、一段の人格を重からしめた事を喜ぶのである。實に十年一日の如き信仰に生きる、不退轉の聖徒である。

(四) 開眼者荻野吟子

若い時の顏は知らないが、色淺黑く、多くの小皺に衰弱は爭へない迄も、潜む熱血は未だに其壯時を物語つて居た。よく校醫などになつて來たなと思つて居ると、一夕私と話したいとの招請だ。そこは明治女學校構内の別館で、意氣相觸れたものであつた。黃八丈に黑縮緬の被布だが、談論漸く熱すると立膝に片懷ろ、右手の火箸は灰文字を段々大きく段々速かに、斜唇半眼の應答ぶりは白眼で世上を睥睨するの慨がある。「私は此處の溫床を去つて北海の冷床へ往きます。此溫床をですよ。」と言つて微笑する邊りは、迚も一筋繩では縛れぬ人だ。「後志國利別の原野に理想村を起し、其處で傳道團を造る積り故、經驗ある目で視て下さい。」といふ。よし視ませう、どうせ小樽まで行く序でだ。併し今夕の御用は其旅費調達の件でせうと笑へば、流石の女傑も處

女の如く顔を火照らせた。「宜しい、お若い血を見ました償ひに。」

其理想村の名はインマヌエルといふのだ。少し厭味に思つたが、問題は資本と信仰の團結方法とにあるのだがと、先づ踏査を濟ませ、吟子に答へた。「荻野時代は女醫の開眼者で、志方時代は此村の傳道事業の開眼者で、如何にも本分に適して居ますが、都會生活を見て居る此空想青年の一群では、最初は食物、次は女、次は美術音樂と、次ぎ次ぎに缺乏の苦痛から智識信仰の熱も鎭まつて來る。そこで感情衝突が議論となり苦情となり、黨を分ち派を生じ、一人去り二人去り、殘るは老人ばかりとなつて、勞力の缺乏を來して、資金に訴へるやうになろう。斯う考へて準備をする要がある。」と、之が私の置土產であつた。

女傑吟子は開眼の人だ。女醫の玄關は寂寥であり、開拓は果して紛糾のため放擲したが、女醫は簇生し、開拓は農夫を賑はした。成敗など眼中にはない。たゞ開眼に任俠の熱意が燃ゆるの傑物だ。

斯ういふ女傑の目に留つた好漢だけに、志方といふ老書生も餘程變つて居る。新農場視察の東道役として、函館から後志國瀨棚までの半日交際だけだが、萬事無頓着の豪放磊落で押して往く所、寡默で不斷の喜色を湛へて居るあたり、三宅雪嶺君と西田天香さんといふ面影がある。草で

も畑でも頓着なく踏込んで、農家で貝の身を求め、畑の馬鈴薯を掘出して、驛傳舍で料理する按配など上出來であつた。後日、新農場に河川氾濫の天災があつて、各戸狂奔の面前で水中へ騎馬を乘入れ乘廻して、愉快々々と走り廻つたといふ事から紛議が起つたと傳聞したが、如何にもその眞骨頭を說明したものと思つた。

（五） 獨眼龍尾崎鱗太郎男

志方之善の案內で函館から大沼小沼、駒ケ岳を右に眺めて森驛から山越內（こしない）の峠下までの乘合馬車、其客中に紳士一人が居た。之が後の男爵尾崎君で、當時日本銀行函館支店長であつた。不圖した昔話から、秀才斬に猪子吉人の名が出たので、それは吾競爭對手で、漸く打勝つて親友となり、其亡友記念のため長男に吉人と命名した程だと云つたら、同君も奇異の感に打たれ、此荒寥たる原野にて知友を得たのは全く猪子の紹介だと、思はず握手したものだ。歸函後、同君を訪ふて若き夫人にも遇ひ、お國自慢の燻し鰹の馳走にもなつた。後年同君は本店詰となつたが、行金紛失の失態を剔抉して中山總裁に引責辭職させたといふ硬骨ぶりを見せた。後、病氣引退して鎌

倉に來住したから親しく交際して居たが、襲爵後、幾何もなく物故した。其若い折の漁色癖が累を爲して、五十歳以前に既に衰弱して瘦骨憔々とはして居たが、颯爽たる威風を備へた獨眼龍であつた。

（六）北旅の武者修行

新農場の視察を濟ました私は、馬を驅つて長萬部へ出た。其後は小樽までは徒步で愈々武者修行だ。一望坦々たる廣野を貫く八間道路は、一直線に縱走して左右は悉く六七尺の篠笹が生ひ茂る。熊や出づると思ふ間もなく、篠笹搔分けて一人の髭男、續いて一人又一人、早足に突進して吾背後に出でんとする一人の擧動を見た時、既に追剝なる事を察し、猛然と逆襲態度に出た一事は、既に武藝談中に述べてあるから省く事とし、黑松內の休憩所で空知の脫獄囚なる事を聽き、更に出沒する熊の評判をも聽いて、歌棄から磯谷の海岸へと出た。往く行く鯡の大漁で働く女群の間を縫ふて漸く往き當つた所は雷電峠だ。其處の商人宿で小樽への便船を待つ事になり、女房の深切と捕りたて鯡の馳走で二泊を過ごしたが、船來らずと評決されて仕舞つた。よし道中の三

大嶮、而も二ツ峠といふ雷電嶺、今雪解け季節の最も熊の横行する悪時期といふとも、勇往邁進の他に途なしといふなら、一意此膽あるのみと決した。熊に對する覺悟は、たゞ吾膽力の程度に任す他にはなく、其時は自信があつたので、苦もなく冒險の歩も輕々と登山し始めたのだ。此時の話は矢張り武藝談中に述べてあるから省く。今から思へば熊が出ぬのが僥倖であつた。併し之も齡のせいか。

何しろ勃々たる勇氣は凄まじいもので、此山上から山麓の岩内まで雪中を輾轉して一氣に下降し、同伴者を辟易させた位であつた。そして翌日は小樽稲穗町の松井精一翁と本道の大勢に就いて談話に花を咲かせて居た。擧動、談話に熱あり調子あり、之が彼女の父とは思へぬ程だ。此行の目的とした嫁迎への事は終に一言も觸れる事なく、歸路函館に立寄つて、其長子喜代三より嫁を貰ひ受けて歸路に就いた。

歸途盛岡に東顯寺を訪ふた。曹洞宗の古刹で、其住職松井智定師は最も嫁を愛する伯父で、本山の管長代理に選ばれた程の人望家であつた。

問十一　文學界雜誌の經歷始末は悉く明瞭になりましたから、今まで世間に流布して居る明治文學の誤謬を訂正するに好き史料となりました。此上は更に此雜誌に伴ふ貴下の思惑に付ても承りたし。

答　「文學界」廢刊餘談

(一)　廢刊の實情

前述通り、此雜誌は日本基督敎思想から生れ出た文學で、特に私は日本婦人を開發誘導する目的であつた。第一に、其看點を高くするのと廣くするのが急務なる事、人類の至寶とする婦人獨得の情操を、古人の勝れたる人物に據つて開發せしむる事、才幹智能は泰西婦人に學ぶべきも、其餘は日本婦人を學べと勸誘すべき事、此等の希望を文學敎育にて有効ならしめんとの存意であつた。それが集まる文士と讀者の意向とに壓されて、斷然この方針を轉じて範圍を擴める事にしたが、常に西洋文學に偏流しないやうにと頑張つて居た。私は性來、國粹主義で同時に改良急進

主義で、歐米文化は學ぶべしだが、丸呑みは排斥する。之が英文學生等に消化されない點であつたろう。

さて、此雜誌が號を重ね年が替るに從つて、小説の傾向が漸く向上して來るのを見て、今まで氣の向かなかつた小説に段々意が動き出し、試み半分に短篇を掲載して作意の動向に腐心し出した。尤も此誌面以外にも二三篇發表した事もあつたが、何れも意に滿たない。愈々二十九年の國民之友雜誌春期附錄へ「呪ひの木」を出したが、折惡しく一葉女の沸き立つ人氣に壓せられて、男性作家は何れも全滅の有樣であつた。併し此「呪ひの木」は過分の激賞と、過分の惡評とが讀賣新聞へ長々と掲載され、下司漫罵の評ある綠雨が露伴の剽竊だなどゝ毒づいた。兎も角評判されるのは有望だから、大いに脂が乘り出して來た。所が爰に意外なディレンマに引懸つた。

私は元來、家庭至上主義で、人世の根元を爰に割出して唱道する。家庭内は主婦の王國で、主人は大事を掌握して細事には補佐役をする。主人若し文筆を事とすれば、部屋籠りや夜更しは固より、來客忌避や屆託顏は免かれない。家庭憂欝から敎育の破壞するは必定だ。それに吾新婦は剛健にして單純な東北武士の血を受けて、敎訓外の文學や小説名義の書籍などは大摑みに忌避するといふ文學嫌ひだから堪らない。小説轉向の機は既に遲しだ。新家庭の圓滿を破るやうでは吾

至上主義の立場がない。此ディレンマの苦惱は續いた。終に「熊に喰はれた男」の一文を誌上に掲げて吾決心を仄かした。暫らく躊躇して獨り名殘りを惜しんで居たが、終に突然の廢刊を決意して文學と縁を斷つたのであつた。前後滿五ケ年の愛兒を一朝にして默々と放棄したのだから、正に愛兒を里子に出した淋しさがあつた。

今にして回顧する。

文士は總じて思想緻密で感情が尖銳だから、武藝道場の荒い交際に慣らされた當時の吾身などは、如何にも禿木の注意したやうな直情徑行で、特に快濶粗笨だから、應對の手答へが頗る荒つぽくて露骨だつたろう。定めて多く感情を損じさせた事であつたろう。それにも拘らず、廢刊後に各々境遇は變つても、同君だけは、折々だがよく面會したものだ。藤村も禿木もよく來訪したが、殘花と洒竹とは更めて親しくなつた。

（一） 談林的大野洒竹

殘花道人の事は後段に讓り、洒竹の事を少し話そう。

豪快な面白い男で俳諧などは思ひも寄らぬ所だが、兎角句は磊落なるが佳しと云ふ蕪村宗で、久しく破れ障子を繕はぬのが可笑とて通行人の笑ひ物となつたのを「風流は障子の紙の破れより」と貼出せしに皆沈默したといふ。それは醫學生酒竹と云ふ男なりと聞いた。之が入社の紹介であつた。此人あつて初めて吾社中に俳味を加へたのである。雜誌廢刊後、鎌倉へ靜養に來て再び親しくなつたが、其時の話。

「別れて十ヶ年、其間好く働いて三萬圓稼いだ。生活と珍本拾集に二萬、餘は酒と女だ。それで首が廻らぬどころか、右へ右へと廻る病氣で死に損ねた。之は好く遊んだお土産だが、其遊び方も堂々たるものだ。凡そ乘馬で待合通ひをする者は乃公獨りだろうと思つたら、まだ一人居て大いに張合つたものだ。其男は後藤新平だつた。」斯ういふ酒竹は外科病院長の大野豐太郎と云ふのだ。其言行は蕪村よりも談林風である。

つばくらや三十三間堂の雨　　酒竹

之は其愛誦の句。だ其細君は岸田吟香の一女で、同志社へ其姉と通學する姿は、一時人目を欹てさせたので有名であつた。

壯年時期

下

問者　訪客數名

答者　星野天知

一問　宿願とされた武藝の奥儀も禪堂の苦行で啓發され、同時に心機一轉されて一校の拘束を避け、社會文化向上の急務たる文學に盡瘁されたが、惜しや家庭至上主義の自論とディレンマを生じ、終に文界を辭別されて新家庭の人となられたといふ。其蛇行的推移には成敗利害を超越して自己なく排他なく、スラ〳〵と片付いて往く所は、日頃御自説の無理するな主義通りなのに感服します。それに付きまして、新家庭に出入された變り種子に付て伺ひたし。

答　鎌倉前期の交友

（一）津田仙翁のモノマニア

吾少年時代既に媒助繩で全國的に有名な津田翁を妻の紹介で訪ねたのが初めだ。嘗ては厚生館の玉蜀黍演説で感激させられ、今亦、卒直で深切で飾り氣のない自然さに動かされた。自ら木を割り風呂を焚いて歡待される。追々親しく往復して居る中に一つの不審が起つた。宗教家庭で幸福であるべき其奥さんが、何時も不愉快な顔付をして居る事である。此疑問から端なく翁の亂雜

な惡癖を耳にして、有らずもがなと思ふやうになつた。

此奧さんは德川家達公兄弟のお腹で、お竹さんと云ふ權威者の妹だが、此姉妹は餘りに違つて見える人だ。それも翁に問へば分る事であろう。名にし負ふ農業雜誌と學農社を主宰して、早くも明治初年に雜誌と學社といふものを示し、更に農業にも學術ありといふ事を示した丈でも功績は多大だ。又其社から㝡本を出して女學社會に雜誌を發行した功績も、其社に負ふ所は大きい。

翁は熱烈な感激性に富む、顧慮や躊躇はない。直上徑行、氣も早いが觀察も速い。獨善的だが大膽で眼が高い。そして一方には野武士的で道德に拘泥しない。私が十年の親交を破つて此人と斷つたのも、其暴狀を聽いて、其惡癖を懲らさんためであつた。

翁が嘗て獨逸漫遊の際、墺國の皇后陛下奉迎の折、突然、日本臣民津田仙なりと名告つて、咄嗟に破格の握手を賜はるやうにさしたと翁は笑つて居た。

日露戰で東鄕提督凱旋の折、遇々月桂樹が學農社で發芽したといふので、翁は大悅びで之を携へ、深夜驛頭に佇立して之を迎へ、「吾邦最初に發芽した吉兆の月桂樹、之を捧げて凱旋の偉功を祝す。」と述べて、泥塗れの土鉢で將軍を煙に捲いた事がある。交際中、斯ういふ種々な逸話を見せた人である。此聖善者にして突然惡德に狂する事、たゞ翁のモノマニア病として惜しむ所であ

つた。それは女と金との事である。

（二）　東國屋のお勝さん

仙翁の裏面に付て詳しい人に、江戸ッ子のお勝さんが居る。翁の家で知合になつたのだが、昔日本橋魚川岸に東國屋といふ生き鳥の問屋があつた事は有名だ。其全盛時代にお屋敷下りの美しい娘が居た。それが此お勝さんである。翁は一時其店の外交員として築地の洋館に出入して居たので、西洋野菜の高價なるを知り、之が栽培を知るべく洋行を志したのだといふ。翁の發祥地である此東國屋の主人といふのが面白い。食事時には誰にでも食事隨意で、廣い板間へ薄緣り莫蓙一枚、長い飯臺が幾線も列べてある。士農工商上下の區別を撤して、大名の使者でも小僧でも男でも女でも、一列同樣の食事をさせる。それも茶漬けに香の物だけだ。併し其飯米は鮨米の一粒撰り、香の物は最上の新漬け、番茶は常に熬れ立てといふ所に入念深切を表はして居る。斯ういふ家風に育つた娘で、如何にもきび〳〵した江戸肌だ。此人の娘で明治女學校へ通つて居たのが海產問屋加嶋屋の鈴木千吉といふ人へ嫁いだのが、破緣となるやら、息子の大怪我、主人の死亡

などで、一意法華經の信仰に生きるやうになつたのだといふ。今も私の記憶に活きて居るやうな人であつた。それに此千吉といふ人は吾親戚の增田家と懇親な人で、私と同年同氣の相引く江戸肌の人である。

(三) 横瀨文彥君の任俠

別莊地となり始めた鎌倉長谷町に快々亭といふ洋食店が出來た。其背後に池を擁した風雅な居室が出來て、其處に初めて文彥君を見た。大藏省租稅課の官吏をして居た時、小野といふ雇ひ書記が居た。綺麗な細字を書くのを見て、其器用さを筆生にして置くのは惜しい、一層勉强して書道の先生になるが好いと激勵した事がある。此書記は小野鵞堂であると話された。それから私との談話中、寶物館の必要を共鳴して直ぐ同志を集める事に奔走されて、師範學校長内堀君と三人で柴崎宮司を說動しに往つたが、其宮司の利己的堅持のため解散した事がある。斯ういふやうに好い義俠心のあつた人だ。資性磊落で、文學美術に通じ、書法に嗜好が深い。常には定家流を好んで居たが、雲龍といふ道風の筆法を臨書して、額としたものを見たが、良い筆法であつた。私

は松方侯の口添へで、此人から大師十二筆法だけを指導して貰つた。それが私の斯道研究の第一歩であつた。

其任俠で快濶な性格も家計には無頓着で、事業に焦慮して破綻を來たしたのは惜しまれる事であつた。英雄の末路斯くの如しと、貧と癌とにも屈せなかつたと聞く。此快男兒は五十男で不遇を笑ひ流したのである。吾著速成書法講義の拔文一篇は其文才の一片を窺ふに足りる。鎌倉別莊地開發者の重要な一人である。

(四) 櫻田節彌孃の明朗

校生時代は著しくおつとりとした、人の好い評判者であつた節彌さんが、洋行中の苦勞で鍛へたスマートさには感服させられたものだ。そこで一肌脫ごうと開いた米國料理講習會、其試食會で吾笹目宅へ集まつた人々の中、津田仙、九鬼隆一、高橋是淸などの顏觸れもあつて、寄宿舍料理では此等の人々には少し不似合だと思つた。軈て九鬼子は言つた。「オガンツ學校の出ですか、吾等領事館連は都會籠城生活だから、あんな田舍は知りません。まして料理などはね。」と隨分の

惡口にも聞こへたが、元來光風霽月底の虚性を持つ此孃は、少しも怯む所はなかつた。其頃は松井性であつたが、銀行家櫻田助作氏夫人となつて、交際社會に知られ、其特色を發揮したものである。その自らを悅びて他を毀らぬ所は、十年一日の如しとも云へる。

（五）加藤藤四郎の羅漢像

吾壯年時、淺草公園に評判の五百羅漢が陳列された。去る名陶工一世一代の作品だが、業ならずして歿し、繼承に自信ある者なくて久しく遺憾として居た所、圖らず之を完成した妙手が出て却て優秀な觀を示すものだといふ評判であつた。其優秀の陶工といふのが加藤春慶といつて、藤四郎の名を繼ぐ此老工である。素樸訥辯な好々爺で、雪嶺君と同型の超人型である。私は一見して知人となつて、其亂雜な店頭から靑磁の羅漢を手に入れた。三井家主人愛藏の竹根彫り羅漢に據つた作品で、二體中の一だといふ。手の寶珠に龍が慕ひ寄る羅漢相は成程と頷かれる。工藝展覽會で審查員眞葛香山作靑磁花瓶と列んで、翁の天龍寺浮牡丹の靑磁花瓶があつた。香山は一等賞を翁の方へ讓つて名匠の器を示した。此ために益々高價になつて今更買手が無いからと本人が

云ふので、其逸品を引受けた事がある。

此翁は名人藤四郎の後裔で名古屋に居たが、青磁複製のために吾等が鎌倉へ喚寄せたものである。之は別莊黎明期に早く入込んだ私は、古跡探しに日毎歩き廻つて居る中に、路傍の溝川中の砂礫に多くの陶片が異色を放つて見出された。其中に古渡りの砧青瓷が多分に在る。之は面白いと思つて拾ひ集め、後日横瀨君に相談して、九鬼子とも圖り、総に還元して青磁器を製作させやうと陶工探しとなり、其矢が此翁に當つた譯である。成程、實朝公時代には僧侶の往來が繁くて宋朝の青磁器は諸大名の珍藏品で隨分夥しい渡來であつたろう。それが屢々戰塵に塗れて破壞散亂し、其邸趾が耕地となり、年々農夫の鍬先きから溝渠へ投捨られて居たものであろう。古社寺の瓦片は探跡家の目を脫がれないが、之は勿怪の倖で、此複製手腕の名匠と相待つて、爰に鎌倉青磁を出す事が出來たのである。

(六) 藤宮規平の東岐巾

吾宗教眼は基督教に據つて開かれたので、充分に其秀れた點は體得して居るが、國民性に融合

力を持つ佛教にも離れ難い所があつて、耶佛二教の融合からの一致を得たいと思つた。それは自己宗教として、又同人宗教としたい企望を持つて居た。其頃小田原の寺に寓居して居る北村透谷の紹介で、藤宮規平といふ四十男が山莊を訪ふた。東峻頭巾に墨染の法衣を纏ひ、巨眼鬚髯も儼めしい。一見して想界の相を見出さぬ。先づ耶佛併合論の草稿を前にして、互に耶佛の一致點で話し合つたが、孰れも世界大勢と國狀とに應じ、現生活に卽した宗教でなくてはならぬが、同時に科學をリードする人界外の强力を待望する。耶佛を敵と見ず、双方を容れるべき吾宗教を完成させたいといふ事で終つた。

藤宮は巖本著「吾黨の女子教育」を讀んで感ずる所あり、紹介を乞ふとの事であつたから、其佛徒姿では悅ぶまいがと答へたら、藤宮は快笑して、「そんな凡器か、何しろ試みやう。」と言つたが、果して來校して紹介を乞ふので、巖本君に面會させた。此日は更に雲水二人の僧形を增して來た程の惡戲者だ。何するかと見て居ると、無言で牛眼を瞎と見開いて、脚下からヂリ〳〵と見上げて居たが、「貴著に感服して參つた者、天晴れ御見識だが、果して御實践なされますか。」と論議調子に迫つて往くので、巖本君は面倒と思つたか、慌しく辭去して仕舞つたのは惜しかつた。此東峻巾は中々の脫線家らしかつたが、後に上野公園前の行倒れ雲水と新聞にあつたのは、

それらしかつた。

（七）　海江田信義翁の大西郷論

吾山莊の庭に、黃八丈羽織に杖を持つた長身白髯の老翁が迂路ついて居た。之は「隣莊の海江田が岩井戶拜見のためだ。」と言はれる。「あれが道場で御座るか、折々好い音が冴えますが。」とも言はれると、それで忽ち武藝談が沸立つて、棨山の四ツ堂で主客の話が漸く高まる。私は立上つた。型を覺え型に使はれ、型を使ひ型を脫し、漸く得たる空中坐の體勢を示した。これで翁は忽ち襟懷を披き始めて懷舊談に熱が漲り出した。

「往年京都の宿で劍客から試合を申込まれた事がある。人を斬る事だけなら對手にならうが劍術は知らぬと謝絕した所、それで宜しいといふので立合つた。庭前で互に一禮するなり、一聲掛けて共首と腕とを一擊して仕舞つたが、何か異議を申して居つた。それから御前試合、あれはお好みで渡邊昇との立合じや、當方は手薙刀の下段で臍下を突こうの考へ、此時は慣れない面がねが邪魔で困つた。先方は背が高い上に破格に長い竹刀を上段でヂリ〱と出てくる。彼は中々狡猾

な奴じや、右に柄頭を握つて體を斜に面頭へ擊込んで來た。同時に其腹へ突込んだ。併し弱い打ちで掠り手に過ぎぬが、先手だつたので當方の負けとなつた。小松崎琴の腰かね、其通り如何にも成つて居らん。試合つた事があるが、筋が立つて居らぬやうだ。

吾兄は一眼流を修行致した。鄕里に山居の僧で武藝の出來物が居つた。兄は其寺に宿泊して武藝修行を願つたが、唯修禪を勸める計りで取合はない。此僧が每朝庭前を掃き清めては箒を取片付けに往く。それが軒下を折れ曲る時必ず急激に振返るを常とする。竊かに注意して見ると、其見返る眼光の銳さは人を射るやうだ。之だなと思つて問詰めたら和尙は笑つて、到堂見付かつたか、あれが每日の修行で、先方にある樫の木孔へ眼光を投付けるのだ。投げた視力が一度で其孔へ射込む事を練習する。一顧一到、ぴたりと其孔へ射込めるやうになれば人を射竦める事が出來ると云つた。兄は此修行で一眼流を會得したのじや、それに付けてもお若いのに奇特な御修行者じや、吾子供等は成つて居らん。唯海軍に居るのが少し好いやうで御座るが。」と嗟嘆さるゝも淋しげであつた。

一週間後に、大西鄕に付ての感想を聽くべく其門を叩いた。

「西鄕隆盛、あれは馬鹿で御座る。」と先づ概評を投げて置いて、さて「西鄕、大久保、吉井(友實)

と吾との四人で、每度論語などを輪講し合つたもので、每週宿題を定めて論辯するのだが、大久保は每々滔々と辯ずるが、吉井が一番勝れて居つた。その吉井の說を聽くと、西鄕は必ず贊成するし、去りとて大久保の說を聽くと又贊成するといふ風で、西鄕には何も說がない。併し其吉井や大久保が如何しても解決し難い問題に往き當る事がある。其時西鄕は忽ち易々として斷案を下すのだ。之には吉井の明智も大久保の英才も及ばない。それは何時も西鄕は人間を標準としないで、天を標準にして判斷する。それだから時として敵も味方も無くなる事がある。天に坐して人間界を判斷するのだから、人間界では馬鹿でも、天界から見る條理には賢明である。偉い人間ではなく、高い人間だ。それ故吉井が一番偉く、時として西鄕は最も偉く、吾が一番偉くないのじや。それに西鄕は臭い男じや。餘り肥えとるので尻もよく拭けんのじや。西鄕どんの來訪とあれば女子は皆逃げたものじや。西鄕どんは臭い計りではなく、臭い物を平氣なのじや。或時魚釣りに往きましたい。夜釣りで暗い時じや。西鄕どんは尿(はい)し申すといふて、舟の淦掬(あかすく)ひを借りて大便をし申した。軈て良い魚が捕れて刺身に致し、さて之を盛る器が御座らんとて當惑し申したら、西鄕どんが先きの淦掬ひがあり申すといふ。同舟者が愕いて差留め申したら、いや洗ひ申せばよかとて、其器へ盛らせて平氣で賞翫申したのに、誰一人箸を執らなんだと申す。此話は連中に傳

はつて名高いもので御座つた。」

（八）　同翁の東郷元帥評

或日親戚の增田嘉平翁を紹介かた〴〵信義翁を其邸に訪ふた。子息の虎次郎氏も同席で謠曲が始まつた。有繫に七十四五歲の海江田翁は澁い深い音聲であつたが、終つてから稍々不機嫌な顏で翁は言つた。「謠曲は肚から出る音聲でなくばいかん、あんたは肚の聲だがなア。」と修行肚のない當世を呪つた口吻を漏らされた。軈て盃盤が列べられ一同馳走になつた。折から翁は脚が痛むためか、矢庭に蹲踞み立ちの姿勢で汁椀へ口を着けて吸ひ始められた。何となく增田老人に當り始めたやうに思はれたから、老人を促がして辭去した事がある。町人話を極度に嫌惡する古武士の習慣と察したのであつた。

其後、東郷元帥が日露役凱旋の時から半歲後の或日、海翁が來られての話に、「平八が額面を揮毫せにやならぬ事になつたから相談に參り申した。元來平八が揮毫するなどゝ云ふ事は家族中の笑話だから固く辭退したが世間で承知せん。既に依賴が二三百枚も來て居る騷ぎぢや。そこで本

人も手習ひしてから書く事になり、上手になるまでは額面でも捺印だけはせぬと申した。之では愈々世話せにやならぬが、吾も額面の法を知り申さぬので、どうか二三枚手本を書いて下され。」と言はれた。嗚呼豫言者古郷に納れられずの類か、世界的偉功を立てた程の平八元帥も、家族の眼からは斯くの如きものかと呆れた。苟且に隣莊の交誼からとは云へ、齢こそ違へ意氣投合して訪ひつ訪はれつ、書面の往復には和歌や戯畫も書き添へる親しさを交はして、翁も昔のお茶坊主有村俊齋となつて親しさを現はしたものであつた。

(九) 勝海舟先生の江戸ッ子ぶり

海江田信義男の豪傑ぶりを想ふに付て對象して見たのは、勝先生の江戸ッ子肌である。男は言ふ。「敵方で先生と云はれるのは勝安房ばかりぢや。尤も西郷も先生と云はれるぢやろが、其西郷も勝の事を必ず先生と呼んで居た。」斯うい ふ先生株の勝海舟に接近したのは私の二十四五の頃であつた。武藝の師大嶋正照先生の命で氷川の玄關まで使したのであるが、忽ち呼上げられて其居間へ通された。見ると小兵の老人が微笑して床の上に坐して居る。「お前か、一角の愛弟子は。

大分强いそうだな。俺は齡は取つたが鎗を持つと未だ負けねえぞ、けふは氣分が良いから一番見せてやろう。」と言ふ時來客があつたので、私は坐隅へ退いて其來客を見た。威儀正しい軍人で、上官に對する態度が極めて慇懃だ。鳥渡話が切れたと思ふと先生は私を見た。「之は伊東（祐亨元帥）といふ奴で、海軍では少し好いんだぞ、俺の弟子だ。此間嶋田だとか何とか云つた政治家が遣つて來て、二時間も喋り續けて往つたには弱つたよ。俺は喋るのは大嫌ひだ。」我等一介の書生をも輕視せず、相應有名である此紳士をも、門人とは云へ、同等に待遇する底の事は、如何にも江戸ッ子氣象の陵々たる片鱗であらねばならぬと思つた。客が座を立つか立たぬに、「サア見せてやるから、俺を助けて一緒に來い。」と言ふ。私は其立居を助けて附隨したら、物置きのやうな道場へ往かれて、五間の稽古槍を承塵（なげし）から取卸させて、米俵を取寄せ、素扱きを掛け始めた。其腰構へは最早七十餘の老人ではない。聽て矢聲鋭く突掛つて、最初は一轉び二輾びしたが、再び突掛けた時は一間程向ふへ飛んだ。先生は槍を投出して、「どうだ」と頰笑まれた。其後二三遍使ひに往つたが、一回だけは氣分が惡いとの事で玄關から辭去したが、いつも昔話と武藝談で、嘗て王子稲荷の社殿で坐禪した經驗を談られて、頻りと坐禪修行を勸告された事を有難く思つて居た。話し振りは無造作だが、親切で教訓が籠つて、親のやうに思はれるのであつた。幕末三舟と云つたの

は此海舟先生に鐵舟居士、それに高橋泥舟さん、何れも名筆だが、海舟さんは筆の毫先を切つて書く。そして俺の筆使ひは鎗術流だと言はれた。梅の古木のやうで雅趣津々たるものを感じた。鐵舟先生の豪傑文字は肚で動く剛劍のやうで、燒芋の看板までも書いて遣るといふ普施太子の徳を布かれた。泥舟さんの書が一番學者風で、異色が見えなかつたから、素人には餘り持て囃されなかつた。どういふ物か其時分、舟の字が大層流行した。田邊花圃さんの父上蓮舟さん、木村駿吉さんの父上芥舟さん、何れも學者で能筆だ。それで刀鎗の名人も居る。

二問　一たび富商の境涯から鎌倉山莊へ退隱されたものが、再び麻布で富裕な生活を始められたといふのは、如何いふ心機の轉向ですか、其折の事に付て伺ひたい。

答　麻布の俗生活風景

私が二十二歲から三十八歲まで掛つて漸く完成した開墾事業を勞役者に開放して、得た所の恩

恵金を有利に働かそうと思ひ、先づ富の生活といふものを知らぬ家内に、一應の體驗も得させたく、麻布學農社の津田仙氏舊邸を借受けて三年間の俗生活を試みたものであつた。やつと三階建洋館に和樣二棟の構へですら、忽ち被傭者同居者の依頼やら、出入商人や投資勸誘、借錢悃願者の緣故に縋つて來る者などが頻繁となつて、時間の浪費、資財の消耗が目立つて來る他、何の向上も發展もない生活と成り、淸友知己は遠避かり、遊朋俗客は殖えるばかりで、徒らに虚榮の效果ない生活を樂しむ他はない。たゞ都會の便利に釣られて日を過ごすこと三ケ年、其間の出來事を少し話す事にする。

（一） 治庖會と赤堀峯吉

或日、戸川殘花が來て、名料理番赤堀峰吉起用の事が出た。其頃女學校に料理科のあるのは師範校ばかりで、私が常に唱道して居る女學校の缺陷を補ふべく、料理講習會を起す事になつた。幸ひ既設の治庖會があるから之に合併して、磯部武者五郎、安齋葆光、龜井まさ、本山漸と吾家とを持廻り教場とし、其頃四十前後の二代目峯吉を採用し、杉田定一、足立栗園、栗原亮一、渡

邊國武、本山漸、津田仙等の夫人令孃などの來習で賑はつた。特に試食會には四五十名の知名者が集まつて、嘗て料理行脚までしたといふ先代赤堀の峰翁も、八十歳の腕を奮つて名人の片鱗を見せたものであつた。

私の亡父は中々料理の趣味は高尙で、懷石料理の名人捨藏翁を常に出入させて、自分獻立で茶事を催すのを常として居た。普通會席でも八百膳派の板前彌吉を常傭ひにして居た程だから、私も幼少の頃から見聞きして居たせいか、稍々消息に通じる所から、此峰吉とは共鳴點も多いので悅び合つたものである。

此峰吉のやうな江戶料理番肌の男は、其頃珍らしいものになつて居た。無口で上品で瀟洒たる肌合は、板前の彌吉の再來かと思ふやうであつた。其姉菊女も折々代人に來たけれども、感心する程でなかつたが、併し後、友人成瀨仁藏君が女大を目白に新設した時、殘花君と共々勸告して料理科新設と赤堀採用の事を實行させた時、此菊女は若い三代目峰吉を輔佐して能く敎務を果たせたものである。

（二）謠曲會と名人中村新輔翁

觀世太夫淸高と吾父との交情は家族の部にある通りだが、引續いた緣故で私も觀世宗家に就いて謠曲九番物までの許狀を得て居た。淸高の長子淸廉は名人だが師とする器に非ずで、剛吟を學ぶには代人の田村邦太郎の方が良かつた。所が一日富豪川村傳兵衞君の紹介で、星ケ丘茶寮の會へ出た事がある。入會後二回目で一人も顏知りが居ない。初回には入江爲守子と知合になつたが此日は缺席された。軈て一番が終ると耳に遺つた尤物二名、一は弱吟の巧緻、一は剛吟の崇重、それは隱居京極子と淸浦圭吾男とであつた。肚の修行は能く肚を聽くか、淸浦老は私を引見して名を問ふたが、推して善知鳥一番を謠はせられた。鉗鎚一番、圭吾男に肉迫の機を待つたが、群小の妨げる所となつたのは遺憾であつた。併し此會で地謠の名人中村新輔老を得たのは嬉しかつた。

之は舊幕臣で七旬の老骨瘠瘦たるに似ず、「老大家實翁でも萬三郎でも、地謠師が舞はせて遣るのだ。」といふ氣焰がある。此江戸ツ子肌の名人氣質は、私はよく呑込んでは居るが、其敎授ぶり

の險惡さと深切さとを尠し話して見よう。

入門初めに三井寺を謠はせられた。軈て「月は山、風は時雨に鳰の海」といふ所へ來た時、頻りと膝を叩いて焦慮して居たが、「霜天に滿ちて凄まじく江村の漁火もほのかに」といふ所へ掛ると「いけない。」と叫んだ。霜と謠ひ出すと首を振り、霜天に滿ちてと進めば、いけないと吹鳴る。直しに直して尙いけないと壓へる。此日も二三行で終り、其日は一行も進まずに終つた。一週間練磨して次回稽古に謠ひ出すと又否定する。此日も二三行で終り、其次ぎの週にも同樣であつたが、師匠が中座した合間に、此時ぞと思つて遠慮なく二三行謠ひ進んだ頃、所用中も不斷の注意があつたと見えて突然厠の中から「いけない、それは謠ではない。」と吹鳴られた。そうかと思へば或日の如きは、熊野蟬丸などを謠はせて、終りまで謹聽して一言も云はない。「追は家元仕込みだ、上出來です。」などゝ悅ぶ時もある。餘りに責抜かれるので、此方も躍起となつて突掛つて往くが、其時は笑つて居る。互に脂の乘合ふ師弟だから、其龜島町の住宅で歌仙素謠會が催された時などは、朝から坐り込んで、三十六番のワキを私一人で引受けて、夕景までのべつ幕なしで勤めた事がある。之は道場の代稽古で慣らされた功で、別に苦痛でもなかつた。世辭を云はない師匠も「よく續きますなア、此老人の蟲の鳴くやうな聲ぢや、打消されて元氣も出なくなつたのに。」などゝ言はれた

が、その微吟低聲の名調子は、人をして恍惚たらしめる。熱情の潜んだ上品な名器であつた。

（三）川村傳兵衛さんの綠陰號

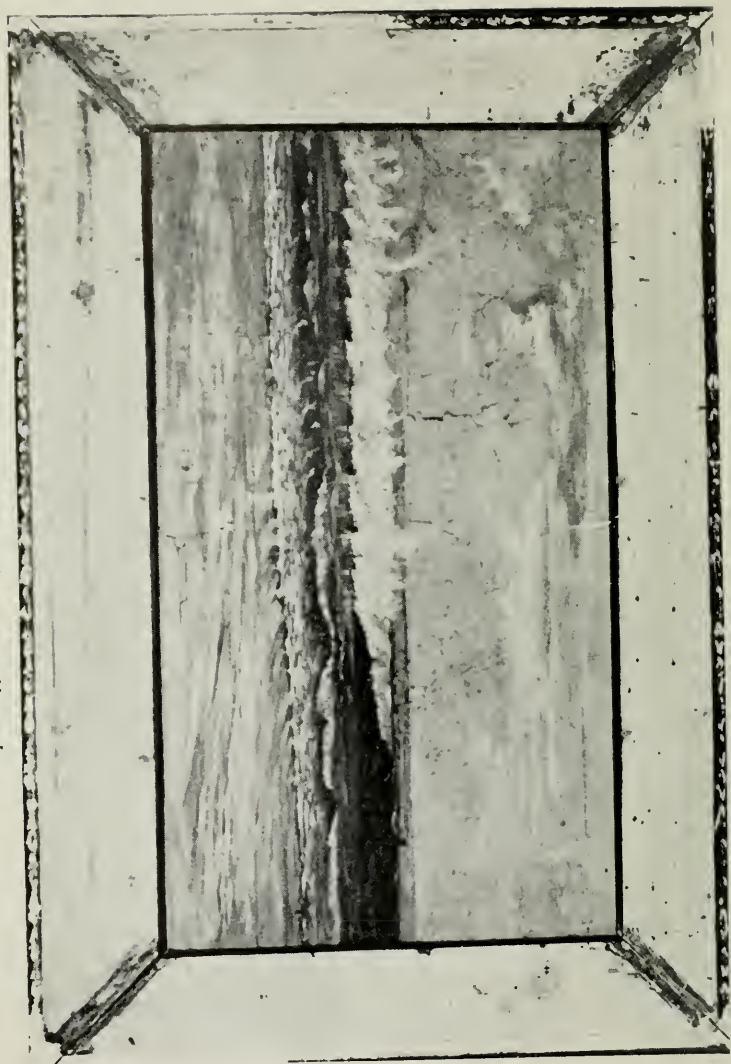
此人は實業界では當時有名な人で、其弟の傳といふのは川村銀行の頭取で、之が川崎銀行と對峙して居た頃、吾父はよく交際して居た。傳兵衛後に綠蔭と改名した譯は、元來宮中に知人の多い傳兵衛氏は、能樂が出來るといふ所で、折々陛下に破格の御陪席を忝くして居たが、或日「綠蔭かげ綠にして」と誤吟したのを、陛下には微笑召されて、惶くも綠蔭の名を賜はつたことがある。以來本人は改名したのだと云ふ。

此人の娘八重子は明治女學校の寮生で、寮長は家內であつた所から、此娘の敬慕する所となつて其家人の懇親を享け、それが緣で私も謠曲友達になつたのである。幾何もなく私は其人を失意の病床に見舞ふ日が來た。豪奢な常盤松の邸宅を引拂つて、貸家には藏し切れぬ程の書畫骨董を擁する富豪末路の光景は、前途酸鼻に堪えぬものがあつた。

(四) 透谷全集の出版事狀

明治三十三年廐布に住込んだ其九月に、大阪の矢島誠進堂の主人が來訪して拙著「破蓮集」出版の相談が出來、三十五年には此破蓮集外の詩文を集めて文友館主人に渡した。之は「山菅」の出版である。破蓮集の方は大阪出版で安價な平凡印刷だが、山菅の方は竪六寸橫三寸三分で全編六號活字を用ひ、題字は自筆で表紙は「文學界」末期の表紙に倣ひ、挿畫は藤島武二筆の洒落れた物だ。所が時の新聞評は、形を小にして六號活字を用ひたのは出版費を節減する所以かとあつた。如何にも下卑た觀點で、當時その文學評の眼識が如何に低劣であつたかゞ窺はれる。

この山菅出版と共に文友館主伊藤時が透谷全集の出版を申込んだ。兼て女學雜誌と文學界雜誌との分を集めて透谷集といふ一本を三百部出版しただけだから他の分も集めようと、島崎、平田二君に協力を依賴し、自ら其遺稿を整理して其日誌と腹案錄拔萃に着手した。之を聞いて、透谷の弟で畫家の丸山古香君が兄の肖像畫を描いて容れたいとの要求だ。之を承引したのは一月二十八日で、雜誌切拔きが平田君から屆いて來たのを待つて直ちに編輯に着手し、四月二十一日から

由比ヶ濱浪 (神中糸子女史筆)

校正が始まつた。抜萃の方も同二十三日から四五日で出來るから、五月五日に出版願書へ捺印した。所が五月十日に文友館が文武堂同伴で出版權移讓に付ての交渉に來た。同十二日に此兩家が契約書を取換はすに付、立會人として私は記名捺印した。以上の事は麻布邸で取扱つたのだが、七月一日に鎌倉へ移轉したので、校正は其地で進行し、九月十一日で終つて居る。出版の際たゞ一部を郵送して來ただけで、何の料金も謝金も受取つては居ない。

(五) 洋畫家神中糸子さん

女醫の先驅をした荻野吟子を想ふ時、いつも心に浮かぶのは此神中(じんなか)女史の事だ。之は女流洋畫家の先驅者たる一人である。嘗て展覽會場で其靜物の一點が宰相西園寺公の光榮を得たといふので好評を博したのも此人だ。一時明治女學校教授をして居た關係で麻布の吾家に寄寓して居られたが、五六歳の長女妙子が旅立つ父の袂に取付いて別れを悲しむ風情が、此上なく上品な態度に痛く心を打たれたと、其傳記中に述べてあつた。併し此少女の性格は其彩筆に消化し得ないと見え、此少女の肖像畫は一度び試みたが、終に筆を折つたと見える。

幼時からひた向きに畫が好きで、叱られながらも畫筆を離さなかつた程だが、其ため學術を顧みなかつたといふ。之が災ひして折角の天才も暢びる事を得ず、獨棲七十年餘、徒らに家事のために筆を擲ち終つたのは痛惜の極みである。

(六) 製茸事業と水利事業

私の弟に男三郎といふのがある。帝大の造家理學士で、實家を相續しながら建築事務所を開いて居た。此弟が中學生の時、同窓の親友磯邊といふ男が、生家の破産で自力更生の必要に迫られたに付、一肌脫いで助けてくれとの餘儀ない依頼を持込んで來た。それは改良した醬油新釀造に從事する資金支出の事であつた。その故鄕は大分市だといふ。此大分といふのが私の意向を大いに動かし出した。

此話の出た頃は農科大學退校直後で、研究中、國益上林産物には大いに注目して居たし、其中で特に椎茸製造に興味を懷いて居た。其椎茸の二大產地と云はれるのは福島と大分とである。其大分といふのに食指大いに動いた譯だ。素より本人の性質は知つて居るし、其生業の助力かたが

た製茸業の監督を委託するのは一擧兩得だらうと考へた。

そこで同縣野津原の佐藤工郎一族の所有林木を、十年間製茸の約束で買入れ、早速實地踏査した所、林木も地の利も製茸に絕好だが、農作が貧弱で懶惰の人氣が稍々不安であつた。併し製茸業にはナバ師親分が居て、其下にナバ子若干名が附隨統率されて、嚴重な仁義習慣があるといふのに安心した。初年は立木倒し、浸し込み、鉈目仕事から、列べ建てゞ終り、三年目からは數棟の乾燥小舍、三棟の人夫小舍、表裏の監督小舍を建てゝ採集を始める。採量は六年目まで遞加して七八年と遞減して往く。此三年目から監督が必要なので、其前に醬油釀造の仕事を組立てるやうにと、二千圓の資金を監督料として與へた。さて以上の仕事だけでは三年間徒手坐食するに堪へない。折から恰度、有利な仕事を見出したから之を是非實行させてくれとの嘆願を、磯邊當人から弟へ泣き着いて來た。弟も友情默し難くて私へ懇願して來た。それは九州地方に流行する水利事業である。山上の貯水堤防も既に一二間積上げてあるし、加盟農家二百戶の連印證書もあるし、殘りの三四間堤防の資金を得れば完成すると云ふのである。そこで實地踏査をして有望と認めたので、直ちに着工させた所、忽ち堤防は完成するし、難工事だつた水門も出來上つた。所が貯水池に水が溜らないといふ難點が起つた。此失敗は往々有る事で、更に之を完成させるには一

資本を要する譯でもあり、又發起者の下司盛吾なる者の不信用も混在するので、此まゝ其權益を他へ讓る事にして仕舞つた。それは監督者磯邊に疑問が起つた故でもあつた。

私が製茸積出し二年目頃の視察に出掛けた時、監督者の擧動に疑問が起つた。元來信任すべき監督者あつて始めて此仕事を着手したのであつたが、見慣れぬ商人肌の男が、親戚なりと稱して始終附隨して相談に口を挾む樣子から、之は危險性ありと感付いた。元來吾仕事は重點を其人格に置くのであるが、當の磯邊は單に机上の學生で、其背後に隱れて仕事をするのは此男かと思つた時、從來の主義に崩壞を覺えた。歸京早々人を派して調査した結果、果して種々の私曲が暴露されて、詐僞橫領罪を構成した程だが、過去は咎めずといふ事にして、之から直接管理の事になり、種々の手人を派遣して漸く事業終期にまで漕ぎ着けた。斯んな頓挫はあつたけれども、製茸事業は餘程有利なもので、水利事業の利益を合せて優に數千圓の收利が見えた。此仕事打切りの時に、豫て着目して置いた別府隣接地の買入方を磯邊に依賴して、有終の美を成させやうと思つた。所が當人は恣に果樹栽培地を買付けて、更に救助の素志を完ふせん事を强要して來た。私は袖を拂つたが、弟は嘆願した。據ろなく事業成立までの三年間を扶持する事になり、之が生家の存立中は續いた。磯邊の名は常次郎で、其妻は金子堅太郎伯夫人の妹だと聞いた。

(七) 虛榮生活の打切り

前に述べた通り、所謂大盡生活の收穫とは、人の羨望を買つて貧者の呪ひを集め、無用の人出入りが多く、親類緣者は近しくなるが、賴み事と金談の客が著しく殖え、從つて無益な時間を多く費し、俗客の交際が日々に擴がつて家庭生活が落着かなくなり、召使ひや寄寓者が增加して贅費ばかりが重なり、逢ひたい友は遠除き、讀みたい書籍は讀めず、虛榮の贈答、虛僞の交際、日に俗化し月に愚となる。折から主業たる製茸事業に監督者の不正事故が起つた。實を云ふと、今日まで自分の爲した事は何事でも成らぬものはなく、何れも豫期以上の成果を得て、豫斷破竹の如しと密かに自任して居たのであつた。所が此事業の罅隙で豫期の收穫の無い事が分つた。之はそろ〳〵曲り始めの前驅だと考へた。大盡生活ももう打切り時機で、敗兆には早く旗を卷くに限ると、其七月一日に鎌倉山莊へ全家移轉して仕舞つた。

三問　二代に亘る廣大な開拓事業も、成功の上一擲して土は汗へといふ觀念を完ふされ、研究の試驗事業たる製茸事業も完結し、補助事業の水利の頓挫も落着して、全くの輕身で再び虛榮生活から舊莊へ戻られたのは、そこに何かの消息が潜んで居るやうですが、どうか其入莊後の狀態を承りたし。

答　再度入莊後の風景

(一)　山林踏査の打切り

餘り突然の移轉で片付かない仕事が二つあつた。一は透谷全集の出版で、之は不便ながら簡單に繼續出來るが、も一つの伐木事業の踏査といふ事が差迫つて居た。素より吾研究範圍の仕事でもあり、又家內の戶籍取戻しの難題に偉功を立てた其親戚の箱石秀之助の依賴もあり、無碍に退ける事も出來ないので之を遂行しなければならぬ。尤も有望の見込みが見えたら其仕事に投資してくれと云ふのでもある。場所は福島縣南會津の館岩村鱒澤の黑澤山林で、栃木縣との國境に四

松村介石・星野天知兩家族

相馬愛藏氏と黑光女史

里の溪流があつて、三四里四方の老樹林伐木事業だ。執業期限が十五年で、一萬圓支出で、收益半分といふ觸れ出し、企業者は六本木といふ堅實な若者で、運動資金も遣ひ盡して居る樣子である。折から稀有の暴風雨の後で、日光街道を外れて、大谷川、鬼怒川などの氾濫崩壞痕を辿つて往く。藤蔓で深淵を跳び越したり、倒木を攀ぢ、細枝を潜り、やつと村道へ出たら、急に議論口調の稜々しい話し聲に耳を欹てた。其村人の容貌までが物々しく見える。果して會津領の八總の宿で、山辨え、林深く溪流に臨んだ山家の風情が閑だ。之から山入りで徑路斷續、岩跳び峯攀ぢ、鱒澤の黑檜林相や、黑澤の密生した五葉松の處女林など、日頃沈潜した林學知識が擡頭して恍惚たるものがあつた。併し林相の雄大、樹質の良否よりも、今日の視察は運搬の便否にある。迚も小資本の徒勞たる事は一目瞭然であるから、無言のまゝ歸路に就いた。途中藤原村の舞茸、瀧ノ原の深切で有名な老嫗、大濕地茸の葛引き、此等の記念を齎らして日光小西旅館に舍弟を訪ふ。舍弟男三郎は驅出しの工學士で、日光廟大修繕の技師として滯光中、神橋流失の臨時災害で協議中との事であつた。

之が裏會津山林企業の調査旅行で、談るに足らぬ事ではあるが、吾實業家としての終末運動でもあり、又再度入莊の初出來事でもあるから、印象の梗概だけもと述べたのである。

（二）　松村介石君の炯眼

私が入莊第一に來訪したのは松村君で、歴史著述に引籠る場所を探ねるといふ。早速邸內にある親戚別莊の一室を提供した。同君は敎徒仲間で最も政治思想が旺盛で、青年指導の良師だ。其ために「警世」といふ雜誌を發行して居たので、私も寄稿する事にした。私が島田三郞、尾崎咢堂などの諸君と識るのは何れも同志の士として介石君の紹介であつた如く、政界、實業界に一隻眼ある人々には勤めて交際に盡す所は異とするに足りる。其豪放磊落さの中に細心の思慮が働くのも異狀だが、世故に練磨した打算眼にも、貧困者への同情心にも淚ぐましいものがある。私は同君に接近して以來、世態人情の流弊を多く覺えた。人情の熱する所、憐愍となり、救助となり、助力となり、慈善となり、といふ遣り方は、如何にも英智が缺けて居る事を知つた。成程金を貸して助けたと思つた友人は皆去つた。恩を施し、資力を助けた世人は皆寄り附かなくなる。其結果は金と人とを失ふ事になる。併し無智な慈悲、理智な防衛、私は二つながら好まない。

この得難い青年指導者を理解した人に大倉孫兵衞氏がある。實業界に雄飛する傑物だが、大倉

鎌倉女學校創立記念

（前列四人目星野令孃・中央星野教頭・後列五人目大石庶務）

喜八郎君とは何等關係が無いのみならず、正路實踐の堅實な富商である。此人の崇拜熱から出來た拜天堂の建物は、青年敎養場として必要ではあるが、同君の潑剌たる野生味を縛して、滿々たる覇氣と鬪志とを痲痺させて仕舞つたのは惜しい事であつた。併し齡も齡だ、もうそれで良いのだ。たゞ阿羅漢が菩薩道を獲なくて、祖師座に安居したのを嘆じたばかりだ。荒法師文覺も高尾山に納まつたのは齡のせいであらう。

(三) 日露開戰と鎌倉

其頃露國の實狀を些しも知らない吾國民は、昔から「おそろしや」との言傳へに怯えて、元寇の再來程度に感じて居たから、日露開戰の報に人心は緊張して種々なデマが飛出した。浦鹽艦隊が出動して今、函館、小樽を砲擊し、同港は今炎上しつゝあるといふ號外も出た。軈て橫濱から東京をも砲擊し始めるだらうとか、北海道へ上陸して掠奪を始めて居るとか、種々な風聞で人心恟々となつて來た。今に橫須賀から水兵隊が乘込んで防備に着くさうだ。婦女老幼は早く立退きの準備に取掛れ、などゝ言つて追々町中が騷めいて、其夜は不安に明かした。翌朝、飛報が來た

といふ噂さで、早速停車場へ往くと、號外を見る人々で大騒ぎして居る。見ると之は意外だ。東郷艦隊が敵軍艦數艘を撃沈して、吾方にも相應の損害ありとの事だ。續いて敵艦の名も知れて來たので、漸く虛報でない事が知れた。何しろ勝利の確信が付いたので皆々狂喜した。それでは生涯の大喜悅感を記念するためにとあつて、松村、星野兩家の記念撮影をした。

引續いて捷報が續々と來るので、町民の不安は忽ち歡喜の空氣に變り、何れも落着いては居られなくなり、小學校の運動場で敎員が生徒に提灯行列を催して居たのに參加する者が多くなり、終に長蛇の一列は有合せの提灯を揭げて、町內を押步くやうになつた。其意氣は、嘗ての日清戰捷時代とは全然違ふ國民になつて來た。盲目の恐怖を感じて居ただけ、身に迫る感じがし始めたのである。斯うして外國に對する吾國民の思想も、追々明瞭となり始めたのである。之はペルリ提督の黑船を見た時から第二の痛感で、迫身的愛國心のスタートであらう。

（四） 鎌倉女學校の創立

逗子開成中學校長田邊新之助君が、鎌倉へ女學校設立の企望を町會へ持込んで來た。町會では

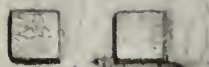
同君の信用皆無のため、謝絕委員として町議大石平左衛門が擧げられた。この人は吾祖父の姻家で、兼々私の教育家たる事を承知して居たので、決議猶豫を請ふて吾家へ相談に來た。當町として誠に重要な問題で、町長始め吾が出馬を悃願する所だとの切願だ。この地文化の向上には兼々考慮して居た所なので、早速田邊君の人格を見る事になつた。

さて同君と話して見ると、現代女性の理解も、其教育の抱負もなく、漢學一點張りの心細さであるが、此地方には之でも調和點もあるだらうし、其溫厚さは縣廳向きに宜しく、學校經營には相當な見解があるやうだから、終に盡力する事を承諾した。但し其條件として、第一發起者の企望を尊重して校長を田邊とし、自分は校主兼教頭となつて、設立一切の事及び校務、教育一切の事を引受ける。田邊は縣廳方面の交渉を引受けて教育、校務には容喙せぬ事、斯うして町議大石と協力して、差詰め由井ケ濱松林中の空き兵舍を利用して修繕を急ぎ、教員撰定から設備完成まで、晝夜不休の奔走で忽ち開校の式を擧げた。此創立の片腕となつた大石に報ゆるため之を庶務會計に採用し、算術教師を兼ねしめて其位置を高める事にした。本科四組と專修科三組とで、教師の揃はぬ課目は悉く私自身が勤めて居たので、其勤勞は甚しかつた。生徒は忽ち百名を突破したので、四五ケ月中に收支經濟は整ふし、校評は漸く高まつて來た。尤も、私も校長も無俸給の

事にした。豫て女學校に不備三點を感じて居た私は、早速惣菜料理科と書簡習字科及びマッサージ科を設けようと思ひ、金子教師を得て料理科は出來たが、マッサージ教師は出來次第として書法科に思ひ及び、從來の範に據らず、何とか教案を立てゝ速達する方法を求めようと思ひ、出京して都下知名の書法家を訪ふて意見を聽取すべく歷訪した所、何れも舊慣墨守で徒らに書法の尊嚴を擁護して、速成の、教案のといふ言葉を不敬扱ひにする。迚も相談對手にならぬ事を知つたので、試みに自ら教案を作つて實習に掛つた。先づ一點一線から、曲げ、拔き、留め方、といふ順で教へ始めるのだが、之は千葉靑嵐といふ書家から暗示を得たのである。此人は王羲之筆法と稱して、異樣な雅趣ある刷毛書き書風で初心者を釣込む所があつた。それが點線、曲げ、折り、留め、跳と、分解教授をする所に首肯されたのである。併し其頃、私は世俗通り楷書から始めるものと思つて居たので、初年は楷書教授に傾注して、其速達ぶりを父兄に問はんと思ひ、翌年校內に成績展觀を催し、同時に料理成績もと思つて試食會をも催した。書は一ケ年の好成績に賞賛を得たが、料理の方はたゞ鹽辛いとばかりであつた。

私は修身に熱意を示し、勤めて壓迫主義を避けて解放主義を入れ、家事には美術文學趣味を加へて、專ら實用方針を執つたので、校評漸く擧り、幼稚園さへ新設する事になつて、校運の前途

心經（松方老公書）

塩治長坪刀（松方老公書）

に光を添へて來た。斯ういふ折柄、突然方向轉換の事情が湧き起つた。それは友人横瀬君から松方老侯の消息を傳へて來た事に始まる。

それは速達習字の成績展觀を傳聞された老侯が、私の事を聞かれて是非面談したいとの事で、再三の通知があつた。元來權門富豪に無頓着な私は、之を聞流しにして居た所、書法の本道に付て話したいとの事で、初めて心が動いた。それではと云ふので、學校に隣接する侯の別邸を訪ふた。其後兩三回の會談で、侯から餘儀ない依頼があつた。それは或やんごとなき方の御心を酌みての依頼であるから、私は恐懼して、先づ當面の仕事を片付ける必要が起つて來た。

そこで、女學校の方は創立以來既に滿一ヶ年を過ぎて、校務も整ひ、校生も百餘名となつて、經濟も安定を得て來たから、今は誰にでも維持するに堪へられる。素より町のため、田邊のためにと創立仕事を遣つたのだから、今こそ讓渡する時機であらうと考へた。そこで創立に協力した大石と共に退職したのである。丁度其頃、田邊派の人々も漸く關心を現はして、田邊氏も食指大いに動き出した折でもあつた。

（五）　松方老侯の知遇

往年父が財界の巨頭として、顯官縉紳と交際して居た頃、招待客中に壯時の侯を垣間見た事がある。其少年眼に忘れぬ侯の面影は、今に彷彿として初對面とも想はれぬ懷かしさがあつた。侯はニコ〳〵して慇懃に談られる。其要旨を約言すると――

泰西文化の崇拜から來た書道の廢頽は、書家、學者、僧侶の書風をも低落せしめた。偶々ある能筆も、大抵無法無則の書風で、恰も現代青年風氣の敗頽さを象徵して居る。然るに君は若いに似合はず、書道奬勵に盡力さるゝとは悅ばしい。唯同じ事なら、本當の書法を鼓吹しては如何。其本當の書法とは書博士に祕藏する大師筆法の事であるが、委細の事は横瀨に就いて檢討するが宜しい。

之が初對面の忠告で、一ケ月研究後に謝意を表して參邸した時は、侯は一層熱意を現はして左の事を談られた。

侯の母堂は藩邸奥向きの祐筆を勤めて居た位だから、侯の家風は一段と書を尊ぶのである。維

新の奔走中も忘れる事がなかつた。現代知名の書家には大抵本統の書道に付て說導して見たが、會得する者が居ない。獨り悟竹は人物も出來て居るし、よく分つて研究を約した。阪の如きはそんな物がありますかなどゝ、呆れた事を言つて居た。どうか吾心を察して斯道普及の事を引受けてくれまいか、との話であつた。

其後、吾揮毫の書軸を閱覽に持參した所、侯は恭しく推戴いてから繙かれた其恭謙さには心を打たれた。其時、侯は姿勢を正して左の依賴を打出された。

實は先年やんごとなき御奧へ御機嫌伺候の折、書法衰微を嘆かれて、近頃は又宮中へまで左樣な見にくい假名文字が入込んで來たが、どうかならぬかとのお話にいたく感奮して、徒らに此老軀を嘆くのみであつた。君は幸に未だ若いから、此の斯道普及の事に奮發して下され、との餘儀ない依賴であつた。

之で依賴の筋が分つた。分つて見ると重大な事だ。片手仕事では成立たぬと思つた。之が到頭研究專念の必要から、意志轉換の原因を喚起したのであつた。

或時侯が私の手を見て、あんたとおいの手とよく似申すが、と言はれて掌を見せられた。成程較べたら、其太く短い五本指から、厚ぼつたい大きな掌まで如何にもよく似て、唯私の方が小ぶ

りだけだ。「此手は母よりの傳來で、而も其母は御同齢で、綺麗な花形流の假名を書きます。」と答へたら、侯は大いに其長壽と幸福とをことほがれた。

大正十二年の關東大震災は、啻に此書道の擁護者を失つたばかりでなく、吾書道の上層展開を杜絶し、終に吾關西隱遁の實を爲さしめたのである。

(六) 中川一德と松岡若翁の天才

此二人の異材に付て尠し話して見る。一は新工夫の智者で、一は筮卜の天才である。既に專賣特許權も種々持つて居る程の發明知識を有し乍ら、又珍らしい疳癖家で、咄嗟の疳癪で、客だらうが金主だらうが、親戚だらうが友人だらうが我慢が出來ない。果ては雇人を逐ひ出し、妻を逐出し、職業の養鷄でも疳癪に任せて撲殺して仕舞ふ。萬事此調子だから追々と産を失ひ、妻子を離れ、舊知を便りに津田仙翁の紹介に縋り、終に吾家に寄食するやうになつた。舊幕の御家人で書畫も文章も器用だ。私は之を九州の茸山監督に試用して見たら忽ち鑵詰製造案を提供して來たので、思ふ通り實行させて置いた所、其不成功に疳癪を起して失敗に終つた。仕事も終結したの

で呼寄せて置く中、家人から苦情が出て餘儀なく退去して貰つたが、後日新聞で見ると、此老人困窮の極、安樂自殺機といふものを考案して自身實行した所、苦痛に堪へず、更に轢死を企てた所を捕へられ、養老院へ入れられたとあつた。此痴癡の奇人が紹介したのが筮卜家若翁である。

此人は稀に見るの易者で、其恬淡性が無我無心の境地に入り易き故か、易斷豫知に妙を得て居る。交際數年、私は重大事件着手の折は必ず其豫斷を聽いて後に行ふを常とするが、每時的中せぬ事がない。而も私は一回の面識もないが、何となく其風丰態度が目前に髣髴する。或時、門生が翁を訪ねて其事を談るに、翁も亦、吾風采、態度、年齡、性情を悉く明答したと云ふ。是より未見の知己を互に領く所があつて、是非夢の一字を揮毫してくれと所望して來た。その云ふ所は「抑々夢は想像現象だが、無我の修行を積む時は夢から想念を生ずるもので、或意味から云ふと矢張り人世の現象は夢の如しとなる。兎に角夢は萬象の姿だから。」と言ふのだ。震災後、突然の訃報で、私は前途を照す一燈を暗くしたやうに感じた。

四問 先生の少年時代は菱湖流で、書家の關雪江が、後世恐るべしといふ褒狀を贈呈した程だと

傳聞して居ますが、其カラ様がどうして和様の大師流に轉向されたのですか、其研究の御經歴などに付て承りたし。

答

書法の覺醒

(一) 懸腕直筆の愚を覺る

弘仁の昔、空海和尚渡唐の節、韓方明から王義之百八點といふ筆法を傳授され、それを基礎として更に梵字筆法を加味し、煎じ詰めたエキスのやうな十二筆法を編成して嵯峨天皇に奉つた。天皇御感ありて、空海を初代書博士に御任命ありて、此執筆法を祕傳せよとの勅命があつた。空海は此十二筆法に添へて、草行十八形傳を編成された。

之が書法第一の基礎であるが、私が第一に覺醒されたのは、その執筆卽ち筆構への法方であつた。懸腕直筆といふ言葉を墨守して、尠しの疑問を起す餘裕もなかつたものが、線の方位と剛柔とに應じて、筆構へに四種ある事を理解した事である。成程、孫過庭の書譜にも、或は直にし或

は側にしとある。書は和漢ともに學者の專有物であつた丈、勿體ぶつた法則や論議が多く加へられて、不自然な弊害が多くなつて居る。試に畫伯の筆使ひや、彫刻家の刀使ひを見れば分る。堅い線には立てるし、柔線には斜にするし、斜線には右にし又は左にし、縱横起伏、自由自在に使ふのを常とする。支那は隨唐以後、宋朝までは此自由がある。明淸以後には製筆法を飛白書きにしたので、餘儀なく直筆書きを主張するやうになつた。それも支那人が大字を書く時は直立して卓上で書くのだから、懸腕にも直筆にもするのであるが、邦人が机前に坐して小字を書く時などにも、懸腕直筆などで縛するのは、愚の至りだ。從つて用筆も全部卸しては、吊り筆になつて腰が落付かぬ。のみならず、書の要點たる線の表裏が現はれなくなる。

斯う氣が付いてから、第一に趙子昂を臨書して見た。之は明朝時代に傑出した本筆法者だ。果して難問が氷解して思ふやうに書ける。續いて古聖の拓本を臨書し始めたが、益々手に應じて現はれるので興味津々と湧出す。そこで多年の宿題として居た千蔭翁の連綿假名の流暢さを學んで見た。嘗ては自著「山すげ」の小冊子見返しへ、千蔭流で著はした吾筆蹟を見たが、餘り成つて居ないのに愕いた。之は今出版法帖でもよく見る字形臨書と同じで、臨書とは字形ばかりと思ひ込んで居る書家達の盲目さで、尊圓親王の所謂「字形ばかりを重んじて精靈無し」の文字だ。そ

れを今、本法に據つて臨書して見ると、之も容易に現はす事が出來た。
此研究一ケ月で早速、門柱看板の「武藝道場」を書替へて置いた。そこへ横瀬君が松方侯の傳言を齎して、吾が永い籠居の安否を氣遣つて來られたが、「看板の書風には愕きましたよ。實に早い腕ですな。これでは老侯の傳言も不用になりました。」との一言を遺された。
斯くて、書道は直筆の覺醒から始まつた。

(三) 堂内の靈覺

庭内の築山に破蓮堂といふ四つ堂がある。其堂が私の夢殿で、書三昧に引籠つた所である。食を節し氣を澄まして、研究に不斷持念して二週間三週間と經過すると、神氣明澄、夢とも現とも覺えぬ中に、いつしか草書筆法二十三點を編出して居た。そして其點畫の母字を二十三字に定めた。それは草體で、心口人日之月夕公白文女子門前色言見水行音進乍戈である。尤も此時分には入木百點とか義之百八點などゝいふ傳書のある事を知らなかつたし、たゞ十二筆法と草行十八形傳だけから、研究し出した結果であつた。

元來大師筆法といふのは行草筆使ひの精髓ばかりを集めたもの故、初學の者には之を敷衍して一定の字形を編み出す必要ありと思つたからであつた。此籠居坐禪の無我境に湧き出たインスピレーションを、少し形容して書くならば、彼の蔡邕が「嵩山石室に學書三年、一夜神人あり、其形甚だ異、筆法を授けて沒す。邕感得し、苦思、不食三日、則ち永字八法成る。」との消息も理解される。實に書禪劍禪一歸一如の感があつた。

（三） 運筆リズムの新教法

通常言ふ所の筆法といふ用語は、常套手段とか遣り方とかいふ所へ用ゐ、書に付ては書風とか書き癖とかに用ゐられるが、實は執筆法又は使筆法の略語で、字形や點畫の現はれを云ふのではなく、毛筆の使ひ方を云ふのである。故に使ひ方を見學しなければ役立たぬといふ事が分つた。それは元來筆法といふのは、楷法の永字八法同樣位に思つて居たからでもあつた。

次には運筆といふ言葉だ。之は單に筆の進行といふ事で何の意味もない事と思つて居たら、習字に大關係のある事だと分つた。人の步行にも脚の遲速と腰の浮沈とがあつて、調子好く運步す

る。運筆も其通りで、特に弾力ある毛筆なるが故に、其遲速浮沈の調子が著しく變化を起させ得る。空海は之をたゞ阿吽の二字で片付けて居るが、阿と筆壓して吽と進め、吽と沈めて阿と浮かせる、といふだけではない。此筆壓の浮沈に進行の遲速が加はつて浮沈遲速、浮沈遲速と追々波動の調子が練習される。之が其人々の持つ性情のリズムと一致し出すと、文字に生氣が現れる。それ故、此運筆法は習字速進の主要な手段である事に氣付いた。習字に面白味を覺え出すといふのも、此一致し出した時で、書は能く其人を現はすといふのも、此一致點から來るのである。

此運筆練習の要件として、昔は寫し習ひの法方があつた。現代のやうな單に字形ばかりを模倣するのでは上達は出來ない。昔は習字の事を臨模(りんも)と云つた。臨は字形を見て書き、模は浮沈遲速の運筆を練習するための寫し習ひで、此二つの手段を必須の習ひ方にして居た。

さて、此模法の習ひ方に最も必要なのは、筆毫の鋭鈍と弾力の强弱に註文が起る。今、古法帖に就いて習ふとするに、何れも本道の筆法に據る書體としても各自一家の書風を異にするし、其一家中にも細大剛柔の書體があるから、それに應じた筆毛の選み方を要する。更に其筆の形體に付ても選み方を要する。成程空海は自ら筆毫を選み、自ら筆を作つて献上して居る。狸毫(たけ)の筆三本の献上表を見て烏渡愕いたが、其頃まだ筆は民衆化さないで、製筆智識の乏しい時代だから、

筆は貴重な物であつたのであろう。何しろ空海は製筆法から研究して居る。松花堂もそれに倣つたやうだ。それが本當だと考へたから、私も諸家の筆譜から研究に着手し、邸内に筆司を抱へて長短大小の筆形、剛柔太細の筆毫を種々按配工夫して、十餘種の用筆を作り、漸く雀口の短穗から柳葉の長穗を折衷する事が出來、到堂千蔭假名の連綿體をも容易に御する筆が出來た。何程貫之假名が連綿に名を得ても、千蔭ほど自由自在に連綿を扱つて圓山派の烟霞縹渺たる濃淡墨色の粹を現はした者はあるまい。そして緩急の强い都人的リズムは殆ど音樂的で、雅致と洒脫に富んで居る。殊に又その急調子は書簡や短冊の卽興的實用に適して居る。今日この時勢に奬勵普及すべき假名文字が如何に高尙優美なりとて、色紙や書類書きに適する上代樣よりも千蔭流の方が適切だと考へた。それも多くの人が失敗したやうに、大師筆法と此製筆法が手に入らぬ時なら止むを得まいが、旣に此二法が手にある以上、之を普及するのは最も時勢を識つた者と考へた。それで松花堂より一歩を進めた假名として、千蔭に立脚する事にした。

（四）名筆司、得應と雲平

前述のやうに、三年掛りで漸く製筆を研究して大師流の用筆を定め、普通の筆司に編毫法を示して作らせて居た。其筆司の中に宮内得應といふ老人が居た。之は他の筆職人氣質を離れて書畫骨董の嗜みもあり、一升一本といふ筆を名刺に添へて書畫家の門を叩いて居たが、大師流の製筆法に共鳴して、松方老侯にも知られ、其製筆をも納めて居た。或日「得應の製筆で老侯の賛文を天知師が書く、之で同流の一つ揃ひとなる。如何に同時代に同流異業の三才が握手したかの奇緣記念を遺そうではありませんか。」斯う言つて、その白鬚赭顏の福相を微笑させて居た。

併し此翁の製法は大師流ではない。眞に本道の筆司が京都にあつて、代々の御筆司であつたが當主は倒産して行く所を知らずと云ふ。それが後日、邂逅し得て早速製筆を依賴した所、本道の製筆法は勿論、其技術も勝れて、御家流の書體も巧みなのに悅んだ。之が代々の襲名たる藤野雲平といふのである。卷筆は現代には此男の他にはあるまいし、本流篠卷きの大管なども、此家人の他には製者は絕えたであらう。惜しい事だ。

(五) 速成書法の發表

女藝專修學校開校記念

（前列中央　松平校長・星野副校長）

要するに其教授法は部分研究から、組合せ作用、造形工作、それを運筆の調子で活かして往く方法である。此順序に從へば、模倣手習ひの無法練習よりは速達するのが當然の事となる。唯永年の傳承中に誤寫冗漫の弊が多いから、之を簡單に整理して初學にも便にするの必要があると考へて、略々順序を立てゝ實行して見た所、豫期以上の實績を納めた。此噂を聞いたので忽ち報知新聞社から訪問を受けた。此記事が新聞へ出ると翌日早くも、書法の熱心家や研究家が來訪し始めた。そして新聞社からは至急研究書を出版するから著述せよといふ。世の中へ出すには未製品だからと辭退したけれども、松方侯も紹介序文を書くと言はれるし、小此木信六郎君も速成書法といふ題名を選定されるし、横瀬君も跋文を書くと云はれるので、到頭假名書きの部が出版された。それには社內の反對を排して、賴母木桂吉、中村千代松などの諸君が盡力された爲で、其元は小此木忠七郎といふ親友があつた故である。所が初版再版は瞬間に賣盡すといふ盛況で、此種の出版物としては稀有な事だとの好評、更に三版をとの勸めはあつたが、假名文字には自信がない時だつたから、之を固辭して仕舞つた。之が六月の事で、其十二月には次篇として書簡文字の部が出版された。之も再版を賣盡した。此速成といふ語は何となく安價に聞えるが、人氣には協つたのか、忽ち東京に速成書法といふ會が起り、第二卷が出ると、直ぐ書簡習字といふ會が起つ

た。蓋し人氣を利用する際物師の仕事であらうが、以て人氣のある所が知れると云ふものだ。續いて第三卷の草書研究法が出たのであつた。此他の書法出版物は皆、後年に屬する。

(六) 技藝專修學校の設立効果

書法研究の最中に又しても女學校の設立などゝは氣が多いやうだが、之は餘儀ない事情ばかりではなく、東京へ書法の實績を發表して見たいとの素志を織込んだ所以である。明治女學校で入魂の間柄である八木乘辰君が懇に委託して來た其息子の乘夫といふ男が、技藝學校設立に付て哀願する所があり、敎育部を擔任してくれぬと設立出來ないと言ふのである。此男は知人の成瀨仁藏君が目白へ女大を設立する際に奔走附隨して、同校の庶務係を勤めて居たが、突然の罷免に奮發しての目論見である。素より成功は覺束ないのではあるが、新書法實施の爲に迫られても居る際だから、單に其敎育方面を引受けて副校長となり、松平敬直子を名譽校長に推立て、明治四十年四月牛込神樂坂上に開校式を擧げた。自ら修身と習字、家事科に據りて、專ら實生活、實社會の智識を鼓吹する事に勤めた。一學期は順序好く進んだが、大早計にも新校舍建築に着手し始め

たので、之は危險だと感じ始めた。素より事務と經濟には無關係との約束で始めたのだから、委細の事情には不案内だが、技藝部主任の人物と、放漫な八木の借財政略が、漸く露骨になつて來たゞが此建築であるから、其秋、八木の逃避から閉校騷ぎを惹起した時も、何とはなく豫期の出來事のやうに思はれて、少しも動搖はしなかつた。校内に特立して居た書法が、此閉校が因をなして漸く東京へ弘まり始めた。

そこで芝の車町に出張所が出來、川上素一、股野景孝などゝいふ同志を得て大いに發展の力を得、續いて四國町の出張所から松本町へと延び、續々有力の會員を得る事になり、大森、牛込、京橋と擴がり、同志の士も後援の友も多くなり、高官富豪の會員も集まり、終に機關雜誌發行の要を主唱する者も出て來た。それは常磐松女學校長三角錫子女史で、其ため第一回書友會を東京美術倶樂部の講堂で開催して、大いに氣勢を上げるに至つた。其雜誌は難波津と名命したが、二號までゞ中絶して仕舞つた。併し書友會大會は五回も開催されて、大震災の直前まで續いた。

（七）　三角錫子女史の才分

其聰明さと藝術味豐かな天分は、其母校女師の型を破る所が多かつた。其母校を裏切つた藝術味は其優なる特色である。胸を病んで久しく隱れて居たが、再起の時は常盤松女學校の校長として潑剌の才分を奮つて居た。一度び吾書法を學ぶや忽ちにして普及の要を主唱し、先づ雜誌發行と書友會の開催を案出し、假名文字の工藝化を催して展覩の會を開くなど、ジアナリズムの智識が常に往來する天分があつた。吾書法會に此働き手を失つたのは大きな進展の妨げでもあつた。
三角はミスミと讀む、算數學、三角術に名譽の家柄なりと聞く。

五問 大師筆法とは十二點と草行十八形勢の二種だけで、其他多くの傳書類は代々の書博士が之を增補敷衍した點畫と、法則作方等を集めたもので、先生の書法は、それを初學者の入易いやうに工夫されたもの、言はゞ古人の秘傳癖を發いて民衆化させたもの、といふ事は會得しました。書道の委細は別の御著書に據る事にして打切と致しますが、永年の書道生活中、關係のあつた名士の事績や逸事、異聞などに就いて伺ふ事にします。

第七 吾が書法の名士群像

（一） 小此木ドクトルの頓才

醫學生として後藤新平伯の同窓の先輩たる信六郎先生、或日、伯から大臣就任の祝賀會に招待された。人々何れも其出世の偉功を稱贊して居たが、先生、潜かに伯に對して、「惜しい事だ。君は醫者になる方が好かつた。」と言つて超然として居るので、得意の伯も苦笑の他はなかつた。聰明俊敏、謙遜で諷刺豐かな才人であつた。私の書法を聽くや直樣、速成書法の題名を贈らる。速成とは安價に過ぎると思つたが、之が發祥の文字であつた。

先生、或時坐壁の扁額を指して、「此坐像は座席より生え出て居るやうで、突いても押しても倒れそうもないが、之は坐禪からか、武藝からか、それとも膽の据え所ですか。」と問はれる。私は「坐禪より成るものは禪師の姿態、單に武藝より成るものは鬪士の猛姿、武と禪とにて成るものは自然の姿態、何れも膽力不動の結果と斷じます。」先生手を拍つて悦んで言ふ。「道理で、あ

なたの姿勢が此額の通りだと思つた。」仰視すれば、それは鐵舟居士の肖像であつた。

（二）　坂井寛三郎翁の篤學

明治四十一年の報知新聞に初めて私の書談が掲載された。社では特扱ひにして一頁へ滿載したので、社會へ話し掛けた第一聲としては相應な反響があつた。之を見て直ちに社へ驅け着けて、私の住所を探ね、鎌倉まで辿り着いて入門を申込んだ人がある。それは六十翁坂井氏であつた。上品な大柄の富商の御隱居タイプで、若い時から千蔭の假名文字が好きで、多年研究したが少しも手に入らぬ。永年之を遺憾に思つて居た矢先き、圖らずも紙上で研究の鑰ある事を知り、萬事を擲つての入門希望だとの申込み、私は其篤實さに快諾して、是から神田の其家に立寄る事になつた。

翁は信州志賀村の舊家、神津（かうづ）家の隱居で、本家爭ひで對峙する今一つの神津家主人猛といふ人は、文學を解して島崎藤村の窮迫時代を後援されたり、又は吾門に入りて其一家とも〳〵研究された紳士である。

（三）勞役生活發起の實現

明治四十一年、女藝專修學校の解體を待つて、私は斷然書法教授を以て社會に名告り出た。それは財力生活を捨てゝ、吾肉體を勞して生活するといふ宿論實行の序幕である。

其發源地は高輪車町で、今日からは最早ブルジョアヂーではない。父祖の財力に據つた富商の且那株も捨てた。父の遺業で納まつた豪農地主の大盡株も捨てた。資本企業の權益株も捨てた。いよ／＼妻子を抱へて腕一本で生活するといふ宿論の實行期に入つたのである。そこへ偶然來訪されたのは川上子爵だ。偶々看板の書體を見て立寄つたのだと云ふ。

（四）川上元帥の引合せ

この川上子は操六將軍の嗣子で、擊劍と書法は必ず修業せよとの遺言を守り、北泉師より既に奥傳まで傳書を買受け、筆法も學んだが、一向書は上達せぬがといふ入門口上だ。流石は川上の

日淸戰爭だと云はれた程の將軍の心境だと思つた。其劍と書の兩方面から入込んで融合點に安住した私は、將軍が其一子を私に引合せたのだと想つた。

以來素一子は其純眞の誠意を傾けて、歿するまで研究を怠らなかつたのみならず、書友會々長となつて後援に盡されたものである。惜しいかな、父將軍の豪酒が災してか、腦に故障あつて中折された。それも賢明な夫人に先立たれた打擊でもあつたらしい。其夫人は伊東祐亨將軍の一女で、良妻賢母であつた。其長女は吾が五女君子と同月の出生で、子爵は是がため非常に家庭の親しみを披瀝されたものであつた。

（五）內田外相の張之洞談

支那公使內田男が團匪騷擾で外交多忙の折柄、外相任命を受けて歸朝されたといふ事が新聞に出た。

引續いて其外相が私に書法敎授を申込まれた。二三日放置すると又知人から催促が來たので、兎も角も理由を聽くべく外相邸を訪ふた。外相の話は斯うだ。

支那へ赴任當時、專ら李鴻章との交渉中は氣付かなかつたが、近頃張之洞と交渉するやうになつてから氣付いて見ると、張氏はいつも筆を持つ手付きがペンを持つのと同じに見える。異様に思つて問ふて見ると、之洞は却て不審な顔をして、「貴國では側筆書きをせぬのか、清朝連は直筆だが、漢朝出は皆これだ。之は義之の遺法だ。貴國は義之の書風である筈だが、」と問はれたが、「吾輩は門外漢でよくは知らぬが、懸腕直筆と計り心得て居たが、早速調べて見やう。」と答へて置いて、直ちに外務省へ依頼して書法の出版書を悉く送本して貰つた。其中に側筆を唱へるのが唯二冊だけで、而も側筆を主張されるのは貴著だけであつた。吾邦にも未だ具眼の士が居ると思ひ、早速誇り顔に之洞へ話したら大いに喜ばれた。それから、歸朝後は必ず習ふ事に考へて居た所、今回突然歸朝の機を得たので、是非にと依頼した譯である。」此懇望には又も知遇を感じて快諾したのであつた。何しろ外務の仕事は不休不斷で、落着いて居られないのが此練習の大敵であるが、此稽古は現職から休職中へと隨分長く續いた。唯一人の愛孃を慈しまれて、御飯を養つたり遊び對手になつたりする、人間の自然さを持つ人であつた。

其夫人は大和十津川の土倉氏で政子さん、其姉が御殿山の原六郎氏夫人。

(六) 原六郎翁の維新談

吾が初見參は七十歳を越えた病後靜養中の翁で、身長勝れて高く面長の風丰は山縣有朋公に似た聰明の骨相である。但馬佐中の豪族進藤氏より出でゝ俊三郎長政が本名で、原六郎とは當時の匿名であると云ふ。「平野國臣の勤王心に動かされて生野義擧の兵器係となり、運搬に苦鬪中大事敗れて戰爭は頓挫したが、彰義隊を上野山內に取圍んだ時は但馬藩の隊長で、山下雁鍋あたりから一發砲擊してやりました。此最初の一發が小さな堂に命中して、高く昇つた黑煙が抑もの開戰烽火でした。」などゝ談られる昔の豪氣が今も折々隱顯するが、縱橫無盡の豪傑肌も峻嚴なる夫人の賢德に融和され、實業家中、士魂逞しい人格の持主であつた。嗣子邦造氏夫妻、之は又、辛防苦勞から來た情致ゆかしい人々で、豪家氣質中稀に見るの良器である。

(七) 股野景孝翁の感懷

或日、令孃同伴の上品な老人が教授の參觀に來られた。軈て教授の終るを待つて、恭しく書法研究に付ての述懷を述べて、卽座に入會された。此品位ある老人は刀劍鑑識の評高き股野景孝君であつた。後、同翁の感想を雜誌に寄せられたものを左に掲げて省筆する事にする。但し過賞の所は苦笑に價するが、許して貰ふ。

股野景孝君談

私は元來書が好きで、書家の一人や二人は養つたり保護もしたりして奬勵したものです。星野先生の著書も二三册購讀しました。其論旨は如何にも多年書法の疑問であつた問題をよく解決して居るのに感服して、之は平凡の書ではないと思つた。先づ其實際を見やうと高輪の出張所を訪ねた。實は右の著書を懷中して、東京のあらゆる書大家を訪問して議論を伺つたが、此先生程の名論は一つも無かつた。そこで、此先生にも一議論しやうと訪問したのであつた。

先生は五十前後で溫厚な人に見えた。弟子が三十人も机に就いて居たが、一々其人柄に應じて懇に敎へて居られるのが嬉しかつた。之は營利や山師の先生ではないといふ事が直覺された。

さて先生に對話を始めたが、如何にも丁寧な禮儀正しい人なのに感じて、忽ち娘の入會を乞ふて仕舞つた。次の稽古日には娘を同伴して手解きを願つた。又二三回稽古の樣子を見に往つた。愕いたのは娘の字が二三回で急に上達した事である。それから筆法の傳授を願つて自分も入門した。段々先生の書論方針が

分つて來て毎度感服させられる。松花堂の卷物を所有して居たからそれを數へて頂いた。成程書ける。從來眞似も出來なかつたものだが、それが書けるやうになつたのは、僅々三四ケ月の稽古であつた。

私はどうかして之を弘めたいと思つた。古典講究所では阪（正臣）さんの假名を研究して居るが、そんな根據もない假名を研究するのは學究者のする事ではないから、星野先生のを研究せよと勸めて遣りましたが未だ分りません。其中又よく話して此恩澤を分ちます。親戚の阿部一家へも弘めたいと思ひますから宜しく願ひます、云々。

以上は其談話の概略を寄せられたのであるが、それは大正六年で、其夏、同翁は突然逝去されたのである。私は此得難い研究者を奪ひ去られた事の情けなさを熟々考へさせられた。今尙その面影を偲ぶものは、其遺愛の蛟龍古硯と令孃きく子さん、今は三矢夫人として鎌倉に在住さるゝが、此二つだけである。

（八）　岩永夫人の寛濶

三菱銀行重役夫人と言へば直ぐ銅臭を感ずるが、此夫人はそんなのではない。磊落寛濶で藝術味に富んで居る。其筈である。畫伯山本梅逸の娘で、大方彩管も揮ふのであろう。書と謠曲とは

其手並みを見て居るが共に筋が立つて居る。或時出社がけの主人を私に紹介した夫人は、重役の貫祿を備へた謹嚴な主人の態度を見て居たが、聽て「どうです、あのシカツメらしさは。」この無頓着の一擊に主人は苦笑、私は居然として私に對する馳走ぶりを悅んだ。次の日、私は夫人に忠告した。「私は御主人の重役癖などは見ないで、額上に多くの筋を見て顰蹙した。御主人は旣に繁用に負けて居ます。肚で繁用を捌かねば、一命窮迫を免かれぬ。」之は嘗て押川方義先生を搖がした一言であつた。果して此三月後、夫人は早くも未亡人となつて居た。

此家で茶湯の老宗匠に紹介されたが、再會の機がなくて今に遺憾に思つて居る。夫人の紹介では「之は江戶ツ子の金滿家宗匠で、昔上野戰爭の時、宮樣を其家にお匿ひして、密かにお落し申上げた義俠家だが、今は多くの貸家を所有して、安樂なお茶人ですよ。そうして隨分な慾張りでね。」突然の拔打ちに流石の老宗匠も稍々狼狽氣味で、漸く茶禪談に興を盛り返すのであつた。

（九）伊地知幸介男の將器

休職大將伊知地男爵は、青年時代に大西鄉の膝下に仕へて大いに敬慕して居た丈あつて、溫厚

寡言、度量豐かで、其大兵な體容までも似て居られる。其愛藏さるゝ西郷先生の書は面前で揮毫された物であるといふ。私は此書に接して始めて大西郷の筆蹟に首肯する所があつた。それは世上に屢々觀るやうな覇氣滿々たるものではなく、剛健中に溫情の彈力を含む所の、落着いた風格のあるもので、之でこそ大西郷を窺ふ事が出來るのであつた。

大將は奉天役で肺氣腫を病み、以來退職靜養中なので、自ら來つて吾門を叩いたのである。其篤實なる信賴の硏究は、久しからずして額字を書く腕になられたので、松方老侯に謝し、次いで私に感謝された。其敬虔の態度と其謙虛さとには、いかにも大將の器を現はされた。或日、舊幕僚の將校で稍々能書の者來りて、吾面前にて大將に進言した。「書などは勉强する程の事はありません。たゞ古法帖でも無暗に習へば出來て仕舞ひます。」との放言に、大將の溫顏は無言に引締つたので、輕卒多辯の將校も威壓されて沈默して仕舞つた。

(十)　刀家綱屋主人の實體

親友小此木忠七郎君の兄信六郎君、何れも刀劍鑑識家だから、自然刀劍商の舊家である綱屋と

の交渉が淺くない。私は刀劍家網屋と聞くと、いつも刀劍鑑定家の本阿彌光悅を聯想する。あの光悅の豐富な藝術天才には敬服させられて居るので、此刀劍家網屋といふ名に心が曳かれる。光悅とても折々は鑑定外の商取引もしたろうし、此網屋主人でも、商取引以外に鑑定もするであろうし、そこには共通の脈があるから、從つて書法の緣もあろう事を樂んで、其一家の教授を受合つた。其世襲名は小倉惣右衛門、力士のやうな大男で名は陽吉、其實體が印象づけられる人だ。其連綿たる舊家風の奥床しい取做しは、舊家育ちの私には至極好調子であつた。惜しい事には繁忙のため妨げられて、今一段といふ所で光悅と握手させる所まで至らなかつた。特に其妻君の弟に藝術味豐かな一人がある。一二回の稽古で別れて仕舞つたのは心惹かれた。

六問　大正三年から四五年へかけて、關西から先生を招聘する事が流行しましたが、其發展中、御記憶に殘つた人々に付て伺ひませう。

四　關西への書道發展

（一）　石川錦子の徹眼

御殿山の原六郎夫人が親戚の原田助校長へ推奬されて、其同志社女子部で開講したのが始まりで、神戸大阪へと擴張されたのであつた。當時原田さんは同校々長で信用が厚いから、忽ち人員が集まつた。醫大部長荒木の奥さんも颯爽と出席したし、村岡範爲馳博士も篤厚な學究ぶりを見せ、巖谷小波君の令姉も、凛とした温良な武家風に舍監の重みを見せて居た。

此原田校長の近親に石川錦子といふ未亡人が居て、性來の能書家だから、之に本道の書法を仕込んで一本立に仕立てるやうにと吾鎌倉へ差遣された。其時の話に「途上不圖、藤田靈齋師の修養會に立寄りたるに、會後同師は私を認めて治療師の器ありとし、懇に修養を勸告さるゝに據り暫時暇を乞ふて御相談に來れり。」と云ふ。私は言下に靈齋師の眼識を賛嘆して、再び透徹する其眼を見直した事がある。

果して幾何もなく神戸に修養所が成立ち、腹式呼吸の治病術も信用が高まり、支部長の貫録も整ふに至つたが、才氣煥發の危なげが稍々顰蹙させるものであつた。それから遠からず藤田師と離れて、精神療法に重點を置き始めた。

（二） 藤田靈齋師の腹式呼吸

白皙美髯の道士、靜かに坐禪觀法の座を出でゝ、白隱禪師の夜船閑話に啓發し、科學萬能の庸醫多きを見るに忍びず、精神療法の黎明期に敢然立つて、坐禪治病の闘病法を叫ぶ。啓蒙の雄叫び、漸く斯界の隆昌を來すに至つた。

殆んど同時に岡田式呼吸法の大流行を來したが、根柢深き坐禪觀法の修練には優るべくもなかつた。靈齋君の異數な事は、腹形を視て肚裏を相するの眼識ある事で、刑務所の實驗で屢々囚人を相するに的中せざる事がない。終に其實驗は宮殿下の台臨を得るに至つたのであつた。其頃はもう腹式呼吸の治療法は世間に葬られて、氣合術や心行術や精氣術等の精神療法と、手壓や手熱のエネルギー療法とで賑はふやうになつて居た。私は同君とは素より禪門の同士だが、又松村君

を通しての知友でもあつた。

（三）女丈夫森わさ子刀自

信念と氣魄とに引摺られて、技藝女塾から高等女學校を築き上げた神戸の森わさ子刀自、嘗て若かりし時、矯風會長の矢島梶子さんの偉さに憬がれ、それが今、上京の途、目前を通過する事を聽き、慨然として立志の門出をしたといふ熱血家だ。其裁縫學舍の背後に祥福寺がある。そこの老師に參禪して信念の臍を固めて居るから、修行心が深くて話に力がある。宗教は無言實行で自己の修行を一義とするといふ話に、「耶蘇の牧師は學識と辯舌はあるが、修行が成つて居らん。餘りツベコベ言ふので、私はいつも押しくらをしてみますが、何れも一押しで相手にならん。肚のない證據だから、口頭禪の駄辯に過ぎん。先生も一つやりませう。」と、地方女丈夫の片鱗を現はして來た。私は一指を示したが、瞎驢だ。ムンズと坐して押して來たが、笑止の至りだ。女丈夫が私の信念の深さを試驗しようとして、却て試驗された結果となつた。

併しその信念不動の女丈夫を助けて、其事業を成さしめた者を忘れてはならぬ。それは其傍らを離れぬ一才女、山西斂子と其夫君とである。

天知書友會發會記念（美術倶樂部）

（後より二列目中央　先生と夫人）

天知喜壽賀筵（蘆屋婦人組）

（前列中央 先生・その左 夫人・小林健齋氏）

天知喜壽賀筵　（鎌倉舊武藝門人組）

右より　前列　永野目録・村田・先生・山本目録・河野
中列　加藤中段・久米中段・菅埜目録・鶴見目録・宮本初段・臼井
後列　成毛・原・進藤・松岡中段・山田　其他上より　木村初段・永野（目録は五級）

老年時期

答者　訪客數名

問者　星野天知

一問　關東大震災から引續いて關西へ隱退なされた動機に付て、其狀況が承りたし。

答　大震災の前後

私が書法社會へ大師流を發表したのが明治四十一年で、十年後の大正六年に後援會が起り、之を書友會と名付けて門下中の熱心家が結合して、毎年上野美術倶樂部などで大會を開いた。之が六回も續いて機關雜誌難波津も二號まで出版されて、出張所も六七ケ所と成り、會員も千四五百を突破して全盛に近付いた。斯うして大正十一年まで來た時、牛込組に義俠な婦人が居た。それは人格に高評のある辯護士今村力三郎氏の夫人正子といふ人だ。此夫人の熱心な主唱で私の還暦祝賀會が催され、會員の醵金で、私の熱望する京都見物を一ケ月もさせてくれた。それを聞いて京都の會員小林好太郎君が其家を宿泊所に提供された。尤も此人の父誠一といふ人は、武藝の所で述べた通りの擊劍道樂で、同門舊知の朋友であつたからである。

（一）畫家輝蔭君の脫俗

此誠一翁の前身加藤正吉といふ男は、私と何の宿緣あつてか、同門劍士の多い中で頻りと私を仇敵視して、他流の工夫を練磨してまでも打勝たうとする程であつたが、更に又期せずして千蔭流書法の研究に沒頭したり、宗教に志を立てたり、其趣く足取りが私と同じであつたのも奇緣と思はれた。其一子好太郎君も擊劍と千蔭流の假名を好み、十七八の頃から早く吾門に入りて、畫筆の他に今尙書筆を離れぬのである。此人が輝蔭君で、書畫の他に和歌を好くし、琴は鈴木鼓村師の門下である。其藝術性は塵を破るを辭せず、名を立てず、藝を沽らず、超然として獨り藝を樂しむ、彩筆非凡、能く緻密と輕妙の筆致を現はす。今尙ほ壯年、遠からぬ純大和畫の復興時期を待つものである。

私の彩筆は少年の折、玉章畫伯を煩はし、中年に秋畝といふ人に就き、老境に入りて輝蔭君の大和畫に負ふ所が多い。

（二）還暦の京めぐり

嘗て京都一燈園に吾書法普及の希望もあつたので、西田天香君に南禪寺宿坊の斡旋を託して僧堂生活を望んだのだが適所を得ずして、西陣出水の小林氏宅に一ケ月の滯在で、名勝舊蹟の旅人となつたのである。

此間の見聞に付き、今尙記憶に明かなるものを少し擧げて置こう。

「最初の茶室」といふ、銀閣寺內の其枯淡味と、木像義政の政治に失敗しそうな藝術相貌の名彫刀。

强烈な信念の焰に頭の下がる、安樂寺の玉蟲鈴蟲の麗人墓。

靑蓮院の尊圓法親王の大器を仰ぐ御筆蹟。

一力亭跡の赤い壁と、歌舞伎櫓の特種の屋根組、舞子のダラリ帶、此等で漸く四條通りの貧弱な近代化の澁面が解ける。京都情趣は、此等を見てから高臺寺境內へ入りて、五條坂あたりの雰圍氣に限る。

嵯峨は宜い。妙心寺の園藝四流の腕競べ松、裏手の黄鐘調の鐘は兼好法師からの傳言で尊い。

うゑおきし花とならびの岡のへに
　あはれ幾代の春に過ぐらん　　兼好

私は思はず西の空を眺めた。そこには双びが丘が緩やかな線を並べて霞んで居た。

養蠶最初の蠶神社、之は小祠だが、傳說を先づ聞こう。それは牌史遊仙窟が渡來した時、讀める人が無い。宮廷の博士達が苦惱の極、此所の老翁を訪ねて了解した。此事が上聞に達して再訪した時は、老翁既になかりしと云ふ。思ふに、それは養蠶指導にでも渡來して居た漢民でもあつたろう。

舊の糺ノ森なりといふ一條の溪流、そこに石の小さな三面鳥居が、磊々たる石塊上に建つて居る。それは屢々、宗家の蓋置きに糺ノ鳥居形といふので見知り越しだから、一段と由緒感が高まる。尤も之は模形だ。

廣澤ノ池に臨む遍昭寺山、東岸の千代のふる路、六代御前潜伏跡の稚兒神社、それから

ひと本と思ひし菊を大澤の
　池の底にも誰か植ゑけん　　友則

菊花が最初渡來したのを植付けた、大澤池の菊島の荒れた姿。
大覺寺の閻魔像は篁の甦り作といふ逸物、渡邊始興の正寢殿妻戸の古美術。
落柿舍の投石じみた去來墓の枯淡さ、正風に緣の遠い今の俳人を諷刺するかに見える。
小楠公首塚と列んだ足利義詮墓、之は義詮の遺言だと聞いて、超脱人格に思はず跪坐した。
厭離庵の寂寞枯淡の快味、嘗ては小倉色紙の名聲が吾上流社會を威壓して、豪華美術の高峯に聳えた。それは、此山莊の襖を飾つた一時の風流からであつた。

小倉山みねのもみぢ葉心あらば
いま一たびの御幸またなん　　定家

此山莊跡は此處か。
あだし野の無常感は痛い沈默だ。

黑木ゆひちがやおほひて化野の
あだなる世にもしばし住かな　　樂叟

祇王堂で若い麗人尼等の木像を儚んだら、八十六歳の上品な尼さんに親しんだ。
新田義貞の首塚で勾當內侍を床しがつた恍惚感から、忽ち横笛の像を想ひ出し、往生院やら三

寶寺跡を探ねると、徒らに野草離々として、其歌石さへ見當らない。

　梓弓たれとて何か恨むまじ
　　引かへすべき身にしあらねば　　横笛

再び戀をしたくなつて來た。

法王の戀を遺した小督局の車琴は、常寂光寺に古雅な車形の彫刻を見せて居た。

　吾ものと秋の梢を思ふかな
　　小倉の里に家居せしより　　西行

此歌で再び落柿舎に引着けられて、軒端の柿の木に折からの心を捉へられて仕舞つた。

黑木の鳥居に小柴垣、源氏物語の哀傷感に制伏される野ノ宮情緒、嫋やかな一面の竹籔にも忽ち參つて仕舞ふ。

(三)　生き字引下橋長敬翁

鴨河の水と比叡颪で鍛え上げたといふ一條家の老家夫、此翁、實に公卿諸家の古實儀禮には生

字引と云はれる人で、嘗ては早稻田大學に聘され、其口演筆記に舌を捲いた事がある。書博士歴代の墨跡を所藏して居らるゝので、一夕小林氏の紹介で、其慇懃で溫厚な面に接した。京都式の薄暗い小部屋だけに、一層長大にして前踞みの姿を見た。

歴代の大師十二點は珍らしい物だつたが、條幅文字は、岡本保考だけは流石だと思つた。元來書博士は餘りに筆法に重點を置いた故か、字形には、現代の眼を引着ける程の發達は無かつたやうだ。

(四) 京の郊外行脚

奈良は矢張り靑丹好しで、丹塗りの春日燈籠が老杉に反映する色彩。落着いてからは、九重の奥深き御身にて親ら運び給ひし土塊の功德も著しく、大佛巨像に下げる頭は、忽ち良辨、行基の大導師をおろがむ唯一の轉害門に往き當る。飛鳥藝術の陶醉境、猿澤池畔で曉の鹿を聽くのは佳かつた。

西大寺、藥師寺、唐招提寺から、夢現の想ひで法隆寺五重塔の前に立てば、愕然として目を覺

ます。飛鳥藝術は此一瞬に皆汲ひ込まれて仕舞つた。凝念工夫の靈場、夢殿には改めて太子を見詰める。

京の北山では鷹ケ峯光悦寺が奥床しい。高村光雲の光悦像、大倉鶴翁の再建太虚庵も尊き芳志を受入れたが、軒端の額字には寒さを感じた。光悦と鶴翁、それは餘りにも盲蛇である。

偖又、通天橋三ツ葉紅葉の殘興。小野の退耕庵の三字。石峰寺の禪書額、木庵、即非には眼を拭ふ。若冲の五百羅漢狼藉たる中に貫名の圓柱碑が淋しい。瑞光寺に三本竹の塚がある。深草の元政上人に相應しい閑寂味があつて、殘花道人を想ひ出す。瘠せた三竹が今も音を立てゝ居る。伏見の雀のお宿で、愛らしい淸げな老母を見て天井の巣を仰ぐと、慈悲の光が輝いてくる。一走りして八幡の石淸水。先づ仁和寺の年寄り僧を想ひ出して、何事にも先達の尊さをと、麓から登る。

松花堂の跡捗々しからず、下りて新築の松花堂泰勝寺を訪ねる。舊松花堂茶室は郊外に去り、爰には瀧本流一家の供養塔ばかりで、俗氣室に滿ちて居た。

さて方向轉換で、月は山、風ぞ時雨に鳰の海。そこの三井寺側の念佛院に源兵衛の髑髏、古來の殉敎的熱烈の信仰心に手を合はせる。石山寺式部の籠室には遠慮して蹈込ます。

喜選法師は假名遊ひの難を避けるために、世をうし山と人は云ふなり、と逃げたのではあるまいが、私は之を宇治と云つて、直ぐ源氏物語を想ひ出す。黄檗で暫らく聯書を讀み歩くと、いつしか唐土（もろこし）の陶醉に落ちる。

　山門を出れば日本の茶摘唄。

こう訂正したいやうな句碑を見る時、始めて柴舟に浮舟塔などを再考する。

此處の景色は橋上に限る。此處の美術は鳳凰堂内に限る。それに朝の川霧、夕暮の鶯。

ずつと離れて、小原の寂光院に三千院、それも小原女姿と初染めの紅葉、平家の哀詩あつての事、何と云つても紅葉は三尾に限る。

汗の高尾登りで、先づ海老藏の危なつかしい揮毫額、之で名優の裏面を窺（のぞ）き、清麿公と文覺上人との心境を仰いで、却て敏行卿の鐘銘に不足を感じ、滿山を壓する空海の額字に胸を轟かす。槇ノ尾西明寺の空海木像が、靈世鷲心の氣焰を軒端に吐き出す想ひがする。栂ノ尾高山寺の栂の木、三尾各境の朱塗り橋、青葉七分の境地更に佳し。

（五）劇震風景

大正十二年は例年より暑い夏であつた。特に殘暑が嚴しくて九月一日は早朝から厭に重苦しい暑さだ。小學校も今日から始まるし、娘達もそれ〴〵上京すべく準備したが、餘り變つた暑さで天候も不氣味だからと、家內が引留めて居たし、私も泊り客と客間で用談中であつたが、突然東南の海上から大鳴動が追ッ被さるやうに襲來するや否や劇震が來た。立上る客を制して軒端を視た。硝子戸が踊り出して、弓を放つやうに外れ飛んだ。他の硝子は砂のやうに揉まれ落ちるし、障子紙は漣波のやうに揉み切れ、庭は一面に微細な土煙りを立てゝ居る。之は尋常な地震ではないと見たから、一同に庭前に飛出す事を叫んだ。其時は第三震の襲來で、家鳴り震動と共に四圍がバッと明るくなつた。それは邸內の二階家や丘上の洋館が一時に轉覆した時であつた。二棟の平家居宅が、二十四五度のめり出たり又起きたり、四五回も搖り動かされて、壁は拔け、天井は垂れ下がり、床は拔け、椽は外れる。同時に走り寄る三人の娘と二人の息子、妻も漸く姿を見せる。强い餘震で崖岩が轉落し、巨樹が覆へる。軒を潜り屋根を踏み、隣莊から怪我した末娘を拾

容し、近隣救助に奔走後、直ちに人を走らして籠城食物の買集めに着手する。早手廻しの積りでも白玉粉二百本を獲たばかりであつた。薪炭、鹽、醬油、梅干の貯藏はあり、井戸に水あり、畑に茄子あり、土芥と煙とで赭黒かつた空も、明澄たる星空となつて往く。折から鮮人暴動の蜚語が聞え始めた。翌朝には既に暴徒が山ノ内へ襲來との報があり、隣人が其闘爭狀況の目撃談を傳へてくるし、一方には海嘯襲來の警報で前の畑地へ避難に集まる人が充滿した。警官は行方不明で、町には自警團が組織されて、拔刀で巡廻する。警報係りが時々警報を觸れて來る。私も壯丁を集めて團長となるといふ有樣、其夜は徹夜、邀擊の悲愴な決心をする程であつた。深夜一發の銃聲が響いて、潜伏群が騷めくと見る間に、走り出した大男一人、警戒線内に躍り込んだから、已れと思つて立上つたら米國人であつた。街からは自警團三名が拔劍を杖にし、鉢卷、襷で巡廻して來た。親方や俥夫などの壯丁である。私は賴んだ。「敵の殺氣を認めないうちは斬り着けぬやうにね。」と、持ちつけぬ拔劍の方が却つて危險であつた。

昨夜避難畑に來て居た高濱虛子君一家の人々に託して、家人一同其家へ立退く事となり、男子だけ居殘つて、尙鮮人の襲來を防ぐ事となつた。雨が斷續的に降り出す。此日の邀擊氣分は男子ばかりなので、僅か五人だけだが稍々面白味を感じた。虛子君とは前より知合ではあるが、此夜

その家に避難の事があつてから、愈々親しいものになつた。

鮮人暴徒の流言は有耶無耶の中に薄らいだが、海嘯の恐怖は終夜絶えなかつた。そこへ海賊が捕へられたといふ噂が立つ。而も其張本人は、其店先の石の大鳥居が崩落して壓死したといふ。八幡宮の神罰覿面談が流れて來た。火災は雪ノ下一面と長谷觀音前と、下馬から原ノ臺までゞ鎭火したが、震源地に近い此地は、東京、横濱などよりも震動は一層猛烈であつた。死者は此町では八十餘人に過ぎぬが、お傷ましい事に宮方がお二方あつた。宮邸に隣接した松方邸も倒潰して侯も負傷され、年後薨去の因を作つた。八幡宮の舞樂殿も潰れ、箭大臣門も石段上に倒れ懸り、太鼓橋も大燈籠も崩れ落ちた。

榮枯盛衰の急劇な人生の眞相に打たれた人々は、暫時たりとも本然の人間性を現はして、無我無慾の境地を現はしたのは賴母しかつた。知らざる者に與へ、路傍に施し、一汁一飯を頒ちて惜しまず、家具調度を散らして顧みず、外界は地獄だが、内界に天國を現はした。長明は榮枯の流轉を厭ひ、芭蕉は有爲轉變の無定を儚んだが、私は現世の此定態には既に觀念して居るから、今更愕かない積りだ。素より豫期した事ではないけれども、災難の打擊を有利に運用してこそ、修行の甲斐があるべき筈だ。昨秋漫遊視察した關西の、明朗な天地に殘して來た希望こそ、早くも

實現が來たのだと考へた。

この最悲境地を利導するには一家の氣分をも明朗化せねばならぬ。此あらゆる曲り傾き、破れ碎けた視聽を拭ひ去らせ、悲慘の境地を轉換させるのが急務だと考へ、被難民通路の開通を待つて、娘、息子等を軍艦に便乘させて關西へ出立させた。それは、昨暮移り住んだ次女の家が西ノ宮郊外青木（ヲオギ）にあるからであつた。着替へ一包を抱いて整はぬ身姿で、暗夜を出で往く後ろ姿、何れも分別よく親に分れて往く雄々しい擧動には、悲喜交々の涙なしでは居られなかつた。半倒潰の邸宅所置から、家財家具の處分を概略濟ませ、蓄財豫算を整へて、郵船ケビンを高濱家と共に占有し得たので、家族を擧げて關西へ向つた。それは其月の二十一日の夜であつた。

(六) 高濱虛子先生

私は敢て先生の稱を用ゐる。穩健で上品な好紳士、如何にも革新俳諧の先生タイプで、常住坐臥是俳諧といふ宗匠ではない。私は漢學系で風流氣に乏しく、武骨で洒落氣が剛いから、俳諧畑には鍬を容れないけれど、元來が文學畑の同人で相識の仲であり、それに長男吉人（よしと）への知遇と、

天知書畫

此震災とが因をなして、兩家の交渉は親しくなつた。

私の書論では、書は毛筆の遊戯三昧で其リズムが其人の性情を現はし、無我の三昧境に到つて書禪一如となる。劍法亦斯くの如く、俳諧更に斯くの如しで、畢竟言葉の遊戯である。そして其性情リズムを季節景物へ假託する事で、其長所は大衆詩にあるのだから、一流一派に拘泥せず、なるべく廣範に渉つて奬勵すべきであると思ふ。それには、昨今のほとゝぎす社中の雜詠のやうに、平凡で俗氣のある句をも許すといふ遣り方が好い。主觀を客觀の中に潜めるといふ位の條件で取締るのは賢明だと思ふ。何しろ病的の極端論は緩和すべきものだ。虚子先生は早くから此融通性に富んで居る熟達の士だ。

問二 震災の故とは云へ、久しい經歷のある鎌倉を捨て、權威ある地盤の東京を弊履のやうに擲つて、忽然と關西へ引退されたのは、如何にも名利外の先生たるものをよく說明する所ではありますが、古い過去を知る者には甚だ遺憾に思ひます。併し父祖五代の純江戸ッ子として其肌違ひの土地に、よく平和な住居を樂しみ得るものだと評判する程ですが、其深刻な心眼

に映る、他山の石たる評などに就いて伺ひたいものです。

答　關西隱棲後

（一）吾が目的は所謂成功に非ず

いや有難い同情ではあるが、私は少し違ふ。成程經歷や地盤は尊い。併し其事業の「成功」といふ事からが疑問符つきで、多くは己れの名譽と利得との成功を云ふものらしく、眞に人世を益し、人生の本道を往くといふのは尠くて、成功に焦慮して無理をする者が多く、種々な惡手段を用ひて、人を苦しめ、人を虐げてもと、成功熱に浮かされる人が夥しい。私は人世の一分子として、吾出來得るだけの範圍内で、人世の急務と認めた事に應じて働くだけの事で、小さな自己の損得や成敗などには餘り重きを置かないのである。爰に過去を淸算して見ると、敎育事業では、時の政府も民間も、女子敎育といふ事を、西洋人の慈善心に放任して少しも顧みないから、同志の士と結託して働いたのだが、特に私は、眞の日本女子たらしめんと武術敎育を實行奬勵して、

自力の續くだけ教育急務の烽火を上げたのである。文學事業は、時の社會が餘り文學を輕視して文化向上に急務な事を知らない。之は大事だと思つたから、旗幟を押立てゝ覺醒を促したに過ぎない。商業家となつたのも、父祖の家業再興の急務があつたためで、農業家となつたのも、父の仕散らした遺業を繼續所理せんがため、書法の事も松方老侯の委囑を重んじて、本道筆法を流布せんがためで、何れも出來るだけの力と誠意とを奮つて居ただけの事で、成否利害を專念した事はない。それ故、何業でも仲間附合ひを避けて、其世才に染まぬやうに心掛けて來た。

斯ういふ考へだから、此未知の地に未知の客となつて、無名の一老客として晏如たり得たのである。

(三) 關西の禮讚

傾いた軒、歪んだ橋、曲つた塀、折れた壁、此等の直線を失つた世界に目慣れた儘で、曲線運動の船旅をして上陸した其眼で、先づ直立の線を見上げる癖がつく。高い建物、長い電柱、林立する樹木、さては軒や柱など、そして二三週間安危を共にした高濱一家の人々と別れ、青木(ヲオギ)

の石井方に一家の無事面會を喜んだ。續いて軒端の噴井に清水を掬んで、聳ゆる六甲の山容を眺め、簡素な矮屋住ひと質實な田園風俗とに、歡呼の聲を揚げぬはなく、先づ關西禮讃の第一聲を聞いた。

この處女感に誤りはなく、爾來私を永く此地に引留めたのも全く此氣候風土の勝れたるに據る所で、精神的に引着けられる所は其舊文化の古跡にあり、人事人物には接觸する事を遠慮した。それ故、心靜かに既に十餘年も安居して居るのである。元來關東人が關西に來て關西を嫌ふのは其考へ方が違ふからである。關西は由來物質的文化の成立ちで、而も古い世紀を有つて居る。其主腦たる大阪は、物質外に世界はない。損得の他に算盤はない。それを他から來て仁義德業を求め、義俠博愛に不足を唱へ、人道を說き、眞僞を論ずるなどは不覺の事である。私は斯う覺悟して居るので、偏に其物質智識の練達さに心服謳歌するものである。又それ故、在住既に十五年、實業家中未だ一人の知己を得ないのも其證據であろう。偶々二三の人はなくもないが、何れも他鄕人で、又財界の人ではない。醫家の異材大坪德三博士、此人は前途ある精神家であつて、私とは默契のあつた仲だが、今は大坪地藏に祠られてある。此他施療道士の福井松湖翁も逝き、戸川殘花翁も既に去り、爰に殘つて居る人に小林健齋翁がある。此翁の事は後段に述べる。

さて關西文化は物質文化旺盛のため、著しく精神文化の劣つて居るのは止むを得ない。道德方面は無論だが、文學方面も著しく低級で、高尚な所で俳諧程度である。未だ地ロ駄洒落などが全盛で、吾少年時代の東京市民を想ひ出される。少女歌劇が他の劇場を壓倒し、浪花節がラヂオを賑はせる勢ひ、尤も東京も商民街は之に近いものであらう。

(三) 小林健齋翁のエネルギー

此翁の事を談る前に、少し吾治病術の事を述べなければ分らぬ。

柳生但馬守が狐憑を落した話がある。私はそれを笑はない。武藝の奥儀は心氣力の三つが一如となる事で、之を合氣と云つて敵のそれを挫くにある。肉體と精神は二つにして一如だから、精神力さへ確立すれば肉體の損所は恢復する。病魔と云へば此二つの缺陷だから、此心氣力を傳へさへすれば病魔は退散する。肉體の損傷程度が強くて回復力が遲ければ、肉體方面からも回復力を促す。そこで投藥の必要が起る。それ故、吾開祖荒木又右衞門よりの皆傳許狀には此合氣術と藥種の事が傳つて居る。偶々腹式呼吸で專ら治病する藤田靈齋君と相知るを得て、それが坐禪修

行の力で、白隱禪師の治病術を會得して、衆人を救濟するといふ事に共鳴した。其頃は岡田式靜坐法が流行して居る際であつた。其後圖らずも舊友福井松湖著「心行」の一册を手に入れたが、此治病術は武藝や坐禪修行に據らず、一意祈りの精神力から來たもので、凝念の必要上、呼吸を整へ丹田を鎭めるのである。此福井道士の事は前章にも烏渡掲げた通り、透谷が「違つた牧師」と私へ紹介した人で、胃潰瘍で一度び死の宣告を受けたが、專念祈ること一週間、靈感に應じて起床し、即日熱烈な說教で人々を愕かし、病者を集めて之を癒し、終には一喝して治癒するの勢ひ、聖者の奇蹟も怪しむに足らぬ有樣なりしと云ふ。私は及ばざるを知つて直ちに此友に師事した所、君の修行は既に治病し得る力ありとて、先づ紙撚りを以て杉箸を打折らしめ、次ぎに凝念して紙片を燈火に覆はしめ、或は掌を燈上に翳させて、燃えず火傷せざるの實證を以て、自信力を喚起させられた。之に據りて漸く治病の確信を得、知人と家人だけに實施して漸々功驗を現はすに至つたが、關西移住後、不圖知人となつたのは此小林健齋翁である。

或日次女の露子の話に、其親友の母が急病の爲め即時入院治療すべく醫命ありしを、東京より其父馳せ來りて治療せしに、蛔蟲を吐出して其病即治せしと云ふ。私は元來漢藥の長所を唱導する者で、且つ科學的醫術の籔醫術に陷る弊ある事と、看板凡醫の多き事に傷心する者で、從つて

聖心女子學院第三期卒業記念

（前列八人目・星野女史）

其社會外の治療者に注意を怠らぬ所があるので、忽ち其物語を手繰つて直樣吾身に治療を乞ふ事にした。

健齋翁は問はず語らず、手が先づ患部に觸れ、患脈を走つて患根に到るのである。私が胃壁を病むのは、少壯の折墜落して腸壁を傷け、其患部全癒せずして、終に連進して、腸より左脚へ往き、一方は胃壁外筋より肩等に走る。其墜落の狀斯くの如しとて其姿勢を示された。私は怫然とした。よし墜落しても武藝者は左樣な醜狀を現はさぬものだと答えたが、二三日後に不圖想ひ出したのは、壯時松平隱岐守の下屋敷大火の際、消火に登つた文庫藏の高屋根から滑り落ち、廂屋根で臀部を打ち、其まゝ無事に跳び下りたが、此廂先きへ腰掛けたやうな姿勢が其言はれた通りであつたのに氣付いた。それのみならず、四五回の治療で諸所の患部、殊に五六年持續した胃病も全癒したのに愕いた。後年拇指の瘭疽が内攻して持飽ぐんだ時も、三回治療で無痛全癒したのにも愕いた。科學萬能の淺見者には、緣無き衆生は度し難いので對手にしないが、吾誠意に從ふ者を紹介して、幾人その難病から助けられたか眞に數へ切れぬ程の善根を施した。科學は迷信を破つたが、精神界に於ける大自然力の大いなる研究にも盲目になつて仕舞つた。科學の長所を取入れた西洋熱が、東洋で長所の心靈界を輕蔑して仕舞つたのは千慮の一失である。翁の治療は談

笑の間に行はれるので、終日三十人を扱つて尙ほ疲勞を覺えぬと云ふ。吾が凝念療法は左樣な氣樂なものではなく、多く精根を消耗する如く感ずるので、終に匙を投げて降參して仕舞つた。それは翁の靈手を得なければ、學んでも得難いものと思つた故でもあつた。

翁は言ふ。私は何も知りません。唯此手が治療してくれるので、病が癒えるかどうか知りませんが、皆さんが癒えると云つて參られるのであると。全く虛心坦懷である。それが肺や瘰癧の腺病系でも、婦人病、小兒病と云はず、萬病を簡單に扱ふ所に驚異がある。而も此翁は生物識りの誤解を想ふて、エネルギーの旺盛に發散する靈手感得の動機を言はない。併し私は識つて居る。それは其尋常ならぬ貧困苦行の體驗と、異域の旅途に於て難病のため死線を味はひ、必死の祈願より迸り出した靈力で、人間以上のエネルギーが活動して居るのである。

(四) 聖心女子學院の誕生

落花水に漂ふ人世の流轉も、突風激波のやうな震災では往々意想外な奇緣を結ぶものである。其重もなるものに高嶋直一郎君夫妻が居た。財閥の大倉喜八郎君の孫で、歐米趣味の人で、私を

單に書家として知り得るに止まるが、震災以來二三年といふものは、非常な親しみと厚誼を寄せられたものだ。それは震災前夜の私の注意談が偶々同君の命拾ひをしたといふ報恩の美談からであつた。私は常に同君の明敏なる義俠と、夫人花子さんの明朗なる誠意とを尊敬する。

此夫人が、私の家內を聖心女子學院の學監に推薦したのである。想ひも寄らぬ事と固辭する家內を私は適材として慫慂した。それは豫てから私の宿望であるからである。家內は五十三歲の今日まで既に八人の子女を成育して、賢妻良母の任務は果して居るが、其良妻賢母ぶりよりもアールヌボー式の太い線が、其疎漫の持ち味を活かして居る。之を活用させず、徒らに一家に引留めて置く事は、吾が才器擁護の責任上、常に心苦しく思つて居たので、自ら蒙むる老後の不便などを顧みるに暇もなく、之を推擧勸誘したのであつた。敎育は素より吾が第一主義であるが、特に此聖心といふ敎育團體は世界的のもので、母性愛を基本とする、各國の修道者の敎育者團體から成るもので、敎育に國境は無いが、各國情に應ずるを本旨とするから、此方面を負擔するに足るべき人物を探求するのであつた。此探求者マザア・エッチマイヤアといふ婦人が又傑物で、家內を引見して忽ち意見相合し、許すに高等女學校と小學校の設立を以てした。果して此コンビは、忽ちのうちに好成績を擧げて、堂々たる大校舍を寶塚小林（オバヤシ）の山上に設立するに至つたので

ある。

(五) 星野萬といふ修業臺

褒めれば惚し貶せば自慢で、誰も妻の事は話し憎い。成るべく他人行義で話す事にする。

舊幕時代、南部藩の若殿お守り役に松井千代瀬といふ氣品高い老女が居た。其長男が東顯寺智定和尙で、長女の子が萬だから稍々佛緣もあるのだが、早く異教の遺愛女學校に入り、學事專念で師範學校を終へて上京し、明治女學校に奔りて巖本校長庇護の下に其高等科を終り、歸國一ヶ年、祖母に事へて報恩の志を致し、性來の健康と剛情とは能く誘惑と艱苦に堪へて驀進一路、武藝は中傳允可に及び、料理は二代峰吉の高足、華道は池ノ坊紫幕の許可を受く。毅然たる高風と肅然たる禮讓とは、當時士族娘の典型との評があつた。早く基敎の修養に據りて謙讓と慈愛とを取入れた事は、其生涯の成功であつた。

實を云へば、私は此等人々の贊評よりも、其推察力に鈍い鈍器が注目された。之は缺點でもあるが、其無頓着な間暢びした所が女流に得難い大器と視て居た。或惡評家は金屛風と評したが、

和歌（著者書）

私は良い意味に於て賛嘆した。この無能の能、そこに其大きな能のある事を期待したのである。榮華の境地を去つて隱棲する吾が一家妻に終らせるに忍びないので、好機あれかしと待機して居たものだが、機終に熟して聖女等と共に、學院創立の柱石に据えられたのは、私の滿足する所である。而もその處女期には、吾が頑迷の堅氷を破つて、慈悲眞諦を誘導した修行臺であつた事を告白する。

入木道書法に、書いて木に入る事三分、石に入る事一分といふ事がある。所が此修行臺石は默視凝念四年にして微動せず、五年にして皮に及び、八年にして僅かに肉に徹するといふ不退轉の臺石であつた。

三問　先生にはいろ〳〵の餘技とか裏藝とかいふものがおありのやうですが、今日は和歌、俳諧などゝいふ詩的の所を伺ひたく思ひます。

答　表藝と裏藝

（一）叙　事　歌

私には表裏と區別する程の技藝もなく、又餘技などゝいふ程の餘裕もありませんが、書法を標榜して居る今日では、武藝、作歌、大和畫位が裏藝とも云へませう。それでは古い所から撰り出す事にします。

私が今住んで居る近くに業平橋といふのがある。嘗ては在原業平の邸前橋だそうで、朝臣は常に此橋を往復したので、終には東下りの時も此橋から出たのだと想つて、其心境に同情の餘り其圖を描きました。其時の添詩から揭げます。

業平朝臣の東下り

（一）み苑に咲ける藤の花　　根さへ枝さへはびこりて

鎌倉青磁器（加藤春慶作）

また咲きいづるひと房の　花のほこりの香ぞ高し

（二）此花折らば藤なみの　色あせなんとかきむしる
うまし男の狂態に　流す浮名のあくた川

（三）露とけなまし白玉の　疵つく胸も惟喬の
君にむくゆる一しづく　ぬれしたもとを抱きつゝ

（四）さすらひ出でしあづま路に　見やる富士がねいつとてか
鹿の子まだらに雪のふるらむ

清少納言

（一）げに麗はしや桐壺に　色さま〴〵の四季の花
桃李物いふその中に　秋海棠や蘭のはな
雅びにさびし茶の花を　かねしその君少納言
露にすねたる萩のはな　くねる風情ぞをかしけれ

（二）御苑にうつす一もとの　花のをとめのかゝげたる
御簾にかゞやく香爐峰　仰ぎて高きその宮の
臈たき御手にすがりつゝ　才氣才筆最一の
ほこり時めく手枕の　草子は壺のうま酒や

（三）集まる直衣かり衣を　裙帶(くたい)の領巾(ひれ)に弄ぶ
見よや殿上の一驕花　高きほこりも夜をこめて
雞のそらねを願ひてし　袖につゝめる悲みを
知るや宰相その人も　几帳のかげに光なや

（四）倏ち起る夜嵐に　野わきの跡の侘しさよ
傾く軒をあはれよと　道ゆく人のつぶやくを
ほこりに生きる老の身に　多恨の焔ほとばしる
聲も嗄れゆく枯れ姿　駿馬の骨を買はざるや

實朝卿

（一）きぬ張り山の月暗く　星の影のみ輝きぬ
闇にせめげるけだものゝ　あはれなりける世の様や

（二）なげけどそむくすべ知らず　吉野の山も住みうしと
心そゞろに浮き雲の　たゞ只管に迷ひつゝ

（三）錦の床にうきふしの　爲す事あらぬ君かなと
言へば言へかし史論家の　ひが目をかしやわが使命

（四）兒戲にひとしきまつりごと　われは空飛ぶ鵬翼（おほつばさ）
鷲の山ゆく心もて　眞如の月にあくがれぬ

（五）一夜林霜風あらく　羽衣も破れてつゆ時雨
ほすよしもなき胸の内　もゆる焔をいかにせむ

（六）たきゞこれども鎌倉の　山は淋しく暮れはてゝ

つはものどもの夢の跡　おくつきのみぞ苔むしぬ
（七）世は幾かへりかへるとも　詩魂いよ〳〵かゝやきて
不朽の命いまもなほ　金槐集を見よや看よ

虞　美　人　草

（一）あな麗はしや芥子の花
虞氏が舞ふ袖露けくて　よし燈火は暗くとも
雛のあがきをとゞめつる　麗はし姿ほこらまし
（二）もろきさだめと嘆きぞよ
たゞひたふるに散るまじと　世をしむさぼる心せば
物のあはれも知るまじき　見憎きものと成なまし
（三）あしたに道をきゝえなば
夕べに散るも悔いまじき　いにしへ人の心こそ

げに美しの散り姿　あなうるはしや芥子の花

白百合の花

（一）ゆりと云ふめの子ありけり行きづりに
會釋じ往けば落ちかゝる　かざしの花の紅ゐは
若き心を染めぬべし

（二）ゆりと云ふ娘ありけり宵やみに
かどを出れば浮きいづる　白き浴衣の伊達もやう
ほゝゑみ見ればほゝゑみぬ

（三）ゆりと云ふ女ありけり物いはで
一もとくねる枝ぶりに　萩の下露下くゞる
なみだの袖の露けしや

（四）ゆりと云ふ人妻ありぬ露霜に

枯れたつべきを降る雪に　又さえかへる白ゆりの
しろき面わぞかぐはしき

袈　裟　女

（一）露ふかき淺茅が原に迷ふ身の　哀れ氣强き女郎花
狂ふ野わきのあらび風　折らせて折れて身をすてゝ
浮ぶ花びらひら〳〵と　悲戀にもがく煩惱の
ほのほ逆まく高平太

（二）頓生菩提のべに筆に　隈どり凄き荒法師
一蕾了して咲きいづる　百花爛漫目もあやに
笹龍膽につちかひし　此たをやめの力草
好しや闇路に入りぬとも　袈裟よ〳〵と謡はれし
露の姿はかはらじな

櫻の嵐山

（一）誰を戀ふとて喚子鳥　はるけき聲に目さめつる
嵐の山のうすがすみ　茜いろ增すをちこちの
山々木々のさわ立ちて　迎へ參らす咲くや媛
（二）此花咲くやさくら花　谷かげ多き人の世の
俄に替るほがらかさ　筏の棹の汗の手も
忘れてうたふ舟唄の　川上よりぞ流れくる

藤の嵐山

青葉若葉　大きく成りしあらし山
峯まで昇る藤波は　かざしと成りて目もはるに

君咲也媛いにがてに　姿しるけき夏ごろも
又來ん春にと眺むれば　そゞろおもての露けしや

さつき節句

（一）いにしへゆ
くすり狩りせる眞須良男の　競ふ姿の雄々しくも
乘れる若駒きおひつゝ　驅けつ走りつやがてしも
年のためしと成りにたる　加茂の神事の競べ馬

（二）かくてしも
雄々し姿よ今もかも　吾武夫のこゝろ根と
ともにけざけく薫るなる　あやめを軒によもぎ葉の
いづれ劣らぬくすり草　人すこやかになれかしと
代々にもゝ代に千まき餅　睦み祝ふもいにしへの

教わすれぬためしなれ

富士の冠雲

（一）起いでゝ

眺むる空はしのゝめの　まだほの白きみづ海に
やゝ立そむる漣波や　かもめか魚か動めくは
いさりに急ぐ小舟かも

（二）かたまりて

空にかさなる雲の峯　うつす姿の海のもに
小舟は登る嶺のうへ　山はくづれて風騒ぐ

（三）照りはえて

輝く朝日ほの〴〵と　現はれ出づる富士の裾
俄に動く雲の脚　ゆるぎ出したる連れ雲の

富士を見せじとあせるかも

(四) きびしくも

護りかしこみ打圍む　霧の戸帳りの切れ〳〵に

もれでる姿尊とやと　仰ぐ裳裾も長々と

目を愕かす姿かな

(五) 吹きはらふ

風に乘りゆくむら雲の　帶雲さへも取去れど

まだ去りかねし冠り雲　名にし女王の咲也媛

その端麗の面かげや

霧こめし蘆の湖くもはれてこゞし目ざまし富士の高峰は

嗚　呼　麗　猫

(一) 雪と輝く胸の毛に　ぬれ羽の黑毛照り榮えて

こがね鈴張る明眸に　そば立つ耳の豐かさよ

（二）げに品高き飼猫の　心も高く氣も高く
長き黑尾に寄る牡も　近付きかねし風情なり

（三）四たりの娘嫁ぎゆく　あと見送りて淋しげに
殘るはなれか、はた吾か　なれも十とせは老にしを

（四）思へばいにし春の夕　唯かりそめの行きづりに
まとひ着きたる緣の糸　宿世いかなる馴染ぞや

（五）永らく老を慰めし　健げのなれも今ははや
天つ御園に隱れけむ　炬燵にのこるうつゝ影

（二）短　歌

感情歌　はちすの家々集より

初　見（明治二十三年九月より）

露繁き秋野の千草わけゆきて思ひもよらぬ花を見しかな

追懐

花の露かゝりし袖は朽ぬともなほ移り香のきえずもあらなむ

朝顔

あるじ無き庵の垣根にあかくと秋をわびつゝ咲ける朝がほ

藤ばかま

野わきしてすさめる野邊に大かたの哀れを見する藤袴そも

川霧　なめり川にて

きぬ洗ふ音のみ冴えて川ぎりのしづかにつゝむ秋の色かな

歸宅

わがきぬを縫ふらむいもが燈火のほのかに見ゆる山の下庵

うひ子嫁げる日

うれしくも亦うれたきは撫子の人のたもとにやどるなりけり

次の子遠く嫁ぐ日

千代かけてことほぐけふの吾身にもなほあやしきは涙なりけり

山楓

世の人の見る目をもれて山かげに散るも楓のこゝろなりけり

殘光

山の端に月かくれゆく庭面にはせを葉白くてりわたる見ゆ

震災（大正十二年九月より）

鎌倉やさゝめの里は幾かへり花さくものと思ひけらしに

復興

たほされし籬と共に伏しながら色榮えて咲く朝顔の花

白菊

雨風にたほれながらも逆らはで姿やさしく咲けるしら菊

四色の娘帶

わが娘四たり連れ立ち語りゆくうしろ姿の帯のさやけき

初枝といふ教へ子嫁げる日

吾園の梅のはつ枝の花かげに老鶯のいにがてに啼く

西行庵　よし野にて

山深き庵を訪へば人の世の悲き戀のいぶきをぞ聞く

あぢきなき戀の重荷を山の庵にときほどきつゝ如何に泣きけむ

山の庵のねざめ苦しき夢ごとに高峰の花の咲きや亂れし

苔清水

いにしへの名を流したる苔清水今もうき世にそゝぎつるかな

こゝろ見にそゝぎ給ひし苔清水うき世は今もけがれ居るがに

月の露

籔かげにほのかに見ゆる露草のつゆの光に月を知るかな

御諒闇の新年　（大正四年より）

雲の上さぎり小暗く立こめて昇るはつ日の影も見わかず

菜の花

見る限りつゞくこがねの春霞菜の花ばかり今盛りなり

桐の花

きりの花落ちて紫あせもせず若きをみなの怨み顔なる

藤かげ　嵐山にて

藤さける木の下水をすくひあへず沈める花をながめてしかな

泣く母

その稚兒のめでし人形いだきつゝ懐かしみ見るほゝずりのあと

雛祭

むつまじきひいな遊びの桃の花ほゝゑむ見ればほゝゑまれけり

咲く花のもゝ代をかけて睦まじき女夫の雛のゑまひこぼるゝ

桃の花咲くやうたげもうき立ちてけふの女雛のあるじ顔なる

螢

孫たちの寢屋もしづかになりにけり光りはじめし庭の螢火
庭もせに誰がわすれけむ螢籠のまろびしまゝに光りそめつゝ
竹の葉の雫に月のうつるやと見れば飛びたつ螢なりけり

夕立

夕立は今やふるらし吾宿の蘆屋の山は雲きほふなり

蟬

夏山を登り〳〵てやすらへば谷底遠く蟬時雨する

蛙

さみだれのけぶる蘆屋の里近くかはづ鳴くなり夜やふけぬらし

星かげ

夕すゞみ野路の川底水ふかみ螢のかげに星を見出して

涼風

竹の葉にひと雨すぎし夕立のしづく滴る庭のそよ風

朝霧

朝ぎりに淀の長橋中絶えて燈し火のみぞ空を行くかな

御題海邊の巖（昭和五年より）

うち寄せて裂けて碎けて浦波の苔むす巖うつかひぞなき

海風　七里ヶ濱山にて

磯山に見おろす海は目もはるにたもと涼しき夏の夕風

うな原や夕やけ雲の色あせてひときわ冴ゆる富士のむらさき

火ともゆる夕日うすれて浮きいづる夏のふじの峰紫にして

漁火

ながめあかす秋の夜長の漁り火を蜑の妻子やいかに見るらむ

秋の夜のすなどり人を待ついもは沖のいさり火わびしくも見め

御題社頭雪（昭和六年より）

ちりもなく清げに見ゆる廣前の路ふみかねしけさの初雪
朝日さす丹塗りの鳥居かゞやきて杉の梢は雪ほどろなり

深志の宿（松本にて）

思ひ出もふかしの里の夏の夜に庭のやり水うつゝにぞ聞く

上高地　田代の池にて

そゝり立つ峰に黒雲むら立ちて樺の林に鶯なくも
仰ぎ見る山は黒雲白けむり篠つく雨にきおひ立ちつゝ

豊年

山さとの月てりはえて豊としの唄ながれくる夏の信濃路

御題暁雞聲（昭和七年より）

神代なる心地こそすれ朝まだきかけの聲きく加茂の廣まへ
山霞まだしのゝめの色わかぬ雲よりひゞくかけの一聲

春の夕

草もえてぬるむ小川に鳴く鳥の聲しづかなる春の夕暮

白百合

夕立のはれゆく崖の下露にひとときは白し大ゆりの花

白頭翁

冬ばれの野づらうら〳〵日のさして旅おもはするひよの一聲

早雲山にて

谷間より湧いづる雲はさながらに夕日にはえて山燃えんとす

白雲のつゝみかくせる山の端に燃ゆる大の字そらに浮かみつ

三日月　唐崎にて

近江の海みかみの山も霧こめてほのかに明かし三日月のかげ

秋ぎりの深くも籠めて鳰の海さえし三日月今落ちんとす

御題朝の海　（昭和八年より）

大浪のうねりのはてに茜して太平洋は今明けんとす

栗の實

落かゝる毬をかばひて親ごゝろ呼べどすかせどきかぬわらはべ

柿の實

吾園の柿の實うれぬ學び家もはや終へぬらし吾子はや來よ

末娘嫁ぎ去る後

けふばかり執る筆の毛の命まで泣くか文字さへ震へがちなる

文机に獨りむかへばかげ寒み我もあやしむ吾涙かな

雪の山莊

世の勸め終へて歸れる山の庵の爐ばたにぎはふ雪の夕暮

雪ふらばなほも往かんと誓ひてし友まつ榾のもえ盛りつゝ

歸りゆく友の足跡かぞへつゝ物思はする雪の夕ぐれ

仇夢の花

なやましき夢の浴衣の色みえてみづ〴〵しくも咲ける朝顔

輝き

朝日かげさすや池邊のかゞやきて雪と見まがふ鶴の一むれ

純白

そびえ立つ不二の高根のましろなるびやく衣清けく神かゝりせる

御題池邊鶴　（昭和十年より）

ひな鶴のうろくづあさる池のへに心そらなり母鳥の聲

富岳

空高き富士の高峰雲さりていたゞき見れば神宿ります
なだらかな斜めの線の氣高さに心とけこむ富士の大峰

瀧

谷を割り崖を碎きて瀧つ瀬の奔馬怒龍と山轟かす

ましらの橋　蔦温泉にて

山深みましらの橋の夕つく日しゞまを破る鳥の一こゑ

花売女

霧はれて鳥居の色のけざけさに見かはす少女花賣りにして
花めせと聲もやさしき白川女ほゝゑむ見れば買はさらめやは

紅つた

野に山にさまよひはてし道のへに夕はえもゆる紅蔦のいろ

朝顔

わすれえぬ夢のうつゝにながむれば仇めく色に朝顔さくも

紅葉狩

仰ぎ見る峯に紅葉の夕はえて時雨はまだし日はくれんとす

哀悼　喜代子

此夏は訪はんと言ひし言の葉は露をやどせとつげし別れか
立のぼる香の烟の末つひに消ゆる面かげ今はた無くも

御題海上雲遠　（昭和十一年より）

目もはるに見送る沖の船きえてかすむあたりに雲の一むら

溪流　黒部溪谷にて

谷川の音さわがする山風のたえま〳〵に蜩の鳴く
雪の魚雪の蛙のおよぐやと見ればさわ立つ溪の川水
そゝりたつ山は軒端におほひきて息ぶきせまれる嶺の晴嵐

水上溫泉

さながらの寢覺めの床を今こゝに夢かうつゝか水かみの溪

哀悼　千代子

此夏にあはたゞしくも別れゆきしうしろ姿のけぬべくもなき
思はじと思へばいとゞ思はれて身も世もあらず立ちつすわりつ

まとゐ

膝もとに集ふ吾子の齡をなみ語り物いひ笑ひどよめく

五人娘

生ひ立ちし五人娘のうしろ帶見送る親のほこりありしに
折をえて時を圖りて集へてもはやも揃はぬ帶のひと色
吾子こそ吾命なれ吾妻の若き心もこもると思へば
野に叫び空に呼べども五つ衣そろはぬ野べにすみれ摘むなり

惑ひの夢

去りてゆくうしろ姿のわびしきはけふ此頃の夢にぞ有ける
昔こひしいもの姿は吾姿いまの姿はいものすがたか
妻あれどいもは往にけり在るものは良き學びやの長にぞ有ける
吾願ふいもが重荷のたふとさをよろこぶ我の心しるしも
重荷負ふいもなとがめそとがむるは狂ふ焔の餘波なりけり

理　解　歌

榮華の誇を見て

咲きほこる春の花野に來て見ればそゞろに物ぞ悲しかりける

反　省

心をば月の高きに置きてこそ吾身に宿る雲も見ゆめり

高　蹈

あさりつゝ競ふ小禽をよそにして一聲高く鶯の鳴く

世　務

世の外にたかく飛ぶらむかりがねもけふは山田にあさるへらなり

亡兒の母へ

おもひ兒の今や花野に遊ぶらむ母は枯野に袖はぬるとも

八十歳の賀（春季）

桃さきて流るゝ川の水上に八十路のわらべおひ立ちぬらし

疎　情

うとしとて我だに人を疎まずば何とて仲の絶えやはつべき

心　影

人われにつらしと御つ心こそつらくもさるゝ吾身とぞ思ふ

葆　香

籔かげに咲出でそめし蘭の花かくれてもなほ匂ひしるきや

入木に志したる折

ちりの世の有爲の奥山けふこえて鳥の跡ふむ道をたづねむ

園　の　梅

色よりも香こそ哀れとおもほゆれ手折らでめでよ園の梅がえ

あやめ人形

菖蒲ふく軒端も高き武夫のほまれはかをれ後の世までも

雛　　祭　白は誠、赤は情けのシンボル

白と赤とまぜて桃色もゝの花めをとの誓ひさゝげまつらむ

赤と白とまじはり深く咲く花のもゝよろこびのうたげなりけり

破れし夢

めをととは睦じき名と思ひてしひいな遊びも夢ときえつゝ

筍

いさぎよき直ぐなる親の心より此子うまれぬうまし此子よ

家庭

親と子のほゝゑみかはす所より世の幸多く生れいづらむ

和樂

世中はほゝゑみくらせ春風のなごやぐ里は花盛りなり

若松

その昔根引きにもれし若松もやがて梢に雲やかゝらむ

駿馬

伯樂はいづこ往きけむ千さとゆく駒もちまたに老いや朽なむ

春駒　昔の小金牧を想ふて

小金なる牧の春駒よばひつゝ鞭とる人をまちげなるかな

口無しの花

人も見ぬ谷間に咲ける口なしの花のあはれは誰か知らまし

窮　達

ゆきくらし露野の暗にさまよへば松の葉ごしにもるゝ月影

故郷の蛙

五月雨に吾ふるさとを思ひ出の蛙なくなり夜やふけぬらし

武藝奥儀

吹く風の押す手引く手につきまとふ枝の調べや松風の聲

社頭の雪

朝まだき雪ふみ分る廣前に誰が跡つけし靴のあとぞも

古稀の春

古來より稀なりといふ齢をば迎へしけふの我若やぎぬ

八十路まで働かばやと誓ひてし年も十とせを殘すけふかな

藻刈り舟

さみだれの降るやふるほど藻かり舟山ほど積まば歸り忘るな

桔梗

もの丶ふのいもとやめでん此花の野末に惜き品の高さよ

七夕

やるせなき少女ごゝろを梶の葉にかきてさゝぐる露の玉づさ

斷一つ

何事も成ると成らぬは唯一つ斷つと斷たぬのけぢめなりけり

平易

僞りの多き世なれど吾は唯誠一つで行くぞ氣易き

舊習墨守

煩しき世の習はしに捉らはれし人のあえぎぞ愚なりける

俗見

世のふりに唯習はんと勤むなるうつろ心ぞ愁れなりける

追想

濁る世を澄まさむものと誓ひてし友の多くは早やも老けり

尼僧

雪霜を凌ぎてかをる白梅の氣高き姿誰に見せばや

博愛

心なき人の袖にもかをるなりひろき情けの白梅の花

蓬萊の山

花紅葉たえせぬ里に山ひじりまとゐさゞめくよもぎふの嶋

皐月晴

さみだれの晴れまはれ〳〵晴れわたる水際の蘆に鳴くは何鳥

はゝ鳥

はゝ鳥の母や戀しと來鳴くらむ冬の林にあさりかねつゝ

老びとの會

うつゝ世を樂む我もおいばみて昔語りを戀しとぞ思ふ
おいびとの昔語りに花さきて若やぐ實さへ結ぶけふかな

唐崎の枯松

老松の枝受け石に其かみの雄々し姿を偲ぶけふかな

折にふれて

思ふ事思ひ〳〵てたゝざれば終に思ひの成らざらめやは
願ふ事祈り祈りてたえざればいかで祈りのきかれざるべき
祈りとは誠ごゝろの燃え盛りたぎり煮え立つ叫なりけり
人のもつ心の底に宿ります神の叫びを祈りとはいへ

猛虎の圖

吼ぬこそ常には好けれいざと云はゞ山轟かす聲を聞かまし

打岩成羊圖

かたくなの心の岩も鞭うたば仔羊のごと成らざらめやは

狗子に鞠の圖

趙州の狗子ならねどもざれ遊ぶ手鞠にやどる無字の考案

落花に猪の圖

たけりたつ荒び姿の怒り猪も花の下には伏猪なりけり

蜘蛛と落葉圖

蜘の圍にかゝりながらもとり〴〵に色を競へるかき葉もみぢ葉

菊に蔦のまとふ圖

紅蔦のもゆる思ひに纒はれて園のひな菊中折れやせむ

朝　顔

ひと時をほこるたをやめ散りもせでしぼむはうたて朝顔の花

三　色　菫

再びゆ三たびも替はる色すみれ人の心にならずもあらなむ

唐もろこしの圖

水ひめの里のみやげに笑み集ふわらべ心ぞ今はこひしき

池邊の鶴

いろくづの今年はふえて池の邊に田鶴の呼聲日にまさり往く

富岳

たゞ仰ぐ富士の高峰の眞白さに歌の言葉もおされがちなる

公任卿折梅の圖を描きて

宮人の雪踏分けて折る梅は鶯とても宿は惜まじ

人牛倶忘

雲もなく烟りも月も星もなく拭ひすてたる朝の大空

くれなゐの花も柳もうちかすみたゞ廣〳〵と見ゆる春の野

尉と姥の圖を描きて

松の葉と數をあらそふ年波の寄する濱邊に君やすむらん

坐禪の境地を偲ぶ　黒部にて

夏日かげさすや黒部の岩あひに岩魚つりする我を見しかな

若竹の圖

すく〳〵と暢びよ若竹ふしごとに年さび増して虎や宿さむ

すく〳〵と眞直ぐに立てる親竹の葉かげ仰ぎて立てよ若竹

親竹のすく〳〵立てる姿をばあふげ若竹なに歪むらし

出征軍人

武夫の大和嶋根に咲く花はみいづかしこみ散らんとすらむ

千よろづの張り切る民の心こそ焔となりて君まもるがに

千歳の一遇とこそ思ほゆれ大和魂今あま驅けんとす

不許複製

昭和十三年十月六日印刷
昭和十三年十月十二日發行

默歩七十年

定價貳圓五拾錢（滿・鮮・臺等外地定價一割增シ）

著者　星野天知
東京市神田區錦町一ノ十七
發行者　福田久道
東京市神田區小川町二ノ十二
印刷者　西川喜右衞門
通稱　晴光

發行所　東京市神田區錦町一ノ一七
振替口座　東京五三四四一
電話　神田（25）三六七四
聖文閣

合資會社秀英社印行